

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第239集

西通北遺跡

平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道路整備事業（街路B）

平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地）

建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第239集

西通北遺跡

平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道路整備事業（街路B）

平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地）

建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2011

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

巻頭図版 1



環濠（東より）

巻頭図版2



1 環濠全景（西より）



2 環濠土層断面剥ぎ取りのための断ち割り状況（西より）



1 環濠遺物出土状況①（北東より）



2 環濠遺物出土状況②（北より）

卷頭図版4



環濠出土土器



1区完掘状況（西より）

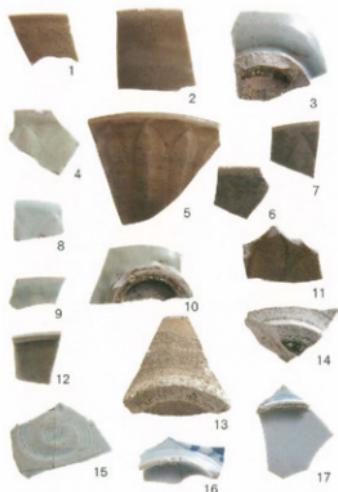


3号溝状遺構遺物出土状況（東より）



3号溝状遺構出土土器

卷頭図版8



1 貿易陶磁（外面）



2 貿易陶磁（内面）



3 潤戸美濃製品（外面）



4 潤戸美濃製品（内面）

序

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所では平成20年から平成22年にかけて、JR沼津駅付近鉄道高架事業に伴う西通北遺跡の発掘調査を実施してきました。発掘調査では、主に弥生時代と奈良・平安時代において、当時の人々の生活の一端を窺えるような、多くの成果をあげることができました。

西通北遺跡の位置する沼津市片浜地区は、北に愛鷹山、南に駿河湾を望み、特に駿河湾に面し隣接する千本松原は、東海道の景勝地の一つとして親しまれています。また、この地域は、愛鷹山南麓に広がる浮島沼として著名な低湿地帯の東縁部に位置しており、海から湖沼を経て陸地化を果たした特異な自然環境下にあります。そうした環境変化を背景にしていたためか、当地域における原始の人々の生活については、今まで不明な部分が多く残されていました。今回の調査では、現在の沼津市域低地部が海から陸地へ変化していく過程で、丘陵部から低地部に移住し始めた最初の弥生時代人の活動痕跡を示す遺構・遺物を発見することができました。

また、当研究所としても、静岡県東部地域において低湿地遺跡のまとまった面積を調査するという点において、今回の調査は数少ない調査事例の一つとなりました。地域の知られざる歴史に迫り得る成果をあげることができたことを喜ばしく思うとともに、本書で報告される調査成果が、広く一般の方々の目に触れ、埋蔵文化財に対する理解と、郷土の歴史に対する関心を高めるための一助となり、多くの研究者の方々に活用されることを祈念してやみません。

最後になりましたが、発掘調査および資料整理並びに本書の作成にあたり、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、沼津市教育委員会をはじめとする関係諸機関の御支援・御協力に感謝するとともに、調査に御理解頂いた地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 石田 彰

例　　言

1. 本書は静岡県沼津市大賀町字新通・小瀬町字二ノ坪に所在する西通北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は平成20～22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道踏査事業（街路B）工事および平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業（新車両基地）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として、静岡県沼津市木暮町所都計画課の委託を受け、静岡県教育委員会文化課（現文化財保護課）の指導のもと、沼津市教育委員会文化振興課の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
3. 確認調査は平成17年4月から平成19年3月に沼津市教育委員会文化振興課が実施し、本調査は平成20年6月から平成22年1月まで財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。資料整理は平成21年12月から平成23年3月まで実施した。
4. 調査体制は以下のとおりである。

平成20年度（本調査）

所　　長：清水 哲	次長兼総務課長：大場正夫	次長兼調査課長：及川 司
次長兼事業係長：稻葉保幸	保存処理室長：西尾太加二	東部総括係長：中鉢賢治
事　業　担　当：青井拓司	調　査　担　当：大林 元・蘿科泰裕・杉山和徳	

平成21年度（本調査・資料整理）

所　　長：天野 添	次長兼総務課長：松村 亨	次長兼調査課長：及川 司
次長兼事業係長：稻葉保幸	次長兼東部総括係長：中鉢賢治	保存処理室長：西尾太加二
事　業　担　当：青井拓司	調　査　担　当：蘿科泰裕・杉山和徳	

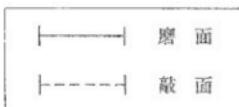
平成22年度（資料整理）

所　　長：石田 彰	次長兼総務課長：松村 亨	調　査　課　長：中鉢賢治
専門監兼事業係長：稻葉保幸	保存処理室長：西尾太加二	調査振査第二係長：岩本 貴
事　業　担　当：青井拓司	調　査　担　当：杉山和徳	

5. 基準点測量・空中写真測量・空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
6. 出土した石器の石材鑑定は、当研究所の柴田亮平常勤嘱託員が実施した。
7. 出土した木製品の樹種同定は、当研究所の西尾太加二保存処理室長が実施した。
8. 出土した木製品と金属製品の保存処理は、当研究所保存処理室が実施した。
9. 本書掲載の写真是、現地での写真是各調査研究員が撮影し、遺物写真是当研究所の杉山すぐ代整理技術員が撮影した。
10. 現地での自然科学分析と出土した土器の胎土分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
11. 出土した炭化物の年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
12. 調査の概要は当研究所の出版物などで一部公開されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。
13. 本書の執筆は、杉山和徳が行った。
14. 本書の編集は、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
15. 発掘調査資料は、静岡県教育委員会文化財保護課が保管している。

凡　例

1. 本書で用いる方位は国土地理院の方位で、座標値は世界測地系に帰属し、標高は海拔高を表す。
2. 本書で扱う遺物実測図の縮尺は、土器 $1/3$ 、土製品 $1/3$ 、石器 $1/3$ （石錐および石核は $1/1$ ）、木製品 $1/4$ 、金属製品 $1/2$ （鏡貨は $1/1$ ）を基本とした。
3. 本書で扱う遺物の揮面番号と図版に示した番号は同一である。
4. 本書で用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）に準拠した。
5. 本書で扱う遺構の呼称とその定義については、第Ⅲ章第1節に記載しており、特に「環濠」の呼称については、第V章第1節においても触れている。
6. 土器の器種について、本来は「壺形土器」「甌形土器」のように「～形土器」と記載するのが妥当であるが、本書では便宜上、「壺」「甌」のように略記している。
7. 石器実測図中の研磨痕（磨りの範囲）はトーンを入れて表現した。
8. 石器実測図中の指示記号は以下のとおりである。



9. 遺構の計測表において残存値には()を付して表記した。
10. 遺物の観察表において推定値・復原値には()を付して表記した。
11. 第6図は国土地理院発行 $1:25,000$ 地形図「沼津」を複写して加工・加筆した。

目 次

巻頭図版／序／序言／凡例

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
第3節 調査の経過	3
第Ⅱ章 位置と環境	7
第1節 遺跡の立地と地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第Ⅲ章 調査の成果	13
第1節 遺構と遺物の概要	13
第2節 繩文時代以前の遺物	21
第3節 弥生時代の遺構と遺物	21
第4節 古墳時代の遺物	42
第5節 奈良・平安時代の遺構と遺物	44
第6節 中世の遺物	77
第7節 近世以降の遺構と遺物	79
第Ⅳ章 理化学的分析	134
第1節 自然科学分析	114
第2節 出土弥生土器胎土分析	130
第3節 放射性炭素年代（AMS測定）	142
第Ⅴ章 考察	146
第1節 環濠の特徴と機能について	146
第2節 潟状遺構と古代条里について	156
第3節 総括	159

図版／報告書抄録

図版目次

巻頭図版 1	環濠	巻頭図版 4	環濠出土土器
巻頭図版 2	1 環濠全景	巻頭図版 5	1 区完掘状況
	2 環濠土層断面剥ぎ取り のための断ち割り状況	巻頭図版 6	3号溝状遺構遺物出土状況
巻頭図版 3	1 環濠遺物出土状況①	巻頭図版 7	3号溝状遺構出土土器
	2 環濠遺物出土状況②	巻頭図版 8	1 貿易陶磁（外面） 2 貿易陶磁（内面）

	3 濱戸美濃製品（外面）	2 弥生土器甕①
	4 濱戸美濃製品（内面）	弥生土器甕②
図版1	1 西遇北遺跡遺景	図版14 弥生土器甕③
	2 西遇北遺跡壳状泥炭遺景	図版15 弥生土器甕④
図版2	西遇北遺跡壳状泥炭遺景全景	図版16 1 環濠出土弥生土器甕 2 環濠出土弥生土器甕
図版3	1 環濠全景	図版17 土師器坏・甕①
	2 環濠西部壳状泥炭遺景	図版18 土師器坏・甕・鉢
	3 環濠中部壳状泥炭遺景	図版19 1 3号溝状遺構出土土師器甕 2 土師器坏・甕②
	4 環濠東部壳状泥炭遺景	図版20 1 遺構外出土土師器坏 2 土師器高坏
図版4	1 環濠土層断面①	図版21 1 土師器沟 2 須恵器坏①
	2 環濠土層断面②	図版22 須恵器坏②
	3 環濠土層断面③	図版23 須恵器坏・高坏・坏蓋
図版5	1 環濠土層断面④	図版24 1 3号溝状遺構出土須恵器环 2 須恵器坏蓋・甕
	2 環濠土器出土狀況①	図版25 1 5号溝状遺構出土須恵器环 2 須恵器坏・甕
	3 環濠土器出土狀況②	図版26 1 須恵器坏・坏蓋・甕 2 遺構外出土須恵器坏
	4 環濠土器出土狀況③	図版27 1 須恵器甕・甕・鉢 2 灰陶陶器
	5 環濠石甕出土狀況	図版28 1 灰陶陶器坏・皿 2 中世陶器 3 土製品
図版6	1 環濠土器出土狀況④	図版29 1 近世以降陶器 2 近世以降磁器
	2 環濠土器出土狀況⑤	図版30 1 石織 2 石核
	3 環濠灰甕出土狀況	3 石器 4 木製品①
図版7	1 3号溝状遺構上端土器 出土狀況①	図版31 木製品②
	2 3号溝状遺構上端土器 出土狀況②	図版32 1 鉄製品 2 銅製品・錢貨
	3 3号溝状遺構出土狀況①	3 錫製品
	4 3号溝状遺構出土狀況②	
	5 1号溝状遺構木製品出土狀況	
図版8	1 5号溝状遺構出土狀況	
	2 池状遺構土層断面	
図版9	1 池状遺構遺物出土狀況	
	2 20号溝状遺構遺物出土狀況	
	3 近世陶器出土狀況	
図版10	弥生土器甕①	
図版11	弥生土器甕②	
図版12	弥生土器甕③	
図版13	1 弥生土器甕④	

挿図目次

第1図	西道北遺跡の位置	1	第33図	環濠第6層出土土器実測図	36
第2図	調査対象範囲図	2	第34図	環濠第6層出土土器 および木製品実測図	37
第3図	基本土層往状図	3	第35図	1~4号土坑平・断面図	38
第4図	周辺地質図	7	第36図	5号土坑平・断面図	38
第5図	浮島沿岸の地形の変遷	8	第37図	1号土坑列平・断面図	39
第6図	周辺の遺跡分布図	9	第38図	3・4号土坑 1号土坑列出土土器実測図	39
第7図	調査区全体図	14	第39図	弥生時代遺構外出土土器実測図	41
第8図	遺構配置図付図	14	第40図	弥生時代遺構外出土石器実測図	42
第9図	遺構配置図①	15	第41図	古墳時代土器実測図	43
第10図	遺構配置図②	16	第42図	1~6号溝状遺構平・断面図	45
第11図	遺構配置図③	17	第43図	1号溝状遺構出土土器 および木製品実測図	46
第12図	遺構配置図④	18	第44図	2号溝状遺構出土土器実測図	46
第13図	遺構配置図⑤	19	第45図	3号溝状遺構土器集中1 出土状況図	47
第14図	調査区内出土土器分布図	20	第46図	3号溝状遺構土器集中2 出土状況図	48
第15図	縄文時代以前石器実測図	21	第47図	3号溝状遺構土器集中3 出土状況図	49
第16図	環濠平面図	22	第48図	3号溝状遺構出土土器実測図①	51
第17図	環濠図付図	22	第49図	3号溝状遺構出土土器実測図②	52
第18図	環濠平面・ エレベーション図①	23	第50図	3号溝状遺構出土土器実測図③	53
第19図	環濠平面・ エレベーション図②	24	第51図	3号溝状遺構出土土器実測図④	54
第20図	環濠平面・ エレベーション図③	24	第52図	5号溝状遺構土器集中 出土状況図	56
第21図	環濠平面・ エレベーション図④	25	第53図	5号溝状遺構出土土器実測図①	57
第22図	環濠断面図(A~F)	26	第54図	5号溝状遺構出土土器実測図②	58
第23図	環濠断面図(G・H)	27	第55図	7・8号溝状遺構・2号土坑列 平・断面図	59
第24図	環濠土器集中1出土状況図	27	第56図	9・10号溝状遺構・3・4号土坑列 平・断面図	60
第25図	環濠土器集中2出土状況図	28	第57図	6・9・10号溝状遺構出土土器 および石器実測図	60
第26図	環濠土器集中3出土状況図	29	第58図	11号溝状遺構・6・7号土坑列・ 25号土坑平・断面図	61
第27図	環濠土器集中4出土状況図	29	第59図	11・12号溝状遺構平・断面図	62
第28図	環濠第1・2層出土土器実測図	30			
第29図	環濠第3層出土土器 および鉢製品実測図	31			
第30図	環濠第4層出土土器実測図	32			
第31図	環濠第4層出土土器 および石器実測図	33			
第32図	環濠第5層出土土器実測図	35			

第60図	6号土坑平・断面図	63
第61図	7号土坑・1号溝状遺構 平・断面図	64
第62図	8号土坑平・断面図	65
第63図	9号土坑平・断面図	65
第64図	10号土坑平・断面図	65
第65図	11~13号土坑平・断面図	65
第66図	14~16号土坑平・断面図	67
第67図	17~20号土坑平・断面図	67
第68図	21号土坑平・断面図	67
第69図	22号土坑平・断面図	67
第70図	23号土坑平・断面図	69
第71図	24号土坑平・断面図	69
第72図	5号土坑列平・断面図	69
第73図	8号土坑列平・断面図	69
第74図	6~8号土坑・3・6号土坑列 出土土器実測図	70
第75図	奈良・平安時代遺構外 出土土器実測図①	72
第76図	奈良・平安時代遺構外 出土土器実測図②	73
第77図	奈良・平安時代遺構外 出土土器実測図③	74
第78図	奈良・平安時代遺構外 出土土器実測図④	75
第79図	奈良・平安時代遺構外出土土器 および土製品実測図	76
第80図	中世土器実測図	78
第81図	池状遺構・16~18号溝状遺構・ 26~34号土坑平・断面図 (A~E)	80
第82図	26~34号土坑断面図(F~J)	81
第83図	池状遺構出土土器・木製品・ 銅製品実測図	82
第84図	13号溝状遺構平・断面図	83
第85図	14・15号溝状遺構平・断面図	83
第86図	19~21号溝状遺構平・断面図	85
第87図	35・36号土坑平・断面図	86
第88図	37~40号土坑平・断面図	87
第89図	9号土坑列平・断面図	88
第90図	13~19~21号溝状遺構・ 36~40号土坑土器および 石器実測図	89
第91図	近世以降遺構外出土土器・ 土製品・石器・銅製品実測図	90
第92図	錢貨拓影図	91
第93図	環濠試料採取地点の順序	115
第94図	主要埴輪化石群集	121
第95図	植物珪酸体含量	124
第96図	各粒度階における鉱物・岩石出現 頻度(%)および粒径組成①	132
第97図	各粒度階における鉱物・岩石出現 頻度(%)および粒径組成②	133
第98図	碎屑物・基質・孔隙の割合	136
第99図	層年較正年代グラフ	145
第100図	弥生時代中期環濠の 平面形態の諸例	146
第101図	弥生時代中期環濠の 断面形態の諸例	147
第102図	古代駿河国的主要官衙交通路	157
第103図	駿河条里復元概念図	157
第104図	1・8号溝状遺構の配置	158

挿表目次

第1表 本調査・資料整理工程表	6	第11表 出土金属製品観察表	113
第2表 出土遺物破片数量表 (貿易陶磁)	77	第12表 出土鉄質觀察表	113
第3表 出土遺物破片数量表 (瀬戸・美濃製品)	77	第13表 生態性区分と環境指標種群	117
第4表 出土遺物破片数量表 (その他の陶器)	78	第14表 珪藻分析結果	119・120
第5表 新旧遺構番号対照表	92・93	第15表 花粉分析結果	122
第6表 土坑・小穴計測表	93~95	第16表 植物珪酸体含量	123
第7表 出土土器観察表	96~112	第17表 稲実分析結果	123
第8表 出土土製品観察表	113	第18表 試料一覧および胎土分類	130
第9表 出土石器観察表	113	第19表 薄片観察結果	134・135
第10表 出土木製品観察表	113	第20表 測定結果①	144
		第21表 測定結果②	144
		第22表 東海地方出土弥生時代鉄器 地名表	151

挿写真目次

写真1 灰機による表土除去	4	写真8 花粉化石	128
写真2 人力による遺構掘削	4	写真9 植物珪酸体・稻実遺体	129
写真3 現地説明会(遺構解説)	5	写真10 胎土薄片①	140
写真4 現地説明会(遺物展示解説)	5	写真11 胎土薄片②	141
写真5 土垂復原作業	6	写真12 環濠側壁の窪み	148
写真6 土器実測作業	6	写真13 アフガニスタン研修生を 現地に迎えて	160
写真7 珪藻化石	127		

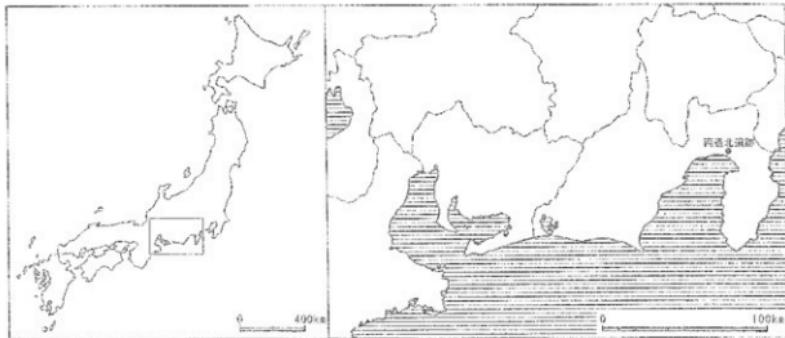
第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

静岡県東部、駿河湾の奥部東側に位置する沼津市は、古来より東西交通の要衝として、また観光地伊豆への玄関口として発展を続けてきた。特にJR沼津駅周辺は、商業・業務施設などの機能が蓄積され、市中心街地としての役割を担っている。しかし、人口増加や通勤圏の拡大に伴い、市街地では慢性的な交通渋滞を引き起こし、鉄道による南北市街地の分断は、住民の利便性を大いに妨げている。また、交通環境や物流システムの変化、大型店の郊外進出などに伴い、駅周辺市街地の空洞化の進行が懸念されている。そのような問題解消の一環として計画されたのが、JR沼津駅付近鉄道高架事業である。鉄道高架事業では、JR東海道本線の大岡団地付近から小野駅付近の約3.7km、JR御殿場線の大岡団地付近から沼津駅付近の約1.6kmの高架化が計画されている。高架化計画範囲内には、鉄道車両基地（JR東海）と鉄道貨物駅（JR貨物）が存在していることから、高架本体工事に先立ち、同施設の移転が必要とされた。このような経緯から、JR沼津駅北東（富士見町）に位置する車両基地の、駅西側約2km先の片浜地区への移転が計画されるに至った。JR東海の新車両基地建設予定地である大根跡・小野跡は、周知の埋蔵文化財包蔵地である西通北遺跡や中通遺跡、軒通遺跡が隣接し、地形的にこれらの遺跡の一部が及んでいることが推測された。このため、建設に先立って、周知の埋蔵文化財包蔵地の詳細な分布範囲と遺構や遺物の残存状況を把握する目的で確認調査が実施された。

平成17年4月から平成19年3月まで沼津市教育委員会によって行われた確認調査では、事業予定地内南北方向に幅3~5m程の細長いトレンチを20箇所設けて調査を行った。その結果、西側のトレンチを中心に奈良・平安時代の土師器や須恵器等が出土し、東側のトレンチでは、調査範囲を東西方向に横断する弥生時代の溝状遺構の存在も確認された。確認調査によって、遺跡の存在が認められるとともに、遺跡の範囲が把握され、埋蔵文化財包蔵地（西通北遺跡）として登録される。それを受け、平成19年5月に静岡県街路券専用室、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、沼津市都市計画部、沼津市教育委員会の間で協議が行われ、同年9月には本調査を当研究所が実施することで合意がなされる。当研究所に発掘調査の実施が依頼され、平成20年度から本調査を行うこととなった。

平成20年2月には、当研究所の本調査に先立ち、静岡県沼津土木事務所が、静岡県教育委員会の立会いのもと、調査対象範囲内の廃土の除去を行う。同年6月より、当研究所の本調査が開始された。



第1図 西通北遺跡の位置

第2節 調査の方法

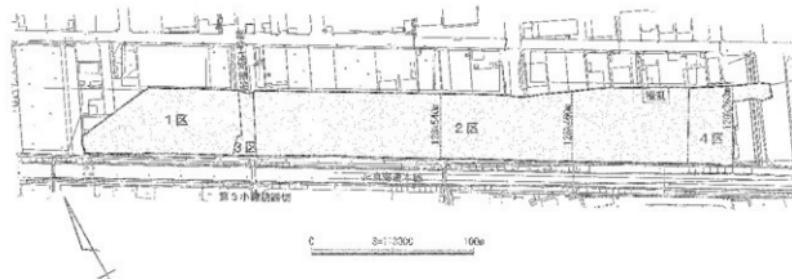
西通北遺跡は、沼津市片浜地区の民家や工場が密接する市街地に位置し、加えて北側には市道が、南側にはJR東海道本線が隣接する。調査期間中はブルーシート等の飛散や堆土の散落が懸念されたため、堆土の山は重機で堅固に叩き締め、調査区内のブルーシートは土蓋により手厚く養生した。

低湿地遺跡である西通北遺跡には、常時排水が不可欠である。本格的な包含層掘削を開始する前段階に、調査区下面外周に排水溝を巡らし、計4箇所に集水坑を設けた。調査期間中は200V水中ポンプ2台と100V水中ポンプ4台を稼働させて雨水・湧水に対応した。

調査対象範囲には国土座標の方位に従って、東西南北20mごとにグリッド杭を打設した。グリッド自体は10×10mに設定し、各グリッドの南西コーナーに打たれているグリッド杭等の番号をもってグリッド名としたが、南から北へはアルファベット、西から東へは数字を用い両者を組み合わせた呼称となっている。調査の工程上、調査対象範囲を4つの調査区に分割して調査を行った。調査対象範囲を南北に継断する市道2551号線を境界とし、市道以西を1区、同以東を2区と呼称した。市道2551号線直下を3区とし、調査対象範囲東側に位置した工場跡地以東を4区と呼称した。各区の面積は1区が3,300m²、2区が11,160m²、3区が528m²、4区が1,421m²で、全体で16,409m²である。

確認調査の成果を受け、本調査期間中には西通北遺跡の基本となる5層の土層を確認した。I層は調査区全体を覆う旧工場の盛土層であり、黒色土に廃工場の解体瓦礫を多く含み、コンクリート塊や釘金などの雜多なもので形成される極めて危険な層位である。また、調査区内では、廃工場建物の基礎として使用されたコンクリート杭や木杭等が、II層からV層まで深々と貫通している箇所が多く認められ、それらは全て撹乱として扱った。II層は黒色を呈する腐植土層である。I層ほどではないものの土中に瓦礫が含まれる。III層は黒色(10YR2/1)の終まりの強い粘土層である。乾燥しやすく、乾燥後は強く崩れやすくなる。IV層は灰黄褐色(10YR6/2)を呈する粘土層である。II層からIII層への漸移層に位置付けられ堆積は薄いが、非常に粘性が強い。V層は黄褐色(10YR5/6)を呈するシルト質粘土層である。下層ほど粘土・シルト・微砂によるラミナ状の自然堆積の痕跡が顕著に認められた。土中には高齢小僧と呼ばれる中空の褐鉄鉱が多く認められた。I・II層は無遺物層として重機掘削の対象となり、III・IV層が人力による包含層掘削の対象である。V層に掘り込まれている遺構を検出し、遺構掘削を実施した。

調査は、盛土や表土といった無遺物層に対してはバックフォーによる掘削をおこない、クローラーダンプやダンプトラックを用いて堆土を運搬し、整形処理を行った。表土除去終了後、遺物包含層以下は人力による掘削を行い、包含層掘削が遺構面に達すると同時に遺構の検出を行った。人力掘削土はベル



第2図 調査対象範囲図

トコンペア等によって調査区外へ撤出するとともに、拂土はバックフォーによって整形をした。検出した造構に関しては、造構掘削を行い、遺物が集中的に出土する箇所では丁寧に土を剥がし、遺物の出土状況を忠実に現出させるように努めた。

遺構の検出状況や土層断面などの記録保存には主に6×7判（モノクロ・カラーリバーサル）カメラを用い、特に貴重な写真に関しては4×5判カメラを用いた。また、発掘作業の工程記録等には35mm判（カラーネガ）やデジタルカメラを使用した。全晄写真や景観写真など、調査区完掘の節目ごとにローリングタワーからの撮影やラジコンヘリによる空中撮影を実施した。

発掘調査の記録保存として現地において各遺構の平面図や断面図等の図面を作成した。図化作業にはオートレベルやトータルステーションを使用し、造構面直上出土遺物や重要遺物については、出土地点の正確な国土座標値を記録するため、トータルステーションでポイント取り上げを行った。

現地調査と並行して現地にて出土遺物の洗浄、注記作業等の基礎整理作業を行い、作業の効率化をはかった。

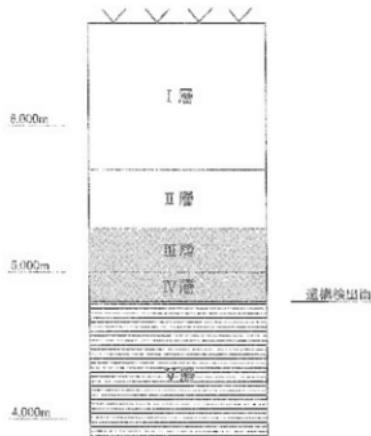
第3章 調査の経過

1. 平成20年度本調査

西通北遺跡の調査対象面積は16,409m²に及び、準備・撤去等を含め平成20年6月から平成22年1月までの概ね1年8ヶ月間の発掘調査を実施した。

委託契約締結後、調査のための事前準備を始めたが、現地での作業としては平成20年6月16日に仮設事務所を設置し、同20日から調査区内の除草作業等、周辺の環境整備を開始した。7月2日には、静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・当研究所の3者による、1区および2区の表土除去前の土量測定の測量確認検査を実施した（以下「3者立会い」と略称）。翌3日より重機による1区の表土除去を開始、同10日に終え、同15日には表土除去後の3者立会いを行い、同17日から人力による包含層掘削を開始した。8月5日に沼津市主催の沼津訟局見学ツアーが実施され、親子連れが現地を訪れ、遺跡見学を行った。9月8日に1区の包含層掘削を終え、同12日に包含層掘削後の3者立会いを行い、同17日から造構掘削を開始した。造構掘削と併行して写真・図化などの記録作業を行い、10月20日に造構掘削を終えた。翌21日にラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を、同22日にはローリングタワーからの調査区全景撮影を行い、1区における全ての調査を完了した。

10月27日には1区造構掘削後の3者立会いを行うとともに、重機による2区の表土除去を開始した。0.7m³バックフォー2台により、調査区東西両方向からの掘削を行い、11月5日にこれを終えた。同10日には表土除去後の3者立会いを行い、同日から包含層掘削を開始した。長大な2区での包含層掘削にあたっては、人員を二手に分け、南北両方向から掘削を進めた。12月25日に2区西半部（128k540mライン以



第3図 基本土層柱状図

西) の包含層掘削後の3者立会いを行った。平成21年1月5日からは、2区東半部の包含層掘削を進めるとともに、検査を終えた2区西半部の遺構掘削・記録作業も併行して開始した。2月6日に2区西半部(128k540mライン以西)のラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施した。2月24日には、2区全域の包含層掘削を終え、同27日には2区東半部(128k540mライン以東)の包含層掘削後の3者立会いを行い、遺構掘削・記録作業に移行した。遺構掘削作業の進展に伴い、2区北部で検出されていた大型溝状遺構が、出土遺物等から弥生時代中期中葉に遡る環濠であろうことが判明した。3月16日には2区の128k540mライン以東128k460mライン以西の範囲における遺構掘削作業を終え、同18日にこの範囲におけるラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施した。平成20年度の調査では、2区の128k460mライン以東の遺構については未掘の状態であり、この範囲の遺構掘削作業については平成21年度本調査に持ち越されることになった。3月26日には、沼津市主催の沼津駅周辺総合整備事業現地視察が実施され、栗原裕康沼津市長、沼津市議会議員、沼津市職員の計32名からなる視察団が現地の視察を行った。

2. 平成21年度本調査

平成21年度の本調査は、1区・2区の中間に位置する市道2551号線直下の3区での調査から開始された。4月22・23日に重機による表土除去を行い、同24日には3者立会いによる表土除去後の土量測点の測量確認を実施した。なお、盛土の除去を静岡県沼津土木事務所が施工し、あらかじめ土量測点を確認していたため、表土除去前の測量確認を3者立会いのもとで実施することはなかった。3区の調査では市道2551号線直下を掘削するため、調査期間中は市道2551号線に代わる迂回路を設営する必要が生じた。市道2551号線に接続する第3小諏訪踏切付近は迂回路を切り回すと車両通行が不可能となるため、できる限り早急に調査区の南端の調査を終えて市道を復元し、通行止めになる期間を短縮する必要があった。このため、調査区を南北に2分割したうえで、第3小諏訪踏切に隣接する調査区南半部を先行して調査した。4月27日より3区南半部の包含層掘削を開始した。5月1日には包含層掘削を終え、3者立会いを行った。立会い後の協議によって、3区と隣接する1区との境界が検出できず、3区と1区の境界を確認する必要が生じた。この確認は、調査区を横断する道路等の切り回し工事を終えた時点で実施することとなった。同11日には遺構掘削に着手する。翌12日には遺構掘削を終え、同13日にはラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施、同14日には静岡県教育委員会による遺構掘削後の作業内容証明立会いを行い、3区南半部における調査を終了した。調査区北半部における調査は5月14日から21日までに包含層掘削を行い、同25日に3者立会いを行った。同26日に遺構掘削を行い、翌27日にはラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施、同29日には遺構掘削後の3者立会いを行い、3区北半部における調査を終了した。3区と1区との境界を確認するための調査（以下「拡張調査部分」と



写真1 重機による表土除去



写真2 人力による遺構掘削

（略称）は、7月7日より着手し、人力による表土除去を行う。翌8日には表土除去を終え、同13日から14日まで包含層掘削を行った。包含層掘削後、拡張調査部分からは遺構が全く検出されなかつたため、同14日をもって拡張調査部分における掘削作業を終了した。同17日には静岡県教育委員会による作業内容証明立会い、同23日にはラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施し、3区での全ての調査を完了した。

6月には平成21年3月18日以来中断されていた2区での調査が再開された。調査対象範囲は、2区内、遺構が未掘状態にある128k460mライン以東の範囲（3,173m²）にあたる。6月22日には3者立会いによって遺構掘削前の現地の状況が確認された。また、同日から掘削準備と遺構掘削・記録作業を開始した。7月18日には、地元住民を対象とした西通北遺跡の現地説明会を開催した。現地説明会の周知は近隣5町内会の各町内会長に調査担当者作成の「お知らせ」を回観して頂けるようお願いするにとどまつたが、当日来訪した見学者は78名を数えた。同30日にはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、環濠を対象に自然科学分析を行うための試料採集を現地にて実施した。8月6日に、当研究所の保存処理室によって環濠の土層剥ぎ取り作業が行われた。同17日までに2区の遺構を完掘した。翌18日にラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を、同19日にはローリングタワーからの調査区全景撮影を実施した。同20日に沼津市主催の沼津駅周辺見学ツアーが実施され、親子連れが現地を訪れ、遺跡見学を行った。同25日には遺構掘削後の3者立会いを行い、平成20年度から続いた2区での調査を全て完了した。10月17日には、当研究所と静岡県教育委員会主催の平成21年度遺跡調査報告会「静岡の原像を探る」が静岡県立美術館講堂で開催され、「東駿河の弥生時代の始まり～西通北遺跡～」と題した発表を担当者が行い、遺跡の周知を図った。

4区は工場跡地の直下にあたり、工場移転後の盛土除去から着手することになった。9月中旬は4区調査の事前準備等を行い、10月21日に盛土除去前の3者立会いを実施した。翌22日より重機による盛土除去を開始し、同29日にこれを終えた。翌30日の盛土除去後の3者立会いを受け、11月2日より重機による表土除去を開始し、同6日にこれを終えた。同9日には表土除去後の3者立会いを行い、同12日には包含層掘削を開始した。包含層掘削作業を進める中で、当初設定されていた調査対象範囲（128k363mライン以西）の北東隅で東西方向に横断する溝状遺構が検出された。溝状遺構が設定された調査区のさらに東側に延伸していることから、同30日に静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・当研究所の3者による現地協議を行った。協議では、溝状遺構がやや北に進路をとりながらも、調査区外の東側へのびていることを受け、調査区東端を一部拡張して調査を実施することになった。調査区内、溝状遺構の検出状況、沼津市教育委員会が行った確認調査の成果、調査区内での遺物の出土状況をふまえ、調査区東端である128k363mラインを基点に東西約10m、南北約9mを拡張して調査した。しかし、溝状遺構がさらに東側に延伸していることが判明したため、最終的には調査区東端である128k363mラインを基点に、



写真3 現地説明会（遺構解説）



写真4 現地説明会（遺物展示解説）

東西約24m、南北約9mの面積221m²を拡張部として調査した。12月10日に包含層掘削後の3者立会いを実施し、同14日から遺構掘削・記録作業を開始した。同18日には遺構掘削を終え、同21日には調査区全体のラジコンヘリコプターによる空中撮影・写真測量を実施した。同24日には3者立会いのもと、遺構掘削後の現地確認を実施した。

12月21日には空中撮影等を行うとともに、現地の撤収作業にも着手した。同日にベルトコンベアや水中ポンプ、ローリングタワーといった現地設営資材と0.25m³バックフォーの回送を行った。また、同21日には野外電気設備の工事を実施したうえで、同24日に200V用（ベルトコンベア・水中ポンプ用）と100V用配電盤の撤去作業を行った。年明けの1月7・8日には現地周辺の仮設フェンスの撤去作業を行い、同12～14日に現地プレハブ事務所が解体・撤去された。同15日に撤収後の現地の状態を静岡県沼津土木事務所立会いのもとで確認を行い、現地からの撤収を完了した。

3. 資料整理

平成21年12月4日より、現地撮影写真の整理や遺構実測図面の整理等、すでに数量が判明している作業については、西通北遺跡発掘調査事務所内で着手した。12月24日には、3者立会いにより、出土遺物本整理の着手前段階における作業内容証明を受けた。平成22年1月18日より、研究所本部にて本格的な出土遺物整理作業に着手した。出土遺物の分類・仕分け・接合作業を行い、出土土器については一部、復原作業を実施した。金属製品については、保存処理を施したうえで、石器や土製品とともに実測作業を行った。3月前半には平成21年度実施分の資料整理を終え、3月8日には、3者立会いによる作業数量確認と内容確認を受けた。

平成22年5月25日より資料整理を再開、6月14日に3者立会いにより、平成22年度の出土遺物本整理の着手前段階における作業内容証明を受けた。遺構図の作成に関しては、デジタルデータ化された遺構実測図面をもとに、Adobe Illustrator CS3を使用してデジタル纏集・版組を実施した。7月1日より、研究所本部にて本格的に出土遺物整理作業を再開した。出土土器の復原・実測作業を行い、木製品については、保存処理を施したうえで、実測作業を行った。実測を終えた出土遺物は、トレース・版組作業を進めるとともに、遺物写真撮影や観察表作成、報告書の原稿執筆を併行して行った。



写真5 土器復原作業



写真6 土器実測作業

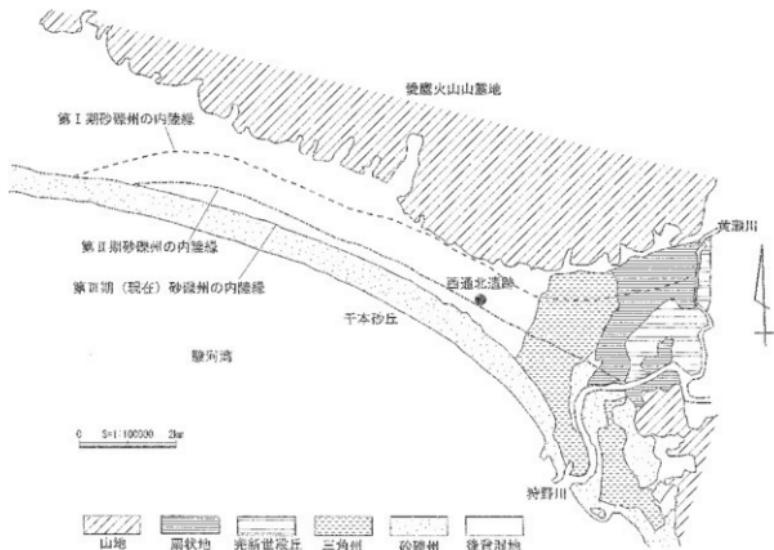
第1表 本調査・資料整理工程表

年 月	平成20年												平成21年												平成22年											
	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
1区調査																																				
2区調査																																				
3区調査																																				
4区調査																																				
資料整理																																				

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

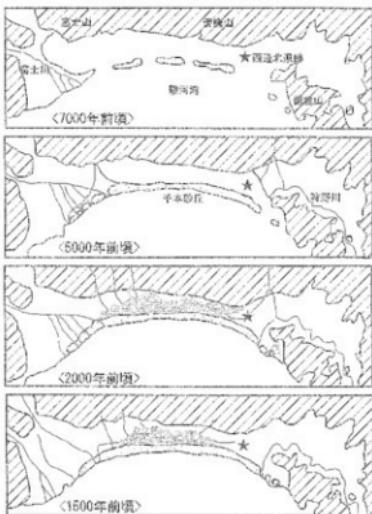
西通北遺跡は、静岡県沼津市大瀬戸・小瀬戸に所在し、JR東海道本線沼津・片浜駅間のほぼ中間に位置している。本遺跡周辺は、南は千本浜、北は愛鷹山をのぞむ標高6m程の低地で、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東縁にある。浮島ヶ原は、富士山・愛鷹山南麓の東西方向に細長く発達し、海岸部の砂礫州と後背湿地で形成される。現在の海岸砂礫州の内陸側には埋没砂礫州が存在し、砂礫州は内陸側から順にⅠ・Ⅱ・Ⅲの3列に区分される。10,000年前には、現在の愛鷹山南麓付近まで駿河湾の海水が深く入り込み、浮島ヶ原周辺も海中に没していたとされる。その後、富士川と駿河湾の沿岸堤により遮られた砂礫の堆積で形成された千本砂丘（妙嘴）が、駿河湾と愛鷹山南麓との間を遮断し始めた。最も内陸側の第Ⅰ期砂礫州は8,000年前から堆積を始め、6,000年前には離水したとされる。この段階では、現在の後背湿地は依然として海域の部分が多く、海水の影響を受けていたことが想定される。5,000年前には、海側の第Ⅱ期砂礫州が発達し、砂礫州と愛鷹山南麓との間に潟湖が形成される。この潟湖がいわゆる浮島沼の原形である。第Ⅲ期砂礫州が完成した4,000年前には、富士川や愛鷹山塊から南下する諸小流の影響によって潟湖は次第に埋め立てられ、沼沢地化していった。現在の内陸縁と一致する第Ⅲ期砂礫州は、その後発達し、2,000年前に完成した。これにより周辺の湿地化が進むこととなる。潟湖を埋め立てた愛鷹山塊の諸小流の内、沼川は流路を大きく変え、現在は西通北遺跡の北側に位置し、国道1号線沿いに東西へ流れている。



第4図 周辺地質図 (松原2000をもとに作成)

西通北遺跡の周辺は、浮島ヶ原の中心地よりはやや東に外れた地点に位置することから、浮島ヶ原の中では、比較的早い段階に陸地化したと考えられる。とはいっても、本遺跡周辺も3,000年程前までは入江状の水域であったことが推測され、弥生時代以降、安定した盆地になっていたものと思われる。それを示すかのように、本遺跡からJR東海道本線の線路を挟んで南側には西通遺跡・中通遺跡・軒通遺跡といった弥生・古墳時代の遺跡が点在するなど、陸地化後の人々の活動の痕跡が残されている。

上記のような特殊な地理的環境下で形成された地域に西通北遺跡は立地している。本遺跡周辺は地形区分では後背湿地にあたるもの、東隣は三角州、南隣は砂礫州、北側は山地と地形の境目に近い箇所に位置していると言えよう。そのため、遺跡付近から僅かに南北あるいは東に移動するだけで、周囲の地質や土壤の様相は大きく異なったものになることが想定される。



第5図 浮島沼周辺の地形の変遷
(大野ほか編1961をもとに作成)

参考文献

- 大野虎雄ほか編 1961 『沼津市誌』上巻 沼津市
久松義昭編 1984 『浮島沼と米づくり』 富士市立博物館
松原彰子 1992 「静岡県浮島ヶ原・雌鹿塚遺跡における自然環境と人間活動の変遷」『第四紀研究』第31卷第4号 日本第四紀学会
松原彰子 1999 「海岸低地の地形発達過程と人間活動の変遷—駿河湾沿岸地域を例にして—」『慶應義塾大学日吉紀要社会科学』第10号 慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
松原彰子 2000 「日本における完新世の砂州地形発達」『地理学評論』第73卷第5号 日本地理学会

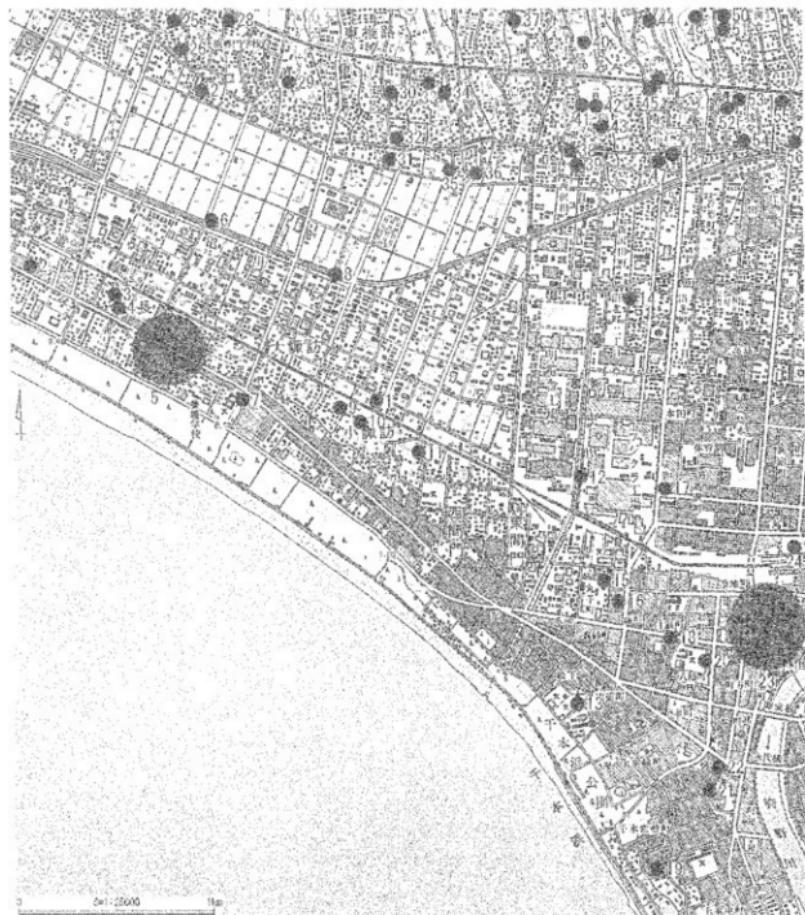
第2節 歴史的環境

西通北遺跡の位置する後背湿地、その周縁にあたる駿河湾沿いの千本砂礫州上や愛鷹山南麓には、多くの遺跡が認められている。前節でも触れたように、千本砂礫州やその北側の後背湿地には、縄文時代以前の遺跡は僅かしか認められないが、弥生時代以降の遺跡は数多く認められる。

1. 縄文時代以前

旧石器時代の遺跡としては、2枚の文化層とナイフ形石器群。縄石器群が発見された中沢田円丸遺跡が、愛鷹山南麓に「居開する」旧石器時代遺跡群の中でも、やや南寄りに位置している。

縄文時代の遺跡は、旧石器時代の遺跡同様、愛鷹山南麓を中心として分布するため、千本砂礫州や後背湿地での分布は乏しい。西通北遺跡の所在する片浜地区からやや西に離れた原地区になるが、砂礫州上に立地する縄文時代遺跡として鳥沢遺跡、湿地に立地する遺跡として雄鹿塚遺跡・雄鹿塚遺跡があげられ



	地名		地名	地名	地名
1	西造北道跡	11	中通遺跡	21	下小路遺跡
2	東堀毛遺跡	12	中南遺跡	22	千本流跡
3	押明塚古墳	13	松下町遺跡	23	沼津坊跡
4	松長上ノ段遺跡	14	沢田遺跡	24	上ノ段遺跡
5	松長古墳跡	15	丸子町遺跡	25	東久保遺跡
6	伴名田遺跡	16	鶴町遺跡	26	東久保古墳
7	叶遺跡	17	双葉町遺跡	27	自風身遺跡
8	長糸遺跡	18	白領町遺跡	28	西柳路山ノ神古墳
9	軒遺跡	19	常盤町遺跡	29	中電神明宮遺跡
10	吉通遺跡	20	福荷塚古墳	30	芝切遺跡
				31	春ノ木遺跡
				32	久保遺跡
				33	小原敷遺跡
				34	東松路神明古墳
				35	東虎遺跡
				36	川向遺跡
				37	大林遺跡
				38	後原豊敷跡
				39	尾崎遺跡
				40	稻荷林遺跡
				41	子ノ井遺跡
				42	子ノ神古墳
				43	苦治海溝遺跡
				44	中沢山円丸遺跡
				45	伊勢塙古墳
				46	田端遺跡
				47	道尾塙古墳
				48	辻堀原経跡
				49	山神遺古墳
				50	長塚遺跡
				51	長塚古墳
				52	沢田神明塙古墳
				53	達堀遺跡
				54	入方遺跡
				55	圓戸遺跡
				56	辻塙古墳

第6図 周辺の遺跡分布図

る。いずれの遺跡でも、明確な縄文時代の遺構は検出されなかったものの、縄文時代後期から晩期にかけての土器と石器が集中して出土している。

旧石器時代から縄文時代にかけては、千本砂砾州やその後背湿地が、一部水域であったり陸地化後間もない状態であったりしたため、人々の暮らしの場として定着せず、その生活範囲の中心は依然として愛鷹山南麓であったことが考えられよう。

2. 弥生時代

弥生時代以降、千本砂砾州やその後背湿地も安定した人々の生活圏内になったようで、住居址等の遺跡も認められ始める。弥生時代から古墳時代の遺跡として、西通北遺跡の南隣には、西流遺跡・中通遺跡・軒通遺跡の3遺跡の存在が知られている。軒通遺跡は土砂採集工事によって弥生時代中期後葉（有東式併行期）の壺形土器十数個体が完全な形で発見された。低地への人々の進出が弥生時代中期にまで遡ることは確実と言えよう。伴名田遺跡は掘立柱建物跡や溝跡が検出された弥生時代後期の集落跡である。長条遺跡・中津遺跡からは、弥生時代後期の水田に伴う柵跡や木杭が発見されるなど、居住域のみならず食糧生産に関わる生産域の痕跡も見つかっている。愛鷹山南麓の台地の裡には、弥生時代中期後葉から古墳時代前期の集落跡として著名な目黒身遺跡が立地する。弥生時代後期の住居址や墓跡、古墳時代前期の方形周溝墓等が検出された。また、黄瀬川の古い自然堤防上に立地する沢田遺跡からは、弥生時代後期前半の住居址や井戸跡、水田跡が検出されるとともに、土器・石器・鉄器・木製品といった多様な遺物が出土した。

西通北遺跡の周辺では、弥生時代中期段階から人々の生活の痕跡が認められ始め、定住の基盤が固められたものと思われる。弥生時代後期段階に住居址や畠跡、水田跡といった居住域と生産域が確保されたことは、本格的な定住生活の始まりと集落の確立を意味するものと考えられる。弥生時代終末期から古墳時代前期にかけては、目黒身遺跡で検出されたような方形周溝墓による墓域の形成も認められる。

3. 古墳時代

古墳時代の集落跡としては、千本砂砾州上に立地する町遺跡や松長上ノ段遺跡があげられる。これらの集落跡に隣接して千本砂砾州上には、十数基の円墳（古墳時代後期の群集墳）によって構成される松長古墳群が展開している。また、松長古墳群の中には、沼津市内最大にして最古の前方後円墳である神明塚古墳も含まれている。神明塚古墳は、墳丘長54mの前方後円墳で、墳丘や周溝から古墳時代前期に遡る土器片が出土している。一方、愛鷹山南麓にも、古墳時代前期の前方後方墳である辻畑古墳が築造される。後続する古墳時代中期から後期にかけても、集落跡として尾崎遺跡・入方遺跡が、子ノ神古墳・長塚古墳といった前方後円墳が存在する。黄瀬川扇状地の末端には、古墳時代後期の祭祀遺跡として知られる丸子町遺跡が立地し、石製模造品や多数の土偶類が出土した。

古墳の立地環境は、神明塚古墳・松長古墳群といった千本砂砾州上に展開する低地の古墳と、辻畑古墳・子ノ神古墳・長塚古墳といった愛鷹山南麓に展開する高地の古墳の二者が認められる。各古墳の付近には小規模ながらも同時期の集落跡が認められる場合が多く、それそれに一定規模の集団とその首長が存在していたことが考えられる。

4. 古代

古代の遺跡分布は古墳時代までと一転して、千本砂砾州や後背湿地、黄瀬川扇状地といった低地での展開が目立つようになる。千本砂砾州上の東畠毛遺跡は、古墳時代後期から平安時代にかけての集落跡で、住居址や掘立柱建物跡が検出されるとともに、9世紀代の縁石陶器片や墨書き御器（判號不明）が

出土した。双葉町遺跡からは、平安時代の土師器（「有」の字）と灰釉陶器（「本」の字）の中に墨書きが認められた。

現在のJR沼津駅北口周辺に位置する上ノ段遺跡では、8世紀前半から10世紀にかけての住居址や掘立柱建物跡が多数検出された。特筆すべき出土遺物として、8世紀前半代の唐三彩の陶枕があげられる。上ノ段遺跡の北東に位置する日吉廃寺は、安倍郡（静岡市）に駿河國分寺が造営されるまでは、駿河国における最大級の伽藍を誇っていたと言われている。遺構配置や特殊遺物の出土、日吉廃寺の存在等から、上ノ段遺跡は郡家の機能の一部を担う官衙関連遺跡であった可能性が考えられる。愛鷹山南麓には、詳細は不明だが、平安時代末期から鎌倉時代にかけての道尾塚経塚の存在が知られている。

沼津市一帯は古代の国郡制において駿河国駿河郡に属していた。駿河郡家に直接関係する遺跡の存在は未だに知られていないが、上ノ段遺跡や日吉廃寺の存在から、現在のJR沼津駅付近に駿河郡家が存在していた可能性は高いと考えられる。官道である古代東海道は、富士郡柏原駅から海岸沿いに現在の沼津市街地を通りて駿河郡家と繋がっていたことが想定され、古代東海道の路線上あるいはその周辺に位置する西通北遺跡でも、古代の人々の往来は盛んであったと思われる。

5. 中世

中世における駿東（駿河國東部）地域は、基本的に今川氏の領国であったが、中世後期（戦国時代）になると、後北条氏の領国への境目に接する地域となり、武田氏や徳川氏も含めた抗争の地となり、支配者がめまぐるしく変化している。今川氏が長らく治めてきた駿東地域は、天文6年（1537年）の後北条氏による駿河侵攻（河東一乱）によって一時に後北条氏の支配地とされる。天文14年（1545年）には、武田氏の仲介によって今川氏と後北条氏との間で和議（駿相一和）が成立し、今川氏が駿東地域の領土を回復した。今川義元の桶狭間での敗死後、永禄11年（1568年）に駿河に侵攻した武田氏によって駿東地域は支配されるが、天正10年（1582年）に武田氏が滅ぶと、徳川氏によって治められた。

桜古屋の奥国寺城は伊勢宗晴（北条早雲）旗揚げの城として著名であるが、少なくとも現在残る城跡は天文18年（1549年）に今川義元によって築城が開始されたものとされる。城跡の保存事業の本格化に伴い、発掘調査が実施され、南北に連続する本丸・二の丸・三の丸を中心とした縄張りの全容が把握されている。また、西沢田の後藤屋敷跡は今川氏紀下の在地土豪勢の一員である後藤氏の屋敷跡として、土塁や礎石の一部が残存している。大手町・上土町一帯に広がっていた三枚橋城は、天正7年（1579年）に武田勝頼による築城とされている。外堀の一部が発掘調査され、戦国時代末期から江戸時代初期の石垣が検出されている。

6. 近世以降

江戸時代初期の慶長19年（1614年）に三枚橋城は廃城となるが、江戸時代中期の安永6年（1777年）には沼津水野藩が成立し、三枚橋城の跡地を利用して沼津城が築造された。明治時代に入り沼津城は沼津兵学校の校舎として使用されたが廃校となり、明治5年（1872年）に城はその土地とともに競売にかけられ解体・売却された。その後、東海道本線開通に伴って沼津市街に南北縱貫道路が建設され、また沼津市内における2度の大火が発生したことにより堀が完全に埋められることになった。現在では城の痕跡は認められず、僅かに城に関する地名が残るのみである。

参考文献

- 安藤広道 2002 「静岡県沼津市東椎野久保出土の弥生土器について」『民俗考古』第6号 『民俗考古』編集委員会

- 小野真一 1957 「沼津市灰塚遺跡と軒道遺蹟について」『静岡県東部古代文化総観』 藤契社
- 小野真一 1983 「富士周辺における弥生・古墳時代の集落立地の変動について—弥生末海進の提起—」
『駿豆考古』第25号 駿豆考古学会
- 近藤舞 2000 「駿豆地方の弥生時代中期後半の遺跡群」『静岡県考古学研究』32 静岡県考古学会
- 設楽博己 1994 「沼津市離島原遺跡の縄文晚期土器」『沼津市史研究』第3号 沼津市教育委員会
- 高尾好之・山本恵・渡井英善 2010 「静岡県沼津市発見の辻畠古墳」『邪馬台国時代の東海と近畿』資料集 ふたかみ邪馬台国シンポジウム10 香芝市教育委員会
- 竹内直文 1988 「東日本における弥生文化の発展—静岡県の土器編年を中心として—」『史館』第20号 弘文社
- 中野國雄 1987 「静岡県に於ける弥生時代遺跡の分布と立地についての予察」『静岡県考古学研究』20 静岡県考古学会
- 原秀三郎ほか編 2004 『沼津市史』資料編 考古 沼津市
- 原秀三郎ほか編 2007 『沼津市史』通史編 原始・古代・中世 沼津市
- 向坂第二 1987 「考古学的方法における静岡県の地域区分」『静岡県史研究』第3号 静岡県
- 沼津市教育委員会編 1987 『沼津市埋蔵文化財分布地図』

第III章 調査の成果

第1節 遺構と遺物の概要

調査では、大小合わせて205基の遺構が検出された。出土遺物からこれらの遺構の時期は、弥生時代と奈良・平安時代、近世以降に大きく分けられるが、僅かながら縄文時代以前と古墳時代、中世の遺物も出土している。このことから、西遡北遺跡において縄文時代以前から近世に至るまで、断続的に人為的活動があったことが窺える。

本書で扱う遺構は、環濠・溝状遺構・土坑・小穴・土坑列・池状遺構の6種である。溝状の遺構の内、円弧状の平面形態、U字形ないしは逆台形の断面形態をもち、幅が2m以上、深さが1m以上の大規模なものを見出し、それ以外のものを溝状遺構とした。穴状の遺構の内、長径0.5m以上のものを土坑、長径0.5m未溝のものを小穴とした。同一の環濠をもつ土坑・小穴群が並んだものを土坑列とした。周囲に木杭列をもち、溝状遺構と土坑を組み合わせたような不定形な形状を呈するものを池状遺構とした。なお、資料整理の過程で、遺構番号を付け直しているため、第5表に新旧遺構番号対照表を示した。

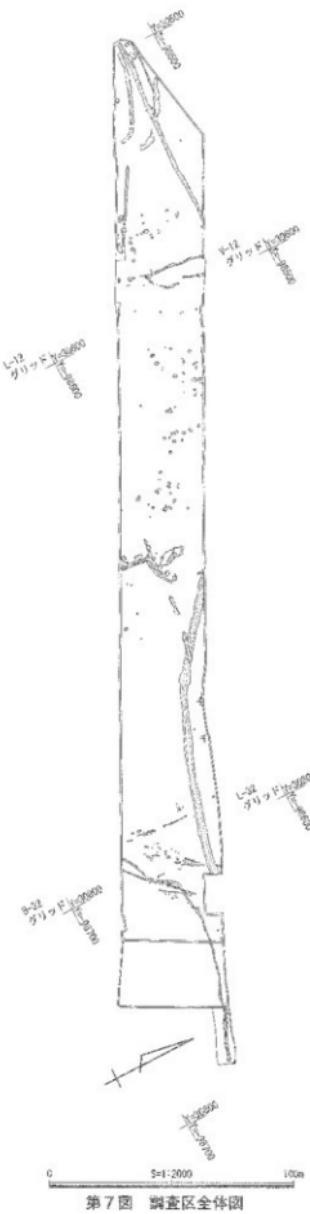
遺構は全て同一面上で検出され、遺構内覆土のみによって時期的な区分を行えるだけの差異は見出しがたい。また、土坑や小穴の並びから、明確に建物の平面形を捉えることはできなかった。したがって、ここでは出土遺物や遺構の切り合い関係等から帰属時期を捉えることができた遺構72基について報告する。帰属時期が判明した遺構の内、弥生時代の遺構としては、環濠1条・土坑5基・土坑列1基の計7基が認められた。奈良・平安時代の遺構としては、溝状遺構12条・土坑20基・土坑列7基の計39基が認められた。近世以降の遺構としては、池状遺構1基・溝状遺構9条・土坑15基・土坑列1基の計26基が認められた。帰属時期不明の土坑(41~157号土坑)と小穴(1~16号小穴)については個別に詳述しないが、弥生時代から近世以降の土坑とともに、計測値を第6表にまとめた。

出土した遺物は、現地にて収納用コンテナ25箱程度を数えた。土器・土製品・石器・木製品・金属製品・炭化物の6種が出土し、図化し得たものは、土器431点・土製品3点・石器11点・木製品4点・金属製品10点の計459点である。また、図化し得なかつた中世陶磁器の破片22点に要しては、巻頭図版8に写真を掲載した。これらを含めた481点の報告書掲載遺物に関する所見は全て第7~12表の観察表にまとめた。

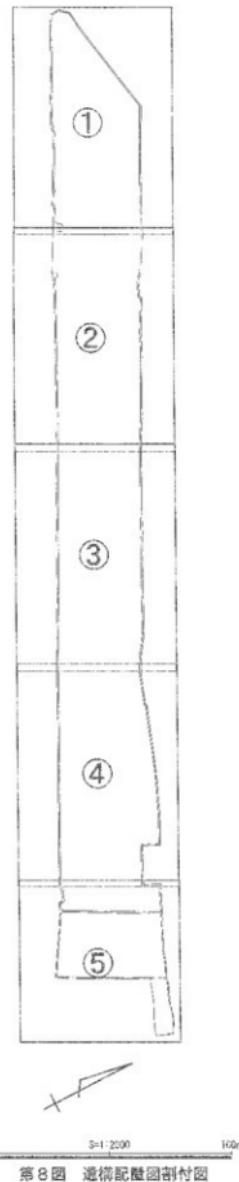
第14図は、遺構検出面上や遺構の底直上で出土した土器の分布を示したものである。調査区内の出土土器には種別ごとに分布に偏りが認められることが分かる。調査区西側の1~5号溝状遺構付近では土師器と須恵器が濃密に分布している。一方、弥生土器の分布は調査区北側の環濠とその周辺での分布が顕著で、他の場所での出土はほぼ認められない。調査区西側は奈良・平安時代、東側は弥生時代を中心とした生活域であったことが考えられる。遺構の広がりや遺物の分布に関して、弥生時代と奈良・平安時代とで重なり合う傾向がほとんど認められることから、同一事業の発掘調査として便宜上1遺跡に括られてはいるものの、西遡北遺跡は本来、時期も集落の中核となる場所も全く異なる複数の遺跡に分かれている可能性が高い。環濠の位置や平面形態から、調査区のさらに北側には弥生時代中期中葉の環濠集落が、さらに西側には奈良・平安時代を中心とした集落が展開していたことが推定される。

遺構内で特に遺物が集中的に認められた箇所については「遺物集中」として取り扱い、遺物出土状況図(第24~27・45~47・52図)を作成した。対象となった遺構と箇所は、弥生時代の環濠(4箇所)、奈良・平安時代の3号溝状遺構(3箇所)と5号溝状遺構(1箇所)の3遺構8箇所である。遺物出土状況図は、環濠については平面分布図と垂直分布図(遺構の上端と下端はエレベーション)、溝状遺構については平面分布図とエレベーション図を掲載している。

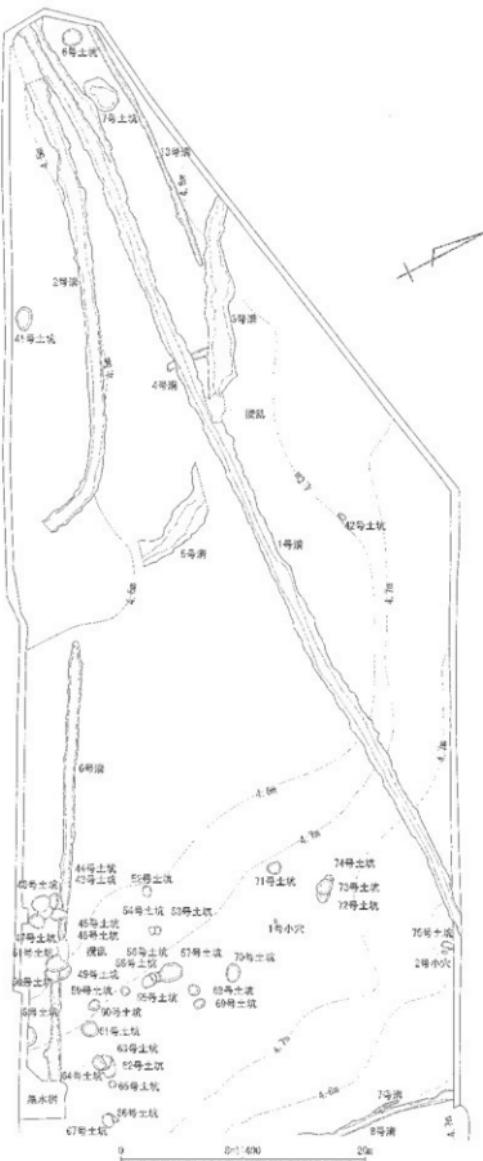
調査区内における遺構の分布は偏在しており、調査区西側および東側に奈良・平安時代の溝状遺構が、



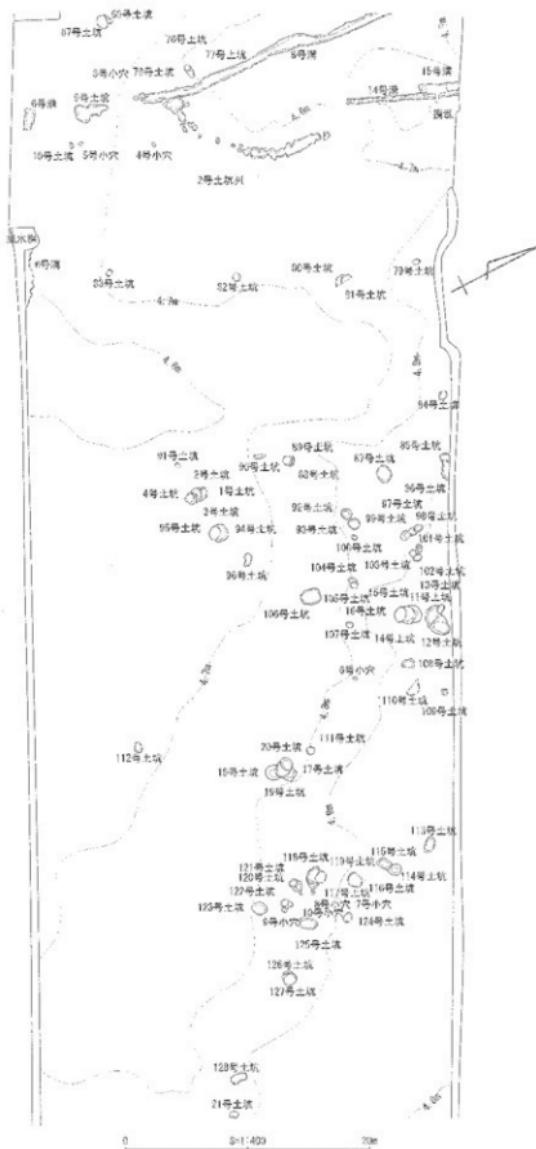
第7図 調査区全体図



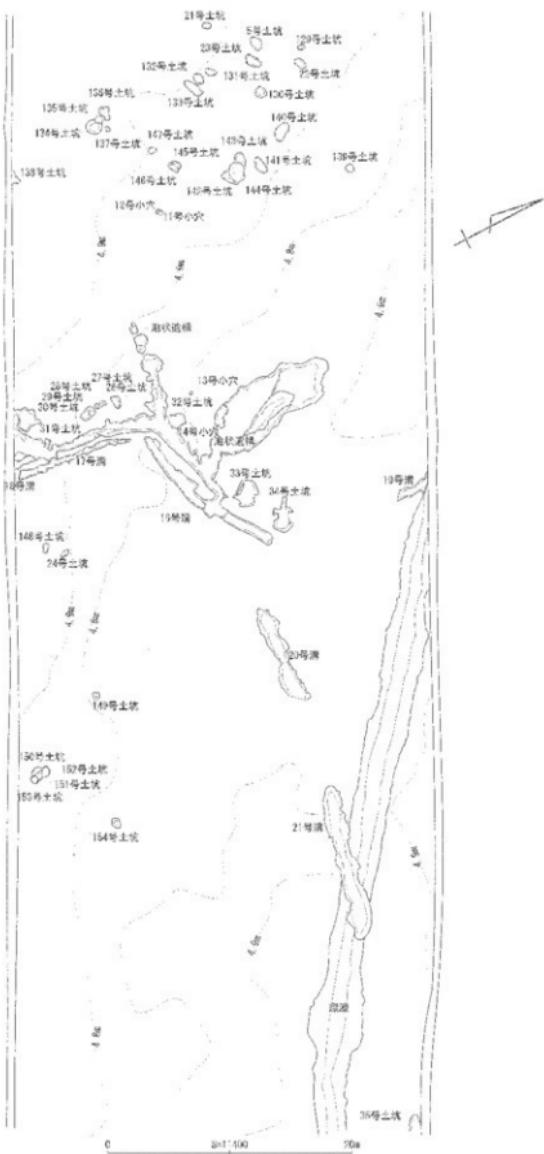
第8図 造構記録図剖付図



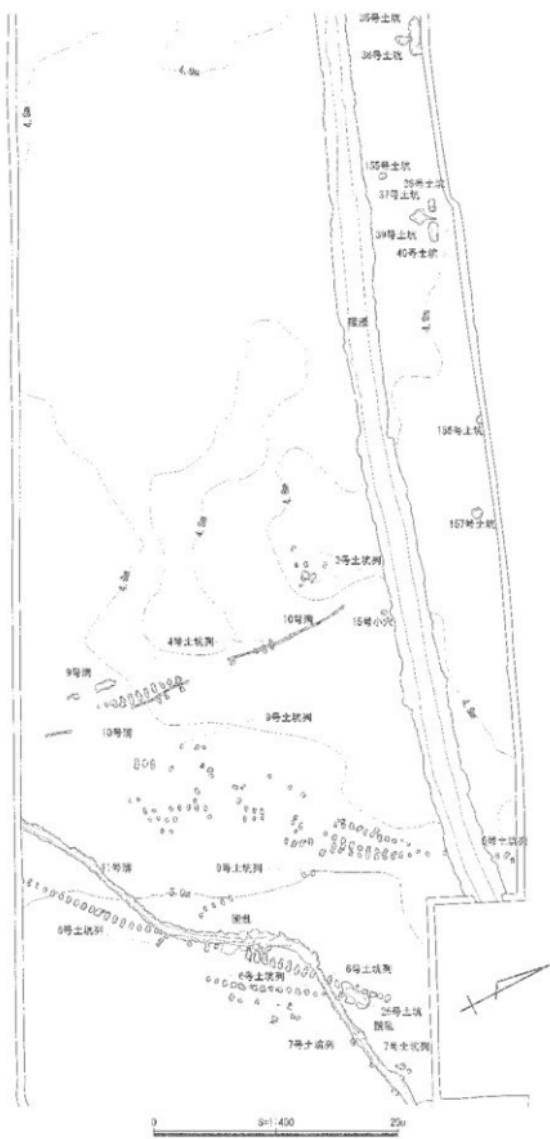
第9図 遺構配図①



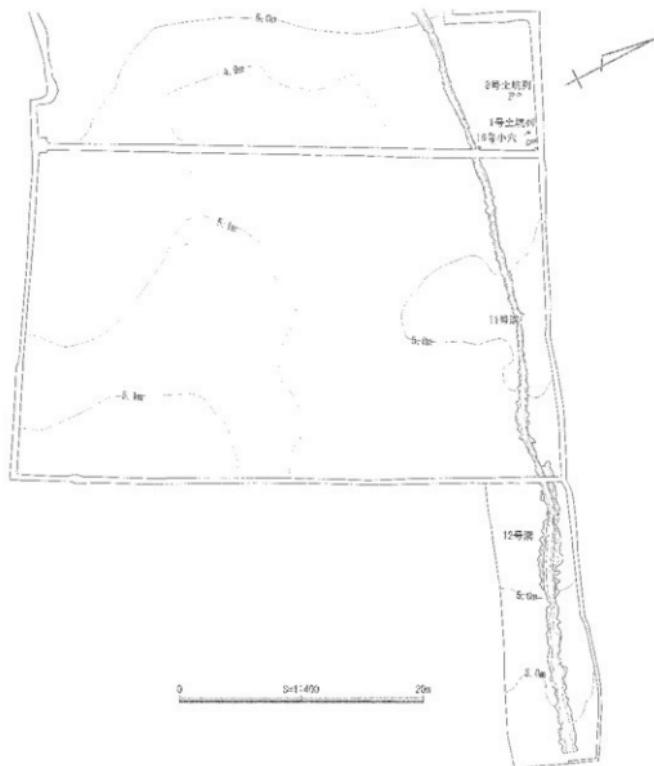
第10圖 道機配置圖②



第11圖 遠摺配置圖③



第12図 道構配置図④



第13回 遺構配置図⑤

調査区中央やや西寄りに土坑（帰属時期不明のものを含む）が、調査区中央やや東寄りに弥生時代の環濠と近世以降の池状遺構や溝状遺構が展開する。調査区西側では、1～6号溝状遺構が主に東西方向に延伸している。南北方向に延伸する8号溝状遺構付近を境に北西側には土坑の集中分布が認められる。ほとんどが出土遺物の認められない時期不明土坑であるが、土坑同士の切り合いは多く見受けられる。8号溝状遺構から東へ池状遺構に至るまでの間に、調査区北側を中心に土坑や小穴の分布が目立つ。やはり時期不明土坑が多いが、1～5号土坑のように弥生時代に帰属する土坑も認められる。池状遺構の周辺には近世以降の溝状遺構や土坑が集中している。弥生時代の環濠は西端が近世以降の遺構の分布域とやや重なるものの、基本的には環濠周辺では、土坑や溝状遺構の分布は薄くなる。特に環濠の外側にあたる調査区南側はほぼ無遺構となる。環濠の東端付近から10号溝状遺構や9号土坑列といった奈良・平安時代や近世以降の遺構が認められ始め、環濠が調査区外へ姿を消す調査区東側では、11号溝状遺構やその周辺の土坑や土坑列など、主に奈良・平安時代の遺構が展開している。



第14図 調査区内出土土器分布図

第2節 繩文時代以前の遺物

繩文時代以前の遺構は検出されず、遺物も石器が2点出土したのみである。第Ⅱ章第1節で触れたように、西濃北濃周辺が2,000~3,000年前頃に海中から陸地化した経緯を踏まえれば、繩文時代以前の遺物の少なさも自然と言えよう。

石器（第15図）

1は四基式の黒曜石製石鏃で、繩文時代早期以降の所産と考えられる。1号溝状遺構の底面付近から出土した。片翼が一部欠損するが、ほぼ完形である。

2は赤玉石製石核である。包含層より出土した。帰属する時期は判然としないが、旧石器時代にまで遡る可能性もある。各所に潰れた痕跡があり、楔形石器のような割り方をしていたのかもしれない。包含層より、同様の赤玉石製の剥片も1点出土していることから、赤玉石による石器製作を示す資料である可能性も考えられる。



第15図 繩文時代以前石器実測図

第3節 弥生時代の遺構と遺物

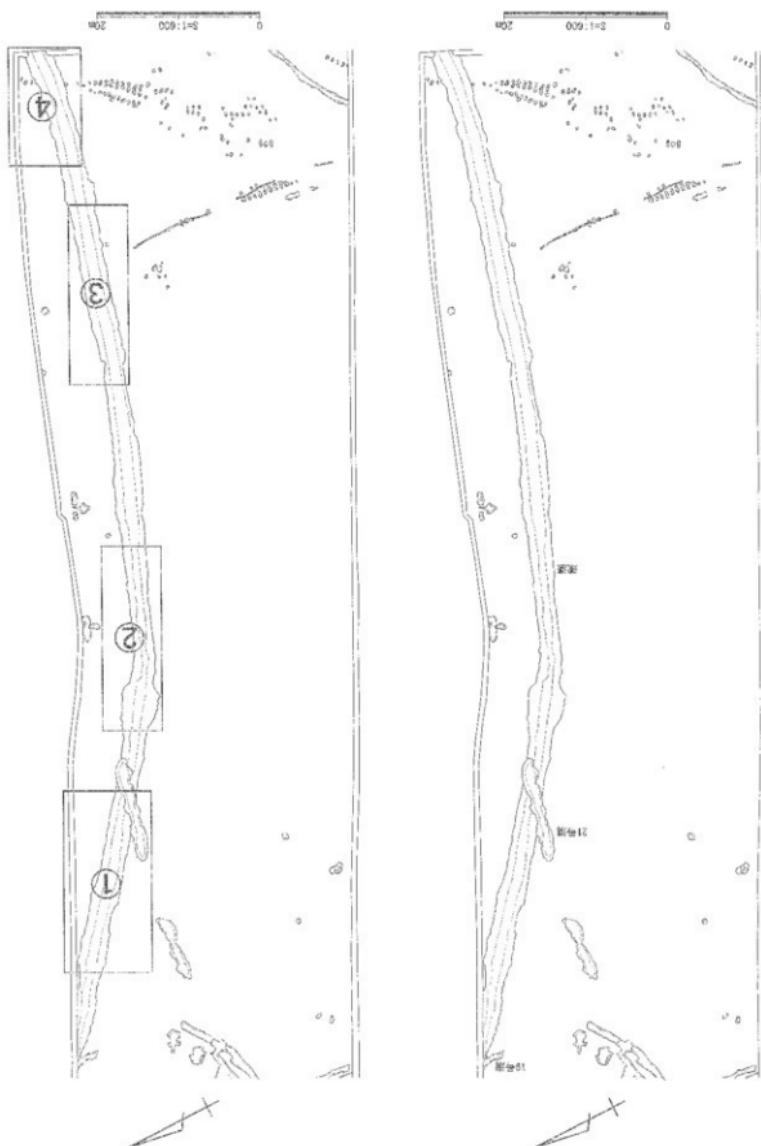
弥生時代の遺構として、環濠1条・土坑5基・土坑列1基を検出した。出土した弥生土器の年代は、『弥生土器の様式と縄年』（加納・石黒編 2002）における東濃河地域における縄年に従いながら、幾つについては伊藤淳史氏の論考（伊藤 1996）も参考にした。本来は遺跡の立地する東濃河地域における縄年と対照させるべきところであろうが、当地域の弥生時代中期段階（東濃河Ⅱ・Ⅲ様式）の資料の少なさから、西濃河地域の縄年に対照させることとした。

環濠（第16~27図）

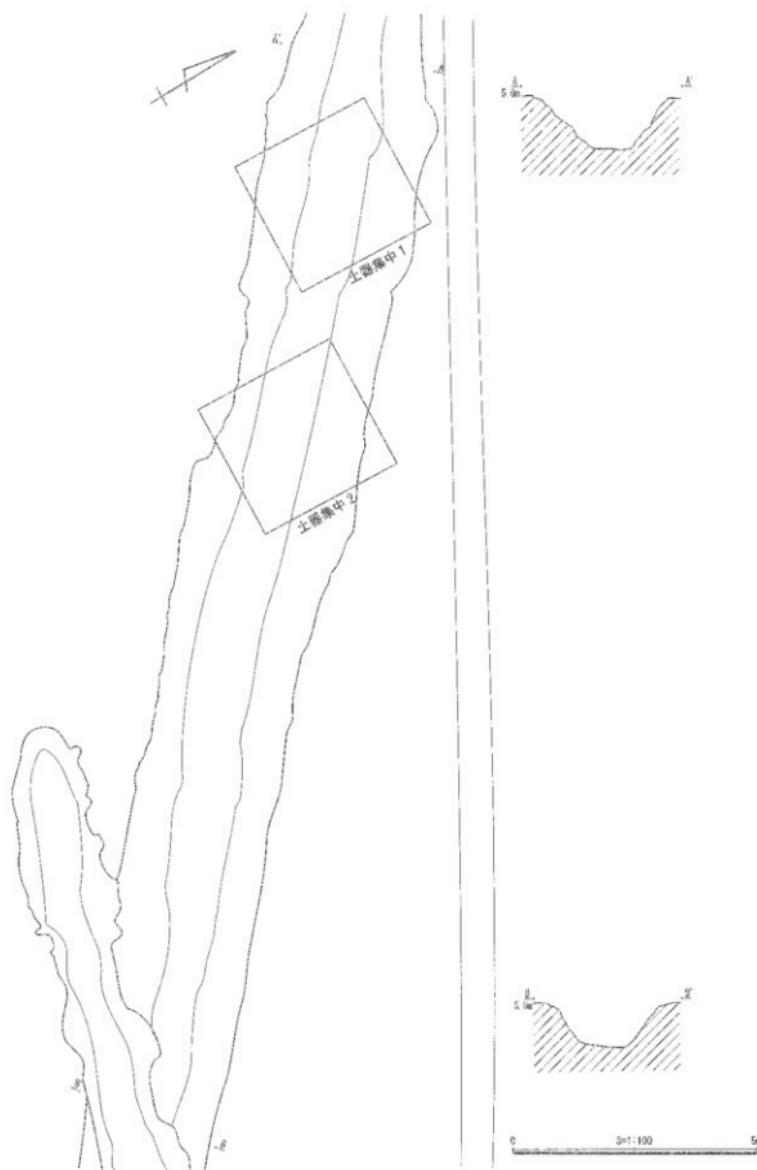
環濠は調査区北側から南に向かって張り出すように緩やかな円弧を描き、東西方向に延伸する。総延長は調査区内で確認できただけでも、約120mを測る。環濠の北西隅は調査区北側へ続き、北東隅についても攪乱であるコンクリートブロックによって途切れた後、北側の調査区外へ続いていくようである。幅は概ね2.5m程度であるが、幅広の中央部付近で、最大幅4.5mを測る。検出面からの深さは1m前後を測り、北西隅付近と北東隅付近で深く、中央部付近でやや浅くなる傾向にある。断面形態は緩やかなU字形ないしは逆台形を呈し、両端の底部からの立ち上がりの部分には抉れたような窪みをもつ箇所が多く認められた。

環濠は土層の堆積状態から6層に分層でき、第2層までは奈良・平安時代以降の遺物が混在するものの、第3層以下は弥生時代の遺物のみを包含している。第3層および第4層は弥生時代中期後葉を主体とする時期と考えられるが、第3層からは鉄砲と思われる鉄製品が、第4層からは石鏃がそれぞれ出土している。また、環濠下部にあたる第5層および第6層は弥生時代中期中葉を主体とする土器が出土し

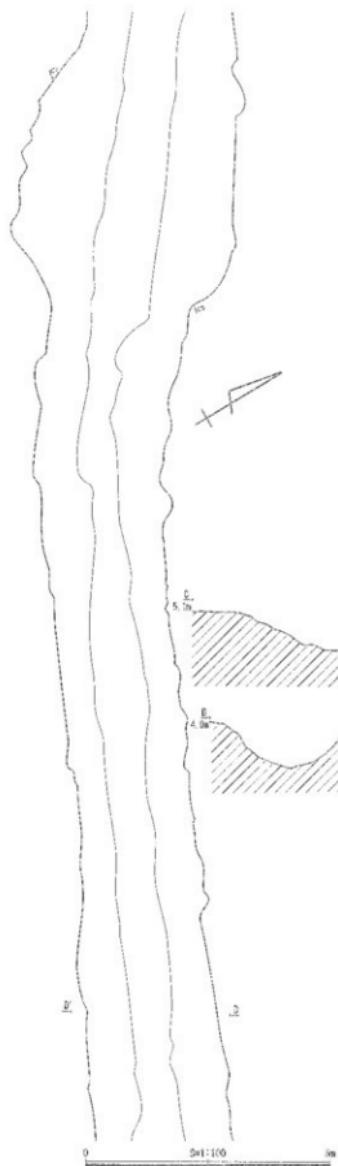
第16圖 雜草平面圖



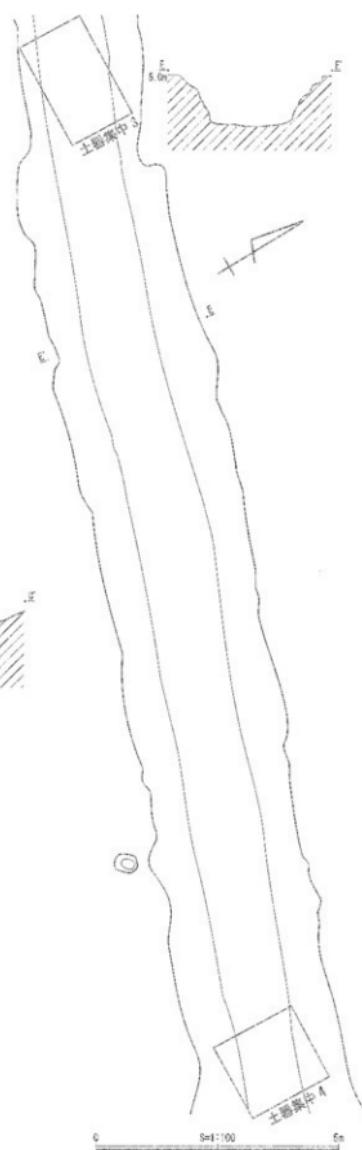
第17圖 雜草分布圖



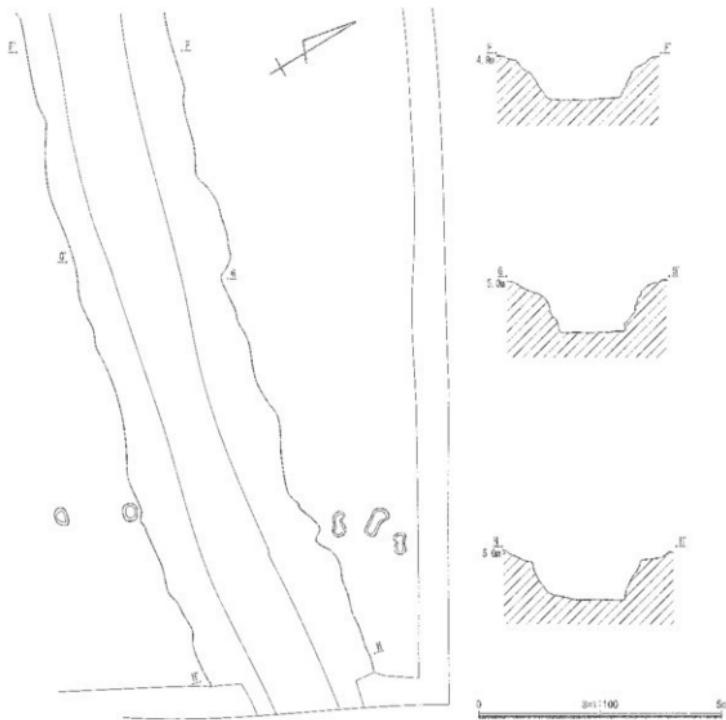
第18図 環濠平面・エレベーション図①



第19図 環濠平面・エレベーション図②



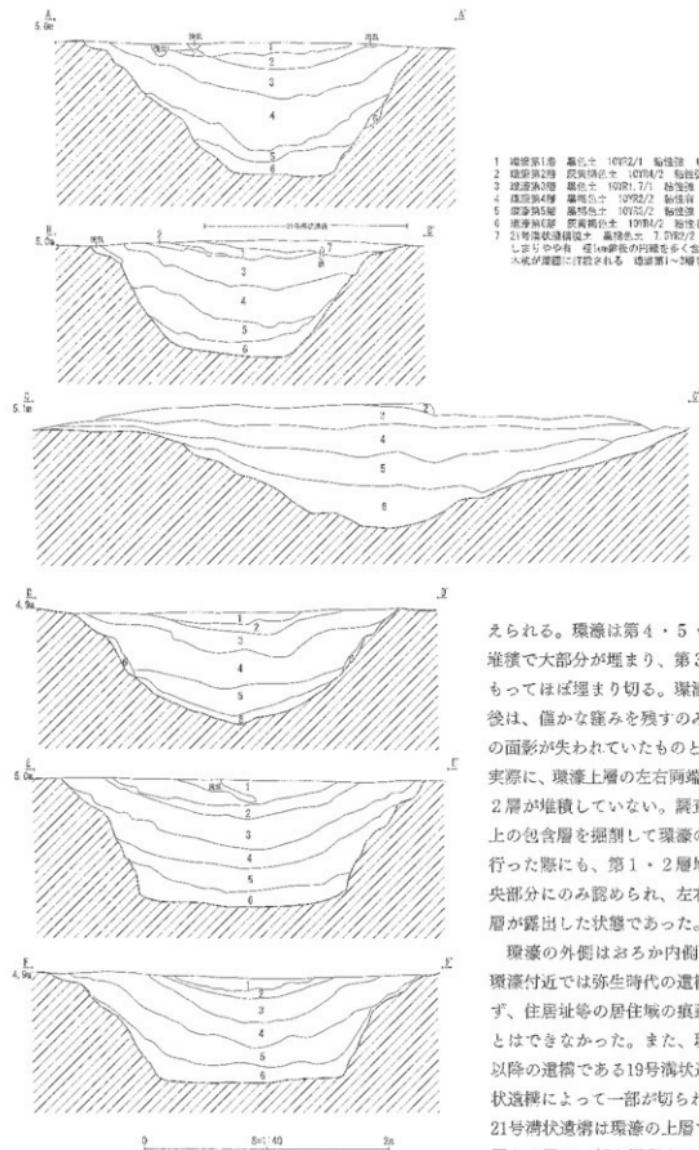
第20図 環濠平面・エレベーション図③



第21図 環濠平面・エレベーション図④

ている。特に環濠底部に近い第6層からは土器が集中して出土する地点が4箇所認められた。各土器集中では、壺や甕の破片がまとまって出土した。特に土器集中1では、集中内で接合する壺が多く認められたが、第33図の6に関しては、土器集中1と隣接する土器集中2で出土した破片同士が接合して、壺の胴部が組みあがった。土器集中3では甕の破片が多く出土し、第34図の9や10のように、接合によつて甕の口縁部から脚部まで復原可能な資料を得ることができた。土器集中4で出土した土器片の大半が接合し、第33図の2が組みあがった。上記のように、一見土器片が多数出土しているように見える土器集中であるが、接合作業の結果、各土器集中につき1～2点の完形に近い土器が割れて破片となっている資料が多く含まれていることが判明した。このように、土器数個体がその場で割れたような出土状況からは、土器が環濠内外から割れた状態で流れ着いたものではないことが考えられる。土器数個体が環濠の内側ないしは外側から転落あるいは廻棄された結果として、4箇所の土器集中が認められるに至ったものと推定される。

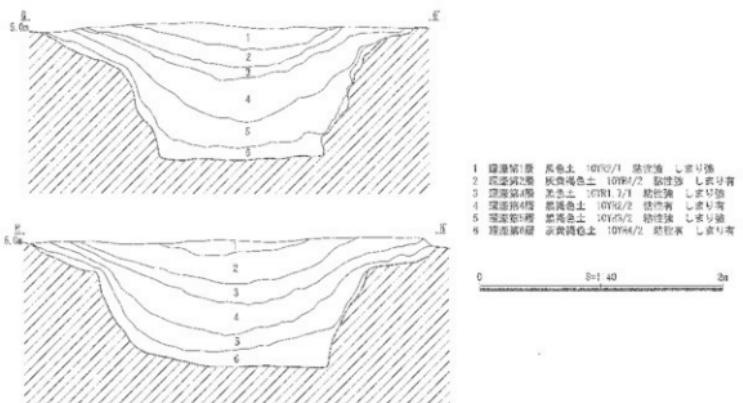
環濠内の堆積は土層観察の結果、どの箇所においても水平堆積であり、環濠内外の土壌の流出あるいは再掘削等の痕跡は認められなかった。覆土における地山土の混入は環濠下層の第5・6層特に第6層で多く認められた。これは環濠の埋没過程において両側壁から削れた地山土が混入していた可能性が考



第22図 環濠断面図 (A~F)

えられる。環濠は第4・5・6層までの堆積で大部分が埋まり、第3層の堆積をもってはば埋まり切る。環濠第3層堆積後は、僅かな窪みを残すのみで、ほぼ濠の面影が失われていたものと考えられる。実際に、環濠上層の左右両端には、第1・2層が堆積していない。調査中に環濠直上の包含層を掘削して環濠の遺構復出を行った際にも、第1・2層堆積は環濠中央部分にのみ認められ、左右両端は第3層が露出した状態であった。

環濠の外側はおろか内側においても、環濠付近では弥生時代の遺構は確認されず、住居址等の居住域の痕跡を認めるることはできなかった。また、環濠は、近世以降の遺構である19号溝状遺構と21号溝状遺構によって一部が切られている。19・21号溝状遺構は環濠の上層である1・2層と3層の一部を掘削するに止まっており、4層より下層には及んでいない。



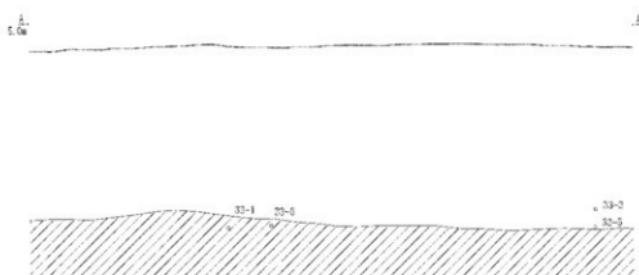
第23図 環濠断面図 (G・H)



第24図 環濠土器集中 1 出土状況図



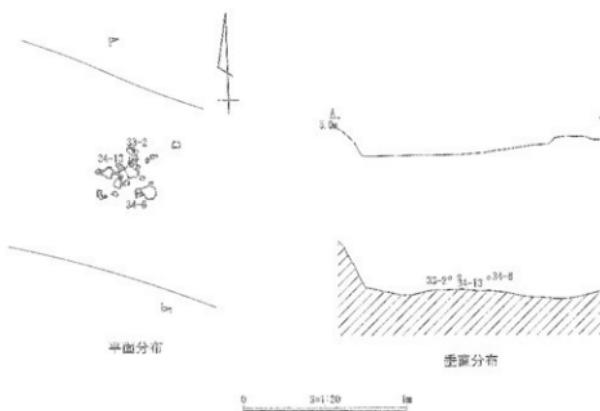
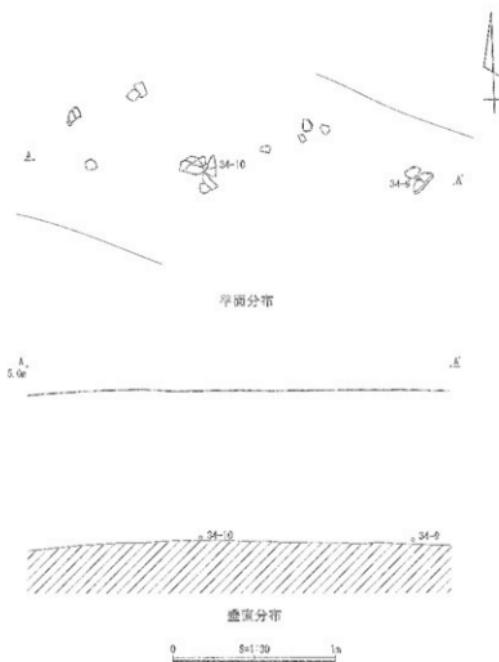
平面分布



垂直分布

0 5m 10m

第25図 環濠土器集中2出土状況図



環濠出土遺物（第28～34図）

①第1・2層出土遺物（第28図）

環濠第1層および第2層からは、弥生土器片の他に奈良・平安時代の土師器片も混在して出土した。土器 1は第1層から出土した土師器壺の底部片である。底部に縦轆引きの痕跡が認められる。灰釉陶器壺の模倣品と考えられる。2は弥生土器壺の口縁～胴部片である。環濠出土の破片と環濠直上の包含層中から出土した破片が接合したことから、環濠埋没の最終段階で混入したものと思われる。頸部から肩部にかけてLR単節で複数の縄文が施される。細頭で口縁部がラッパ状に開く。IV-3～6様式の範囲で、弥生時代中期末から後期初頭にかけてのものと考えられる。3は弥生土器壺の口縁部破片、4は土師器壺の口縁～体部片である。5は土師器壺の底部片である。

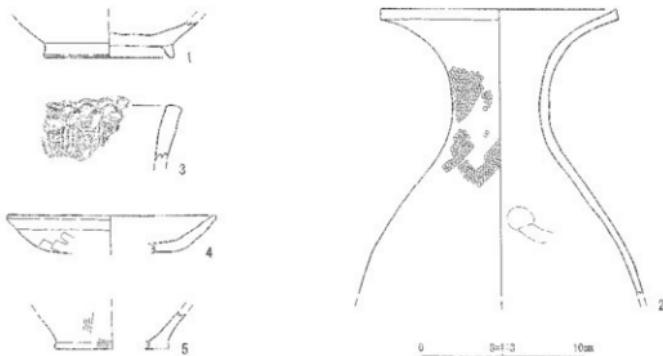
②第3層出土遺物（第29図）

環濠第3層以下は土師器片の混在もなく、純粹に弥生時代の遺物のみを包含していると考えられる。第3層では土器以外に特徴すべきものとして、鉄鏟の茎部片と思われる鉄器1点が出土している。

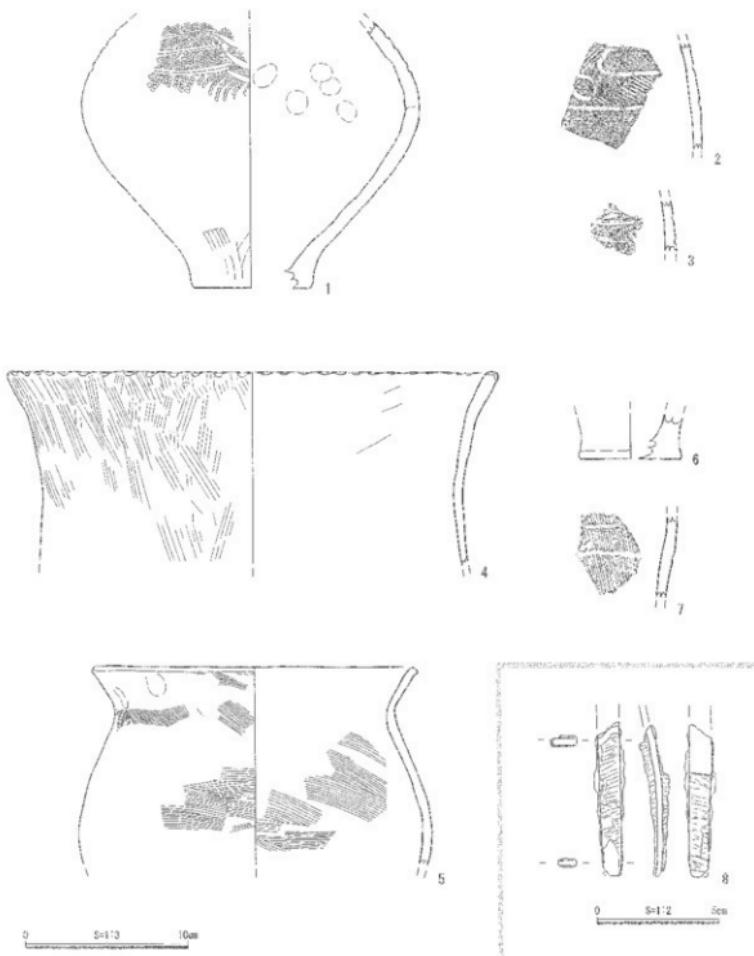
土器 1は壺の胴～底部片である。箇描きによる沈縁文と縄文が施される。IV-2または3様式に相当する。2・3は壺の胴部破片である。沈縁による区画と内区に充填された縄文が認められる。4・5は壺の口縁～胴部である。4は縦位の刷毛目調整を主体とする。胴部上半の残存状態より、最大径は口縁部に位置する。IV-4様式に主流となる無文壺にあたると思われる。5は胴部下半以下を欠損するが、台付壺であった可能性も考えられる。台付壺の本格的な出現は、西阿賀河ではV様式から、東駿河ではIV様式からとなる。6は壺の底部片である。7は壺の底部破片で、いわゆる磨消線文壺である。縦位を基調とする刷毛目調整の後、洞部に指頭によって横位の磨消線を施す。磨消線文壺の出現は伊藤編年中期IIにあたり、中期IIIに盛ん行する。概ね中期IIがIII-3～IV-1様式に、中期IIIがIV-1～2様式に該当する。

第3層出土土器は、5が弥生時代後期にまで時期が下る可能性を残すものの、概ね弥生時代中期後葉までに位置づけられる資料である。

鉄製品 8は環濠第3層より出土した鉄鏟の茎部片と考えられるものである。環濠から出土した唯一の金属製品である。上端はやや反り、断面形態は長方形を呈す。上端から下端に向かって幅・厚さとともに徐々に減していく。下端は一部僅かに欠損するものの、茎尻端まで残存している。両面に木質が付着しており、木柄の痕跡の可能性も考えられる。



第28図 環濠第1・2層出土土器実測図

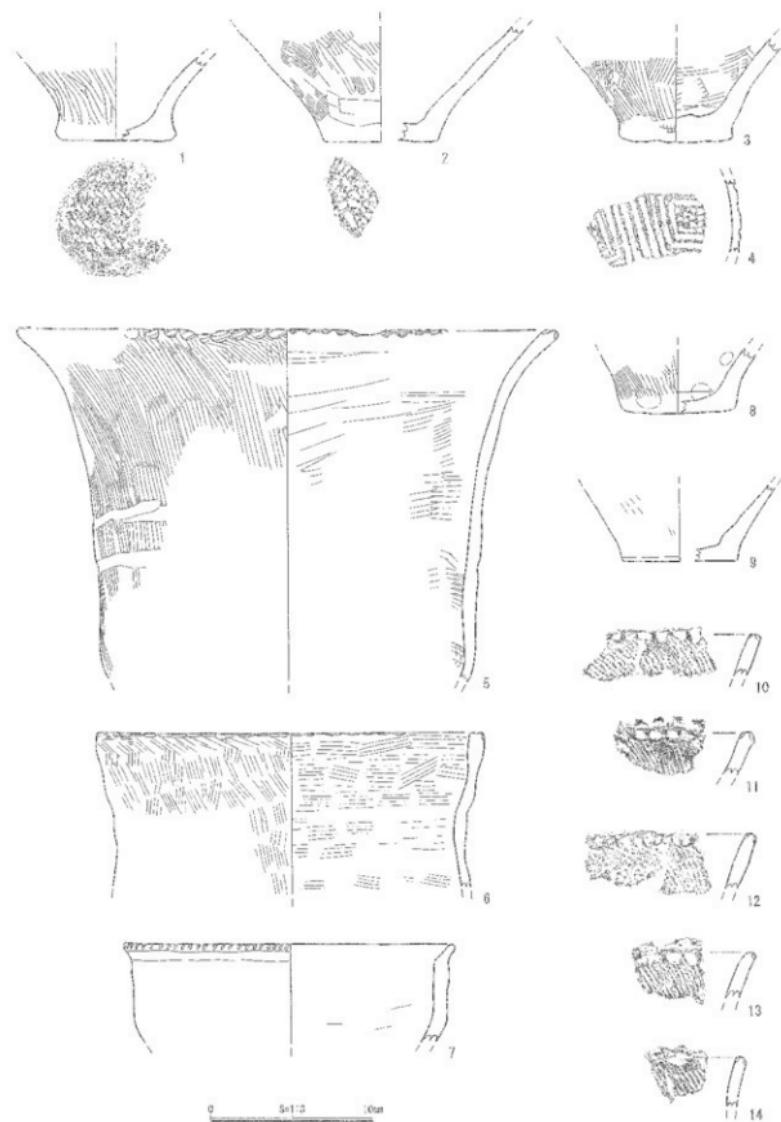


第29図 球藻第3層出土土器および鉄製品実測図

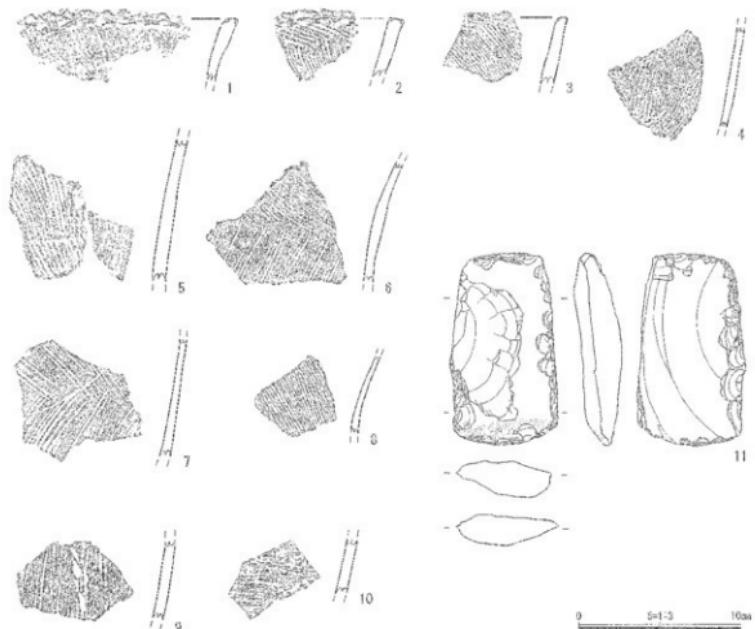
③第4層出土遺物（第30・31図）

球藻第4層は他の層と比べ、出土土器中の甕の割合が高かった。また、石鏡1点が出土している。

土器 第30図の1～3は甕の底部片である。IV様式にほぼ相当し、従来の有茎式に該当する。底部から胴部への立ち上がりから、IV-3様式であろうか。4は甕の脇部破片である。重四角文を重複させた内区に棒状工具による刺突文が施される。III-3様式から類例が認められ始める。5～7は甕の口縁～胴部片である。5は磨消線文甕である。刷毛目調整を複数2条の指頭による沈線で磨り消す。磨消線文を境



第30図 球塚第4塚出土土器実測図



第31図 球藻第4層出土土器および石器実測図

に上半と下半とで、攢整の工具や方向を違えることはなく、全面縦位を基本とする刷毛目調整のみが基調となる典型的磨消線文（伊藤分類Bb）である。6も外縫縦位を基調とする刷毛目調整が施されるが、磨消線文甌ほど口縁部が開かず、刷毛の単位も短い。7とともに無文の刷毛窓でIV-4様式の資料であろう。8・9は甌の底部片である。10～14は甌の口縁部破片である。いずれも縫位の刷毛目調整が施される。

第31図の1～3は甌の口縁部破片である。4～10は甌の底部破片である。5は胴部下半から底部付近の破片である。6・7は横位羽状文甌である。縫方向の刷毛目調整による縫位羽状の装飾をもつ。横位羽状文甌は磨消線文甌よりも発展時期が1段階遅れ、伊藤編年中期III（IV-1～2様式）に出現し、中期IV（IV-3様式）に盛行する。10は刷毛目調整とは異なる縫位の調整が施されており、条痕文調整の可能性がある。

第4層出土土器は弥生時代中期後葉の資料を主体に、直四角文の甌や典型的磨消線文甌など、弥生時代中期中葉から中期後葉の古段階に残り得る資料が散見されるようになる。

石器 11は打製の石鎌である。球藻から出土した唯一の石器である。平面形は短冊形、刃部は平刃を呈する。表裏とも横方向からの大きな剥離面が残されている。刃部付近に一部研磨しているような痕跡が認められるため、磨石として転用された可能性が考えられる。石材はホルンフェルスである。

④ 第5層出土土器（第32図）

球藻第5層は土器のみの出土であるが、外来的要素をもつ甌が認められた。

土器 1は長頸壺の口縁～頸部片である。口縁端部外側が摩滅する。口縁部から頸部に至るまでの間に器形がなだらかにふくれ、有孔刻み目をもつ縦位の棒状突起が3箇所に等間隔で貼り付けられるものの、1箇所は落失している。ほぼ全面に沈線による区画と刺突文が施される。口縁部付近は横方向の弧状の沈線と縱方向の沈線が巡り、弧状の沈線の交点に直径0.9cmの円形貼付文が施される。頸部付近は沈線によって区画された三角形の単位文の中に刺突文が充填される。三角文の交点には円形貼付文が施される。文様構成からⅢ-3様式に位置づけられる。刻み目をもつ突帯としては、田方郡函南町の仁田仲遺跡跡A溝状造塗出土例（秋本 1976）などが類例としてあげられる。2は太頸壺の口縁部破片である。刻み目を境に口縁部は「く」の字状に屈曲する。口唇部は、横位の刷毛目調整後、四角形に範囲沈線文が施されるほか、棒状突起が貼り付けられる。刻み目下位には、縦位の刷毛目調整と横位の範囲沈線文が施される。駿河在來のものではなく、西の三河地域に分布する同時期の三河V-3様式にあたると思われる。弥生時代中期中葉の新段階に比定できようか。胎土や色調に他との際立った違いは認められず、在地での模倣品であった可能性も考えられる。3～5は壺の腹部破片である。沈線による区画と縄文あるいは刺突文が認められる。

6・7は壺の底部片である。8～15は壺の口縁部破片である。8・9は磨消線文壺と思われる。16～23は壺の腹部破片である。16・17は磨消線文壺、18・19・21は横位羽状文壺である。23は条痕文が施された可能性がある。

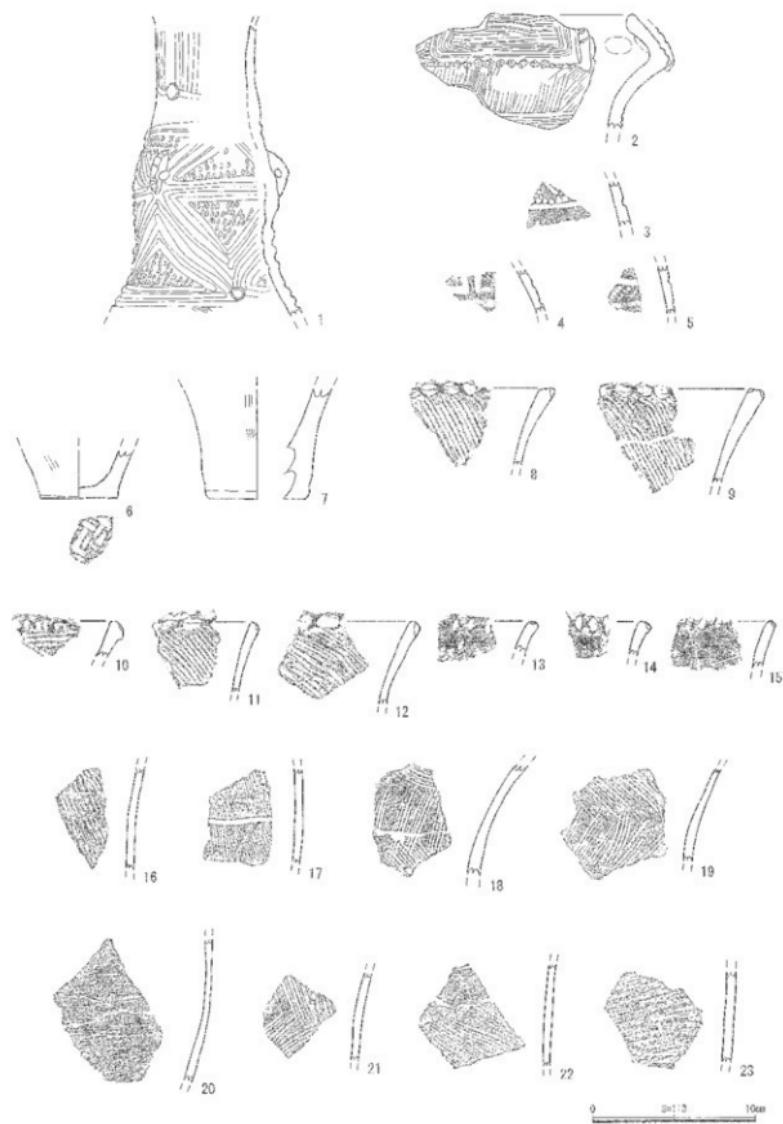
第5層出土土器は文様や調整から時期が判明するものについては、弥生時代中期中葉の新段階の資料が多いと言えよう。

⑤第6層出土土器（第33・34図）

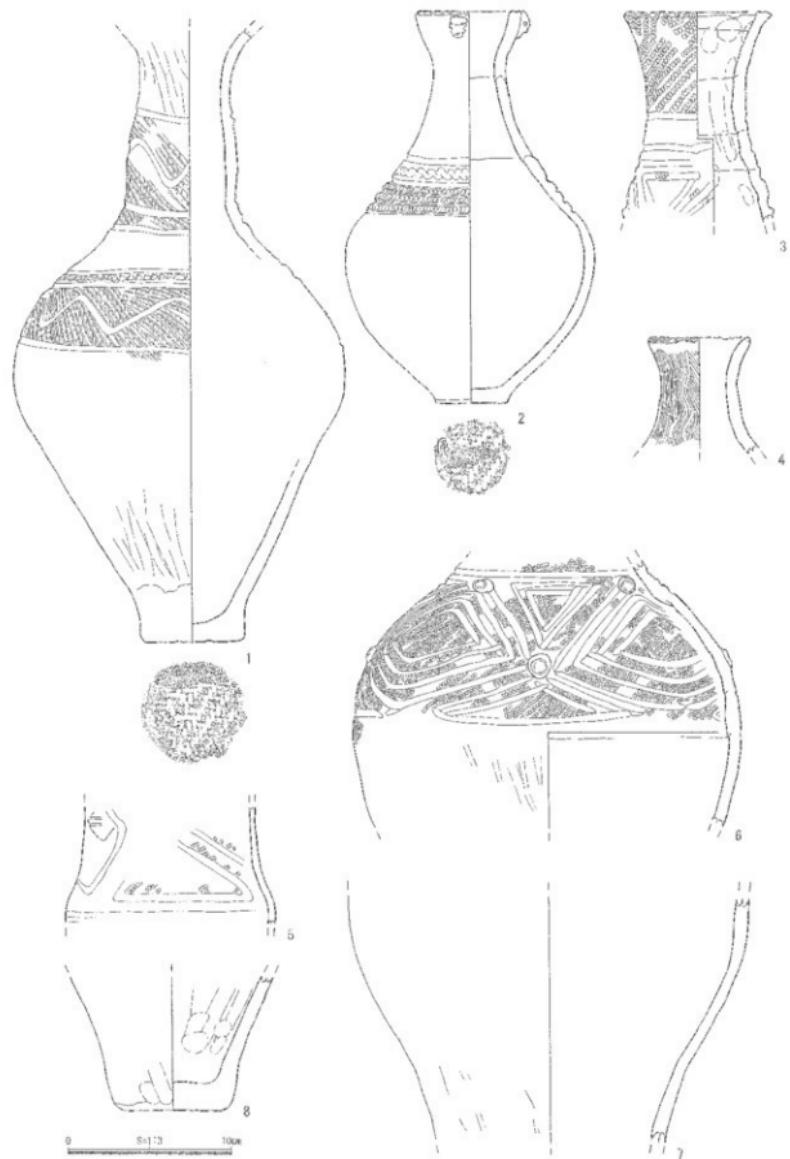
環濠第6層は第5層同様、外来的要素をもつ壺が認められたほか、用途不明の木製品が1点出土している。

土器 第33図の1は口縁端部が僅かに摩滅するほかは、ほぼ完形の長頸壺である。頸部と肩部上半に文様帶をもち、無節の縄文原体を転がして地文としている。縄文を横位の沈線や範囲波状文で断り清しており、肩部中央では沈線の下位に一部地文の繩文が残っている。胴部上半には縄文のほか、沈線で区画された内区に刺突文が充填される。器形は南関東地方の弥生時代中期中葉のいわゆる須和田式土器に似る。ただし、文様帶の幅が広く無文の部分が目立つことから須和田式の新段階から中期後葉の宮ノ台式の古段階の間に位置づけられようか。Ⅲ-3様式に該当する。2は肩部中程を欠くが、口縁部から底部までの様相が分かる資料である。口縁端部に有孔刻み目をもつ突帯が等間隔で3箇所に貼り付けられ、口唇部には縄文が施される。肩部から胴部上半に文様帶をもち、横位の大い沈線を2条、細い沈線を3条巡らす。太い沈線で区画された内区には波状沈縄文を、細い沈線で区画された内区には棒状工具の刺突による刻み目を施している。口縁部への刻み目突起の貼り付けは、IV-1様式で認められる。

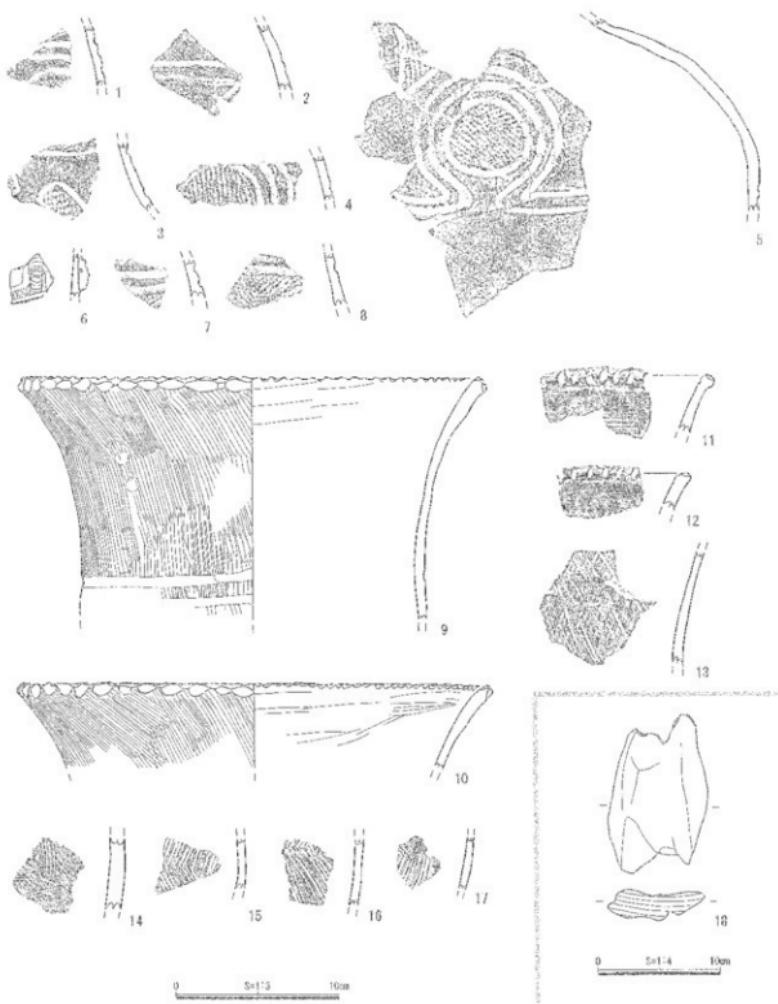
3・4は細縫壺の口縁部片である。3は第6層中でも最下部の環濠底面直上から出土した。口縁部直下にLR单節で横位の縄文が施されるほか、沈線によって三角形の文様を施す。Ⅲ-3様式に該当する。4は縦位の横筋文の後に縦位の範囲波状文が施される。口唇部には刻み目が施されるなど、他とは異質な文様で構成される。範囲波文から三河や遠江といった地域からの影響を受けたものと思われるが、詳細な故地は特定できなかった。5は壺の頸部片で第6層中でも最下部の環濠底面直上から出土した。摩耗が著しいため、文様が判然としない部分も多いが、沈線による三角形の単位文と縄文、刻み目をもつ突起の貼り付けが認められる。6・7は壺の胴部片である。6は肩部から胴部上半にかけて文様が施される。縄文を地文とし、沈線によって横位に三角文と四角文（菱形に近い形状）を連続させる。三角文の交点には円形貼付文が施される。沈線より下位の縄文は磨き調整によって磨り清されている箇所が認められる。地文となる縄文の燃りはLR单節と考えられるが、回転方向は特定できなかった。同様の文様構



第32図 球藻第5層出土土器実測図



第33図 球藻第6層出土土器実測図



第34図 球藻第6層出土土器および木製品実測図

成をもつ壺は静岡市の有東遺跡第16次調査SK05出土例（岡村綱 1997）で認められ、III-3様式に該当する。8は壺の底部片で、第6層中でも壺下部の球藻底面直上から出土した。底部には僅かに稍圧痕が認められる。7・8とともに長頸壺の一部であろう。

第34図の1～8は壺の底部破片である。沈線による区画や縞文が認められる。5は沈線で匁字状に区

面された内側の円形区画内に縄文が充填される。6は沈線による区画と刺突文、有孔刻み目をもつ棒状突起の貼り付けが認められる。突起の貼り付け位置から察するに、腹部よりも頭部破片とした方が妥当であろうか。いずれもIII-3様式に位置づけられる。

9は壺の口縁部から胴部片である。2条の磨消文の下位も経位の刷毛目調整が認められることから、典型的磨消線文窓であろう。10は壺の口縁部片である。胴部以下を欠くが、9と同様の磨消線文窓と考えられる。9・10ともIII-3～IV-1様式の範疇であろう。11・12は壺の口縁部破片、13～17は胴部破片である。14～17は複位羽状文窓である。IV-1～3様式に相当する。

第6層出土土器の内、壺と甕とではやや時期差が生じるようである。壺の年代は概ねIII-3～IV-1様式で、弥生時代中葉中葉に遡る資料がほとんどであるが、甕の年代はIII-3～IV-3様式と、弥生時代中期後葉の古段階にあてはまる資料を含んでいる。前述した通り、ここでは東駿河地域の資料数の少なさから、西駿河地域の土器編年を援用している。また、伊藤編年も基本的には甕のみの編年であるため、東駿河地域における壺と甕とのセット関係が不明確であった点が、甕と壺との年代観の不一致の一因として考えられる。今後の資料の蓄積と研究の進展を俟ちたいところである。

木製品 18は用途不明の木製品である。環濠から出土した唯一の木製品である。第6層の土器集中部から出土した。樹木の外皮に近い部分に相当する。樹種はヒノキである。

1号土坑（第35図）

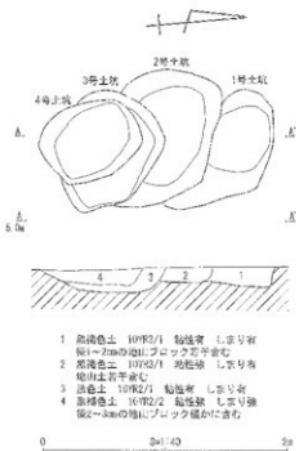
平面形は梢円形を呈し、長径1.14m、短径0.50mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。2号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、2号土坑を切る3号土坑から弥生土器が出土しており、切り合い関係から弥生時代に帰属するものとした。

2号土坑（第35図）

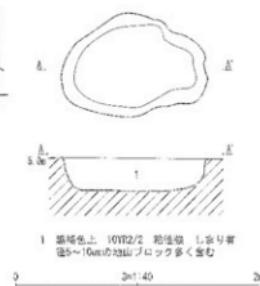
平面形は梢円形を呈し、長径1.22m、短径は残存部で0.44mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。1号土坑を切り、3号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、弥生土器が出土した3号土坑との切り合い関係から弥生時代に帰属するものとした。

3号土坑（第35図）

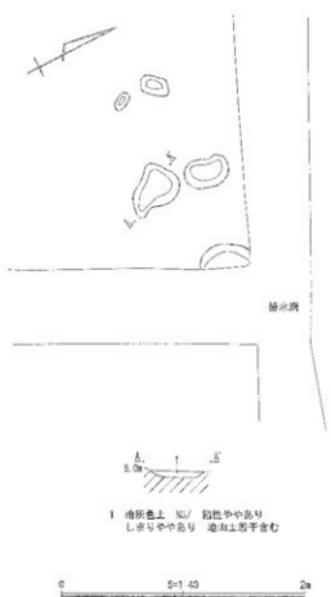
平面形は梢円形を呈し、長径0.94m、短径は残存部で0.22mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.18mを測る。2号土坑を切り、4号土坑に切られる。切り合い関係のある1～4号土坑



第35図 1～4号土坑平・断面図



第36図 5号土坑平・断面図



第37図 1号土坑列・断面図

の中では、一番掘り込みが深く、北端が2号土坑の覆土南端を切っている。

3号土坑出土遺物（第38図）

土器 1は弥生土器壺の口縁部破片である。

4号土坑（第35図）

平面形は橢円形を呈し、長径0.86m、短径0.64mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。3号土坑を切る。

4号土坑出土遺物（第38図）

土器 2は弥生土器壺の口縁部破片である。

5号土坑（第36図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.18m、短径0.88mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.26mを測る。圓化し得なかったが、弥生時代後期の壺の小破片が出土したため、弥生時代に帰属するものとした。

1号土坑列（第37図）

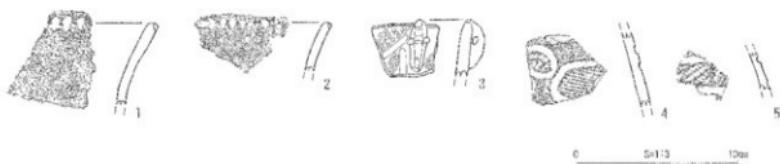
1基の土坑と4基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。今回は便宜上、土坑列としたが、土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は1条の溝状構造あるいは1基の土坑であった可能性も考えられる。

出土した弥生土器壺の文様構成が、環濠下層出

土のものと類似しており、造構の船尾時期は環濠同様、弥生時代中期中葉と考えられる。

1号土坑列出土遺物（第38図）

土器 3は壺の口縁部破片である。沈線による区画と繩文が認められ、刻み目のある突起が壺部に貼り付けられる。第32図の1や第33図の2、第34図の6と同様に、突起のやや上部には穿孔が穿たれる。同様の突起と文様をもつものとして、静岡市の川合遺跡土坑SX11607出土広口壺（山田郷 1992）があげられ、IV-1様式に位置づけられている。4・5は壺の肩部破片である。4は沈線によって区画された内区に網文と刻文の充填が認められ、5は沈線と網文が確認できる。



第38図 3・4号土坑・1号土坑列出土土器実測図

遺構外出土遺物（第39・40図）

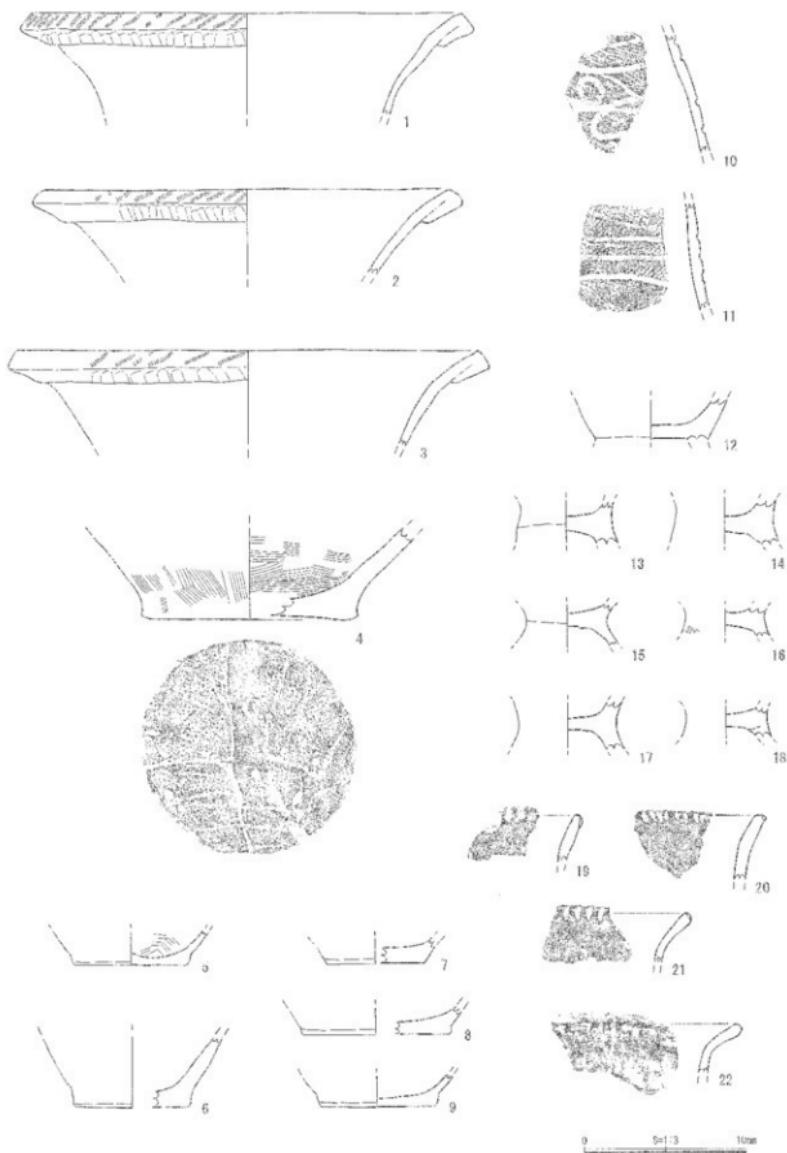
土器 1～3は弥生土器壺の口縁部片である。折り返し口縁で口唇部に縦文が施される。IV～6様式にあたるか、弥生時代後期の範疇に収まるものである。4～9は弥生土器壺の底部片である。4は底部には明瞭な木葉模様が認められる。脚部への立ち上がりから、最大径が脚部下半に位置することが推測され、弥生時代後期のものと思われる。5～9の詳細な時期は不明である。10・11は弥生土器壺の脚部破片である。沈線による区画と内区に充填された縦文が認められる。12は台付壺の脚部片、13～18は台付壺の脚部片である。いずれも磨耗が著しく、詳細な時期は不明であるが、弥生時代後期から古墳時代前期の所産であろう。19～22は弥生土器壺の口縁部破片である。

石器 1～5は敲石である。1は環濠底上包含層より出土し、2～5も環濠付近の包含層あるいは遺構直上より出土したことから、弥生時代の資料として扱った。素材とする礫は、平面形と横断面が橢円形を呈する。いずれも扁平な円錐に敲打痕を有するもので、敲打痕以外に入為的な磨痕や削痕は認められなかった。

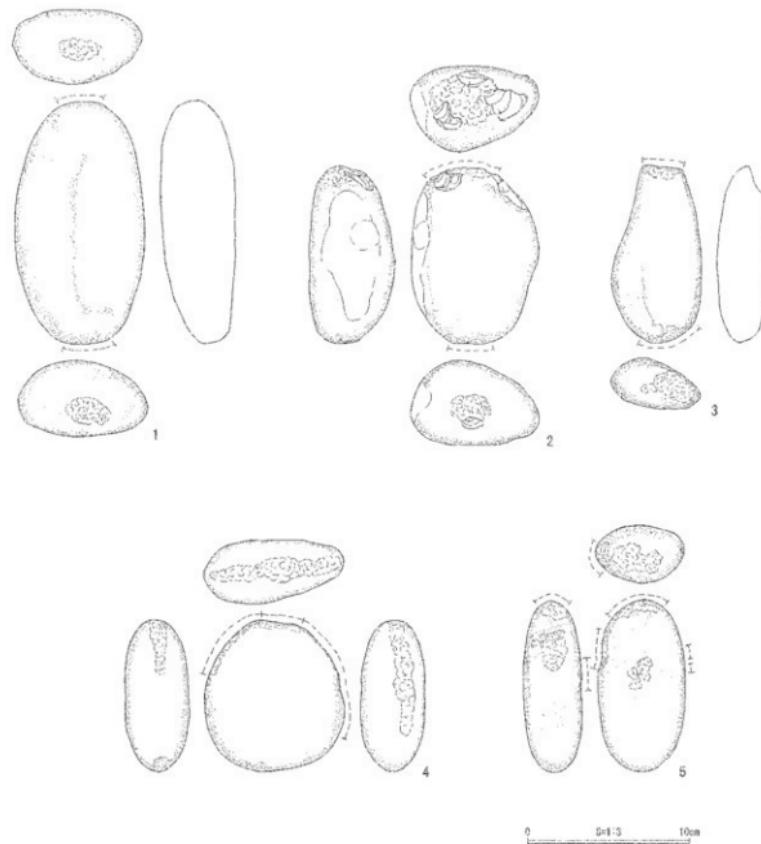
1の石材は閃綠岩で、敲打痕が環の上下端部に認められる。2の石材は細粒砂岩で、敲打痕が環の上下端部に認められるほか、縁辺部に滑らかな面が認められる。しかし、これは特に人為的な磨面ではないようである。3の石材は中粒砂岩で、敲打痕が環の上下端部に認められる。4の石材も中粒砂岩で、環の両側縁部上半に敲打痕が認められる。また、上端部は敲打により明瞭な面が形成されている。5の石材は輝石安山岩で、環の縁辺部や平坦面に敲打痕が認められる。

参考文献

- 秋本真澄 1976 「田方郡南可仁田仲道遺跡発掘調査報告」「駿豆の遺跡研究」(2) 加藤学園沼津女子高等学校郷土研究所
- 石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」「駿台史学」第113号 駿台史学会
- 石川日出志ほか著 2005 「南関東の弥生土器」考古学リーダー5 六一書房
- 伊藤淳史 1996 「太平洋沿岸における弥生文化の展開—駿河湾岸中葉弥生土器からの検討—」「YAY! (やいっ!) 弥生土器を語る会20回到達記念論文集」 弥生土器を語る会
- 伊藤淳史 1997 「太平洋沿岸における弥生文化の展開・補遺」「西相模考古」第6号 西相模考古学研究会
- 大島慎一 2000 「出土遺物の分析」「王子ノ台遺跡」第II卷 弥生・古墳時代編 東海大学出版会
- 岡村涉耀 1997 「有東遺跡第16次発掘調査報告書」 静岡市埋蔵文化財調査報告39 静岡市教育委員会
- 葛西功 1984 「斐形土器の変遷(上)」「史館」第16号 弘文社
- 加納俊介・石黒立人編 2002 「弥生土器の様式と編年—東海編—」 木耳社
- 岡義則 1983 「須和田式土器の再検討」「紀要」10 端玉県立博物館
- 松井一明 1995 「弥生時代の石器について(上)」「弥生文化博物館研究報告」第4集 大阪府立弥生文化博物館
- 官原俊一編 2003 「擦りと結びの考古学」第12回足もとに眠る歴史展示解説書 東海大学校地内遺跡調査団
- 山田成洋編 1992 「川合遺跡」遺物編1(土器・土製品図版編) 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第41集 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 渡邉外 2003 「弥生時代中期における打製石斧の地域性」「神奈川考古」第39号 神奈川考古同人会



第39図 繁生時代遺構外出土土器実測図



第40図 弥生時代遺構外出土石器実測図

第4節 古墳時代の遺物

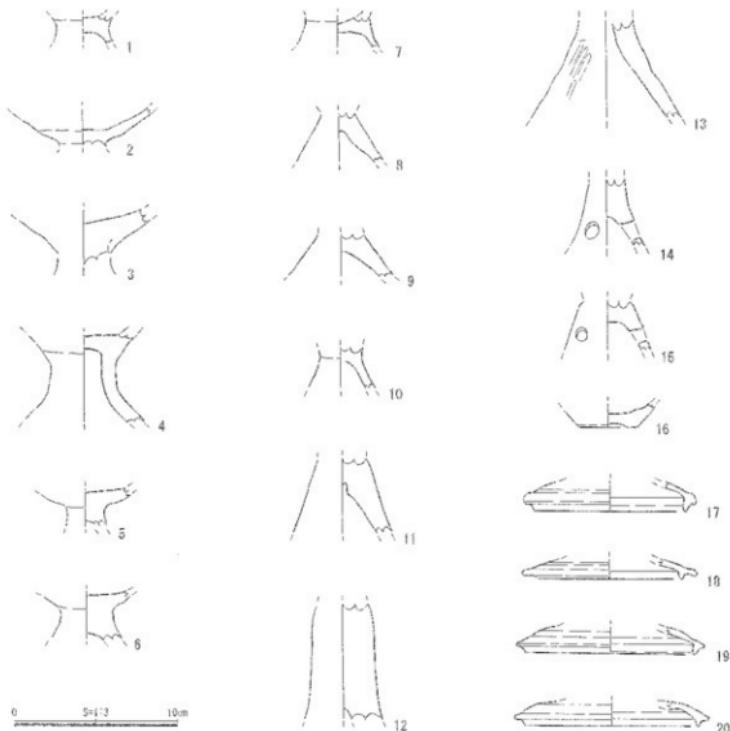
古墳時代に属する遺構は検出されず、土器片が少量出土したのみである。本調査で検出された遺構の内、弥生時代後期から古墳時代後期までの間に属すものは皆無で、同時期に比定される遺物の出土量も極端に少ないと見える。

土器（第41図）

1～16は土器である。1はS字状口縁台付甌、いわゆる古墳時代前期のS字甌の脚部である。2・3は高耳の耳部片、4・5は耳～脚部片、6～15は脚部片である。4は脚部の開き方が比較的なだらか

である。対して、8・9の脚部は開き気味で、やや踏ん張るような形態を呈している。12は上端から下端までが直線的な形態であるが、おそらく脚部の軸の部分であろう。13には外面に磨き調整が施される。14・15には進孔が認められ、14は赤彩が施される。高杯は全般的に器面の摩耗が著しく調整等は定かではない。加えて部分的な資料が多いため、判断が難しいところであるが、本遺跡の弥生土器と比較すると胎土や色調に若干の違いが認められることから、概ね古墳時代前期に想定される資料と理解した。16は堆の底部片である。部分的な資料のため、詳細な時期比定は困難であるが、古墳時代前期から中期の資料と思われる。

17~20は須恵器の杯窓の口縁部である。いずれも口縁端部に返りをもち、口径は10cm前後を測る。返り蓋の出現は鈴木敏則氏の編年（鈴木 2004）におけるIV期前葉以降とされ、7世紀後半頃のものと考えられる。



第41図 古墳時代土器実測図

参考文献

鈴木敏則 2004 「静岡県下の須恵器編年」「有玉古窯」 浜松市教育委員会

第5節 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構として、溝状遺構12条・土坑20基・土坑列7基を検出した。出土した土師器・須恵器・灰釉陶器については、植松章八氏の分類と編年（植松 2008）に従っている。また、須恵器については賀元洋氏の論考（賀 1998）を、甕については山本喜一氏の論考（山本 1988）も参考にした。

1号溝状遺構（第42・61図）

やや蛇行するものの、ほぼ東西方位に延伸する。調査区内で確認できた長さは80m程度であるが、西端・東端ともさらに調査区外へと続く。幅は概ね1.5mであるが、西隅付近で北側にテラス状の落ち込みを伴う箇所があり、テラス部を含めた幅は2mを超える。検出面からの深さは地点によって異なるが、平均0.25mである。土層の堆積状態から3層に分層されるが、地点によっては第3層を含まない箇所もある。

4号溝状遺構・7号土坑を切るが、一部擾乱によって切られる部分がある。

1号溝状遺構出土遺物（第43図）

土器 第43図の1～9は土師器である。1は杯でほぼ完形である。非輪軸系の丸底杯で、口唇部が細く直立する点や体部外面の窓削り等の特徴から、環A1類にあたる。环A1類は第I～II期に確認される。2は杯の口縁～底部片、3は口縁～体部片である。2は丸底、3も丸底の可能性がある。4～6は环の底部片である。环A1類が平底化した环A2類と思われる。环A2類は第III～IV期に確認される。7は有台杯の底部片である。有台杯は須恵器と同様に7世紀後葉から出現するとされる（鈴木・向坂編 1998）。8は高杯の脚部片、9は壺の口縁部破片である。壺の出現はIV期後葉からである。

10～17は須恵器である。10・11は环の底部片である。無台で腹がやや丸い。12・13是有台杯の底部片である。13は丸底の底部が高台よりも突出した形態で、湖西窯製品に特徴的な形態とされる。第I～II期に認められる。14・15は环蓋の口縁部片である。頂部を欠くが、平頂ではなく宝珠摘みがつくものと思われる。14は8世紀前葉以降、15は8世紀後葉以降に帰属されよう。16は环蓋の摘み部片である。17は壺の底部片と思われる。

土師器・須恵器とともに8世紀前葉にまで遡る資料も出土したが、8世紀後葉とすべき資料も混在している。1号溝状遺構の帰属時期は8世紀頃に位置づけられ、9世紀代までは下らない可能性が高い。

木製品 18は板状の木製品である。1号溝状遺構底面直上より出土した。用途は不明であるが、構築物の部材の可能性もある。樹種はイヌマキである。

2号溝状遺構（第42図）

東端付近で弧を描くように南に向かってカーブする。長さは36m程度を測るが、東西両端は擾乱によつて失われている。幅は平均1.5m、検出面からの深さは0.2m程度である。土層の堆積状態から2層に分層され、円錐や砂粒が多く認められることから、何らかの流路であった可能性が考えられる。

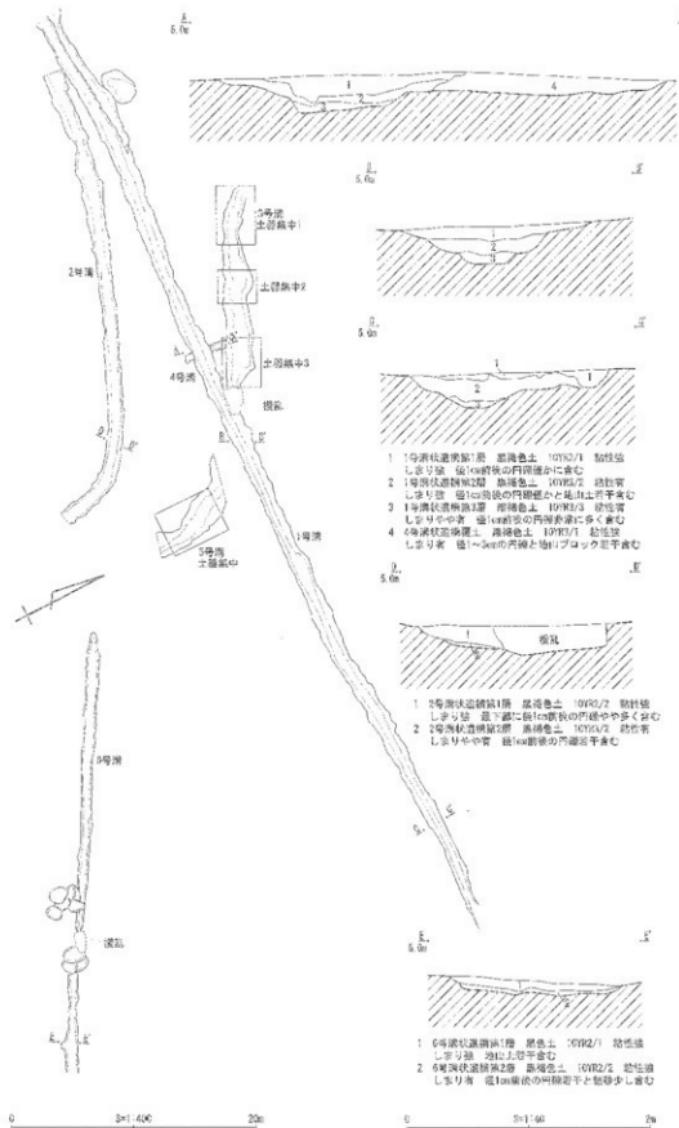
2号溝状遺構出土遺物（第44図）

土器 1は土師器环の底部片で、平底である。2は須恵器环の口縁～体部片である。体部から口縁部まで直線的に立ち上がる。底部を欠いた定かではないが、大型笛环あるいは碗形环と考えられる。9世紀前後に比定されよう。なお、本資料は4号溝状遺構出土の破片と接合した。3は須恵器甕の口縁部破片である。口唇部が厚く、波状に櫛摺文が巡る。4・5は灰釉陶器壺の底部片である。高台内側下半が内傾する三日月高台をもつ。定型化した三日月高台を有する壺は、狼狽窯編年の黒窓90号窯式2型式に相当し、9世紀後半に帰属する。

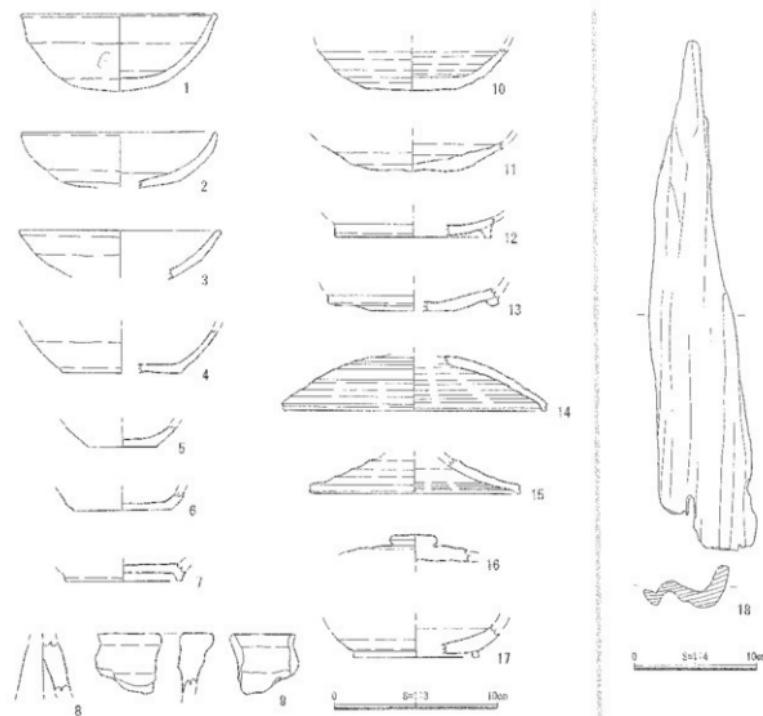
出土した灰釉陶器の年代などから、2号溝状遺構の帰属時期は9世紀頃と考えられる。

3号溝状遺構（第42・45～47図）

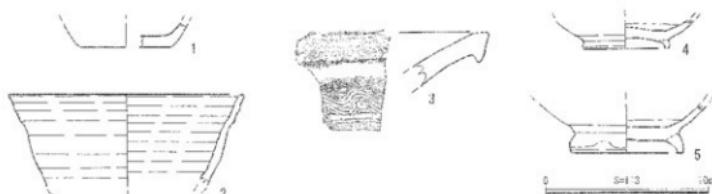
非常に浅い遺構であるが、遺構の上端や底面直上から多くの土師器・須恵器・木片が集中して出土し



第42図 1～6号溝状遺構平・断面図



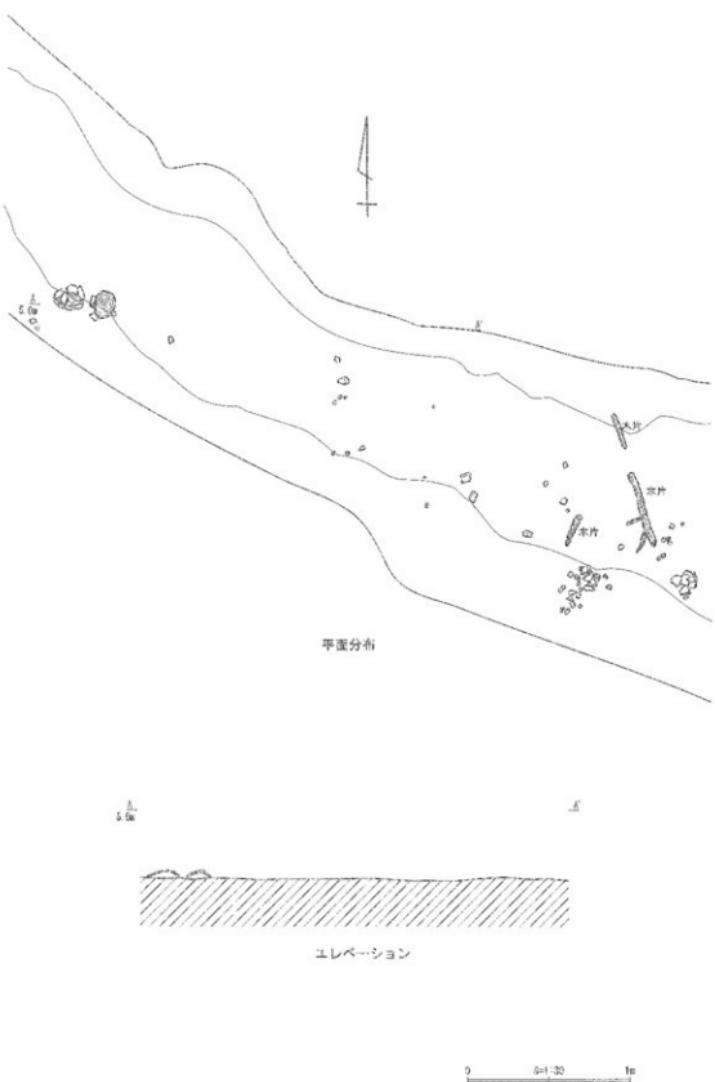
第43図 1号溝状遺構出土土器および木製品実測図



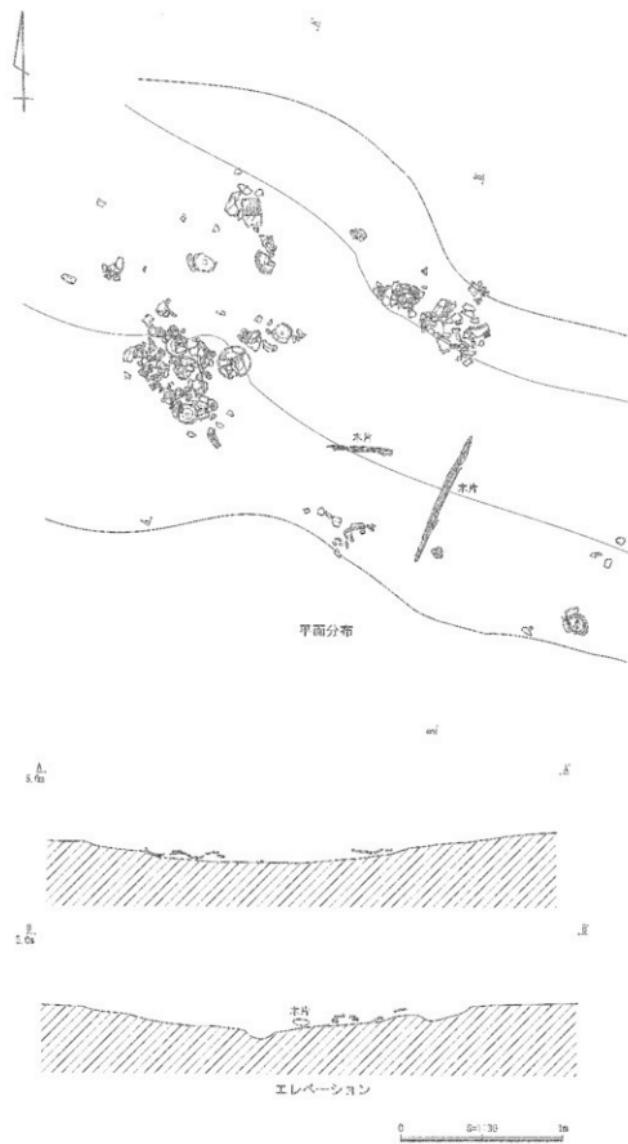
第44図 2号溝状遺構出土土器実測図

た。調査区内での長さは16m程で、西端はさらに調査区外へと続く。幅は西端付近で1.5m、東端付近2.5mを割り、検出面からの深さは平均して0.1mである。覆土は単層で黒褐色(10YR2/2)、粘性・しまりとともに有り、粒の細かい円礫を多く含んでいる。

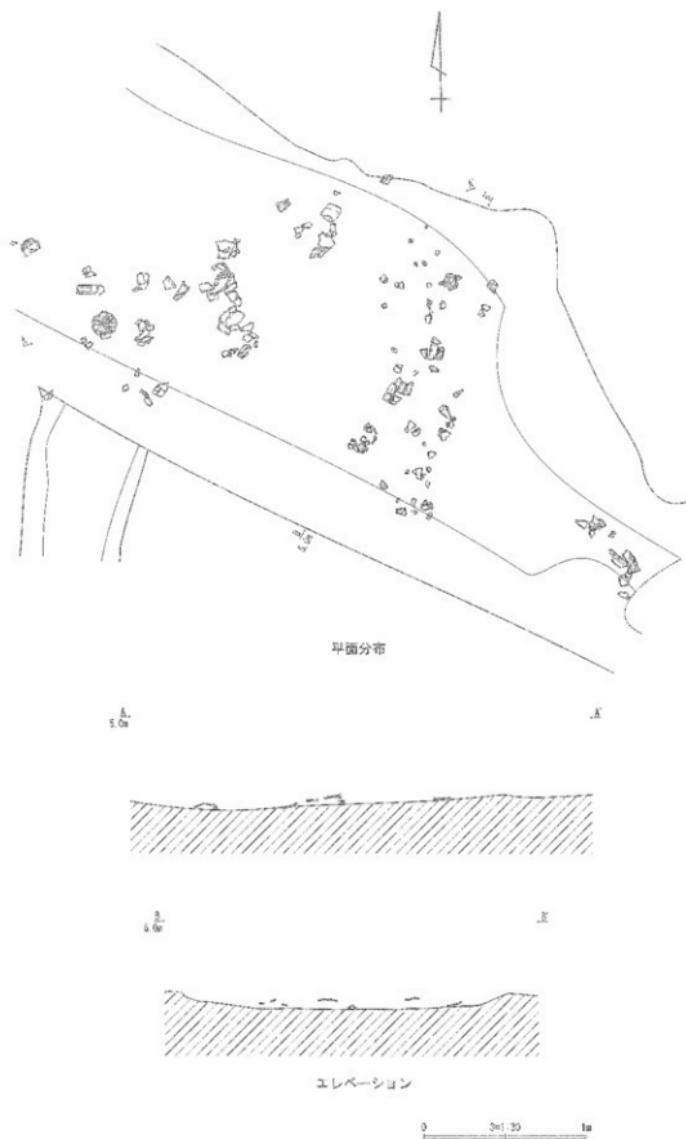
4号溝状遺構を切るが、擾乱に切られる。3号溝状遺構西端の延長線上には5号溝状遺構が存在する。覆土の状態や土器の集中、深さや幅といった規模の類似性から、本來は5号溝状遺構と連結する同一の



第45図 3号溝状遺構土器集中1 出土状況図



第45図 3号溝状追櫛土器裏中2出土状況図



第47図 3号窓状遺構集中3 出土状況図

遺構であった可能性が考えられる。3・5号溝状遺構が連結していた場合、1号溝状遺構によって切られていたことになる。

出土土器は破面が鋭く、個体別にそのまとまりを把握できるような出土状況を示している。このことから、出土土器は他所から流れ着いたものではなく、付近で廃棄された可能性が高い。また、土器とともに検出された木片は用途等不明である。

3号溝状遺構出土遺物（第48～51図）

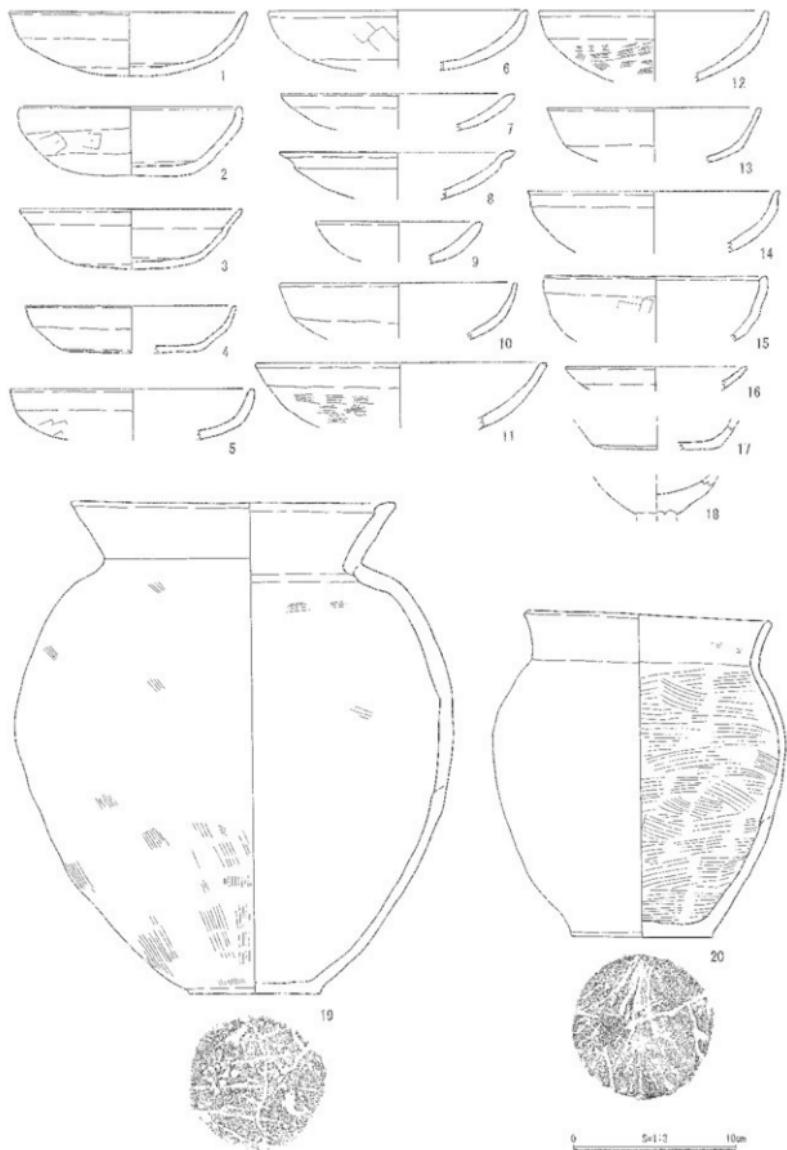
土器 第48図の1～17は土師器壺である。1・2はほぼ完形、3～6は口縁～底部片である。1～6は体部が窓削りで、平底に近い丸底を呈する。壺A1類で第I～II期に位置づけられよう。2は口縁部がやや内傾し、古墳時代後期（7世紀）に遡る可能性もある。7～15は口縁～体部片、16は口縁部片、17は底部片である。7・8は塔高が低く、皿に近い形状を呈する。8は口縁端部が外反する。11・12は体部外面に刷毛目が認められ、胎土が粗い。17は平底で第III期以降の資料と考えられる。18は高杯の壺部片である。19・20は土師器壺で、ほぼ完形である。19はいわゆる駿東型壺で壺A類にあたる。古墳時代の系譜を引く球胴系で、口縁部と器壁が厚い。茶褐色を呈するものが多いが、本資料は赤橙でやや赤みがかった色調である。器面の摩耗が著しいため、外面刷毛目調整後に施されたであろう箠磨きの痕跡は認められなかった。最大径が胴部中位よりもや上半である点、口唇部に粘土帶を貼り付けて肥厚させている点など、山本編年4段階と5段階の要素を併せもつことから、7世紀末から8世紀初頭の所産であると考えた。20は小型の壺で内面に粗い刷毛目調整を施す。胴部下半は横位の刷毛目が主体だが、胴部上半から斜位の刷毛目が加わるようになる。摩耗が著しいが、外面にも刷毛目調整が施された可能性がある。平底で胴部中位よりや上半で最大径を測る。第III～IV期の範疇で捉えられよう。

第49図の1～10は土師器壺である。1～4が口縁～底部片、5～7が窓～底部片、8～10が底部片である。1～9が駿東型壺と考えられる。1は外面に刷毛目調整後の箠磨き調整の痕跡が確認できる。1・2は口唇部の粘土帶貼り付けや胴部の形状から、山本編年4～5段階の範疇で、7世紀末から8世紀第1四半期の間に位置づけられよう。3は最大径が胴部上半ではなく、胴部中位に位置する可能性が高く、口径と胴部径との差が小さい。口縁部は単純口縁に近い。山本編年6段階に相当し、8世紀第2四半期に位置づけられる。4は口唇部内面に、断面三角形状を呈す明確な稜線が認められ、山本編年4段階の可能性が高い。7世紀末に位置づけられよう。5は胴部下半から底部までの窄まりが急で、胴部径に対して底径が小さくなることが推定される。また、4と5は出土状況や胎土等から同一個体である可能性が高い。6は胴部上半を欠くが、3同様に最大径が胴部中位に位置する可能性が高く、山本編年6段階、8世紀第2四半期に位置づけられよう。8は外面に箠磨き調整が施される。

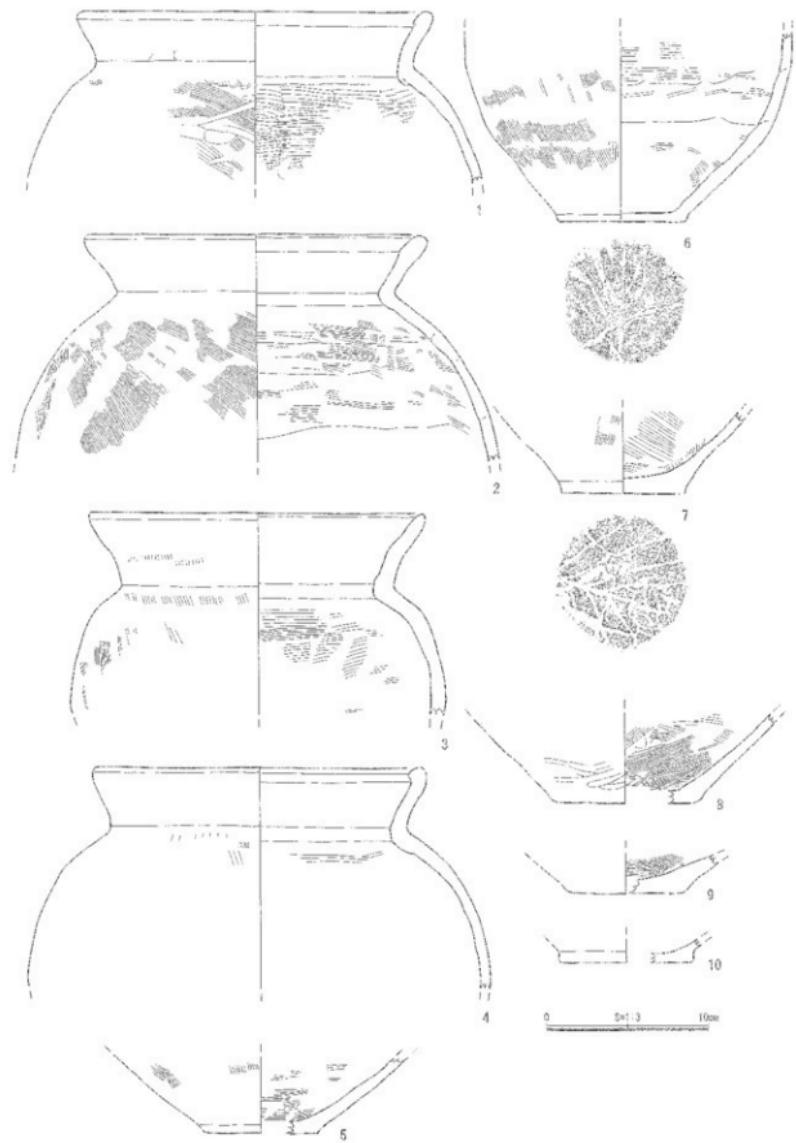
第50図の1～8は土師器である。1～5は駿東型壺と考えられる。1は口縁～胴部片で、口唇部の粘土帶貼り付けによる稜が窺い。山本編年5段階、8世紀第1四半期に位置づけられようか。2～4は口縁部片、5は窓～底部片である。6はほぼ完形の鉢である。壺よりも窓に近い粗い胎土で成形される。7・8は壺壺のような形態を呈す。手捏ねによるミニチュア土器と理解した。

9～19は須恵器壺である。9～11は無台でほぼ完形、12・13は口縁～底部片である。いずれも丸底に近い平底である。11は口縁部を中心に焼け歪みが認められる。14～15は口縁～体部片、16は体～底部片である。14は丸焼に近い形態を呈す。概ね8世紀代の資料と考えられる。17～19はほぼ完形の有台壺である。18・19は焼成の加減か器面が瓦化し、黒い光沢を発する。19は突出した底部が高台からはみ出しており、第I～II期に帰属される。17・18は19よりもやや時期が下る。

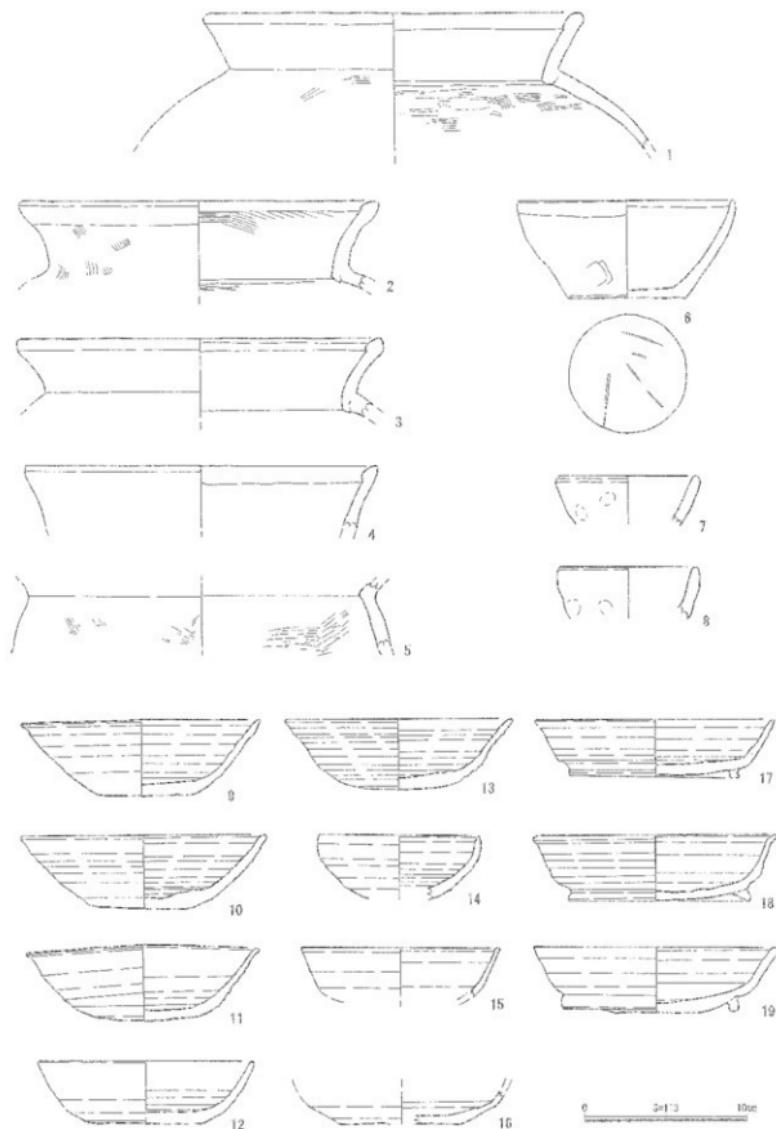
第51図の1～12は須恵器有台壺である。1は完形、2はほぼ完形、3～11は口縁～底部片、12は底部片である。1は底部から口縁部まで緩やかに立ち上がり、箱形に近い形態を呈す。器高が高く壺部もやや深めに作られる。形態的特徴から助宗窯産の可能性が高い。しかし、助宗窯産有台壺は窓による割り



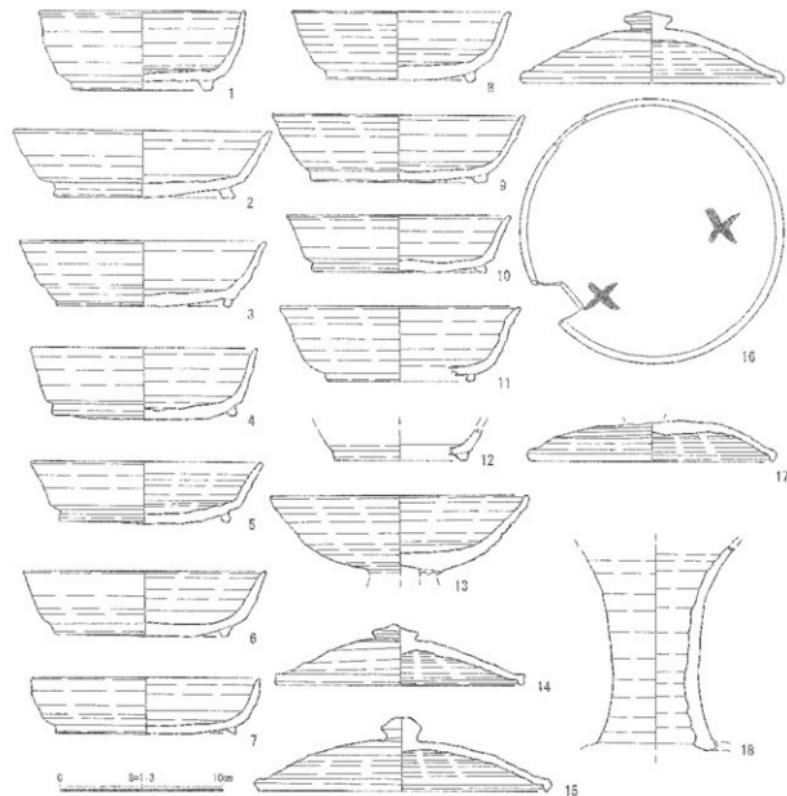
第48図 3号窓状遺構出土土器実測図①



第49圖 3号清状造構出土土器実測図②



第50図 3号溝状遺構出土土器実測図③



第51図 3号窓状造構出土土器実測図④

出し高台を特徴とするが、本資料は貼り付け高台である点、疑問が残る。2～7は丸底の底部が高台よりも突出する湖南窯製品に特徴的な形態である。7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる。8～10は7までよりは底部の張りが弱まり、平底に近い形態を呈している。8世紀初頭から前葉に位置づけられる。13は須恵器無蓋高环の环部片である。环部が深く、塊に近い形態を呈する。环底に僅かに残る脚部の痕跡は摩滅しており、無台の丸底环として転用されていた可能性が高い。高环は8世紀初頭まで存在するが、以降は消滅するとされる。14～17は須恵器外蓋である。14～16はほぼ完形で、17は頂部の滴みを欠く。14・16は頂部から口縁部に掛けての形態や、摘みの形態などから、8世紀前葉に位置づけられる。15は摘みが小型化するなど、14・16よりもやや時期が下る。16の内面には2箇所に「十」の字の墨書きが認められた。18は長頭壺の頸部片である。頸部から口縁部に向かって大きく開く。頸部の下端から肩部にかけては、折れて明瞭な稜になる。8世紀前後の所産と思われる。

土師器は环A1類や山本編年4段階の腰東型壺など、8世紀前後、7世紀末まで週り得る資料も認め

られる。須恵器は助宗窯産の可能性がある第51図の1を除き、形状や胎土からほぼ全て湖西窯産であると考えられる。7世紀末から8世紀前葉までの間に位置づけられる資料が多いようである。総じて、3号溝状遺構の帰属時期も、7世紀末から8世紀前葉に位置づけられよう。

4号溝状遺構（第42図）

検出した部分で長さ3.5m程、幅0.6m程、深さ0.15m程を測る。覆土は単層である。1・3号溝状遺構に切られる。

遺物は土師器や須恵器の破片が数点出土したが、区化に耐え得る資料は認められなかった。1・3号溝状遺構に両端を切られることから、両遺構よりも相対的に若干古いことが分かり、奈良・平安時代に帰属するものとした。

5号溝状遺構（第42・52図）

3号溝状遺構同様に多くの土師器・須恵器・木片が集中して出土した。長さは8m程で、南北両端は擾乱によって失われている。幅は北端付近で2.5m、南端付近2mを割り、検出面からの深さは平均して0.1mである。覆土は単層で黒褐色（10YR2/2）、粘性・しまりともに強く、粒の細かい円錐を多く含んでいる。第53図の9が3号溝状遺構出土の破片と接合したことなどからも、本来は3号溝状遺構と連結する同一の遺構であった可能性が考えられる。出土土器についても、3号溝状遺構同様に数個体がその場で割れたような出土状況を示している。

5号溝状遺構出土遺物（第53・54図）

第53図の1～7は土師器环である。1・2はほぼ完形、3～6は口縁～底部片、7は底部片である。1・3・3～6は坏A1類で第I～II期、2・7はA2類で第III～IV期に位置づけられる。5は黒色、7は内黒土器である。8～15は土師器壺である。8は口縁部片、9は頸～胴部片、10・11は頸～底部片、12～15は底部片である。8・10・11は駿東型壺と考えられる。9は器面の摩耗が著しいため断定できないが、口縁部と胴部接合部に突き出しが認められるなど、駿東型壺の特徴をもつ。16・17は須恵器环である。16は口縁～底部片、17は体～底部片である。恐ね8世紀代の資料と考えられる。

第54図の1～5は須恵器有台环である。1は口縁～底部片、2・3は体～底部片、4・5は底部片である。2・4・5は底部が高台よりも突出する7世紀末から8世紀初頭に特徴的な形態である。1・3・5は底部の張りが弱く、2・4よりもやや時期が下ると考えられる。6・7は須恵器环壺である。6は口縁部の一部を欠く。8世紀前葉に位置づけられよう。7は頂部を欠く。

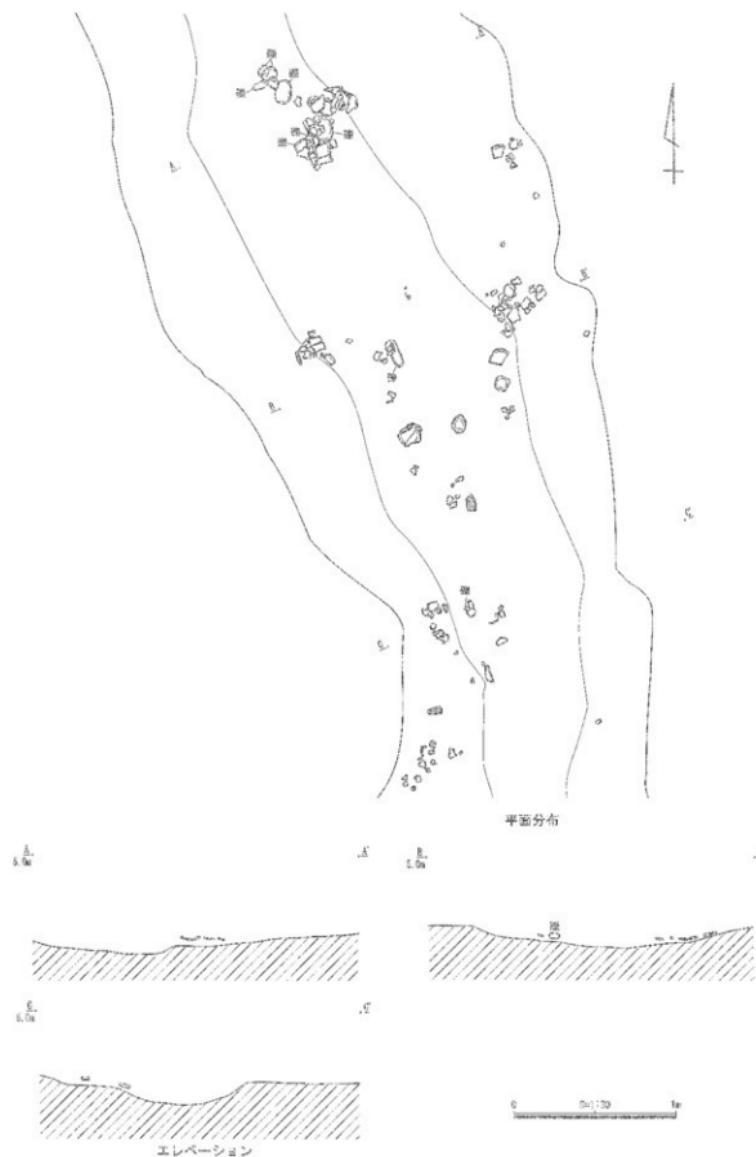
5号溝状遺構出土土器は土師器が环と壺、須恵器が环と环壺など、器種が3号溝状遺構出土資料と一致している。土器の年代観も3号溝状遺構と同様に7世紀末から8世紀前葉に位置づけられる資料が認められる。出土土器の検討からも、3号溝状遺構と5号溝状遺構は同一遺構であった可能性は高く、5号溝状遺構の帰属時期も3号溝状遺構同様、7世紀末から8世紀前葉に位置づけられよう。

6号溝状遺構（第42図）

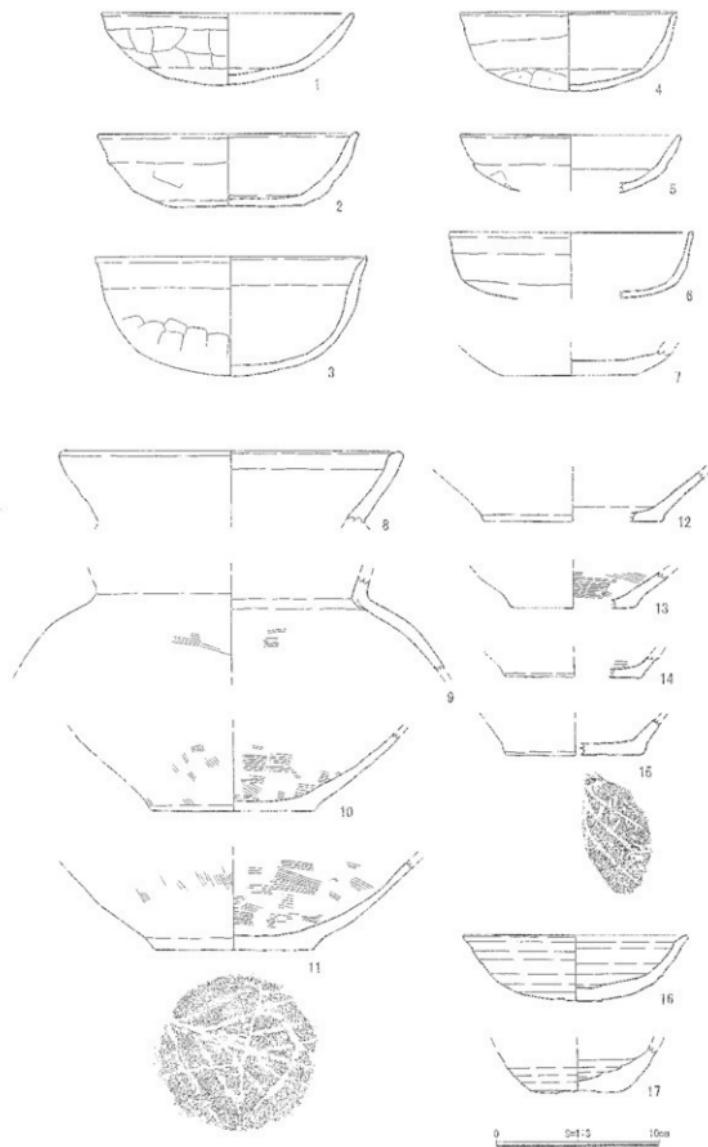
部分的に浅くなることから所々途切れるものの、調査区内での長さは推定62m程延伸することが見込まれ、東端はさらに調査区外へと続く。幅は1m程で、深さは西側で0.15mだが、東側では0.05mとなり、東ほど浅くなる傾向にある。西から東まで、ほぼ直線的に延伸する。土層の堆積状態から2層に分層されるが、掘り込みの浅い東側では第2層しか残存していなかった。43・45・49・50・51号土坑と擾乱によって一部が切られている。

6号溝状遺構出土遺物（第57図）

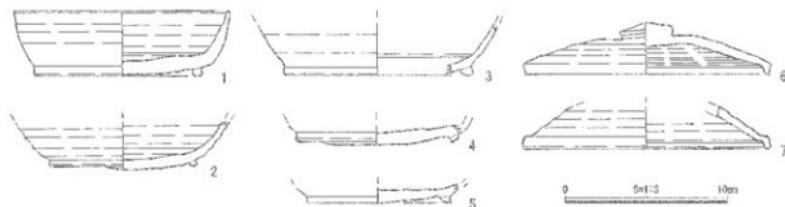
土器 1は土師器壺の底部片である。2は灰釉陶壺壺の底部片である。三日月高台の内側下半の内傾がやや弱いことから、猿投窯誕生年の黒竪90号窯式3型式から折戸53号窯式1型式の間に位置づけられ、9世紀末から10世紀初頭に帰属する。



第52図 5号溝状遺構出土状況



第53図 5号調査坑出土土器実測図①



第54図 5号溝状遺構出土土器実測図②

7号溝状遺構（第55図）

長さ2m程、幅0.5m程、深さ0.08m程度を測る。覆土は単層である。遺物の出土は認められなかつたが、南端を8号溝状遺構によって切られていることから、8号溝状遺構よりも相対的に若干古いことが分かり、奈良・平安時代に帰属するものとした。

8号溝状遺構（第55図）

蛇行しながらも、概ね南北方位に延伸するようである。調査区内での長さは26m程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅は平均1m、深さは南側が深い傾向にあり、0.16m程を測る。覆土は単層である。7号溝状遺構を切るが、78号土坑・2号土坑列によって切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかつたが、土師器窓や須恵器窓の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

9号溝状遺構（第56図）

擾乱によって所々寸断されるが、長さは推定4m程を測る。北側で幅0.8m、深さ0.1mを測る。覆土は単層である。

9号溝状遺構出土遺物（第57図）

土器 3は灰陶焼器底の底部片である。高台が外側に張り出すものの、三日月高台の内側下半の内傾がやや弱いことから、猿投窓縁年の黒管90号窓式3型式に相当し、9世紀末の資料と考えられる。

10号溝状遺構（第56図）

非常に細長く、やや蛇行しながらも南北方位に延伸するようである。擾乱によって所々寸断されるが、長さは推定27m程を測る。幅は平均0.2m、深さは0.05mを測る。覆土は単層で円錐形が多く含む。4号土坑列を切る。底面出土の木片の樹種同定を実施した結果、樹種はヒノキであった。

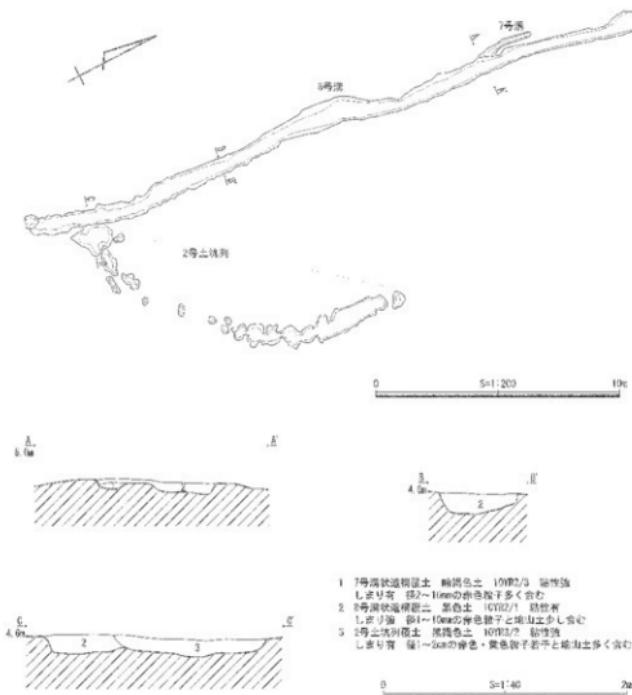
図化し得なかつたが、土師器破片が出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

10号溝状遺構出土遺物（第57図）

石器 4は敲石である。石材は中粒砂岩で、敲打痕が縦辺部に認められる。

11号溝状遺構（第58・59図）

大きく蛇行しながら東西方向に延伸する。調査区内での長さは102m程を測り、南西隅はさらに調査区外へと続く。北東隅は擾乱によって切られている。最大幅は1.5mを測るが、南西隅は0.5mと幅を狭める。深さは西側で深く0.25mを測るが、東側では0.1m前後と浅くなる。土層の堆積状態から2層に分層され、第2層に砂粒が認められる。出土土器は破面に角のない圓丸な小破片ばかりで、流れの中でローリングを受け土器破面が摩滅したものと考えられる。また、濁槽がほぼ東西方向に向かって延伸するものの、小さな蛇行を繰り返していることから、奈良・平安時代における自然流路か、またはそれを用いて人為的に造られた何らかの流路であった可能性が高い。12号溝状遺構と7号土坑列を切るが、6号土



第55図 7・8号溝状遺構・2号土坑剖面・断面図

坑列と掘削に一部切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

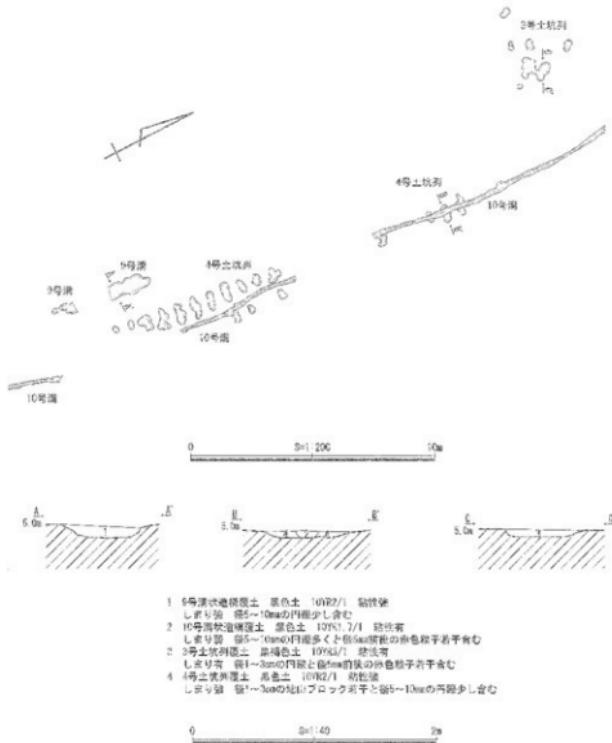
12号溝状遺構（第59図）

長さは11m程度であるが、本来もっと長く延びていた部分が、11号溝状遺構に切られている可能性もある。幅は2m程、深さは0.1m前後を測り、覆土は単層である。11号溝状遺構よりやや幅広だが、11号溝状遺構とほぼ同一方向に延伸するため、中央部を大きく切られている。12号溝状遺構の埋没した箇所を11号溝状遺構として掘り直していた可能性も考えられる。

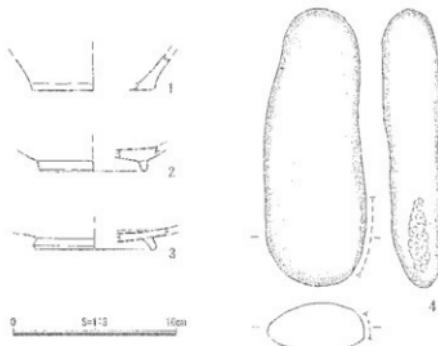
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

6号土坑（第60図）

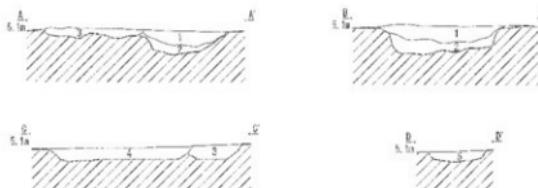
平面形は梢円形を呈し、長径1.64m、短径1.36mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.14mを測る。



第55図 9・10号溝状造柵・3・4号土坑列平・断面図



第56図 6・9・10号溝状造柵出土土器および石器実測図



- 1 11号石状造物第1層 灰褐色土、10m厚 黏性強
し土り有 高さ~1.5mの泰山ブロックと白い含む
- 2 11号石状造物第2層 灰褐色土、10m厚 黏性有
し土り有 高さ~1.5mの泰山ブロックと白い含む
- 3 6号土坑列第1層 灰褐色土、10m厚 黏性強
し土り有 高さ~1.5mの泰山ブロックと白い含む
- 4 6号土坑列第2層 灰褐色土、10m厚 黏性強
し土り有 高さ~1.5mの泰山ブロックと白い含む
- 5 7号土坑列第1層 灰褐色土、10m厚 黏性弱
し土り有 高さ~1.5mの白色・灰色斑子若干含む
- 6 7号土坑列第2層 灰褐色土、10m厚 黏性弱
し土り有 高さ~1.5mの白色・灰色斑子少しあむ

0 5m 10m

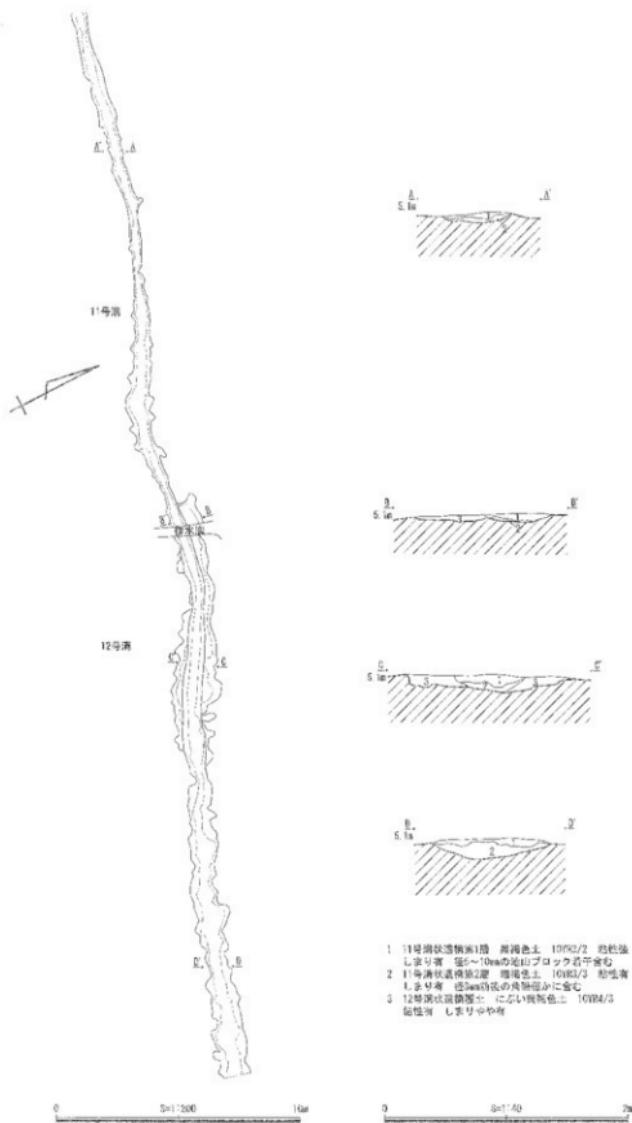
第58図 11号石状造物・6・7号土坑列・25号土坑平・断面図

6号土坑出土遺物（第74図）

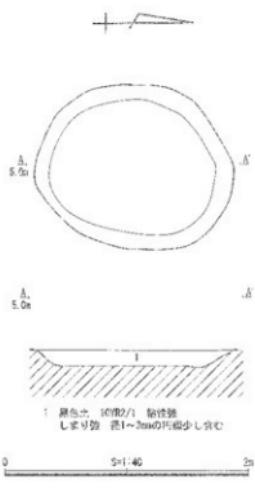
土器 1は須恵器壺の胴～底部片で、有台の無蓋長頸壺と思われる。ややいびつな形態で、8世紀後半の所産であろうか。2は須恵器壺の胴部破片である。内面に當て具痕である青海波文が認められる。

7号土坑（第61図）

平面形は梢円形を呈し、長径3.12m、短径1.92mを測る。覆土は土層の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.10mを測る。1号石状造物に切られる。



第59図 11・12号洞状造構平・断面図



第60図 6号土坑平・断面図

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

10号土坑（第64図）

平面形はいびつな椭円形を呈し、長径0.48m、短径0.24mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.04mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

11号土坑（第65図）

平面形は椭円形を呈し、長径1.52m、短径1.04mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.14mを測る。12・13号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

12号土坑（第65図）

平面形は椭円形を呈し、長径1.60m、短径1.48mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.22mを測る。11号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

13号土坑（第65図）

平面形は椭円形を呈し、長径0.76m、短径0.58mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。11号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

7号土坑出土遺物（第74図）

土器 3は土師器壺の底部片である。4は須恵器壺の底部片である。無台で底盤が小さい。5は須恵器壺蓋の口縁部片である。外側に貼り付いている耳台は、焼成時に有台壺の一部と融着したものと考えられる。

8号土坑（第62図）

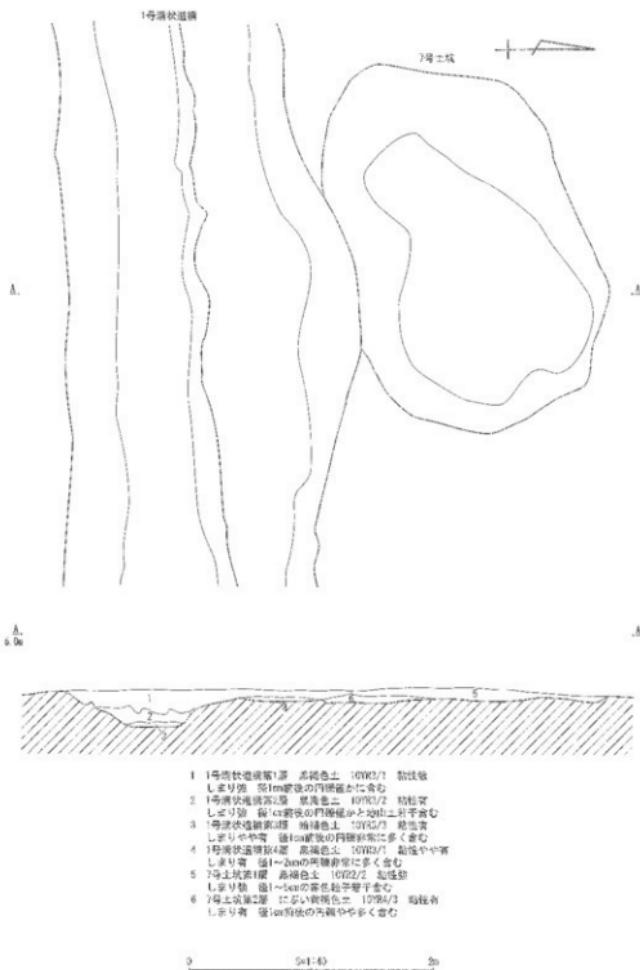
平面形は横円形を呈し、長径1.62m、短径は残存部で0.72mを測る。覆土は土層の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.34mを測る。調査区際で検出された。

8号土坑出土遺物（第74図）

土器 6は須恵器有台壺の底部片である。丸底の底盤がやや張り出す。

9号土坑（第63図）

いびつな平面形を呈し、非常に浅いが、覆土に円環を多く含むため、判別が可能である。長径2.70m、短径1.56mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.04mを測る。

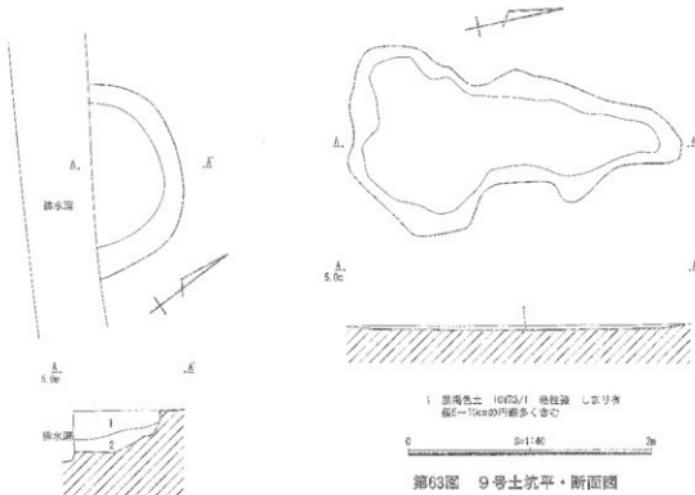


第61図 7号土坑・1号溝状遺構平・断面図

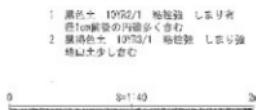
14号土坑（第66図）

平面形は梢円形を呈し、長径1.44m、短径は渓谷部で0.54mを測る。壁土は単層で、検出面からの深さは0.44mを測る。15号土坑に切られる。

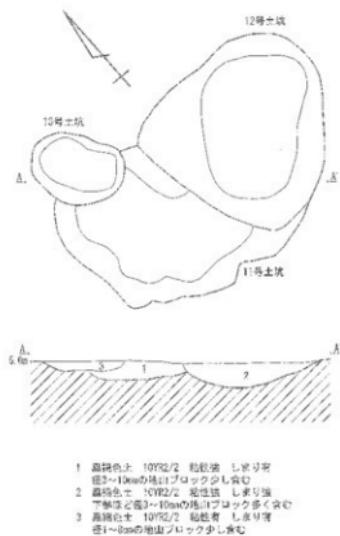
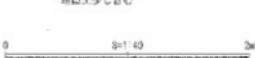
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。



第63図 9号土坑平・断面図



第62図 8号土坑平・断面図



第64図 10号土坑平・断面図

第65図 11~13号土坑土坑平・断面図

15号土坑（第66図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.50m、短径は残存部で0.68mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。14号土坑を切り、16号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

16号土坑（第66図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.30m、短径0.96mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。15号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

17号土坑（第67図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.26m、短径は残存部で0.54mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.28mを測る。19号土坑に切られる。

遺物の出土は認められなかったが、19号土坑によって切られていることから、19号土坑よりも相対的に若干古いことが分かり、奈良・平安時代に帰属するものとした。

18号土坑（第67図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.24m、短径0.86mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.42mを測る。19号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

19号土坑（第67図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.48m、短径1.20mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。17・18号土坑を切り、20号土坑に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

20号土坑（第67図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.08m、短径0.88mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.22mを測る。19号土坑を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

21号土坑（第68図）

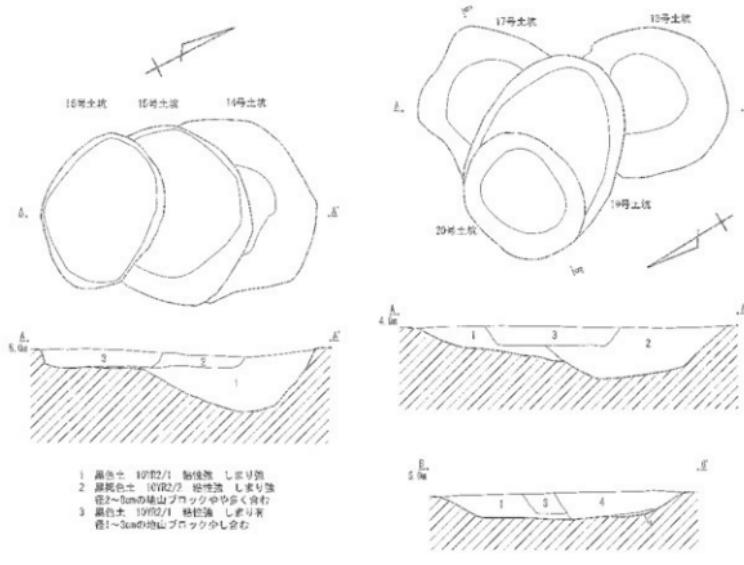
平面形は橢円形を呈し、長径0.72m、短径0.56mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

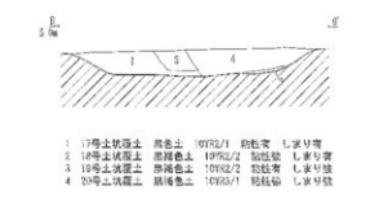
22号土坑（第69図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.10m、短径0.64mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。

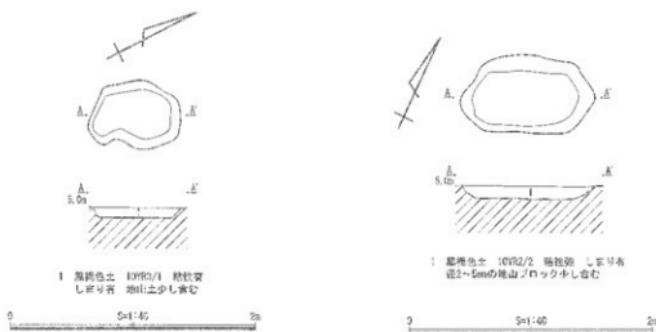
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。



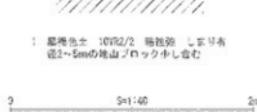
第66図 14～16号土坑平・断面図



第67図 17～20号土坑平・断面図



第68図 21号土坑平・断面図



第69図 22号土坑平・断面図

23号土坑（第70図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.46m、短径0.78mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.06mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

24号土坑（第71図）

平面形は橢円形を呈し、長径0.84m、短径0.42mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

25号土坑（第58図）

平面形はいびつな橢円形を呈し、長径2.90m、短径1.18mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。6号土坑列を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

2号土坑列（第55図）

5基の土坑群と6基の小穴群、不定形な細長い造構1基によって構成される。不定形な造構は土坑を連ねたような形態を呈している。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や不定形造構は弧を描くように列状に並び、本来は1条の溝状造構であった可能性が高い。全般的に浅いが、西端の最深部では深さ0.15mを測り、8号溝状造構を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

3号土坑列（第56図）

4基の小穴群と不定形な土坑1基で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は1基の土坑であった可能性も考えられる。

3号土坑列出土遺物（第74図）

土器 7は土師器壺の底部片である。古墳時代にまで遡る可能性がある資料であるが、3号土坑列覆土内からは土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

4号土坑列（第56図）

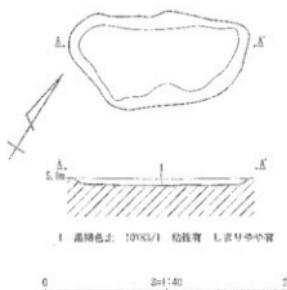
13基の土坑群と5基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。南北方向に列状に並び、本来は1条の溝状造構であった可能性が高い。その場合、10号溝状造構と並行して延伸することになろう。深さは0.05mを測り、10号溝状造構と同規格である。10号溝状造構と搅乱によって一部が切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、須恵器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

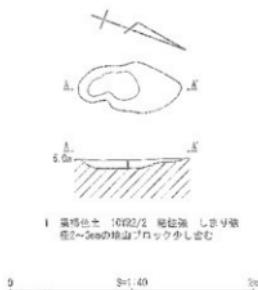
5号土坑列（第72図）

2基の土坑群と1基の小穴で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は1条の溝状造構あるいは1基の土坑であった可能性も考えられる。

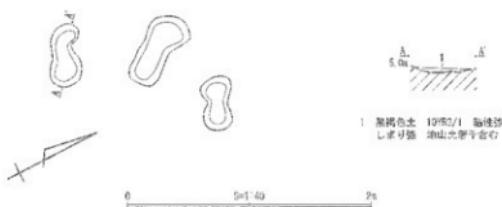
遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器壺の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。



第70図 23号土坑平・断面図



第71図 24号土坑平・断面図



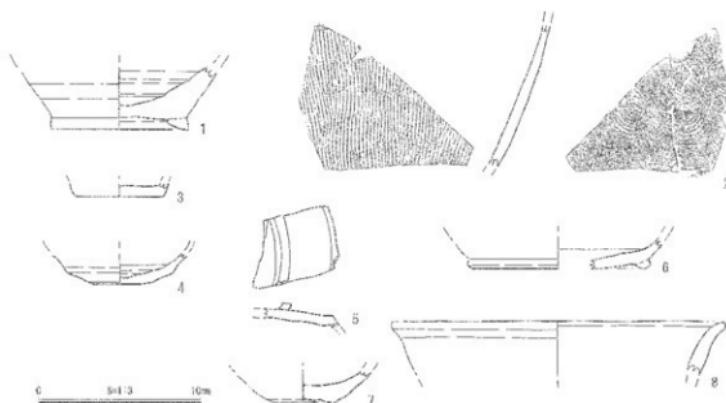
第72図 5号土坑列平・断面図



第73図 8号土坑列平・断面図

6号土坑列（第58図）

46基の土坑群と18基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも单層である。直線的に南北方向に並んでおり、本来は1条ないしは2条の溝状遺構であった可能性が考えられる。一部の土坑の覆土から木片が出土しており、溝状遺構ではなく杭列であった可能性も想定されるが、明確な木杭の痕跡等は認められなかった。11号溝状遺構を切るが、25号土坑に切られる。



第74図 6～8号土坑・3・6号土坑出土土器実測図

6号土坑列出土遺物（第74図）

土器 8は土師器甕の口縁部片である。

7号土坑列（第58図）

4基の土坑群と7基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。本来は11号溝状遺構と交わるように延びる1条の溝状遺構であった可能性が考えられる。11号溝状遺構に切られる。

遺物は固化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

8号土坑列（第73図）

1基の土坑と2基の小穴群で構成される。同一の覆土をもち、いずれも単層である。土坑や小穴はさらに上層から掘り込まれていた可能性もあり、本来は1基の土坑であった可能性も考えられる。

遺物は固化に耐え得る資料は認められなかったが、土師器甕の破片が数点出土したことから、奈良・平安時代に帰属するものとした。

遺構外出土遺物（第75～79図）

土器 第75図の1～39は土師器甕である。1はほぼ完形、2～6は口縁～底部片、7～18が口縁～体部片、19～23が口縁部片、24～39が底部片である。1は丸底で口縁部が僅かに内傾する。半円錐の形態を呈し、内面には範囲き調整が施される。3・4はいぶし焼きにより器表面に炭素を吸着させた黒色土器である。3は内外面とも器面に崩き調整の痕跡が認められ、丸底で体部から口縁部にかけて緩やかに内外面に屈曲する。1・3の帰属時期は6世紀後半から7世紀前半頃まで遡る可能性がある。5は平底で底部から口縁部まで直線的に立ち上がり、箱形を呈す。6は口径に対して器高が低く、且あるいはかわらけの可能性もある。7～13は底部を欠くが、体部下半の形態から丸底になる可能性が高い。24～39の底部片は全て平底である。40～42は土師器有台杯である。40が口縁～底部片、41・42が底部片である。須恵器有台杯を模したような形態を呈する。須恵器有台杯自体が8世紀後半から9世紀にかけて激減することから、8世紀中頃あるいはそれ以後の所産と考えられる。

第76図の1～3は土師器有台杯の底部片である。4～19は土師器甕である。4～6が口縁～胴部片、

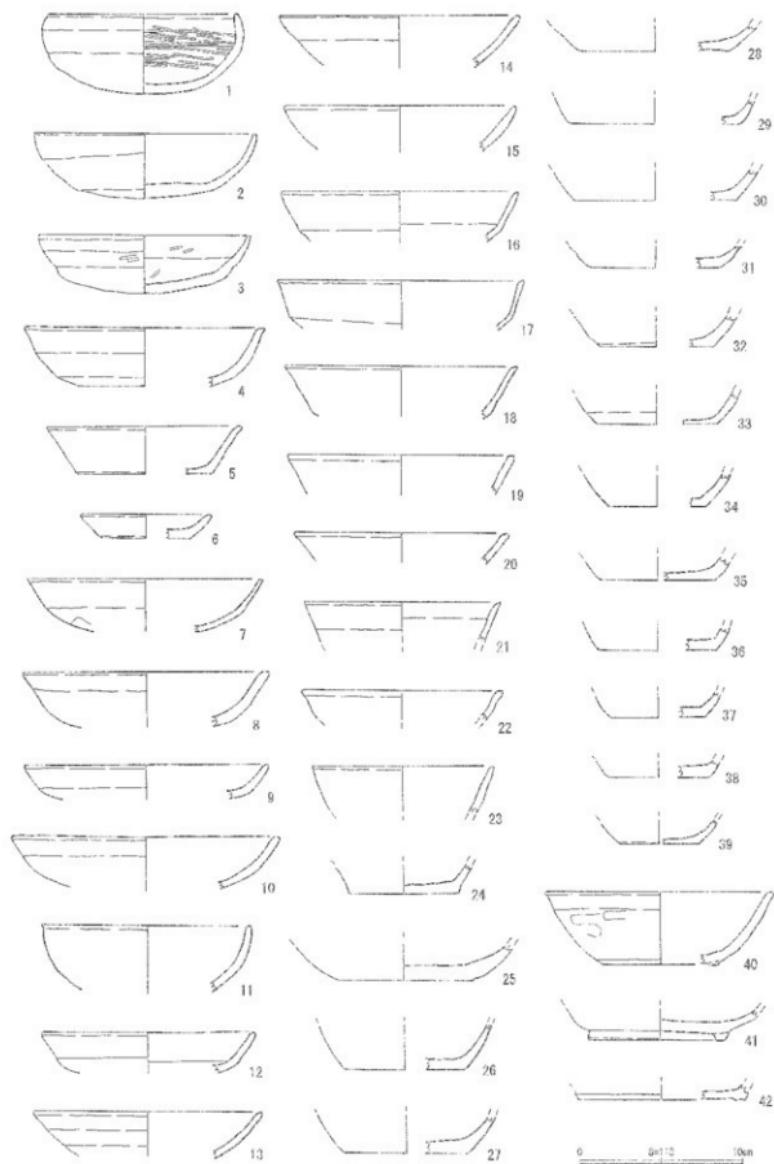
7～13が口縁部片、14・15が肩～底部片、16～19は底部片である。4～10・14は駿東型壺と考えられる。9・10の胎土は茶褐色を呈することが多い古代の駿東型壺にあって、白みがかった橙色を呈する。赤みがかった駿東型壺との胎土の違い、ひいては生産地の違いに結びつく可能性も考えられる。6は口縁部と肩部の接合部に突き出しが認められる。山本編年4段階にあたり7世紀末に比定されよう。11・12は器壁が薄く、口縁部が内面に折り返されたうえで外反気味に大きく開く。平安時代から中世にかけて認められる伊勢型壺（新田 1985）と思われる。14・15は底部から肩部中央にかけての立ち上がりが緩やかである。20は土師器壺の底部片としたが、胎土や焼成から古墳時代の壺の可能性もある。

第77図の1～19は土師器壺の底部片である。5・7・10～12は駿東型壺と考えられる。10・12の胎土は白みがかった橙色あるいは明褐灰色を呈する。20は鉢の口縁～底部片である。口径に対して器高が低い。全面摩耗が著しく、葉巻等は判別できなかったが、底部に木葉痕が僅かに残る。21～29は土師器壺の口縁部破片である。口径を推し量れる資料は認められなかった。口縁部が肥厚し外側に膨らむ。23・25のように、外面に刷毛目が残るものも見受けられた。壺はIV期後葉から出現する。壺は、奥駿河湾で漁獲される大型回遊魚を加熱調理するための煮炊具としての用途が考えられている（瀧川 1990、瀧川・小池 1990）。近隣では狩野川の対岸となるが、沼津市の藤井原遺跡での出土が目立つ。30は羽笠の口縁部片である。

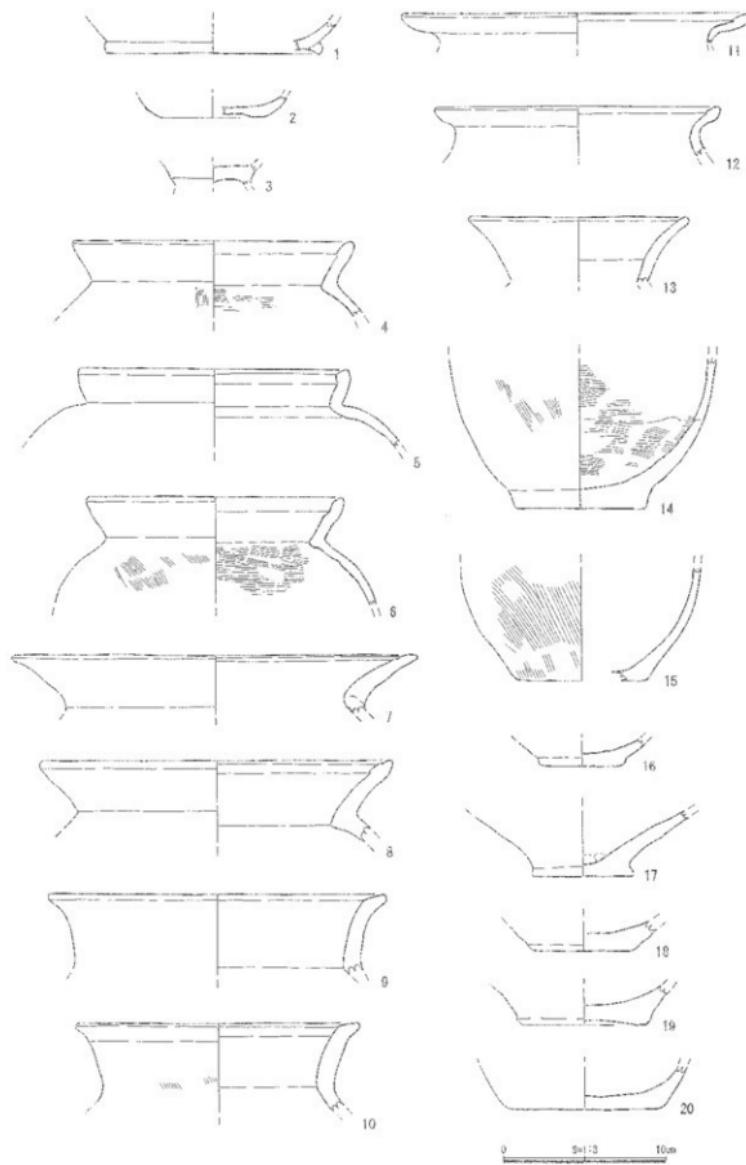
第78図の1～10は須恵器壺である。1はほぼ完形、2は口縁～底部片、3～6は口縁～体部片、7～10は底部片である。1・2・8～10は無台で腰が丸い平底である。7世紀末から8世紀前葉に位置づけられよう。11～21は須恵器有台壺である。11・12はほぼ完形、13・14は口縁～底部片、15は体～底部片、16～21は底部片である。11・12は丸底の底部が高台からはみ出る7世紀末から8世紀初頭に特徴的な形態である。13・14は11・12よりはやや時期が下り、8世紀前葉以降の所産であろう。15は底部から体部上半にかけて直線的に立ち上がる。有台箱壺の可能性が高く、8世紀中葉以降の資料と考えられる。22～27は須恵器壺蓋である。22はほぼ完形だが摘み部を一部欠く。23～26は口縁部片、27は摘み部片である。概ね8世紀中葉から後葉に位置づけられるが、26は口縁部から頂部への立ち上がりが緩やかで、やや時期を遡る可能性がある。28～30は須恵器壺の胴部破片である。28・29は内面に當て具痕である青海波文が認められる。30の内面には箋削りのような削痕が縱横に残る。

第79図の1は須恵器短頸壺の口縁～底部片である。全体に丸みを帯びて、肩がやや張って丸くなる。瀬西窯製品で一般的に見られる短頸壺よりも器高が低く、構円に近い形態を呈する。2は須恵器長頸壺の頸部片である。頸部上半は口縁部に向かって大きく開く。3は須恵器鉢の口縁部片である。いわゆる鉄鉢で9世紀の所産である。4～10は灰釉陶器塊である。4は口縁～底部片、5～10は底部片である。4は体部の内外面に刷毛によって釉薬が塗布される。口縁部の外反は緩やかで、三日月高台の内傾も弱い。猿投窯縦年の黒雀90号窯式3型式に位置づけられると考えられ、9世紀後半の所産であろう。5～10も施釉方法が確認できるものは刷毛塗りで、浸け掛けるによるものは認められなかった。高台の形態から、定型化した三日月高台出現以降のものと考えられ、黒雀90号窯式2型式以降に位置づけられる。11は灰釉陶器壺の口縁～底部片である。薄手で口縁部が外反する。底部は貼り付け高台である。猿投窯縦年の折戸53号窯式に位置づけられ、10世紀前半に比定される。12は綠釉陶器の破片である。壺の底部付近の破片と見われる。釉薬の色調等から中世以降ではなく古代の猿投窯産の綠釉陶器と判断した。トチンを用いて焼成した際の目跡が内面に認められる。

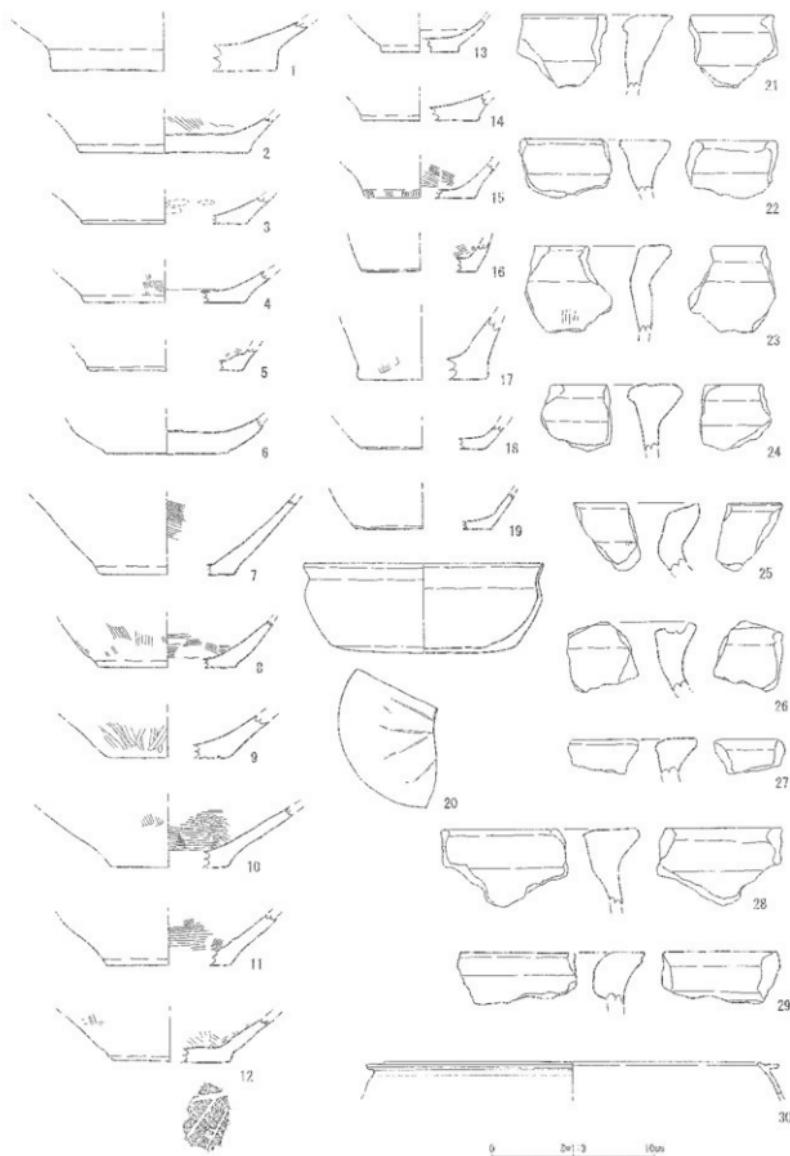
土製品 13は土糞で端部を欠く。直径0.7cm程の孔が貫通しているため中空である。上端からやや斜め方向に穿孔される。



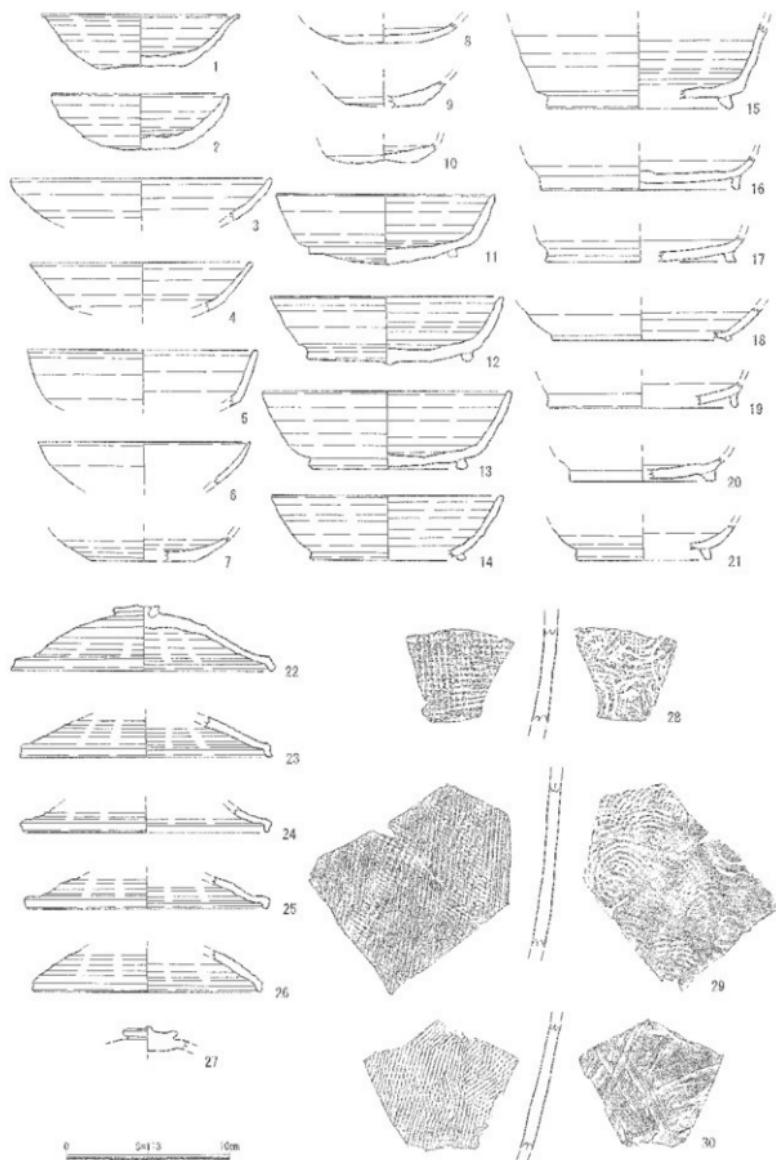
第75図 奈良・平安時代遺構外出土土器実測図①



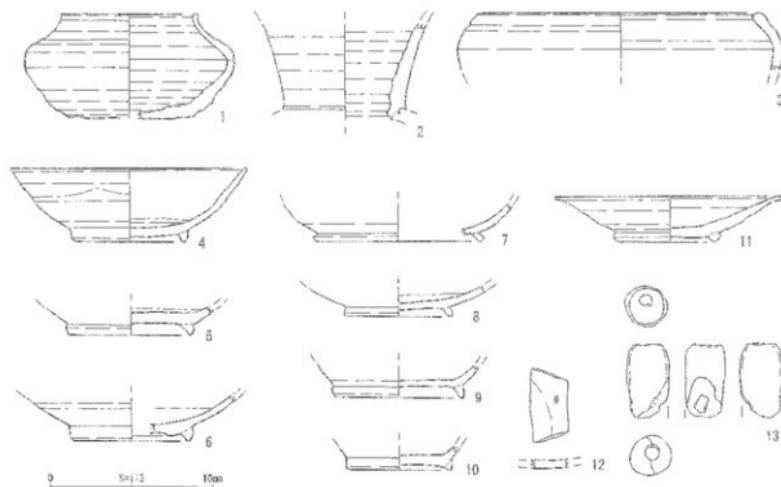
第76図 奈良・平安時代遺構外出土土器実測図②



第77図 奈良・平安時代遺構外出土土器実測図③



第78図 奈良・平安時代遺構外出土土船実測図④



第79回 奈良・平安時代遺構外出土土器および土製品実測図

参考文献

- 植松章八 2008 「東駿河の奈良・平安時代遺跡と土器」『称宣ノ前遺跡』 富士市教育委員会
- 佐野五十三 1994a 「駿江・駿河・伊豆の古代集落の土器—土師器を中心として—」『静岡県史研究』第10号 静岡県
- 佐野五十三 1994b 「駿河国における官衙・集落の土器—須恵器を中心として—」『地域と考古学』向坂鋼二先生遺産記念論集 向坂鋼二先生遺産記念論集刊行会
- 鈴木敏則・向坂鋼二編 1998 「梶子北遺跡」遺物編（本文） 財團法人浜松市文化協会
- 瀬川裕市郎 1980 「藤井原の大鉢—律令時代壺形土器の変遷—」『沼津市歴史民俗資料館紀要』4 沼津市歴史民俗資料館
- 瀬川裕市郎 1983 「駿河型の杯」『静岡県考古学研究』14 静岡県考古学会
- 瀬川裕市郎・小池裕子 1990 「煮堅魚と壺形土器・覚え書き」『沼津市博物館紀要』14 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館
- 賀元洋 1998 「駿西窯編年の再検討」『静岡県考古学研究』30 静岡県考古学会
- 新田洋 1985 「平安時代～中世における煮炊用具—「伊勢型」鍋一に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1 三重考古学講話会
- 平野吾郎 1991 「遠江・駿河における歴史時代土器の成立と展開」『古代探査』1 早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集一 早稲田大学出版部
- 宮崎泰史・藤永正明編 2006 「年代のものさし—陶邑の須恵器—」 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 山本(北川)恵一 1988 「「駿東型の甕」初現と終末について」『沼津市博物館紀要』12 沼津市歴史民俗資料館・沼津市明治史料館
- 山本恵一 1995 「静岡県下の6～7Cの土師器—主に駿河東部・伊豆北部の現状について—」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会

第6節 中世の遺物

中世の遺物は包含層や還構検出面直上からの出土が多く、中世に帰属される遺物は検出されなかった。遺物としては総破片数119点の中世陶磁器が出土した。その全ては第2～4表に破片数をまとめてある。なお、出土陶磁器の数値化に際しては、「陶磁器から見る静岡県の中世社会」(薬川シンポジウム実行委員会編 2005)に示されている集計表に準拠して表を作成した。特筆すべき点として、貿易陶磁の出土数が比較的多い点があげられる。貿易陶磁の出土破片数は47点を数え、総数に対する割合は39.4%を占める。中でも龍泉窯系の青磁碗の出土が目立つ。

以下、貿易陶磁については小野正敏氏(小野 1994)の、瀬戸・美濃製品については藤沢良祐氏(藤沢 1991・2002)の編年に準じている。また、松井一明氏の論考(松井 1993)や『視説 中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会編 1995)も参考している。

総数が少なく、詳細な分類を行えなかった資料も多いため、時期別の数値化は実施しなかった。13世紀中葉から14世紀前葉、15世紀後葉から16世紀前葉、そして16世紀後葉に比定される資料が多いという出土傾向がある。13世紀中葉から14世紀前葉にかけての資料は龍泉窯系B1類青磁碗を中心とする。15世紀後葉から16世紀前葉にかけての資料は、古瀬戸後期から大窯にかけての瀬戸・美濃製品が多い。16世紀後葉の資料として多いのは、大窯4段階の志野丸皿である。

土器(第30回)

1～5は貿易陶磁である。1～4は龍泉窯系青磁碗で、1が口縁～体部片、2・3が底部片、4が口縁部破片である。1は体部外面に半肉彫りの螭蓮弁文が配される。龍泉窯系B1類に相当し、13世紀中葉から14世紀前葉に位置づけられる。2は底部内面付近に劃花文が施される。龍泉窯系A2類から4類の間に位置づけられ、12世紀後葉から13世紀前葉の所産である。3は外面の底部付近に螭蓮弁文が認められる。

第2表 出土遺物破片数数量表(貿易陶磁)

種 別	器 器 名	分 類	年 代	破 片 数	
				数	率
青 磁	碗 類	龍泉窯系A2～4類	12後～15前葉	5	
		龍泉窯系B1類	13中～14前葉	16	
		龍泉窯系B2類	14末～15初	1	
		不明		16	
白 磁	碗 類	瀬戸折腰田窓	13～14	1	
		IV類	12後	2	
青白磁	瓶 類	不明		1	
		梅瓶	14～15	3	
染 付	瓶 類	B1群	15中	2	
		合 計		47	

第3表 出土遺物破片数量表(瀬戸・美濃製品)

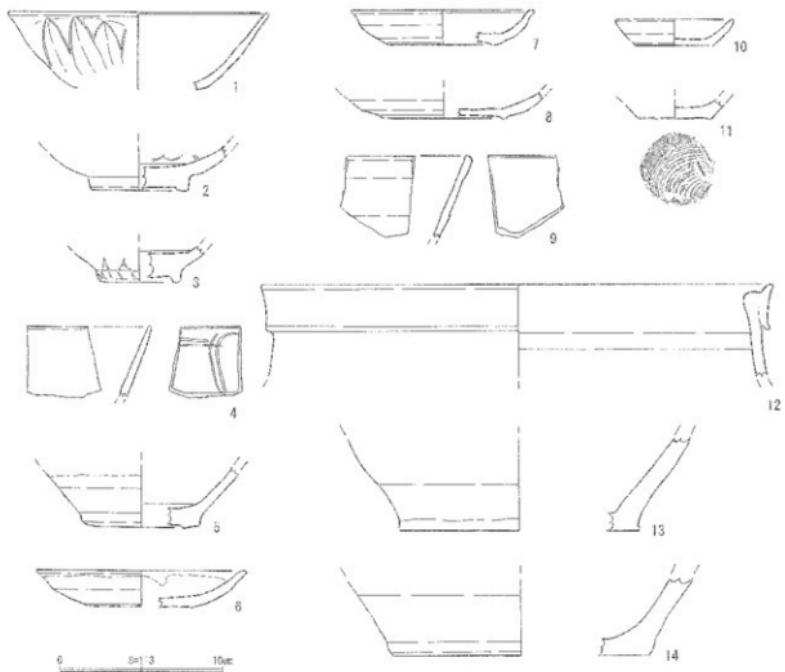
器 器 名	古瀬戸後期	古瀬戸～大窯	大 窯 製 品				合 計
			1	2	3	4	
大 目	天目茶碗		1				1
鶴 頭	灰釉平頭	2					2
三 類	灰釉丸皿		6			1	7
	灰釉縫縫皿	1					1
	志野丸皿					8	8
盤 類	灰釉直縫大皿	3					3
	灰釉盤類		1				1
持 鉢	瀬戸鉢		4				5
	合 計	6	12			1	9
							28

第4表 出土遺物破片数算表（その他の陶器）

種別	器種名	分類	破片数
山茶碗	尾張系3～4型式	1	
小鉢	東瀛系尾張	3	
	合計	4	
常滑製品	甕	9型式	1
		不明	14
		8～9型式	1
	鉢	10～11型式	2
		不明	5
	合計	23	
瀬戸製品	甕	不明	12
	鉢	不明	5
	合計	17	

輪高台である。体部下半は直線的に開き、中央付近に稜が入る。いずれも大窯4期段階にあたり、16世紀後葉の所産である。9～11は山茶碗である。9は常滑の碗の口縁部破片である。尾張系3型式から4型式の間に位置づけられ、12世紀の所産である。10・11は小皿で、10

は12世紀前葉に鶴泉窯系B1類、13世紀中葉から14世紀前葉の所産である。4は内面に割花文が施され、鶴泉窯系A2類から4類の間、12世紀後葉から13世紀前葉に比定される。5は白磁碗の体～底部片である。削り出し高台をもち、内面および外表面部上半に施釉される。IV類に相当し、12世紀後葉の所産である。6～8は瀬戸美濃製品である。6は灰釉緑釉小皿の口縁～底部片である。古瀬戸戸後期IV期古段階にあたり、15世紀中葉に位置づけられる。7・8は志野丸皿で、7が口縁～底部片、8が体～底部片である。高台は削り出し輪高台である。体部下半は直線的に開き、中央付近に稜が入る。7の口縁部は緩やかに外反する。いずれも大窯4期段階にあたり、16世紀後葉の所産である。9～11は山茶碗である。9は常滑の碗の口縁部破片である。尾張系3型式から4型式の間に位置づけられ、12世紀の所産である。10・11は小皿で、10



第80図 中世土器実測図

は口縁～底部片、11は底部片である。底部は糸切未調整の平底である。いずれも東遠江系Ⅲ期にあたり、13世紀に比定される。12は常滑製品の甕の口縁部である。口縁の縁帶が垂下して頸部に接合し、厚い口縁部を形成しているが、折り返した部分は僅かに隙間が残る。9型式にあたり、14世紀末から15世紀前半の所産である。13・14は渥美製品の甕の底部片である。底部から肩部への立ち上がりから、12世紀中葉から後業の所産と思われる。

参考文献

- 小野正敏 1994 「日本出土の貿易陶磁」東日本編 国立歴史民俗博物館資料調査報告書5 国立歴史民俗博物館
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 2002 「瀬戸・美濃大窯年の再検討」『研究紀要』第10輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』25 静岡県考古学会
- 菊川シンポジウム実行委員会編 2005 「陶磁器から見る静岡県の中世社会」
- 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」

第7節 近世以降の遺構と遺物

近世以降の遺構として、池状遺構1基・溝状遺構9条・土坑15基・土坑列1基を検出した。池状遺構等、近世以降の遺構の覆土の特徴として、径10cm前後の砂利が多く含まれる点が挙げられる。

池状遺構（第81図）

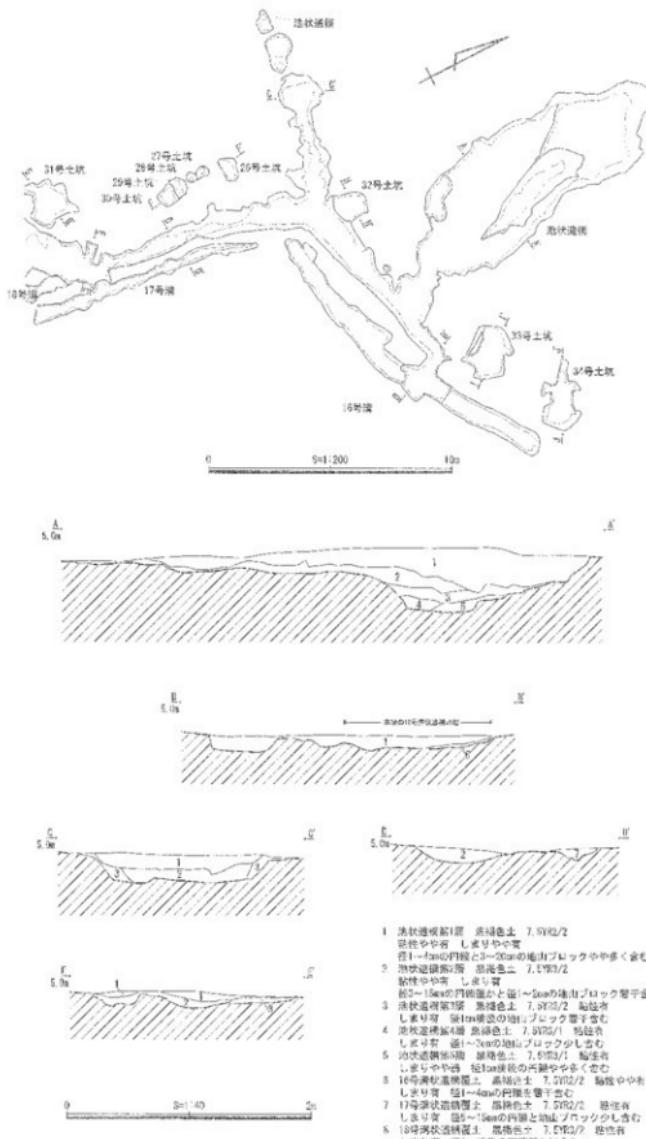
溝状遺構と土坑を組み合わせたような複雑な平面形を呈す。32号土坑付近を基点に三方向へ直線状に広がり、北側では幅広で深い張り出し部と繋がっている。南端はさらに調査区外へと続く。北側の張り出し部での最大幅は4.2m、最大深は0.5mを測る。土層の堆積から5層に分層されるが、遺構の南側は堆積が薄くなり、第5層や第4層、地点によっては第3層の堆積も認められなくなる。このことから、第4・5層の堆積が認められる北側の張り出し部が先行して埋没していったことが想定されよう。16・18号溝状遺構と32号土坑を切るが、17号溝状遺構に切られる。遺構内と遺構周辺に夥しい数の木杭が打設される。検出された木杭の内、大小3点について樹種同定を実施した結果、いずれもニ葉マツ類でアカマツまたはクロマツであった。

32号土坑付近を基点に東・西・南の三方に向かって直線状に広がっており、正方位を意識して溝を掘り、周囲に木杭を打設したものと考えられる。北側の張り出し部には、一部水が堆積していたような痕跡が認められており、北側に水を溜める、あるいは北側から水を流すための流路としての機能が想定される。また、他に楓の区画や通路等の機能も考えられよう。北側の張り出し部の底面付近から昭和14年の一錢アルミ貨が出土していることや、覆土出土の陶磁器の年代観からも、近代以降の遺構であろう。

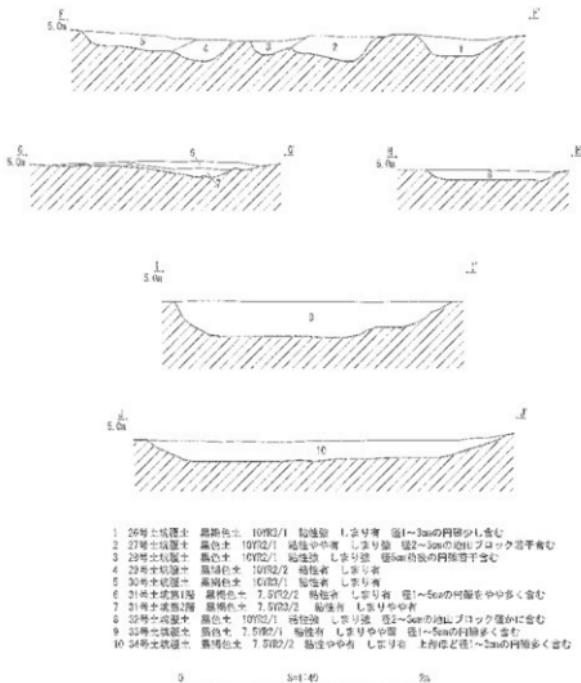
池状遺構出土遺物（第83・92図）

土器 第83図の1は陶器皿の口縁～底部片である。浅黄色の釉薬が器面に塗布される。2は陶器擂鉢の底部片である。底部は糸切未調整の平底である。底部内面にも揮目が確認される。釉薬は鉄釉の全面施釉である。近世瀬戸系の擂鉢と考えられる。他に青磁碗・青白磁梅瓶・瀬戸美濃擂鉢などの中世陶磁器や、固化し得なかつたが、近世以降の瓦片が数点出土した。

木製品 3は用途不明の木製品である。赤色の顔料が片面に塗布されていた。形状はクリである。4は又錆状の木製品である。下半を中心に加工を施した痕跡が認められる。器具などの木製品や標染部材の



第81図 池状堆積・16~18号溝状堆積・26~34号土坑平・断面図 (A~E)



第82図 26~34号土坑断面図 (F~J)

未完成の可能性が考えられる。樹齢は二葉マツ類でアカマツあるいはクロマツである。3・4の他に細片であったため固形化しなかったが、漆椀の破片が出土している。暗赤色(10R3/6)の漆が塗布されていた。樹齢はケヤキである。

銅製品 5は棒状銅製品である。欠損しておらず、完形と思われる。断面は楕円形の中空で、両端部が僅かに外側に広がる。X線撮影写真では中央潰方向に縦ぎ目のようなラインが認められた。用途は不明だが、その形態から煙管吸口等の未完成である可能性も考えられる。

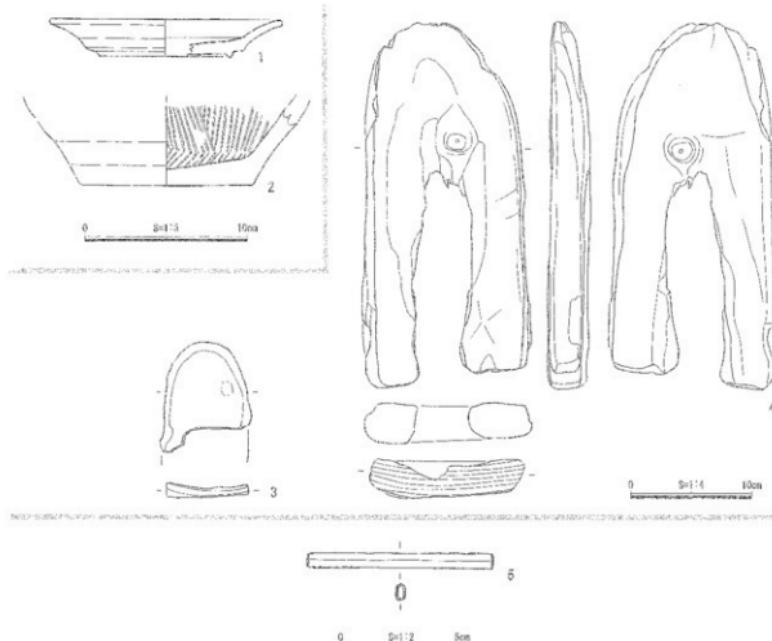
錢貨 第92図の1は昭和14年(1939年)発行のカラスー銅アルミ貨である。泡状凍結層土の底面付近から出土した。昭和14年のカラスー銅アルミ貨には、「四」の字に「ル四」と「角四」の2種があるが、本資料は「ル四」にあたる。

13号溝状遺構(第84図)

東西方向に細長く直線状に延伸する。調査区内での長さは21.5m程を測り、西端はさらに調査区外へと続く。幅は平均0.4m、深さは0.2mを測り、土層の堆積状態から2層に分層される。現端では、細長く直線的な形態から近代以降の増築の可能性が検討された。

13号溝状遺構出土遺物(第90図)

土器 1は土師器壺の底部片で13号溝状遺構上端から出土した。2は土師器場の口縁～肩部片であ



第83図 池状遺構出土土器・木製品・銅製品実測図

る。口縁部が肥厚するとともに外反する。腹部内外面に刷毛目の痕跡が認められる。他に固化し得なかつたが、近世陶磁器の破片が数点出土した。

14号溝状遺構（第85図）

15号溝状遺構と並行するように直線状に延伸する。調査区内での長さは9.2m程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅は平均0.4m、深さは0.15mを測り、覆土は単層である。15号溝状遺構と擾乱に切られる。遺物の出土は認められなかったが、近世陶磁器が出土した15号溝状遺構との切り合い関係から近世以降に帰属するものとした。また、細長く直線的な形態から13号溝状遺構同様、近代以降の暗渠の可能性が考えられる。

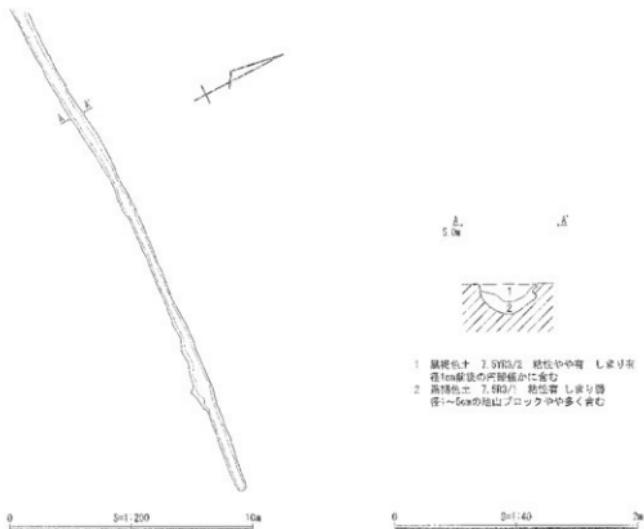
15号溝状遺構（第85図）

14号溝状遺構と並行するように直線状に延伸する。調査区内での長さは3.2m程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅は平均0.6m、深さは0.2mを測り、覆土は単層である。14号溝状遺構を切り、擾乱に切られる。

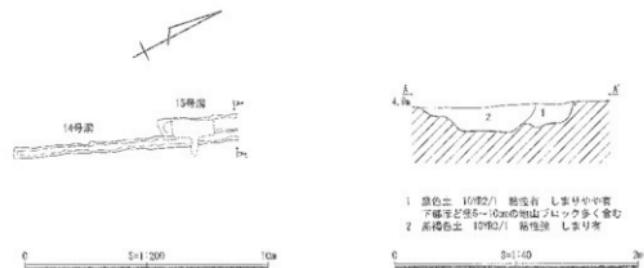
遺物は固化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶磁器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

16号溝状遺構（第81図）

池状遺構の一部と並行するように東西方向に延伸する。長さ13m程、幅1m程、深さ0.1m程を測る。



第84図 13号溝状遣構平・断面図



第85図 14・15号溝状遣構平・断面図

覆土は単層である。池状遣構に切られる。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世磁器碗の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

17号溝状遣構（第81図）

池状遣構の一部と並行するように南北方向に延伸する。長さ9m程、幅0.4m程、深さ0.08m程を測る。覆土は単層である。池状遣構を切る。

遺物は図化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

18号溝状遺構（第81図）

17号溝状遺構の一部と並行するように南北方向に延伸する。調査区内での長さは2m程を測り、南端はさらに調査区外へと続く。幅は0.4m程、深さ0.08m程を測る。覆土は単層である。池状遺構に切られる。遺物の出土は認められなかつたが、覆土の所見や池状遺構との切り合い関係から近世以降に帰属するものとした。

19号溝状遺構（第86図）

調査区内での長さは5m程を測り、北端はさらに調査区外へと続く。幅1.5m程、深さ0.05m程を測る。覆土は単層である。南北方向に延伸することや、木杭が周囲に打設されることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。北端は環濠の北西隅を切り、南端を搅乱に切られる。

19号溝状遺構出土遺物（第90図）

土器 3は壺器類の体～底部片である。外面には刷の染付が配される。

20号溝状遺構（第86図）

長さは16m程を測るが、西壁を搅乱によって失われている。幅は西端付近で3m程、深さ0.2m程を測り、覆土は単層である。覆土の状態や深さや幅といった規模の類似性から、本来は21号溝状遺構と連結する同一の遺構であった可能性が考えられる。また、東西方向に延伸することや、木杭が周囲に打設されることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。

20号溝状遺構出土遺物（第90図）

土器 4は須恵器壺の底部片である。5は陶器の底部片である。壺底は平底あるいは直であろう。腹部付近に釉薬の付着が認められる。近世瀬戸美濃系の製品である。6・7は磁器碗で、6はほぼ完形、7は体～底部片である。いずれも外面に飾の染付が配される。8は磁器筒形碗の口縁～体部片である。肥前系の染付筒形碗で、19世紀前後の所産である。

石器 9は凹石である。中央が人為的に落ちこぼめられている。また、凹面の下半と凸面のほぼ全面が磨面として利用されており、磨痕や削痕が認められる。石材は軽石である。

21号溝状遺構（第86図）

長さ25m程、幅3m程、深さ0.05m程を測る。覆土は単層である。本来は20号溝状遺構と連結する同一の遺構であった可能性が考えられる。また、東西方向に延伸することや、木杭が周囲に打設されることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。東端は環濠の上層を切る。

21号溝状遺構出土遺物（第90図）

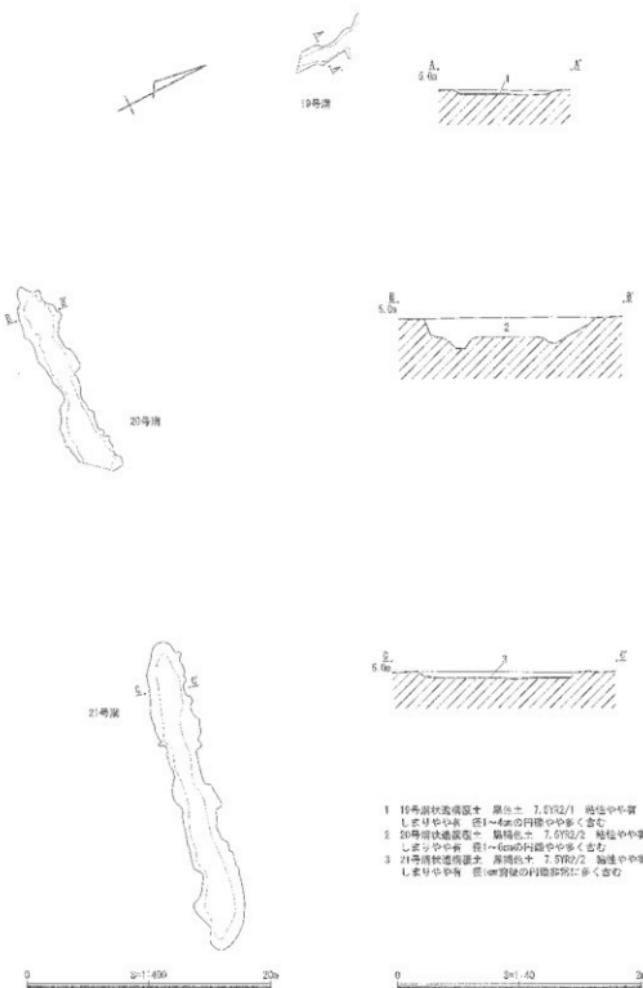
土器 10は陶器皿で口縁～体部片である。志野小皿で17世紀の所産である。11～13は磁器碗で、11はほぼ完形、12は口縁～底部片、13は口縁～体部片である。いずれも外面の体部や底部に染付が施される。14は磁器筒形碗での口縁～体部片である。外面には紅葉の染付が配される。他に染付皿・志野丸皿などの中世陶器盤が出土した。

26号土坑（第81・82図）

平面形は椿円形を呈し、長径1.10m、短径0.80mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。覆土に池上遺構同様の木杭が認められた。27～30号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかつたが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

27号土坑（第81・82図）

平面形は椿円形を呈し、長径0.60m、短径0.40mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.20mを測る。28号土坑に切られる。26・28～30号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかつたが、



第66図 19~21号溝状造構平・断面図

覆土の所見や池状造構との関連性を窺わせる配備上、近世以降に帰属するものとした。

28号土坑（第81・82図）

平面形は梢円形を呈し、長径0.46m、短径0.40mを測る。覆土は草屑で、検出面からの深さは0.12mを測る。27号土坑を切る。26・27・29・30号土坑とともに池状造構に並列するように配置されていることから、池状造構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、

覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

29号土坑（第81・82図）

平面形は橢円形を呈し、長径0.80m、短径0.72mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.18mを測る。30号土坑に切られる。26～28・30号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

30号土坑（第81・82図）

平面形は橢円形を呈し、長径0.94m、短径0.80mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。29号土坑を切る。26～29号土坑とともに池状遺構に並列するように配置されていることから、池状遺構に伴う何らかの機能を有していた可能性がある。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

31号土坑（第81・82図）

いびつな平面形を呈し、長径2.88m、短径2.00mを測る。覆土は土屑の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.14mを測る。調査区段で検出された。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との関連性を窺わせる配置上、近世以降に帰属するものとした。

32号土坑（第81・82図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.40m、短径1.08mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.08mを測る。池状遺構に切られる。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見や池状遺構との切り合い関係から近世以降に帰属するものとした。

33号土坑（第81・82図）

いびつな平面形を呈し、長径2.28m、短径1.70mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.30mを測る。

遺物は固化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

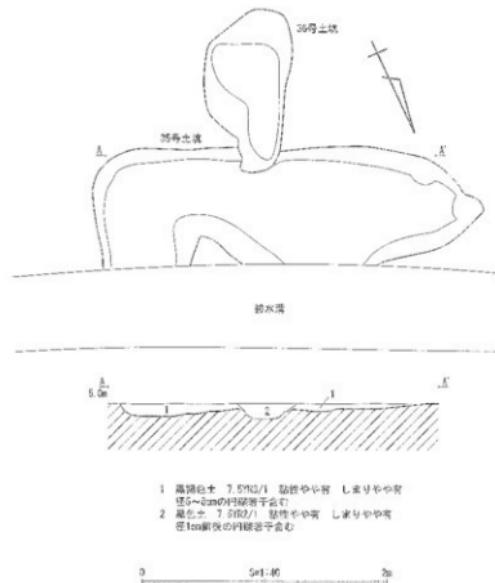
34号土坑（第81・82図）

いびつな平面形を呈し、長径2.98m、短径1.60mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.16mを測る。

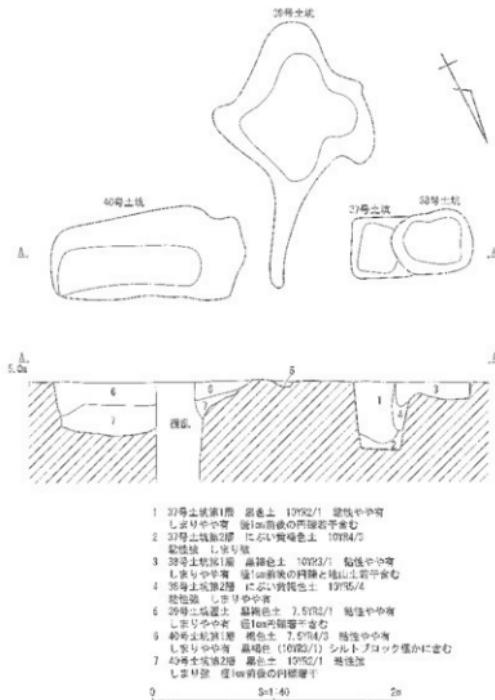
遺物は固化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

35号土坑（第87図）

いびつな平面形を呈し、長径3.20m、短径0.98mを測る。覆土



第67図 35・36号土坑平・断面図



第88図 37~40号土坑平・断面図

平面形は橢円形を呈し、長径0.68m、短径0.52mを測る。覆土は土層の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.40mを測る。東端が一部深くなっている。37号土坑同様、平面形態から柱穴の可能性を想定したが、柱痕は確認できなかった。37号土坑を切る。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

39号土坑（第88図）

いびつな平面形を呈し、長径2.20m、短径1.32mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.05mを測る。38号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

40号土坑（第88図）

長方形に近い平面形を呈し、長径1.60m、短径0.76mを測る。覆土は土層の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.44mを測る。擾乱に一部を深く切られる。覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

40号土坑出土遺物（第90図）

土器 16は灰釉陶器塊の底部片である。

は単層で、検出面からの深さは0.10mを測る。36号土坑に南端を一部切られる。

遺物は固化に耐え得る資料は認められなかったが、近世陶器の破片が数点出土したことから、近世以降に帰属するものとした。

36号土坑（第87図）

平面形は橢円形を呈し、長径1.34m、短径0.70mを測る。覆土は単層で、検出面からの深さは0.12mを測る。35号土坑を切る。

36号土坑出土遺物（第90図）

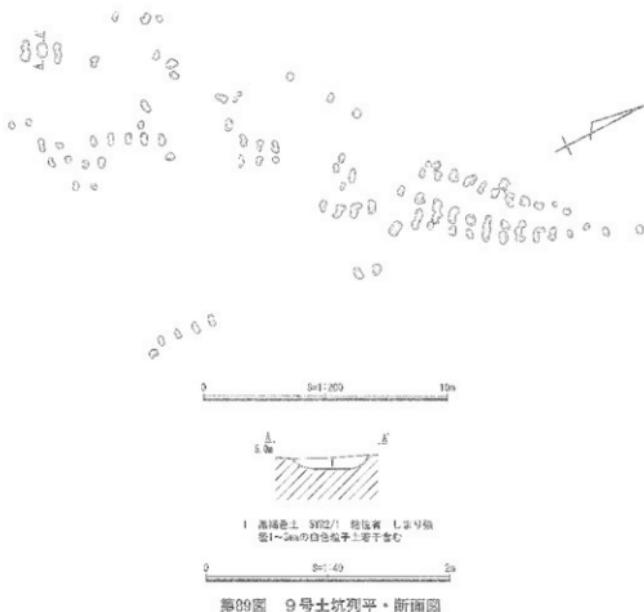
土器 15は陶器の口縁部片である。器種は碗あるいは皿であろう。

37号土坑（第88図）

正方形に近い平面形を呈し、長径0.64m、短径は残存部で0.40mを測る。覆土は土層の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.56mを測る。その平面形態から柱穴の可能性を想定したが、柱痕は確認できなかった。38号土坑に切られる。遺物の出土は認められなかったが、覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。

38号土坑（第88図）

長方形に近い平面形を呈し、長径1.60m、短径0.76mを測る。覆土は土層の堆積から2層に分層され、検出面からの深さは0.44mを測る。擾乱に一部を深く切られる。覆土の所見から近世以降に帰属するものとした。



第99図 9号土坑列平・断面図

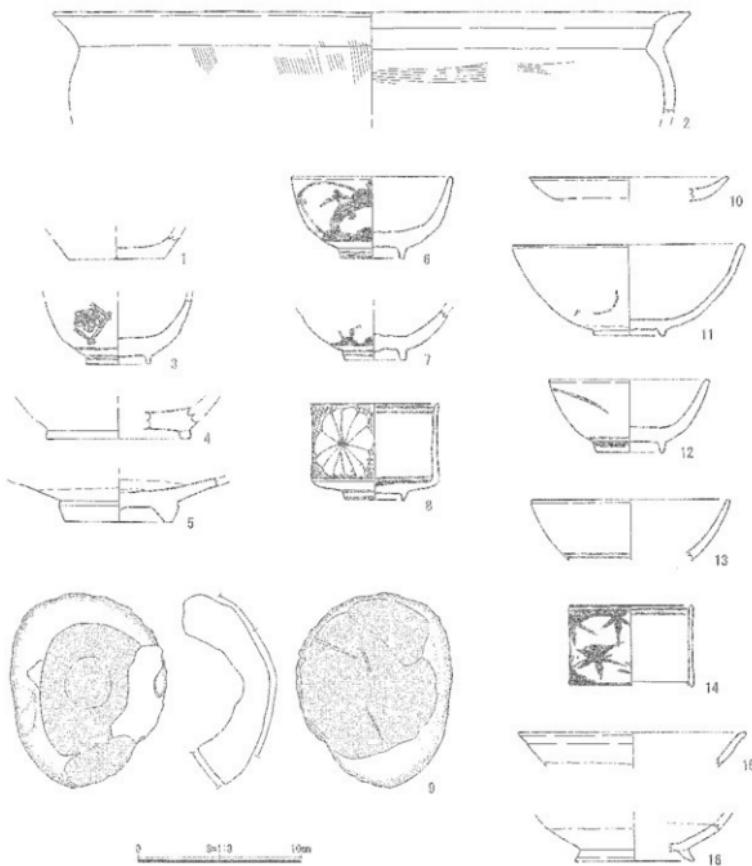
9号土坑列（第99図）

22基の土坑群と67基の小穴群で構成される。北東方向から南西方向に放射状に並んでいる。性格は不明であるが、本末は1~3条の溝状遺構であった可能性も考えられる。深さは地点によって異なるが、平均0.1mを測る。覆土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定結果（第IV章第3節参照）から、近代の遺構と考えられる。

遺構外出土遺物（第91・92図）

土器 1は陶器碗の体～底部片である。内面と外面体部に釉薬が塗布される。近世美濃系の丸碗と考えられる。2は陶器灯明皿の口縁～底部片である。釉薬は鉄焰の全周施釉である。近世瀬戸系の灯明皿と考えられる。3は陶器鉢類の胴～底部片である。内面と外面胴部に明黄褐色の釉薬が施される。近世瀬戸・美濃系の鉢類であろう。4~6は陶器鉢類で、4は口縁部片、5・6は底部片である。4の口縁端部は丸くおさまっている。5・6の底部は糸切未調整の平底である。底部内面にも擂目が確認される。釉薬は鉄焰の全面施釉である。いずれも近世瀬戸系の擂目と考えられる。7・8は磁器碗の口縁～底部片である。7は内面に染付が施される。8は外面に矢羽文の染付が施される。肥前系の染付碗で、19世紀の所産である。9~10は磁器小碗で、9がほぼ完形、10が口縁～底部片である。9は口縁部外面に雨降文の染付が施される。10の高台は二重高台である。11は磁器碗の口縁～底部片である。外面に矢羽文の染付が施される。肥前系の染付筒形碗で、19世紀の所産である。

土製品 12は丸瓦の破片である。凸面に丁寧な掘削調整が施され、凹面には布目痕が残る。13も瓦の破片としたが、扁平な形態で焼成も甘いことから、瓦以外の土製品の可能性も考えられる。片面に叩き目が残る。

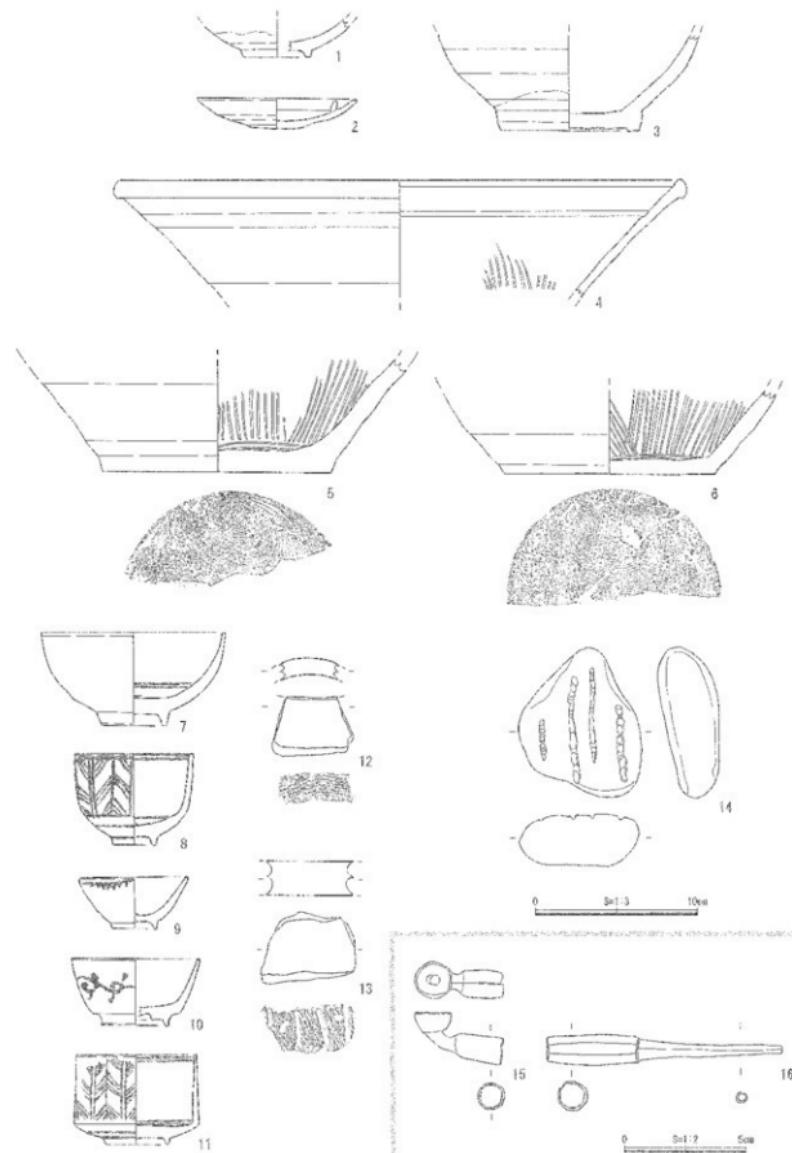


第90図 13・19~21号溝状遺構・36・40号土坑土器および石器実測図

石器 14は縦割が施された砾である。扁平な砾の表面に4条の線刻が認められる。縦はいくつもの穿孔が列状に並ぶ列点によって形成されており、擦痕や削痕ではなく意図的に刻まれたものと判断した。石材はホルンフェルスである。用途や時期等は不明である。

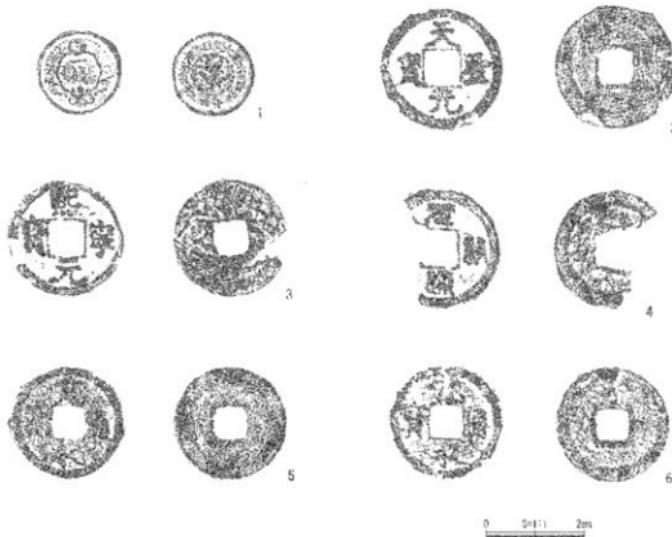
銅製品 15は溝構面直上より出土した銅製の煙管の瓶首である。火道口径1.5cm、管幅1.1cmを測る。16は銅製の煙管の吸口である。やや砂利混じりの包含層中より出土した。15・16とも明確な線が刻められる形態であることから、17世紀代の所産と考えられる。

錢貨 3点の北宋錢の出土が認められた。最古錢は天聖元寶で初鑄年は1023年、最新錢は元豐通寶で初鑄年は1078年である。第92図の2は天聖元寶で錢文の書体は篆書である。3は熙寧元寶(初鑄1068年)



第91図 近世以降遺構外出土土器・土製品・石器・骨製品実測図

で、錢文の書体は真書である。4は全体の1／4程を欠くが、元豊通寶で錢文の書体は篆書である。5・6は寛永通寶である。摩耗が著しく錢文が明確でないが、「寛」の字の12画と13画の頭が離れる点や、「寶」の貝面末尾がハの字を呈する点から、寛文8年（1668年）以降に鋳造された俗に新寛永と呼ばれるものと考えられる。



第92図 錢貨拓影図

参考文献

- 岡本直久・青木修編 2002 『江戸時代の瀬戸窯』 勝瀬戸市埋蔵文化財センター
 青木修ほか編 2003 『江戸時代の美濃窯』 勝瀬戸市埋蔵文化財センター
 岡本直久・青木修編 2004 『江戸時代の瀬戸・美濃窯』 勝瀬戸市埋蔵文化財センター
 山下峰司・金子篠一編 2006 『江戸時代のやきもの一生産と流通一』 勝瀬戸市文化振興財團埋蔵文化
 財センター
 日本貨幣商協同組合編 2010 『日本貨幣カタログ2010』

第5表 新旧遺構番号対照表

旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号	旧遺構番号	新遺構番号
S001	8号溝状遺構	S052	89号土坑	S123	23号土坑
S002	7号溝状遺構	S053	90号土坑	S124	139号土坑
S003	6号溝状遺構	S054	97号土坑	S125	130号土坑
S004	67号土坑	S055	13号土坑	S126	143号土坑
S005	66号土坑	S056	105号土坑	S127	140号土坑
S006	60号土坑	S057	104号土坑	S128	144号土坑
S007	59号土坑	S058	107号土坑	S129	21号土坑
S008	65号土坑	S059	106号土坑	S130	132号土坑
S009	8号土坑	S070	93号土坑	S131	133号土坑
S010	64号土坑	S071	92号土坑	S132	146号土坑
S011	59号土坑	S072	98号土坑	S133	145号土坑
S012	62号土坑	S073	99号土坑	S134	131号土坑
S013	61号土坑	S074	12号土坑	S135	147号土坑
S014	68号土坑	S075	9号土坑	S136	136号土坑
S015	69号土坑	S076	16号土坑	S137	195号土坑
S016	58号土坑	S077	15号土坑	S138	134号土坑
S017	57号土坑	S078	14号土坑	S139	137号土坑
S018	55号土坑	S079	91号土坑	S140	11号小穴
S019	70号土坑	S080	4号土坑	S141	12号小穴
S020	54号土坑	S081	3号土坑	S142	138号土坑
S021	53号土坑	S082	2号土坑	S143	26号土坑
S022	52号土坑	S083	1号土坑	S144	28号土坑
S023	49号土坑	S084	142号土坑	S145	30号土坑
S024	50号土坑	S085	95号土坑	S146	96号土坑
S025	61号土坑	S086	94号土坑	S147	27号土坑
S026	47号土坑	S087	103号土坑	S148	溝状遺構
S027	48号土坑	S088	109号土坑	S149	29号土坑
S028	46号土坑	S089	6号小穴	S150	sondage
S029	44号土坑	S090	欠井	S151	15号溝状遺構
S030	45号土坑	S091	欠垂	S152	17号溝状遺構
S031	55号土坑	S092	112号土坑	S153	128号土坑
S032	1号小穴	S093	110号土坑	S154	13号小穴
S033	73号土坑	S094	125号土坑	S155	14号小穴
S034	72号土坑	S095	113号土坑	S156	16号溝状遺構
S035	74号土坑	S096	106号土坑	S157	32号土坑
S036	1号溝状遺構	S097	20号土坑	S158	33号土坑
S037	2号小穴	S098	18号土坑	S159	34号土坑
S038	75号土坑	S099	17号土坑	S160	20号溝状遺構
S039	71号土坑	S100	111号土坑	S161	24号土坑
S040	42号土坑	S101	116号土坑	S162	148号土坑
S041	43号土坑	S102	129号土坑	S163	145号土坑
S042	3号溝状遺構	S103	124号土坑	S164	154号土坑
S043	4号溝状遺構	S104	115号土坑	S165	152号土坑
S044	5号溝状遺構	S105	114号土坑	S166	153号土坑
S045	2号溝状遺構	S106	19号土坑	S167	151号土坑
S046	13号溝状遺構	S107	9号小穴	S168	150号土坑
S047	41号土坑	S108	7号小穴	S169	31号土坑
S048	7号土坑	S109	118号土坑	S170	90号土坑
S049	6号土坑	S110	118号土坑	S171	9号溝状遺構
S050	79号土坑	S111	117号土坑	S172	21号溝状遺構
S051	82号土坑	S112	121号土坑	S173	19号溝状遺構
S052	83号土坑	S113	120号土坑	S174	36号土坑
S053	84号土坑	S114	123号土坑	S175	155号土坑
S054	81号土坑	S115	10号小穴	S176	35号土坑
S055	80号土坑	S116	122号土坑	S177	33号土坑
S056	85号土坑	S117	9号小穴	S178	35号土坑
S057	28号土坑	S118	127号土坑	S179	37号土坑
S058	57号土坑	S119	126号土坑	S180	40号土坑
S059	101号土坑	S120	23号土坑	S181	7号土坑
S060	103号土坑	S121	5号土坑	S182	11号土坑
S061	102号土坑	S122	141号土坑	S183	76号土坑

旧遺構番号	新遺構番号
S184	5号小穴
S185	10号土坑
S186	4号小穴
S187	3号小穴
S188	78号土坑
S189	2号土坑列
S190	14号南北状迷宮
S191	16号南北状迷宮
S192	156号土坑

旧遺構番号	新遺構番号
S193	157号土坑
S194	6号土坑列
S195	16号小穴
S196	1号土坑列
S197	8号土坑列
S198	7号土坑列
S199	6号1号列
S200	25号土坑
S201	10号南北状迷宮

旧遺構番号	新遺構番号
S202	3号土坑列
S203	15号小穴
S204	4号土坑列
S205	11号南北状迷宮
S206	9号土坑列
S207	12号南北状迷宮
S208	欠番
S209	欠番

第6表 土坑・小穴計測表

()は残存値 領位=m

遺構番号	時 期	長さ(直径)	幅(直径)	深さ	切 り 合 い 関 係
1号 土坑	弥生	1.14	(0.50)	0.16	2号土坑に切られる
2号 土坑	弥生	1.23	(0.44)	0.12	1号土坑を切り、3号土坑に切られる
3号 土坑	弥生	(0.94)	(0.22)	0.15	2号土坑を切り、4号土坑に切られる
4号 土坑	弥生	0.86	0.64	0.10	3号土坑を切る
5号 土坑	弥生	1.18	0.58	0.26	
6号 土坑	奈良・平安	1.64	1.56	0.14	
7号 土坑	奈良・平安	3.12	1.92	0.19	1号稱に切られる
8号 土坑	奈良・平安	1.62	(0.72)	0.34	
9号 土坑	奈良・平安	2.70	1.56	0.04	
10号 土坑	奈良・平安	0.48	0.24	0.04	
11号 土坑	奈良・平安	(1.52)	(1.04)	0.14	12・13号土坑に切られる
12号 土坑	奈良・平安	1.60	1.46	0.22	11号土坑を切る
13号 土坑	奈良・平安	0.76	0.58	0.08	11号土坑を切る
14号 土坑	奈良・平安	(1.44)	(0.54)	0.44	15号土坑に切られる
15号 土坑	奈良・平安	(1.50)	(0.65)	0.12	14号土坑を切り、16号土坑に切られる
16号 土坑	奈良・平安	1.30	0.56	0.16	15号土坑を切る
17号 土坑	奈良・平安	(1.26)	(0.54)	0.28	19号土坑に切られる
18号 土坑	奈良・平安	1.24	0.86	0.42	19号土坑に切られる
19号 土坑	奈良・平安	(1.48)	1.20	0.16	17・18号土坑を切り、20号土坑に切られる
20号 土坑	奈良・平安	1.98	0.88	0.22	19号土坑を切る
21号 土坑	奈良・平安	0.72	0.56	0.08	
22号 土坑	奈良・平安	1.19	0.64	0.10	
23号 土坑	奈良・平安	1.45	0.78	0.06	
24号 土坑	奈良・平安	0.84	0.43	0.08	
25号 土坑	奈良・平安	2.90	1.18	0.10	
26号 土坑	近世以降	1.10	0.60	0.16	
27号 土坑	近世以降	(0.60)	0.40	0.20	28号土坑に切られる
28号 土坑	近世以降	0.46	0.40	0.12	27号土坑を切る
29号 土坑	近世以降	0.80	(0.72)	0.18	30号土坑に切られる
30号 土坑	近世以降	0.94	0.89	0.12	29号土坑を切る
31号 土坑	近世以降	(2.88)	2.00	0.14	
32号 土坑	近世以降	(1.40)	1.06	0.08	施設遺構に切られる
33号 土坑	近世以降	2.28	1.70	0.30	
34号 土坑	近世以降	2.98	1.60	0.16	
35号 土坑	近世以降	3.20	(0.98)	0.10	36号土坑に切られる
36号 土坑	近世以降	1.24	0.70	0.12	35号土坑を切る
37号 土坑	近世以降	(0.64)	(0.40)	0.56	35号土坑に切られる
38号 土坑	近世以降	0.68	0.52	0.40	37号土坑を切る
39号 土坑	近世以降	2.20	1.32	0.65	
40号 土坑	近世以降	1.60	0.75	0.44	疊亂に切られる
41号 土坑	不明	1.92	1.30	0.30	
42号 土坑	不明	0.69	0.40	0.17	
43号 土坑	不明	1.48	0.70	0.15	6号溝を切り、44・45号土坑に切られる
44号 土坑	不明	(1.34)	(0.83)	0.15	45号土坑を切り、45・46・48号土坑に切られる
45号 土坑	不明	(1.27)	1.02	0.10	6号溝・48・44号土坑を切り、46号土坑に切られる
46号 土坑	不明	(1.50)	(1.26)	0.69	44・45号土坑を切り、47・48号土坑に切られる
47号 土坑	不明	1.30	1.06	0.10	46号土坑を切る
48号 土坑	不明	1.60	1.32	0.16	44・45号土坑を切る

遺跡番号	時期	長さ(米)	幅(米)	深さ	切り合ひ關係
49号 土坑	不明	(1.81)	1.32	0.20	6号窓を切り、50・51号土坑に切られる
50号 土坑	不明	1.30	(1.02)	0.21	6号窓・49号土坑を切り、51号土坑に切られる
51号 土坑	不明	(1.34)	(0.96)	0.26	6号窓・49・50号土坑を切り、擾乱に切られる
52号 土坑	不明	0.32	0.38	0.16	
53号 土坑	不明	0.69	(0.64)	0.16	54号土坑と擾乱に切られる
54号 土坑	不明	(0.70)	(0.66)	0.12	53号土坑を切り、擾乱に切られる
55号 土坑	不明	(0.78)	(0.24)	0.16	56・57号土坑に切られる
56号 土坑	不明	(0.98)	(0.78)	0.20	55号土坑を切り、58号土坑に切られる
57号 土坑	不明	1.97	1.50	0.22	55号土坑を切る
58号 土坑	不明	1.10	0.98	0.31	56号土坑を切る
59号 土坑	不明	0.79	0.66	0.19	
60号 土坑	不明	1.02	0.80	0.12	
61号 土坑	不明	1.30	1.30	0.23	
62号 土坑	不明	(1.60)	(1.14)	0.16	63・64号土坑に切られる
63号 土坑	不明	(1.30)	(1.00)	0.16	62号土坑を切り、64号土坑に切られる
64号 土坑	不明	1.22	0.96	0.17	62・63号土坑を切る
65号 土坑	不明	0.64	0.54	0.16	
66号 土坑	不明	1.13	0.84	0.10	67号土坑に切られる
67号 土坑	不明	(0.70)	(0.46)	0.09	66号土坑を切る
58号 土坑	不明	1.00	0.88	0.11	
68号 土坑	不明	0.98	0.70	0.15	
70号 土坑	不明	1.44	1.06	0.16	
71号 土坑	不明	1.15	0.95	0.12	
72号 土坑	不明	1.02	(0.70)	0.22	73号土坑に切られる
73号 土坑	不明	0.71	0.42	0.15	72号土坑を切り、74号土坑に切られる
74号 土坑	不明	(1.32)	1.16	0.21	73号土坑を切る
75号 土坑	不明	(1.04)	0.54	0.08	
76号 土坑	不明	(0.66)	0.54	0.18	77号土坑に切られる
77号 土坑	不明	0.70	0.54	0.21	75号土坑を切る
78号 土坑	不明	0.60	0.54	0.13	8号窓を切る
79号 土坑	不明	0.70	0.54	0.14	
80号 土坑	不明	(0.70)	(0.34)	0.25	81号土坑と擾乱に切られる
81号 土坑	不明	(0.70)	(0.12)	0.17	80号土坑を切り、擾乱に切られる
82号 土坑	不明	0.70	0.62	0.15	
83号 土坑	不明	0.59	0.42	0.13	
84号 土坑	不明	(0.70)	0.64	0.06	擾乱に切られる
85号 土坑	不明	(1.00)	(0.50)	0.20	86号土坑に切られる
86号 土坑	不明	1.50	(0.53)	0.19	85号土坑を切る
87号 土坑	不明	1.62	1.20	0.21	
88号 土坑	不明	(0.44)	(0.20)	0.10	89号土坑に切られる
89号 土坑	不明	0.78	(0.44)	0.12	88号土坑を切る
90号 土坑	不明	1.04	0.29	0.21	擾乱に切られる
91号 土坑	不明	0.50	0.04	0.23	
92号 土坑	不明	0.90	0.84	0.20	
93号 土坑	不明	0.96	0.84	0.18	
94号 土坑	不明	(1.14)	(0.54)	0.09	95号土坑に切られる
95号 土坑	不明	1.12	0.92	0.06	94号土坑を切る
96号 土坑	不明	1.10	0.62	0.08	
97号 土坑	不明	0.52	(0.38)	0.20	98・99号土坑に切られる
98号 土坑	不明	0.76	0.45	0.20	97号土坑を切る
99号 土坑	不明	0.68	0.60	0.21	97号土坑を切る
100号 土坑	不明	(0.90)	(0.88)	0.11	
101号 土坑	不明	0.69	0.68	0.21	
102号 土坑	不明	0.60	(0.56)	0.16	103号土坑に切られる
103号 土坑	不明	0.56	0.54	0.09	102号土坑を切る
104号 土坑	不明	(0.90)	(0.60)	0.12	105号土坑に切られる
105号 土坑	不明	0.70	0.60	0.13	104号土坑を切る
106号 土坑	不明	1.56	1.26	0.12	
107号 土坑	不明	0.60	0.60	0.13	
108号 土坑	不明	(1.06)	(0.64)	0.24	擾乱に切られる
109号 土坑	不明	0.61	0.52	0.18	
110号 土坑	不明	(1.60)	(0.66)	0.09	擾乱に切られる
111号 土坑	不明	0.57	0.66	0.05	

遺物番号	時 期	長さ(直径)	幅(直径)	深 さ	切 り 合 い 補 体
112号 土坑	不明	0.88	0.58	0.13	
113号 土坑	不明	1.30	0.79	0.23	
114号 土坑	不明	(1.12)	0.90	0.29	115号土坑に切られる
115号 土坑	不明	1.09	0.74	0.29	114号土坑を切る
116号 土坑	不明	1.20	1.04	0.07	
117号 土坑	不明	(0.90)	(0.44)	0.16	118・119号土坑に切られる
118号 土坑	不明	1.48	(0.74)	0.16	117号土坑を切り、119号土坑に切られる
119号 土坑	不明	1.00	0.30	0.09	117・118号土坑を切る
120号 土坑	不明	(0.83)	(0.50)	0.19	121号土坑に切られる
121号 土坑	不明	0.64	0.60	0.29	120号土坑を切る
122号 土坑	不明	(0.76)	0.40	0.22	9号小穴を切り、10号小穴に切られる
123号 土坑	不明	1.28	1.03	0.23	
124号 土坑	不明	0.62	0.56	0.03	
125号 土坑	不明	1.49	0.58	0.07	
126号 土坑	不明	(0.77)	(0.26)	0.11	127号土坑に切られる
127号 土坑	不明	1.22	1.20	0.14	126号土坑を切る
128号 土坑	不明	1.40	0.70	0.11	
129号 土坑	不明	0.58	0.43	0.07	
130号 土坑	不明	0.98	0.98	0.19	
131号 土坑	不明	0.94	0.60	0.22	
132号 土坑	不明	0.95	0.72	0.13	
133号 土坑	不明	1.78	0.76	0.10	
134号 土坑	不明	(15.6)	12.4	0.13	135号土坑に切られる
135号 土坑	不明	(0.72)	0.71	0.31	134号土坑を切り、136号土坑に切られる
136号 土坑	不明	1.24	0.87	0.17	135号土坑を切る
137号 土坑	不明	0.50	0.41	0.16	
138号 土坑	不明	(1.12)	(0.68)	0.07	
139号 土坑	不明	0.72	0.70	0.13	
140号 土坑	不明	1.40	1.10	0.05	
141号 土坑	不明	1.47	0.76	0.11	
142号 土坑	不明	(1.14)	(0.68)	0.13	144号土坑に切られる
143号 土坑	不明	(1.14)	(0.68)	0.10	144号土坑に切られる
144号 土坑	不明	1.80	1.20	0.14	142・143号土坑を切る
145号 土坑	不明	(0.80)	(0.40)	0.12	146号土坑に切られる
146号 土坑	不明	1.00	0.44	0.11	145号土坑を切る
147号 土坑	不明	0.70	0.50	0.11	
148号 土坑	不明	1.00	0.44	0.07	
149号 土坑	不明	0.64	0.56	0.25	
150号 土坑	不明	(0.16)	(0.40)	0.10	151～153号土坑に切られる
151号 土坑	不明	0.64	(0.44)	0.13	150号土坑を切り、152・153号土坑に切られる
152号 土坑	不明	0.92	0.64	0.06	150・151号土坑を切る
153号 土坑	不明	0.67	0.58	0.12	150・151号土坑を切る
154号 土坑	不明	0.80	0.70	0.05	
155号 土坑	不明	0.62	0.54	0.17	
156号 土坑	不明	0.88	(0.48)	0.12	
157号 土坑	不明	0.99	0.70	0.13	
1号 小穴	不明	0.30	0.28	0.09	
2号 小穴	不明	0.45	0.30	0.08	
3号 小穴	不明	0.42	0.34	0.08	
4号 小穴	不明	0.40	0.20	0.08	
5号 小穴	不明	0.40	0.28	0.19	
6号 小穴	不明	0.36	0.30	0.13	
7号 小穴	不明	0.46	0.24	0.09	
8号 小穴	不明	0.28	0.20	0.12	
9号 小穴	不明	(0.41)	0.41	0.20	122号土坑に切られる
10号 小穴	不明	0.44	0.40	0.21	123号土坑を切る
11号 小穴	不明	0.45	0.36	0.11	12号小穴に切られる
12号 小穴	不明	0.41	(0.20)	0.10	11号小穴を切る
13号 小穴	不明	0.30	0.28	0.08	
14号 小穴	不明	0.29	0.28	0.12	
15号 小穴	不明	0.48	0.38	0.05	
16号 小穴	不明	0.26	0.22	0.04	

第7表 出土土器観察表

回数 算定 番号	種類 羽織	出土土器 位置	窓有部位	口径 (cm)	基部 (cm)	最大幅 (cm)	底深 (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	備考
25 1	土器 等	底深 約1層	底部片	—	9.2	—	(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	青磁、石英、長石、 白色、赤色少々や多	良好 2.5YR5/6	明治後 —	
28 2	抹加土器 等	底深 約2層	口縁～窓部片 (14.0)	17.3	—	—	—	粗面所残有	粗面絞文	青磁、輝石少・ 白色、赤色多子	良好 2.5YR7/4	内外面とも單純	
26 3	抹加土器 等	底深 約2層	口縁部裏片	—	8.2	—	—	ヨコハケ	ハグ 口縁部キサミ	青磁、 白色	良好 7.5YR8/6	明治後 —	
28 4	上部組 等	底深 約2層	口縁～底部片 (13.0)	2.5	—	—	—	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部ヘテケズヨコナデ	青磁、 白色	良好 5YR8/4	明治後 —	
28 5	土器等 等	底深 約2層	底部片	—	9.5	—	(7.0)	ヨコナデ	ヨコハケ	青石、白砂岩、 輝石少・白色粒子	良好 5YR6/5	明治後 —	底部本底直進か
29 1	抹生土器 等	底深 約2層 等	窓部 約5層	—	16.5	(20.7)	(7.1)	テグ	崩壊構文吹抜文 窓部タマヘラ吹ミガキ	青磁 白色、白色粒子	良好 7.5YR7/6	に高い煙 内外面とも單純	
29 2	抹生土器 等	底深 約5層	測量灰土	—	6.5	—	—	ナダ	沈殿区画、溝文	青磁 白色	良好 5YR7/6	に高い質感 —	
29 3	抹生土器 等	底深 約5層	測量灰土	—	3.0	—	—	ナダ	沈殿区画、溝文	青磁 白色	良好 5YR7/4	に高い質感 —	
29 4	抹生土器 等	底深 約2層	口縁～側部片 (30.0)	11.5	—	—	—	ヘラナデ	ヨコハケ 口縁部ハケキサミ	青磁 白色	良好 5YR7/5	に高い質感 —	
29 5	抹生土器 等	底深 約3層	口縁～側部片 (20.0)	12.1	(21.0)	—	—	ヨコハケ	窓部タマヘラ 四部ヨコハケ	青磁 輝石、白色粒子	良好 7.5YR7/4	当麻佐付骨 内部厚壁	
29 6	抹生土器 等	底深 約3層	窓部片	—	2.7	—	(5.8)	摩拭	解結	青磁 白色	良好 7.5YR7/4	明治後低窯か 外見はに高い煙 2.5YR5/5	
29 7	抹生土器 等	底深 約2層	側部裏片	—	6.0	—	—	ナダ	ヨコハケ後崩落歴文	青磁 白色	良好 7.5YR7/4	解質感 —	解質感歴文
29 1	抹生土器 等	底深 約4層	窓部片	—	4.8	—	(7.4)	窓底	ヨコハケ	青磁 白色	良好 10YR7/2	に高い質感 外見は明治後 5YR6/6	
30 2	抹生土器 等	底深 約4層	窓部 約4層	—	5.5	—	(7.1)	窓底	ヨコハケ後ヨコナデ	青磁 白色	良好 7.5YR7/4	に高い質感 外見はに高い煙 7.5YR7/4	
30 3	抹生土器 等	底深 約6層	窓部片	—	6.4	—	7.0	ヨコハケ	ヨコハケ後ヨコナデ	青磁 輝石、石英、長石、 底石、白色粒子	良好 7.5YR7/4	に高い煙 —	
30 4	抹生土器 等	底深 約4層	側部裏片	—	4.5	—	—	ナダ	沈殿区画、刻丸文	青磁 白色	良好 10YR8/3	に高い質感 —	
30 5	抹生土器 等	底深 約4層	口縁～側部片 (33.5)	21.4	—	—	—	ヨコハケ後ヨコナデ 口縁部キサミ	ヨコハケ 口縁部ハグ脱キナ 剥落後ハク脱落歴文	青磁 白色	良好 10YR7/5	解質感歴文 外見はに高い煙 10YR6/5	
30 6	抹生土器 等	底深 約4層	口縁～側部片 (23.0)	10.0	—	—	—	ヨコハケ	ヨコハケキサミ	青磁 白色	良好 10YR7/4	に高い質感 —	
30 7	抹生土器 等	底深 約4層	口縁～側部片 (22.0)	6.1	—	—	—	ナダ	ヨコハケ 口縁部キサミ	青磁 白色	良好 10YR7/4	解質感 内外面とも單純	
30 8	抹生土器 等	底深 約4層	窓部片	—	4.0	—	7.0	ナダ	ヨコハケ	青磁 白色	良好 10YR7/4	に高い質感 —	解質感歴文?
30 9	抹生土器 等	底深 約4層	窓部片	—	4.5	—	(7.0)	ナダ	ハケ	青磁 白色	良好 10YR7/4	に高い煙 —	解質感 —
30 10	抹生土器 等	底深 約4層	口縁部破片	—	2.5	—	—	ナダ	ハグ ヨコハケキサミ	青磁 白色少・白色粒子少	良好 5YR7/4	に高い煙 —	
30 11	抹生土器 等	底深 約4層	口縁部裏片	—	2.7	—	—	ナダ	ハグ 口縁部キサミ	青磁 白色	良好 5YR7/4	に高い質感 —	
30 12	抹生土器 等	底深 約4層	口縁部裏片	—	3.3	—	—	ナダ	ハグ 口縁部キサミ	青磁 白色	良好 10YR7/5	解質感 —	
30 13	抹生土器 等	底深 約4層	口縁部裏片	—	2.5	—	—	ナダ	ハグ 口縁部キサミ	青磁 白色	良好 10YR6/4	解質感 —	
30 14	抹生土器 等	底深 約4層	口縁部裏片	—	3.0	—	—	ヨコハケ	ヨコハケ 口縁部キサミ	青磁 白色	良好 5YR7/6	解質感 —	

回数 番号	標印 符号	種別 類型	出土位置 由来	残存部位	口径 (cm)	高さ (cm)	最大径 (cm)	盃高 (cm)	内面状況	外因反映	鉢土	伝成	色調	備考
31 1	新山二層 塗	縦縫 型4層	口縫部破片	—	3.8	—	—	—	ナゲ	ハゲ 口縫部キザミ	管通 白色粒子	良好	にせい 7.5YR7/4	
31 2	新山二層 塗	縦縫 型4層	口縫部破片	—	3.5	—	—	—	コハケ	ハゲ 口縫部キザミ	管通 白色粒子少	良好	にせい 10YR7/4	
31 3	新山二層 塗	縦縫 型4層	口縫部破片	—	4.0	—	—	—	コハケ	ハゲ	管通 白色粒子少	良好	にせい 10YR7/4	
31 4	新山二層 塗	縦縫 型4層	断節取付	—	6.0	—	—	—	アデ	ハゲ	管通 白色、黑色粒子	良好	7.5YR7/6	
31 5	新山二層 塗	縦縫 型4層	断節取付	—	8.8	—	—	—	ナデ	ハゲ	管通 白色粒子少	良好	7.5YR7/4	
31 6	新山二層 塗	縦縫 型4層	断節破片	—	7.2	—	—	—	ナデ	ハゲ	管通 白色、黑色粒子	良好	10YR7/2	複数件試瓦器
31 7	新山二層 塗	縦縫 型4層	断節破片	—	7.2	—	—	—	ナデ	ハゲ	管通 白色、黑色粒子	良好	7.5YR7/4	複数件試瓦器
31 8	新山二層 塗	縦縫 型4層	断節破片	—	4.7	—	—	—	コハケ	ハゲ	管通 白色粒子少	良好	にせい 7.5YR7/4	
31 9	新山二層 塗	縦縫 型4層	断節破片	—	4.8	—	—	—	ナデ	ハゲ	管通 白色粒子少	良好	にせい 10YR7/4	
31 10	新山二層 塗	縦縫 型4層	断節取付	—	3.2	—	—	—	ナデ	管通?	管通 白色、黑色粒子	良好	8YR7/6	
32 1	新山二層 塗	縦縫 型5層	口縫～縦縫片	(6.1)	17.6	—	—	—	管壁遮蔽部 表面研削部	ナデ、沈縫区観 附付穴、剥脱穴	管通 黄色、石英、黃石、 白色、黑色粒子	良好	7.5YR7/4	各部は柱 6YR7/6
32 2	新山二層 塗	縦縫 型5層	口縫部破片	—	7.0	—	—	—	ナデ 指痕压痕	タチハケ既往歴、附付穴 口縫部コハケ既往歴	管通 黄色、石英、黃石、 灰岩、白色、黑色粒子	良好	7.5YR7/5	各部は柱 7.5YR7/5
32 3	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	2.8	—	—	—	ナデ	沈跡既往、剥脱穴	管通 白色、黑色粒子少	良好	7.5YR7/4	
32 4	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	2.5	—	—	—	ナデ	沈跡既往、剥脱穴	管通 白色、黑色粒子少	良好	2.5YR6/0	
32 5	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	2.9	—	—	—	ナデ	沈跡既往、剥脱穴	管通 白色粒子少	良好	8YR7/5	
32 6	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節片	—	3.0	—	(4.8)	—	ナデ	ハゲ	管通 石英、白色粒子	管通	10YR6/2	底部丸吹
32 7	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節～縦縫片	—	6.7	—	(5.8)	—	ナデ	ハケ	管通 白色粒子	管通	8.5YR7/1	施部八瓣腹底 外側は剥落 2.5YR7/4
32 8	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	4.8	—	—	—	ナデ	タチハケ 口縫部キザミ	管通 白色粒子少	良好	にせい 10YR7/4	複数件試瓦器
32 9	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	5.7	—	—	—	ナデ	タチハケ 口縫部キザミ	管通 白色粒子少	良好	にせい 10YR7/4	複数件試瓦器
32 10	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	2.2	—	—	—	ナデ	コハケ 口縫部キザミ	管通 石英少、白色粒子少	良好	にせい 5YR7/5	
32 11	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	4.5	—	—	—	コハケ	ハゲ 口縫部キザミ	管通 白色粒子多	良好	8YR7/6	
32 12	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	5.0	—	—	—	ナデ	ハゲ 口縫部キザミ	管通 白色、黑色粒子少	良好	7.5YR7/5	
32 13	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	2.0	—	—	—	ナデ	ハゲ 口縫部キザミ	管通 白色、黑色粒子	良好	2.5YR7/4	
32 14	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	2.0	—	—	—	ナデ	コハケ 口縫部キザミ	管通 長石、白色粒子	良好	2.5YR7/4	にせい 2.5YR7/4
32 15	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	2.9	—	—	—	ナデ	ハゲ 口縫部キザミ	管通 長石、白色粒子	良好	2.5YR7/4	
32 16	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	6.3	—	—	—	コハケ	タチハケ 剥脱既往	管通 白色粒子少	良好	8YR7/6	複数件試瓦器
32 17	新山二層 塗	縦縫 型5層	断節破片	—	5.9	—	—	—	コハケ	タチハケ既往 剥脱	管通 白色、黑色粒子	良好	5YR7/5	複数件試瓦器

図版番号	地名 器物名	出土施設 位置	残存部位	長径 (cm)	横幅 (cm)	最大高 (cm)	底径 (cm)	内面技術	外面技術	土	焼成	色調	備考	
22 16	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部破片	—	6.7	—	—	ナメ	ハゲ	青磁 白色粒子多	済好	薄青 LYR4/1	横径肩伏式大型	
22 19	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部破片	—	5.6	—	—	ナメ	ハケ	青磁 白色粒子多	済好	に高い質感 LYR4/4	横径肩伏式大型	
22 20	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部破片	—	8.2	—	—	ナメ	ヨコハゲ	青磁 白色粒子多	済好	に高い質感 LYR4/5		
22 21	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部破片	—	6.3	—	—	ナメ	ハゲ	青磁 白色・赤色粒子	済好	に高い質感 7.5YR4/4	横径肩伏式大型	
22 22	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部破片	—	6.3	—	—	ナメ	ハゲ	青磁 白色粒子少	良好	10YR4/1		
22 23	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部破片	—	6.5	—	—	ナメ	柔軟?	青磁 石英・黄土・ 白色・無色粒子少	良好	2.5YR6/6		
22 24	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	底盤	8.0	37.2	29.3	5.5	素面	タテミガキ後ナメ 口縁一部 底部圧痕・削鉗文・鉛文	青磁 石英・黄土・ 無色粒子少	良好	12.5YR7/3	窓田5号大型 外面はに高い質感 LYR6/6	
22 25	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部破片	—	6.4	24.0	15.2	ナメ	ナメ	青磁 白色・赤色粒子少	良好	8YR6/2	窓田5号大型 外面はに高い質感 LYR5/4	
22 26	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	口縁一部	9.0	12.7	—	—	特徴模様羽 根捺压痕有	ナメ	青磁 白色・赤色粒子少	魚野	9.5YR7/6	窓田5号大型 上面はに高い質感 LYR6/4	
22 27	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	口縁一部	(6.2)	6.7	—	—	ナメ	ナメ	青磁 口部斜面後吹抜文・ナメ	青磁 石英・無色・ 赤色粒子少	良好	に高い質感 7.5YR6/3	窓田5号大型 上面はに高い質感 LYR6/4
22 28	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	7.1	—	—	ナメ	ナメ	青磁 白色・赤色粒子少	良好	に高い質感 10YR6/3	窓田5号大型 上面はに高い質感 LYR6/4	
22 29	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	16.5	23.7	—	ナメ	タテミガキ・ナメ	青磁 石英・無色・ 赤色粒子少	良好	8YR6/2	窓田5号大型 外面はに高い質感 LYR6/4	
22 30	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	15.3	—	—	素面	タテハケ	青磁 白色・無色・ 赤色粒子少	普通	に高い質感 10YR7/6	窓田5号大型 上面はに高い質感 LYR6/4	
22 31	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	8.2	—	7.1	捺壓压痕有	捺壓压痕有	青磁 石英・無色・ 赤色粒子少	良好	9.5YR6/4	窓田5号大型 上面はに高い質感 LYR6/4	
22 32	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	8.7	—	—	ナメ	沈擦压痕・鉛文	青磁 石英・無色・ 赤色粒子少	良好	8.5YR6/3	窓田5号大型 上面はに高い質感 LYR6/4	
22 33	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	4.9	—	—	ナメ	沈擦压痕	青磁 白色・無色粒子少	良好	5YR7/5		
22 34	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	4.3	—	—	ナメ	沈擦压痕・鉛文	青磁 白色・無色粒子少	良好	7.5YR6/6		
22 35	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	2.5	—	—	ナメ	沈擦压痕・鉛文	青磁 白色・無色粒子少	良好	に高い質感 5YR7/4		
22 36	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	11.7	—	—	ナメ	沈擦压痕・鉛文	青磁 白色・無色粒子少	良好	5YR7/4		
22 37	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	3.1	—	—	ナメ	沈擦压痕・鉛文・鉛鉄文	青磁 白色粒子少	良好	7.5YR4/1		
22 38	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	2.3	—	—	ナメ	沈擦压痕・鉛文	青磁 白色・無色粒子少	良好	2.5YR6/8		
22 39	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	腹部	—	3.2	—	—	ナメ	沈擦压痕・鉛文	青磁 白色・無色粒子少	良好	8YR7/5		
22 40	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	口縁一部	(38.0)	14.7	—	—	ヘラナメ後ナメ 口唇部キサミ	タテハケ	青磁 白色・無色粒子少	良好	に高い質感 8YR5/4	窓田5号大型 細腰柄付鉢形	
22 41	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	口縁一部	(29.2)	6.2	—	—	ヘラナメ 口唇部キサミ	タテハケ	青磁 白色・無色粒子少	良好	に高い質感 7.5YR6/4	窓田5号大型 外面はに高い質感 LYR4/2	
22 42	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	口縁一部	—	3.5	—	—	ナメ	ハゲ	青磁 白色・無色粒子少	良好	2.5YR6/6		
22 43	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	口縁一部	—	2.2	—	—	ナメ	口唇部キサミ	青磁 白色・無色粒子少	良好	2.5YR7/6		
22 44	伊生土器 壺	窓田5号 第5室	口縁一部	—	6.9	—	—	ナメ	ハゲ	青磁 白色粒子少	良好	2.5YR7/5		

回収番号	標識番号	種別 割れ	出土環境 出土地点	熱帶部位	口側 (cm)	翼間 (cm)	最大幅 (cm)	高さ (cm)	内面技法	外面技法	胎土	焼成	色調	語言
54 14	弥生土器 縫	縫直 縫6層	脚部破片	—	4.5	—	—	—	ヨコハケ	ハゲ	骨壺 白色粒子多	直評	淡青緑 7.5YR6/6	
54 15	弥生土器 縫	縫6層	脚部破片	—	3.1	—	—	—	ナデ	ハゲ	骨壺、葉母 長形、白色粒子	直評	淡 2.5YR7/6	
54 16	弥生土器 縫	縫6層	脚部破片	—	4.0	—	—	—	ナデ	ハゲ	骨壺、葉母 異形、白色粒子	直評	淡 2.5YR7/6	
54 17	弥生土器 縫	縫6層 筋縫 筋6層	脚部破片	—	3.1	—	—	—	ナデ	ハゲ	骨壺、葉母 長形、白色粒子	直評	淡青緑 10YR6/6	
55 1	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	3.0	—	—	—	ナデ	口側部サザミ	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡青緑 7.5YR7/6	
55 2	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	3.0	—	—	—	ナデ	口側部サザミ	骨壺 白色粒子少	直評	淡 2.5YR7/6	
55 3	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	3.4	—	—	—	ナデ	枕縫压印、點付文、縞文	骨壺 黃褐色、白色粒子多	直評	青 10YR6/4	
55 4	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	4.5	—	—	—	ナデ	次郎式曲輪、倒立文、縞文	骨壺 黃褐色、白色粒子	直評	淡青緑 7.5YR6/5	
55 5	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	2.4	—	—	—	ナデ	沈縫压印、縞文	骨壺 黃褐色、白色粒子	直評	淡青緑 7.5YR6/5	
55 6	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	(26.4)	3.2	—	—	—	摩滅	ケズリ 口唇部崩壊	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 9.5YR6/5	内外面とも厚泥
55 7	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	(24.8)	5.2	—	—	—	摩滅	ケズリ 口唇部崩壊	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 9.5YR6/4	内外面とも厚泥
55 8	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	(28.3)	5.8	—	—	—	摩滅	ケズリ 口唇部崩壊	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 9.5YR6/4	内外面とも厚泥
55 9	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	—	6.0	—	(15.0)	—	ヨコハケ	タケハゲ	骨壺 黃褐色、薄青白、白色粒子少	直評	淡 7.5YR7/6	外側は淡青緑 7.5YR5/4
55 10	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	—	2.1	—	(7.0)	—	ハゲ	摩滅	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 7.5YR6/3	
55 11	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	—	4.3	—	(6.7)	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 7.5YR7/1	外側は淡 2.5YR7/6
55 12	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	—	1.6	—	(6.0)	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 7.5YR8/4	
55 13	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	—	1.7	—	7.0	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 7.5YR6/4	
55 14	弥生土器 縫	縫6層 直土	口部部片	—	1.9	—	(7.0)	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色、黑色粒子少	直評	淡 7.5YR6/4	
55 15	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	7.1	—	—	—	ナデ	沈縫压印、縞文	骨壺 黃褐色、白色粒子少	直評	淡 7.5YR7/6	
55 16	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	6.5	—	—	—	ナデ	沈縫压印、縞文	骨壺 黃褐色、白色粒子少	直評	淡 9.5YR7/2	
55 17	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	2.6	—	—	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色粒子多	直評	淡 5.5YR7/5	
55 18	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	2.7	—	—	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色粒子少	直評	淡 2.5YR7/6	
55 19	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	2.9	—	—	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色粒子少	直評	淡 2.5YR7/6	
55 20	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	2.6	—	—	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色粒子多	直評	淡 5YR6/6	
55 21	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	1.7	—	—	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色粒子多	直評	淡 5YR7/0	
55 22	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	2.9	—	—	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色粒子少	直評	淡 5YR7/6	
55 23	弥生土器 縫	縫6層 直土	脚部破片	—	2.3	—	—	—	摩滅	摩滅	骨壺 白色粒子少	直評	淡 5YR7/6	

地区 番号	地名 等級	出土場所 位置	残存部位	口径 (cm)	高さ (cm)	最大径 (cm)	直径 (cm)	内面状況	外泊形状	胎土	旋成	色調	備考	
39 19	駒形 墓 塚	追跡面直上	口縁部破片	—	2.8	—	—	ナラ	口縁部ナラテ	青緑 白色粒子多	真打	緑		
39 20	駒形土器 塚	追跡面直上	口縁部破片	—	4.0	—	—	ナラ	口縁部ナラテ	青緑 白色粒子	真打	淡青緑 7.5VR7/5		
39 21	駒形土器 塚	追跡面直上後半層	口縁部破片	—	3.0	—	—	ナラ	口縁部ナラテ	青緑 白色粒子多	真打	灰青 7.5VR7/4		
39 22	駒形土器 塚	追跡面	口縁部破片	—	3.0	—	—	ナラ	口縁部ナラテ	青緑 白色・黑色粒子少	真打	緑 5.5VR6/6		
41 1	土師器 塚	追跡面	脚部片	—	2.0	—	—	摩滅	摩滅	青緑 黑色・白色粒子多	真打	緑 5.5VR7/5	3季調	
41 2	土師器 塚	追跡面	脚部片	—	2.2	—	—	摩滅	摩滅	青緑 黑色・白色粒子	真打	緑 5.5VR4/4		
41 3	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	3.3	—	—	摩滅	摩滅	青緑 黑色・白色粒子	真打	緑 5.5VR5/5		
41 4	土師器 塚	追跡面直上	円・脚部片	—	5.2	—	—	摩滅	摩滅	青緑 石英・白色粒子	やや 不規	緑 2.5VR6/3		
41 5	土師器 塚	追跡面直上	円・脚部片	—	2.4	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色粒子・組み粒	やや 不規	緑 5.5VR7/5		
41 6	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	3.0	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色・赤色粒子多	やや 不規	緑 2.5VR7/5		
41 7	土師器 塚	追跡面	脚部片	—	1.7	—	—	摩滅	摩滅	青緑 石英・黑色・白色粒子	やや 小真	緑 5.5VR7/6		
41 8	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	3.0	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色粒子多	やや 不規	緑 2.5VR6/5		
41 9	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	2.5	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色粒子多	やや 不規	緑 7.5VR7/5		
41 10	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	2.5	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色粒子	やや 不規	緑 5.5VR7/5		
41 11	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	4.5	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色粒子	青緑	緑 5.5VR6/5		
41 12	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	7.0	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色粒子多	やや 不規	緑 5.5VR7/5	脚部の細	
41 13	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	3.0	—	—	摩滅	ミカキ脚部か	青 灰石・白色粒子	真打	緑	5.5VR5/5	
41 14	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	4.0	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色・赤色粒子多	真打	緑 5.5VR5/4	造孔有	
41 15	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	5.0	—	—	摩滅	摩滅	青緑 白色・赤色粒子多	やや 不規	緑 5.5VR6/4	造孔有	
41 16	土師器 塚	追跡面直上	脚部片	—	1.5	—	3.6	摩滅	摩滅	青緑 白色・赤色粒子多	やや 不規	緑 7.5VR7/5		
41 17	土師器 塚	追跡面	口縁部片	(0.4)	1.5	(10.0)	—	ヨコナラ	ヨコナラ	青 白色粒子	摩滅	灰 7.5VR7/1		
41 18	土師器 塚	追跡面直上	口縁部片	(0.6)	1.2	(10.0)	—	ヨコナラ	ヨコナラ	青 白色粒子	摩滅	灰 7.5VR7/1		
41 19	土師器 塚	追跡面直上	口縁部片	(0.4)	1.0	(11.6)	—	ヨコナラ	ヨコナラ	青 白色粒子	摩滅	灰 7.5VR7/1		
41 20	土師器 塚	追跡面直上	口縁部片	(0.6)	1.5	(12.0)	—	ヨコナラ	ヨコナラ	青 白色粒子	摩滅	灰 7.5VR7/1		
42 1	土師器 塚	1号切伏塗漆 漆面直上	漆底片	12.0	4.8	—	6.7	ヨコナラ	口縁部ヨコナラ 伏漆・底漆・タケヅリ	青緑 磁沙粒少	真打	青緑 1CYE品系		
42 2	土師器 塚	1号切伏塗漆 漆面直上	漆底片	(12.0)	3.4	—	(7.2)	ヨコナラ	摩滅	青 白色粒子少	やや 不規	緑 5.5VR7/5		
42 3	土師器 塚	1号切伏塗漆 漆面直上	口縁・漆底片	(12.0)	3.0	—	—	ヨコナラ	口縁部ヨコナラ 漆底・ハラメノヨコナラ	青緑 白色粒子少	やや 不規	青 7.5VR7/4		

標本 番号	標識 番号	剖面 名無	出土地点 山土位置	地表部位	口径 (cm)	高さ (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面特徴	外面特徴	地上	塊塊	色調	跡考
45	4	上部砂 灰	1号深井透水 層土上部	底部片	-	2.7	-	(7.3)	ヨコナダ	ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色粒子少	良好 良好 SYR6/5	灰	
43	5	土壤試 料	1号深井透水 層土上部	底部片	-	1.4	-	(4.1)	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色 石英 長石	良好 良好 2.6R7/8	灰	
43	6	土壤試 料	1号深井透水 層土上部	底部片	-	2.4	-	(6.0)	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 石英 長石 白色粒子	普通 良好 2.6R7/8	灰	
45	7	土壤 育苗灰	1号深井透水 層土上部	底部片	-	1.0	-	(7.3)	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色粒子少	良好 SYR6/6	灰	
43	8	土壤試 料	1号深井透水 層土上部	底部片	-	3.0	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色 石英 長石	普通 良好 SYR6/8	灰	
43	9	土壤試 料	1号深井透水 層土上部	口部砂砾	-	3.7	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	やや粗 石英 長石 白色粒子やや多	良好 2.6R7/4	灰	
43	10	深成灰 灰	1号深井透水 層土上部	体～底部片	-	2.7	-	5.8	ヨコナダ	ヨコナダ 底部ヘラケズリ	普通 白色粒子	普通 良好 7.5Y6/3	灰	
43	11	深成灰 育苗灰	1号深井透水 層土上部	体～底部片	-	1.8	-	(4.8)	ヨコナダ	ヨコナダ 底部ヘラケズリ	普通 白色 白色粒子少	普通 良好 7.5Y6/1	灰	
43	12	深成灰 育苗灰	1号深井透水 層土上部	底部片	-	1.5	-	(9.5)	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色粒子	良好 14/	灰	
43	13	深成灰 育苗灰	1号深井透水 層土上部	底部片	-	1.6	-	(10.4)	ヨコナダ	ヨコナダ ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色 白色粒子少	普通 良好 7.5Y6/1	灰	
43	14	深成灰 灰	1号深井透水 層土上部	口部砂片	(+6.8)	3.5	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色粒子	普通 良好 14/7	灰	
43	15	深成灰 灰	1号深井透水 層土上部	口部砂片	(+9.9)	2.1	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色粒子少	普通 良好 14/7	灰	
43	16	深成灰 灰	1号深井透水 層土上部	底部片	-	1.7	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色粒子	普通 良好 7.5Y6/1	灰	
42	17	深成灰 灰	1号深井透水 層土上部	底部片	-	2.0	-	(7.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色 黑色粒子	普通 良好 2.5Y7/1	内面に白色微粒	
44	1	土壤試 料	2号深井透水 層土上部	底部片	-	1.2	-	(5.5)	ヨコナダ	ヨコナダ ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色粒子少	普通 良好 SYR6/6	灰	
44	2	深成灰 灰	2号深井透水 層土上部	口部～底部片	(+4.4)	5.7	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色粒子	普通 良好 7.5Y5/1	灰	
44	3	深成灰 灰	2号深井透水 層土上部	口部砂微片	-	5.2	-	-	ヨコナダ	沈積物、細繊維	普通 白色粒子	普通 良好 2.5Y3/1	灰	
44	4	深成灰 灰	2号深井透水 層土上部	底部片	-	1.7	-	6.4	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色 黑色粒子	普通 良好 2.5Y5/1	灰	海は坂東リープ SYR6/2
44	5	深成灰 灰	2号深井透水 層土上部	底部片	-	3.0	-	6.6	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色 黑色粒子 細砂少	普通 良好 2.5Y5/1	灰 海はオドーブ良 SYR6/3	
43	1	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	球状実形	14.6	4.0	-	6.0	ヨコナダ	口横斜ヨコナダ 体部、底部ヘラケズリ	普通 白色粒子少	普通 良好 7.5Y6/6	灰	
43	2	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	球状兔形	15.6	4.5	13.8	10.6	ヨコナダ	口横斜ヨコナダ 体部、底部ヘラケズリ	普通 白色粒子少	普通 良好 7.5Y6/7/8	灰	
43	3	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	口部～底部片	(+1.6)	3.7	-	(7.0)	ヨコナダ	口横斜ヨコナダ 体部ヘラケズリ 根ヨコナダ	普通 白色粒子少	普通 良好 7.5Y7/6	灰	
43	4	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	口部～底部片	(+2.9)	2.9	-	(3.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色 白色粒子少	普通 良好 小黄 7.5Y7/9	灰	
43	5	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	口部～底部片	(+4.9)	3.2	-	(10.0)	ヨコナダ	ヨコナダ ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色 白色粒子少、初形成	普通 良好 7.5Y7/9/5	灰	
43	6	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	口部～底部片	(+6.0)	3.7	-	(11.0)	ヨコナダ	ヨコナダ 体部、底部ヘラケズリ	普通 白色 白色粒子少	普通 良好 10R5/6	灰	
43	7	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	口部～底部片	(+4.4)	2.9	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ 体部ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色 白色粒子少	普通 良好 7.5Y7/7/5	灰	
43	8	土壤試 料	3号深井透水 層土上部	口部～底部片	(+4.4)	4.9	-	-	ヨコナダ	ヨコナダ 体部ヘラケズリ後ヨコナダ	普通 白色 白色粒子少	普通 良好 2.5Y7/7/0	灰	

剖面番号	剖面名	出土遺物 出土地点	残存部位	口径 (cm)	高さ (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	内凹枝状	外凸枝状	胎土	焼成	色調	備考
45 5	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(19.0)	2.5	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	白透 白色粒子	やや 不良	焼 不真	5.5R6/6
48 10	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(24.0)	3.5	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	黄透 白色	やや 不良	黄透 不真	7.5YR5/6
48 13	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(17.0)	4.0	—	—	ヨコナダ	白透ヨコナダ 作業ハケ後ヨコナダ	中空 白色	やや 不良	赤	10R4/6
48 16	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(14.0)	4.4	—	—	ヨコナダ	白透ヨコナダ 作業ハケ後ヨコナダ	白透 黑色粒子多	やや 不良	黒 不真	10R5/1
48 18	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(13.1)	3.3	—	—	ヨコナダ	白透ヨコナダ 作業ハケ後ヨコナダ	白色 白色粒子少	普通	亞	7.5YR7/8
48 14	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(15.5)	3.8	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色粒子	やや 不良	7.5YR7/8	外表面とも確認
48 15	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(15.0)	4.0	—	—	ヨコナダ	白透ヨコナダ 作業ハケ後ヨコナダ	普通 白色粒子少	普通	7.5YR6/6	
45 19	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁部	(11.1)	1.5	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色粒子	良好	7.5YR7/4	
45 17	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	全体部	—	1.5	—	(6.4)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	やや 不良	7.5R6/6	
48 15	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	全体部	—	1.5	—	—	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	普通	7.5YR4/4	
45 19	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁部	20.0	30.0	29.0	8.0	L1透ヨコナダ 削削ヨコハケ	口縁ヨコナダ 削削ヨコハケ	中空 白色 白色粒子	良好	10R6/6	表部小量削 胎瓦張剥 内外側とも確認
45 20	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	全体部	15.2	20.2	16.0	3.6	口縁部ハケ後ヨコナダ 削削ヨコハケ	摩滅	普通 白色 白色粒子	やや 不良	5.5R7/6	
49 1	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(51.8)	10.2	—	—	L1透ヨコナダ 削削ヨコハケ	白透ヨコナダ 削削ヨコハケミガキ	普通 白色 白色粒子少	普通	5YR6/6	堅卓型窓
42 2	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(20.4)	13.9	—	—	L1透ヨコナダ 削削ヨコハケ	白透ヨコナダ 削削ヨコハケ	普通 白色 白色粒子 粗砂粒	良好	5.5YR5/4	堅卓型窓外面は板瓦 G7R6/6
49 3	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(20.4)	12.5	(23.0)	—	口縁部ヨコナダ 削削ヨコハケ	L1透カタハケ後ヨコナダ 削削カタハケ	中空 白色 白色粒子 粗砂粒	良好	5.5YR4/4	堅卓型窓 外側には無い赤錆 5YR4/4
49 4	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	20.0	12.6	22.2	—	L1透ヨコナダ 削削ヨコハケ	L1透ヨコナダ 削削ヨコハケ	普通 白色 白色粒子 粗砂粒	良好	5YR5/6	堅卓型窓 壁面は褐色 5YR4/4
49 5	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	溝～全体	—	4.7	—	(6.6)	ヨコハケ	タテハケ	長石 白色粒子	良好	7.5YR5/6	堅卓型窓 外側は崩塌 7.5YR2/2
45 6	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	溝～全体	—	11.7	—	7.6	ヨコハケ	タテハケ	普通 白色 白色粒子	良好	5YR5/6	堅卓型窓 外側焼付着
48 7	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	溝～全体	—	2.0	—	7.6	ヨコハケ	タテハケ	普通 白色 白色粒子	良好	5.5YR5/4	堅卓型窓 外側大面積 數箇窓開
49 8	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	溝部	—	5.1	—	(6.4)	ヨコハケ	ヨコミガキ	普通 白色 白色粒子 粗砂粒	良好	5YR6/6	堅卓型窓
49 9	土師陶片	2号窯火葬場 施設上部	溝部	—	2.5	—	(7.2)	ヨコハケ	ヨコナダ	普通 白色粒子 粗砂粒多	良好	5YR6/6	底部木製板か 継ぎ板等 外側は引手窓 5YR5/6
49 10	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	全体部	—	1.5	—	(6.3)	摩滅	摩滅	普通 白色 白色粒子少	良好	7.5YR7/1	外側は沾湿 7.5YR4/4
50 1	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁～全体部	(23.2)	8.4	—	—	L1透ヨコナダ 削削ヨコハケ	L1透ヨコナダ 削削ヨコハケ	普通 白色 白色粒子少	良好	5.5YR5/6	堅卓型窓
50 2	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁部	(22.0)	4.7	—	—	ヨコハケ後ヨコナダ	タテハケ後ヨコナダ	普通 白色 白色粒子 粗砂粒	普通	7.5YR5/4	堅卓型窓 外側には無い 7.5YR5/4
50 3	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁部	(22.2)	4.8	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	普通 白色 白色粒子	良好	2.5YR4/6	堅卓型窓
50 4	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	口縁部	(21.5)	5.5	—	—	ヨコナダ	ハケ削ヨコナダ	普通 白色 白色粒子	良好	2.5YR4/4	堅卓型窓
50 5	土師陶片	3号窯火葬場 施設上部	溝～全体部	—	3.0	—	—	ヨコハケ	ハケ後ヨコナダ	普通 白色 白色粒子少	良好	2.5YR6/6	堅卓型窓

回数	番号	部位	出芽性質	肉眼部位	口径(cm)	器高(cm)	地盤高(cm)	溝幅(cm)	内面形状	外因法	胎土	焼成	色調	備考
50	6	土師器 好	3分岐状或頭 部直上	ほぼ丸形	13.4	6.0	-	7.2	ヨコナデ	口部ヨコナデ 作部ヘラケツリヨコナデ	白白色子多 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	底部白底黒
50	7	土師器 ニニアニ	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(8.0)	3.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 作部指認佐有	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	手ぬし土器か?
50	8	土師器 ニニアニ	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(8.0)	3.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 作部指認佐有	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	手ぬし土器か?
50	9	土師器 好	3分岐状或頭 部直上	HHばかり形	14.0	4.7	-	6.0	ヨコナデ	ヨコナデ 施部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	淡白 2.5×2.5	
50	10	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	ほぼ丸形	15.0	4.5	-	5.9	ヨコナデ	ヨコナデ 施部ヘラケツリ	白 白白色子少	良好	灰 2.5×2.5	
50	11	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	ほぼ丸形	14.2	4.7	-	6.2	ヨコナデ	ヨコナデ 施部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
50	12	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(13.2)	3.5	-	7.4	ヨコナデ	ヨコナデ 施部ヘラケツリ	白 白白色子少	良好	淡白 2.5×2.5	外面原流
50	13	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	HHばかり形	(14.0)	4.2	-	6.7	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少、細砂粒	背透	墨 2.5×2.5	
50	14	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	HHばかり形	(9.0)	3.9	(10.0)	-	ヨコナデ	ヨコナデ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
50	15	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(12.0)	3.0	-	7.0	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
50	16	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	体一全体剖片	-	2.1	-	(7.6)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
50	17	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	ほぼ丸形	14.0	3.6	-	10.4	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
50	18	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	ほぼ丸形	15.0	4.1	-	11.2	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	外面は灰 7.5×5/1
50	19	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	ほぼ丸形	15.0	4.0	-	10.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	1	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	丸形	12.0	4.9	-	8.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少、粗砂粒	背透	墨 2.5×2.5	地が底黒か?
51	2	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	ほぼ丸形	15.0	4.1	-	11.1	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	3	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(15.0)	4.0	-	(10.7)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	4	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(15.0)	4.6	-	(11.2)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	5	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(14.1)	3.5	-	10.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	6	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(14.0)	4.0	-	10.7	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	7	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(14.0)	3.4	-	(11.0)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	8	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(14.0)	4.5	-	9.1	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	外面は灰 7.5×4/1
51	9	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(15.0)	4.1	-	(10.4)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少、粗砂粒	背透	墨 2.5×2.5	
51	10	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(13.6)	3.5	-	(10.6)	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケツリ	白 白白色子少、粗砂粒	背透	墨 2.5×2.5	
51	11	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	口縁一全体剖片	(15.0)	4.6	-	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	外側は灰 7.5×4/1
51	12	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	脇片	--	2.0	-	(8.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	白 白白色子少	背透	墨 2.5×2.5	
51	13	須恵器 好	3分岐状或頭 部直上	脇片	(15.0)	4.3	-	(4.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	白 白白色子少、粗砂粒	背透	墨 2.5×2.5	

形態 特徴	種名 学名	生息地 所	生育部位	口径 (cm)	開溝 (cm)	最大溝 (cm)	当径 (cm)	内面枝法	外面枝法	片土	塊成	色調	備考
51 14	葉足湖 アシカツ	3号池伏流水 底面水	根冠形	15.2	3.7	—	—	ヨコナデ	ハラケツリヨコナデ	葉 白色粒子	四瓣	灰 NG/	
52 15	原葉根 アシカツ	3号池伏流水 底面水	先端	16.2	4.5	—	—	ヨコナデ	ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子・斑紋	五瓣	灰 NG/	
53 16	原葉根 アシカツ	3号池伏流水 底面水	ほぼ丸形	16.5	4.6	—	—	ヨコナデ	ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子	五瓣	灰 NG/1	内側に墨書き「十」2個
54 17	原葉根 アシカツ	3号池伏流水 底面水	口體漏斗	(16.4)	2.3	—	—	ヨコナデ	ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子	五瓣	灰 NG/	
55 18	原葉根 アシカツ	3号池伏流水 底面水	開孔片	—	12.5	(5.5)	—	ヨコナデ	ヨコナデ	葉 白色粒子・斑紋	四瓣	灰 NG/1	
56 1	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	球形	15.5	4.5	—	9.4	ヨコナデ	口部形・底部ヨコナデ 体部・ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子少	管状	黄 7.5YR7/6	
57 2	土壤根 ソウジン	6号池伏流水 底面水	球形	16.0	4.5	—	9.0	摩滅	口部形ヨコナデ 体部・底部ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子少	管状	黄 7.5YR5/3	
58 3	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	口部漏斗形	(16.6)	7.3	—	(11.0)	ヨコナデ	口部形・底部ヨコナデ 体部・底部ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子少	管状	灰 2.5YR8/8	
59 4	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	11枚～底部片	(15.4)	4.8	—	(10.4)	ヨコナデ	口部形ヨコナデ 体部・底部ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子多	管狀	灰 7.5YR7/8	
60 5	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	口部漏斗形	(15.6)	3.5	—	(9.0)	ヨコナデ	口部形ヨコナデ 体部・ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子少	管狀	黄 20YR8/4	黒土色
61 6	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	口部漏斗形	(15.0)	6.1	—	(15.0)	ヨコナデ	口部形ヨコナデ 体部・底部ハラケツリ後ヨコナデ	葉 白色粒子少	管狀	黄 8YR7/6	
62 7	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	唇部片	—	1.5	—	(5.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	葉 白色粒子	直射	灰 7.5YR8/2	黒土色
63 8	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	口部漏斗形	(14.0)	4.3	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	葉 白色粒子	直射	灰 7.5YR7/4	黒土型
64 9	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	頸～底部片	—	5.0	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	葉 白色粒子少	直射	黄 7.5YR6/0	外見は灰 7.5YR6/0
65 10	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	倒～底部	—	4.8	—	(9.8)	ヨコナゲ	タナハケ	葉 白色粒子少	直射	黄 8YR4/4	黒泥炭型
66 11	土壤根 ソウジン	6号池伏流水 底面水	唇～底部	—	5.4	—	(9.6)	ヨコナゲ	タナハケ	葉 白色粒子少	直射	黄 7.5YR4/6	赤泥字表皮黒炭型
67 12	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	底部片	—	3.1	—	(10.8)	摩滅	摩滅	葉 白色粒子少	直射	灰 8YR5/6	底部土質細か 外見は黄 8YR5/6
68 13	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	底部片	—	2.5	—	(7.8)	ヨコナゲ	ヨコナゲ	葉 白色粒子少	直射	灰 8YR6/5	
69 14	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	底部片	—	1.5	—	(8.6)	ハゲ	摩滅	葉 白色粒子少	管狀	黄 8YR4/6	底部土質細か
70 15	土壤根 ソウジン	5号池伏流水 底面水	底部片	—	2.2	—	(8.4)	摩滅	摩滅	葉 白色・黄色 白色・褐色粒子少	管狀	灰 8YR2/5	底部4深紅 外側は黒褐 8YR3/1
71 16	根茎根 ケンジン	5号池伏流水 底面水	11枚～底部片	(13.8)	4.3	—	(7.9)	ヨコナデ	底部ハラツギ	葉 白色粒子	直射	灰 8YR7/2	
72 17	根茎根 ケンジン	5号池伏流水 底面水	体～底部片	—	2.9	—	(5.6)	ヨコナデ	底部ハラツギ	葉 白色粒子少	直射	灰 8YR7/2	
73 1	原葉根 アシカツ	5号池伏流水 底面水	11枚～底部片	(13.2)	4.0	—	10.3	ヨコナデ	ヨコナデ	葉 白色粒子少	直射	灰 7.5YR7/1	外觀は灰 7.5YR7/1
74 2	根茎根 アシカツ	5号池伏流水 底面水	体～底部片	—	3.3	—	9.0	ヨコナデ	ヨコナデ	葉 白色・褐色粒子	直射	灰 7.5YR7/1	外觀次灰 7.5YR7/1
75 3	根茎根 アシカツ	5号池伏流水 底面水	体～底部片	—	3.2	—	(11.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	葉 白色粒子・褐色粒	直射	灰 7.5YR7/1	外觀次灰 7.5YR7/1
76 4	根茎根 アシカツ	5号池伏流水 底面水	底部片	—	1.5	—	10.0	摩滅	摩滅	葉 黑色粒子少	直射	灰 7.5YR7/1	
77 5	茎葉根 ヨウエイジン	5号池伏流水 底面水	底部片	—	1.2	—	(8.0)	ヨコナデ	ヘラケツリ	葉 白色粒子少・粗砂粒	直射	灰 7.5YR7/1	

標號 番号	別名 学名	地名 場所	現存部位	口徑 (mm)	體高 (mm)	最大径 (mm)	幅高 (mm)	内面形状	外側挿抜	顎子	形成	色調	備考
54 6	頭側 冠	5号假面屋内 施設上	口輪部片	(15.2)	3.2	—	—	ヨコナダ	ヘラケツリ後ヨコナダ	前 白色歯子	頭顱	黒青紫 6557/1	
54 7	頭側 冠	5号假面屋内 施設上	口輪部片	(15.2)	2.6	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色歯子	頭顱	灰白 75Y1/0	
57 1	土嚙頭 冠	6号假面屋内 施設上	頭部片	—	2.2	—	(7.4)	ヨコナダ	タチハゲ	前邊 右角石・左角石・ 白色歯子	良好	灰 5Y1/0	
57 2	頭側頭 冠	6号假面屋内 施設上	頭部片	—	1.5	—	(6.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色・白色歯子	良好	灰白 657/1	
57 5	頭側頭 冠	3号假面屋内 施設上	頭部片	—	1.5	—	(7.5)	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色・白色歯子少	頭顱	灰白 1057/0	は灰白 7.5Y1/1
76 1	頭側頭 冠	5号假面 屋上	削～頭部片	—	3.5	—	(3.0)	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色歯子・折砂粒	頭顱	灰白 2.5Y1/1	
76 2	頭側頭 冠	5号假面 屋上	剥離破片	—	2.5	—	—	開心円タタキ	平行タタキ	前 白色歯子少	頭顱	灰白 2.5Y1/1	
76 3	土嚙頭 冠	7号土嚙 頭施設上	頭部片	—	0.6	—	(6.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色歯子やや多	良好	2.5Y1/0	頭部承け脂面か
76 4	頭側頭 冠	7号土嚙 頭施設上	削～頭部片	—	1.6	—	(4.0)	ヨコナダ	ヨコナダ 剥離ヘラケツリ	前 白色歯子・折砂粒	頭顱	灰白 7.5Y1/1	
76 5	頭側頭 冠	7号土嚙 頭施設上	剥離破片	—	4.7	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色歯子	頭顱	灰白 N7/	
76 6	頭側頭 冠	8号土嚙 頭施設第1層	頭部片	—	2.0	—	(11.0)	摩滅	ヨコナダ	前 白色歯子	頭顱	灰白 7.5Y1/1	外壁は灰 7.5Y1/1
76 7	土嚙頭 冠	8号土嚙頭 頭施設上	剥離片	—	2.0	—	3.6	摩滅	摩滅	前 黃斑・石英・黃玉・ 白色歯子やや多	普通	淡黃斑 7.5Y1/0	
76 8	土嚙頭 冠	6号土嚙頭 頭施設上	剥離片	(26.4)	8.5	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前 青銅石・黃斑・白色歯子	良好	7.5Y1/0	外牆模擬面
76 9	土嚙頭 冠	近隣面壁上	ぼぼ突起	11.7	4.0	12.5	11.7	ヨコミガキ	上唇部ヨコナダ 脇部ヘラケツリ後ヨコナダ	前邊 粗造歯少	頭顱	灰 5YR7/0	
76 10	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(2.0)	3.6	—	(0.8)	ヨコナダ	上唇部ヨコナダ 脇部ヘラケツリ後ヨコナダ	前邊 白色歯子少	頭顱	灰 5YR7/0	
76 11	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(2.0)	3.6	—	(0.8)	ヨコナダ ミガキ状似か	ヨコナダ ミガキ状似か	前 白色歯子少	頭顱	灰 5YR7/0	
76 12	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(14.6)	3.6	—	(8.0)	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色歯子少	頭顱	灰 5YR7/0	
76 13	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(11.5)	2.0	—	(8.4)	摩滅	摩滅	前 白色歯子少	頭顱	灰 5YR7/0	
76 14	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(6.0)	1.5	—	(6.5)	ヨコナダ	ヨコナダ	前 白色・白色歯子	良好	灰 5YR7/0	に付いて歯根か かわらけか？
76 15	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(14.4)	3.8	—	—	ヨコナダ	上唇部ヨコナダ 脇部ヘラケツリ	前邊 白色歯子少	頭顱	淡黃斑 7.5YR8/4	
76 16	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(16.0)	5.4	—	—	ヨコナダ	上唇部ヨコナダ 脇部ヘラケツリ後ヨコナダ	前邊 白色歯子少	頭顱	灰 5YR8/0	
76 17	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(16.0)	2.1	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前邊 石英・白色歯子	頭顱	5YR8/0	
76 18	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(16.4)	2.2	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前邊 石英・白色歯子	頭顱	5YR8/0	
76 19	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(12.5)	4.0	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前邊 石英・白色歯子	頭顱	淡黃斑 10YR8/0	
76 20	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(13.0)	3.5	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前邊 白色歯子少	頭顱	灰白 7.5YR8/1	外側面とも摩滅
76 21	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(14.0)	3.0	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前邊 石英・黃玉・ 白色・白色歯子	頭顱	灰 6Y1/0	
76 22	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(14.7)	3.2	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前邊 石英・黃玉・ 白色歯子少	頭顱	灰白 6Y1/0	
76 23	土嚙頭 冠	近隣面壁上	口輪～頭部片	(14.7)	3.2	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	前邊 石英・黃玉・ 白色歯子少	頭顱	灰 6Y1/0	

図版 番号	種別 認証	出土地 位置	残存部位	口径 (cm)	筒高 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	内面皮肉	外面枝付	跡土	鏡成 分類	凸溝 有無	備考
25 15	土師器 片	遺物面東上	口縁～全体片	(14.2)	9.9	—	—	厚誠	口縁部ヨコナデ 全体厚誠	白色 黄色粒子少	不良	墳頂 16YR8/8	
26 16	土師器 片	遺物面東上	口縁～全体片	(14.5)	9.1	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	白色 黄色粒子	良好	輪辺 7.5YR6/1	
25 17	土師器 片	遺物面西上	口縁～全体片	(15.2)	2.6	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	難 白色粒子	良好 不良	にかい輪 7.5YR6/4	
25 18	土師器 片	包合層	口縁～全体片	(14.5)	5.1	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黄色 白色粒子や多	良好	BY37/5	
25 19	土師器 片	包合層	口縁部片	(15.7)	9.5	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黄色 白色粒子	良好	10R8/6	
25 20	土師器 片	包合層	口縁部片	(13.1)	1.9	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黄色 白色粒子	良好	にかい輪 7.5YR7/4	
25 21	土師器 片	遺物面西上	口縁部片	(12.0)	2.5	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黃色 黃色	良好	頭赤端 2.5YR5/6	
25 22	土師器 片	包合層	口縁部片	(15.2)	1.8	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黃色 白色粒子	普通	灰 2.5YR7/6	
25 23	土師器 片	包合層	口縁部片	(11.0)	2.8	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	黃色 石炭・白色粒子	良好	BY48/6	
25 24	土師器 片	遺物面西上	底部片	—	1.3	—	6.2	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色 青色粒子	良好	青輪 5YR4/2	底部余切痕ほか
25 25	土師器 片	遺物面西上	底部片	—	2.2	—	(6.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 青色 白色粒子	良好	頭白 2.5YR8/2	内外側とも厚誠
25 26	土師器 片	包合層	底部片	—	2.5	—	(7.2)	ヨコナデ	ヘラケベリ強ヨコナデ	青黄 石炭・白色粒子多	良好	青輪場 2.5YR6/6	底部余切痕ほか
25 27	土師器 片	包合層	底部片	—	2.4	—	(7.5)	ヨコナデ	ヘラケベリ強ヨコナデ	青黄 石炭・白色粒子	良好	青輪場 5YR4/2	底部余切痕ほか
25 28	土師器 片	遺物面東上	底部片	—	1.6	—	(9.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 石炭・白色粒子少	良好 少	頭輪 7.5YR10/4	底部余切痕ほか
25 29	土師器 片	遺物面東上	底部片	—	1.6	—	(10.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子	良好	灰 2.5YR5/5	
25 30	土師器 片	遺物面西上	底部片	—	1.3	—	(9.9)	厚誠	厚誠	青黄 白色粒子	良好	透 5YR6/5	
25 31	土師器 片	包合層	底部片	—	1.3	—	(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子	普通	5YR6/3	内外側とも厚誠
25 32	土師器 片	遺物面東上	底部片	—	1.5	—	(7.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子	良好	にかい輪 2.5YR5/4	
25 33	土師器 片	遺物面東上	底部片	—	2.0	—	(7.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子	良好	頭赤端 2.5YR6/6	
25 34	土師器 片	遺物面東上	底部片	—	2.0	—	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子	良好	BY48/6	
25 35	土師器 片	遺物面東上	底部片	—	1.5	—	(7.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子	良好	にかい輪 5YR4/4	
25 36	土師器 片	包合層	底部片	—	1.4	—	(7.2)	ヨコナデ	ヘラケベリ強ヨコナデ	青黄 石炭・白色粒子	良好	透 2.5YR6/6	
25 37	土師器 片	包合層	底部片	—	1.5	—	(5.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子少	普通	透 5YR7/6	内外側とも厚誠
25 38	土師器 片	包合層	底部片	—	1.0	—	(6.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子	良好	透 5YR7/6	
25 39	土師器 片	包合層	底部片	—	1.5	—	(4.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 青輪石・白色粒子	良好	10YR4/4	
25 40	土師器 石質片	包合層	口盤～底部片	(14.5)	4.5	—	(7.0)	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 全体ヘラケベリ 後ヨコナデ	青黄 石炭・灰岩・白色粒子	良好	輪辺 2.5YR6/5	
25 41	土師器 石質片	遺物面東上	底部片	—	2.0	—	5.5	ヨコナデ	ヨコナデ	青黄 白色粒子少	良好	透 5YR7/6	輪辺部は青褐色 10YR6/3

地質 層号	地質 層名	山土地質 区分位置	残存部位	口径 (cm)	高さ (cm)	底面 (cm)	内面形状	外沿形状	胎土	焼成	包制	秀劣
75 42	土師器 有合灰	包含層	底部片	-	1.3	- (10.2)	ココナデ	ココナデ	普通 白色粒子	良好 S2R4/1	泥質	良
76 1	土師器 有合灰	包含層	底部片	-	1.3	- (13.1)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子	普通 S2R4/6	泥質	良
76 2	土師器 有合灰	包含層	底部片	-	1.3	- (6.6)	ココナデ	ヘラケズリ底ココナデ	石斑、白色粒子少	良好 S2R4/6	泥質	良
76 3	土師器 有合灰	包含層	底部片	-	1.3	- (4.6)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	不良	泥質	良
76 4	土師器 陶	包含層	口縁～底部片	(17.0)	4.7	-	口縁部ヨコナデ 脚部ヨコハク	口縁部ヨコナデ 脚部ヨコハク	普通 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、粗砂粒	泥質	泥質型態
76 5	土師器 陶	包含層	口縁～底部片	(16.4)	4.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	普通 白色粒子	泥質	泥質型態
76 6	土師器 陶	包含層	口縁～脚部片	(15.6)	3.6	-	口縁部ヨコナデ 脚部ヨコハク	口縁部ヨコナデ 脚部ヨコハク	普通 白色粒子、焦褐色 脚部白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、粗砂粒	泥質	泥質型態 外面黒茶葉
76 7	土師器 陶	包含層	口縁部片	(24.8)	3.6	-	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子	普通 白色粒子	良好	泥質 S2R4/4
76 8	土師器 陶	表土	口縁部片	(21.6)	6.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、粗砂粒	泥質	泥質型態
76 9	土師器 陶	遺物頂底上	口縁部片	(20.6)	4.9	-	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子、淡黄色 脚部白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、淡黄色 脚部白色粒子、粗砂粒	良好	泥質 S2R4/7
76 10	土師器 陶	遺物頂底上	口縁部片	(17.4)	5.8	-	ヨコナデ	タテハケ輪ヨコナデ	普通 白色粒子、淡黄色 脚部白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、粗砂粒	泥質	泥質型態
76 11	土師器 壁・小鉢	包含層	口縁部片	(21.9)	1.9	-	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	普通 白色粒子少	泥質	伊勢製陶か?
76 12	土師器 壁・小鉢	包含層	口縁部片	(17.5)	3.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ	普通 白色粒子少	普通 白色粒子少	泥質	伊勢製陶か?
76 13	三三切 器	遺物頂底上	口縁部片	(13.4)	4.0	-	摩滅	ヨコナデ	普通 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、粗砂粒	泥質	内外出土とも確認
76 14	土師器 陶	遺物頂底上	脚部片	-	9.2	- 7.8	ヨコハグ	タテハケ	普通 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、粗砂粒	良好	越後燒、外國橫桟筋 外國は明治 S2R5/6
76 15	土師器 陶	遺物頂底上	脚部片	-	6.9	- (8.0)	ヨコナデ	タテハケ	普通 白色、赤色粒子、粗砂粒	普通 白色、赤色粒子、粗砂粒	泥質	室町本漆灰陶か?
76 16	土師器 陶	包含層	底部片	-	1.7	- (5.2)	摩滅	摩滅	普通 白色、黑色粒子 脚部白色粒子、粗砂粒	普通 白色、黑色粒子 脚部白色粒子、粗砂粒	泥質	伊勢製陶か?
76 17	土師器 陶	包含層	底部片	-	4.0	-	6.2	横腹底板付	ヨコナデ	普通 白色、白色粒子少	普通	外國横付筋 内外間とも厚底
76 18	土師器 陶	包含層	底部片	-	1.9	- (6.0)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子少 白色粒子、粗砂粒	泥質	S2R4/6
76 19	土師器 陶	遺物頂底上	底部片	-	2.3	- (7.5)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子、粗砂粒	泥質	西貴義 外國は明治 S2R5/6
76 20	土師器 陶	遺物頂底上	底部片	-	2.7	- (11.0)	摩滅	摩滅	普通	普通 粗砂粒	泥質	外國小盤 外側面とも厚底
77 1	土師器 陶	包含層	底部片	-	3.0	- (2.8)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	普通 白色粒子少	泥質	普通 S2R4/6
77 2	土師器 陶	遺物頂底上	底部片	-	2.3	- (0.4)	ハグ	摩滅	普通 白色粒子少	普通 白色粒子少	泥質	西貴義 外國燒灰陶
77 3	土師器 陶	包含層	底部片	-	1.6	- (10.0)	四頭頭底付	摩滅	普通 白色粒子少 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子少 白色粒子、粗砂粒	泥質	西貴義 外國燒灰陶
77 4	土師器 陶	包含層	底部片	-	1.9	- (9.8)	摩滅	タテハグ	普通 白色粒子少 白色粒子、粗砂粒	普通 白色粒子少 白色粒子、粗砂粒	泥質	西貴義 S2R4/6
77 5	土師器 陶	包含層	底部片	-	1.4	- (8.4)	ハグ	摩滅	普通 白色粒子少	普通 白色粒子少	泥質	西貴義 S2R4/6
77 6	土師器 陶	遺物頂底上	底部片	-	0.2	- (7.5)	摩滅	摩滅	普通 白色粒子少	普通 白色粒子少	泥質	西貴義 S2R4/4

国名 番号	種類 分類	山名等 位置	成育部位	口幅 (cm)	高さ (cm)	互大様 (cm)	頸径 (cm)	内因枝法	外因枝法	施工	施成	出荷	備考
77 7	土壌侵 害	包含層	底部片	-	4.6	-	(8.0)	ヨコハケ	摩滅	雪浦、黄石、角閃石、 鉄石少、白色、褐色斑子	良好	利根葉 5Y5/6	後山湖面、水面に明暗 7.5YR6/6 内外壁とモルタル
77 9	土壌侵 害	透水性面上	底部片	-	2.9	-	(6.4)	ヨコハケ	タテハケ	中や粗 黄石多、白色斑子	良好	利根葉 2.5YR3/9	底部小窓面(何か 外壁は明暗 2.5YR3/1)
77 9	土壌侵 害	透水性面上	底部片	-	2.6	-	(7.6)	ヨコハケ	タテミカガキ	豊通、石英少、黄鐵少、 白色、褐色斑子多	良好	利根葉 5YR7/5	勝田木屋敷面か 外壁はにじむ緑 5YR5/3
77 10	土壌侵 害	透水性面上	底部片	-	3.2	-	(7.6)	ヨコハケ	ハケ継ヨコナデ	普通、長石、白石多 岩燕、飛石、白石粗子多	良好	利根葉 2.5YR7/5	利根葉面か、勝田木屋 外壁は緑 5YR7/6
77 11	土壌侵 害	透水性面上	底部片	-	5.1	-	(7.6)	ヨコハケ	岸誠	普通、長石少、 白色斑子多	良好	にじむ赤褐 5YR10/4	
77 12	土壌侵 害	包含層	底部片	-	2.5	-	(7.4)	ハケ	ハケ	普通、 白色斑子多	普通	5YR7/6	勝田木屋敷面か 勝田湖面
77 13	土壌侵 害	包含層	底部片	-	2.0	-	(4.6)	摩滅	摩滅	普通、 白色斑子少	良好	5YR3/5	
77 14	土壌侵 害	透水性面上	底部片	-	1.6	-	(7.0)	岸誠	摩滅	普通、 長石、白色、赤色斑子少	良好	2.5YR6/8	外壁は浅緑 7.5YR5/4
77 15	土壌侵 害	包含層	底部片	-	2.2	-	(6.6)	ヨコハケ	タテハケ	普通、 石英、長石、白色斑子	良好	5YR7/6	
77 16	土壌侵 害	透水性面上	底部片	-	1.8	-	(7.0)	ハケ	摩滅	普通、 長石、白色斑子	普通	2.5YR7/4	底部小窓面(何か 外壁は明暗 2.5YR7/4)
77 17	土壌侵 害	透水性面上	底部片	-	3.8	-	(5.6)	摩滅	タテハケ	普通、 白色、赤色斑子、粗砂粒	良好	10YR4/2	外壁はにじむ黄橙 10YR7/3
77 18	土壌侵 害	包含層	底部片	-	1.6	-	(7.6)	ヨコハケ	ヨコハケ	普通、 長石、白色斑子少	良好	2.5YR7/6	
77 19	土壌侵 害	包含層	底部片	-	2.2	-	(8.4)	岸誠	岸誠	普通、 白色斑子少	良好	2.5YR7/5	
77 20	土壌侵 害	透水性面上	口縫～底部片 (14.8)	5.4	-	(30.4)	摩滅	摩滅	普通、 白色斑子	普通	2.5YR7/5	底部木底面	
77 21	土壌侵 害	包含層	口縫部破片	-	4.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 長石少、赤色斑子や多	良好	2.5YR5/4	にじむ赤褐 2.5YR5/4
77 22	土壌侵 害	透水性面上	口縫部破片	-	3.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 長石少、赤色斑子や多	良好	2.5YR6/5	明暗面
77 23	土壌侵 害	包含層	口縫部破片	-	5.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 白色斑子多	良好	2.5/36/4	にじむ緑 2.5/36/4
77 24	土壌侵 害	包含層	口縫部破片	-	4.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 角閃石、白色、赤色斑子	良好	2.5YR5/4	にじむ緑 2.5YR5/4
77 25	土壌侵 害	包含層	口縫部破片	-	4.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 角閃石、白色	良好	2.5YR5/4	にじむ緑 2.5YR5/4
77 26	土壌侵 害	包含層	口縫部破片	-	4.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 長石少、赤色斑子	良好	2.5YR4/1	外壁は勝灰 2.5YR4/1
77 27	土壌侵 害	透水性面上	口縫部破片	-	2.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 角閃石、白色、 赤色斑子少	良好	2.5YR6/6	外壁は赤灰 2.5YR4/1
77 28	土壌侵 害	包含層	口縫部破片	-	4.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 角閃石、白色、 赤色斑子多	良好	2.5YR7/6	
77 29	土壌侵 害	透水性面上	口縫部破片	-	3.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 角閃石、白色斑子多	良好	2.5YR7/4	外壁は赤灰 2.5YR4/1
77 30	土壌侵 害	包含層	口縫部片 (23.0)	2.0	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	普通、 白色斑子少	良好	10YR5/5	
78 1	根茎部 片	透水性面上	底部片形	12.2	9.2	-	5.2	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 白色斑子	普通	10YR5/5	
78 2	根茎部 片	透水性面上	口縫～底部片 (10.0)	3.5	-	4.3	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 白色斑子	普通	10YR5/1	
78 3	根茎部 片	透水性面上	口縫～底部片 (16.0)	2.8	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	今や粗、 白色斑子	普通	5YR8/1	

番号	学名	和名	出水部位置	分子部位置	口付 (cm)	咽頭 (cm)	喉嚨部位置 (cm)	喉嚨 (cm)	内嚙位置 (cm)	外嚙位置	咽嚨	喉嚨	備考
76 4	魚鰐目 魚鰐科	口鰐	近咽喉部上	口鰐～体側部	(3.2.6)	0.1	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口
78 5	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～体側部	(3.2.2)	3.4	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
79 5	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～体側部	(3.2.3)	3.6	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
76 7	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～体側部	(3.2.6)	0.9	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 3	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～体側部	(3.2.2)	3.6	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
79 2	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～体側部	(3.2.3)	3.6	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
76 19	魚鰐目 魚鰐科	口鰐部	口鰐～咽嚨部	(3.2.6)	1.2	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 11	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(3.2.2)	3.4	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
75 32	骨舌目 骨舌科	淡水	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	1.4.2	—	10.1	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
76 15	骨舌目 骨舌科	淡水	口鰐～咽嚨部	(1.6.2)	4.8	—	(0.6)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
76 14	骨舌目 骨舌科	淡水	口鰐～咽嚨部	(1.6.2)	4.6	—	(0.6)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 15	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.2)	6.2	—	(1.1.4)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 18	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.2)	2.0	—	(1.2.2)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 17	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.3)	1.5	—	(1.1.3)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 18	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.3)	2.9	—	(1.1.9)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 19	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.4)	1.4	—	(1.1.8)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
79 20	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.4)	1.5	—	(0.6)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 21	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.5)	2.1	—	(0.6)	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 22	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.5)	4.6	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
79 23	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.4)	1.9	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 24	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.4)	1.6	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
79 25	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.5)	2.4	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 26	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	(1.6.4)	2.6	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 27	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	—	1.5	—	—	0.0コナダ	ヘタケヌリ鮎コナダ	白色	黑色	喉口	
78 28	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	—	5.3	—	—	—	同心円ヌリ	白色	黑色	外洋に自生地	
78 29	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	—	10.6	—	—	—	同心円ヌリ	白色	黑色	外洋に自生地	
78 30	魚鰐目 魚鰐科	近咽喉部上	口鰐～咽嚨部	—	7.6	—	—	—	ヘタケヌリ	白色	黑色	外洋に自生地	

群 集等	群 名	地 理	生 長 形 態	分 布 位 置	口 径 (cm)	高 さ (cm)	最大 幅 (cm)	底 径 (cm)	内面状法	外 面 状 法	胎 土	焼 成 温 度	色 調	備 考
79	1	須崎 型	透 壁 型	透壁部面上 口縁～底部片	(6.6)	6.6	(2.9)	(6.8)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 7.5Y6/1	灰白	
79	2	尾 花 型	透 壁 型	透壁部面上 腹部片	—	2.9	(7.4)	—	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 7.5Y7/1	灰白 外圍に自然釉付着	
79	3	根 葉 型	透 壁 型	透壁部面上 口縁部片	(17.4)	2.5	(20.0)	—	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子・粗砂粒	點綴 7.5Y5/1	灰 表面に自然釉付着 或缺	
79	4	根 葉 型	透 壁 型	透壁部面上 口縁～底部片	(14.0)	4.5	—	6.9	ヨコナダ	口縁部ヨコナダ 体部ヘラケズリ後ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 5Y6/1	灰白 種は尻オーリーブ 5Y6/2	
79	5	灰 灰 陶 器	透 壁 型	透壁部面上 底部片	—	1.5	—	7.4	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色・黑色粒子	點綴 5Y7/1	灰白 種はオリーブ質 7.5Y7/3	
79	6	灰 灰 陶 器	底 部 型	底 部	—	2.7	—	(7.2)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子少	點綴 10Y8/1	灰白 胎は灰白 7.5Y3/2	
79	7	灰 灰 陶 器	底 部 型	底 部片	—	2.3	—	(10.4)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色・黑色粒子少	點綴 2.5Y7/1	灰白	
79	8	灰 灰 陶 器	底 部 型	底 部片	—	1.8	—	(6.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色・黑色粒子少	點綴 2.5Y8/1	灰白 種は灰オーリーブ 5Y5/4	
79	9	灰 灰 陶 器	底 部 型	底 部片	—	2.0	—	(7.8)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色・黑色粒子	點綴 5Y7/1	灰白	
79	10	灰 灰 陶 器	底 部 型	底 部片	—	1.5	—	(6.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 黑色粒子少	點綴 2.5Y5/1	灰白 底部余削痕微か	
79	11	灰 灰 陶 器	透 壁 型	透壁部面上 口縁～底部片	(14.0)	2.6	—	6.6	ヨコナダ	口縁部ヨコナダ 体部ヘラケズリ後ヨコナダ	白 白色粒子少	點綴 2.5Y7/1	灰白 底部余削痕微か	
79	12	脚 附 器	透 壁 型	透壁部面上 底部破片	—	0.5	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子少	點綴 5Y6/1	灰 胎は灰オーリーブ 7.5Y5/3	
80	1	背 残 型	包 含 型	口縁～背部片	(16.0)	4.7	—	—	無文	無文	無	點綴 7.5Y8/1	灰白 前項同形8-5 種はカリーフ質 7.5Y6/3	
80	2	背 残 型	包 含 型	底部片	—	2.7	—	(6.0)	無文	無文	無	點綴 5Y6/1	灰白 前項同形8-3 種はカリーフ質 5Y7Y7/1	
80	3	背 残 型	包 含 型	底部片	—	2.5	—	(6.0)	無文	無文	無	點綴 5Y6/1	灰白 前項同形8-1G 輪は明るい灰 5GY7/7	
80	4	背 残 型	包 含 型	口縁部破片	—	4.4	—	—	刻文	刻文	無	點綴 7.5Y8/1	灰白 白色粒子	
80	5	白 壁 型	透 壁 型	体～底部片	—	5.9	—	(7.1)	無文	無文	無	點綴 5Y8/2	灰白 白色粒子	
80	6	圆 顶 、美 浓 烧	包 含 型	口縁～底部片	(32.6)	2.5	—	(6.2)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 5Y7/1	灰白 前項同形8-20 種は灰オーリーブ質 7.5Y8/2	
80	7	圆 顶 、美 浓 烧 小口	包 含 型	口縁～底部片	(31.2)	2.1	—	(6.4)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 5Y7/1	灰白 前項同形8-24 種は灰オーリーブ質 7.5Y8/2	
80	8	圆 顶 、美 浓 烧 中口丸	包 含 型	体～底部片	—	1.7	—	(7.8)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 5Y8/1	灰白 前項同形8-23	
80	9	山 茶 烧	凸 起 型	口縁部破片	—	5.0	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子・粗砂粒	點綴 10Y6/1	灰白 皮石	
80	10	山 茶 烧	透 壁 型	透壁部面上 口縁～底部片	(7.2)	1.6	—	(4.8)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 5Y5/6/1	灰白 白色粒子	
80	11	山 茶 烧	透 壁 型	透壁部面上 底部片	—	1.2	—	4.5	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 5Y5/6/1	灰白 白色粒子	底部余削痕
80	12	常 绿 烧	透 壁 型	透壁部面上 L型破片	(31.4)	5.7	—	—	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 10Y8/2	灰白 白色粒子	
80	13	透 黄 烧	透 壁 型	透壁部面上 底部片	—	5.7	—	(14.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子・粗砂粒	點綴 5Y3/1	灰白 白色粒子	
80	14	透 黄 烧	透 壁 型	透壁部面上 底部片	—	4.7	—	(15.6)	ヨコナダ	ヨコナダ	白 白色粒子	點綴 10Y8/1	灰白 白色粒子	
—	—	背 残 型	底 上	口縁部破片	—	2.8	—	—	刻花X	無文	白 白色粒子少	點綴 5Y6/1	灰白 前項同形8-1 種はオリーブ質 7.5Y6/3	

箇所番号	地図番号	地名・施設名	柱上位置	残存部位	高さ(cm)	幅高(cm)	最大幅(cm)	底深(cm)	内面状況	外面状況	貼土	刷成	色調	備考
-	-	古墳 壁	地盤状況 土壌	口縁部破片	-	3.9	-	-	無文	輪郭分文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-4 輪はオーリープR 2.5GY7/2 輪はモリーフR 2.5GY7/2
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	3.0	-	-	無文	輪郭分文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-6 輪はモリーフR 2.5GY6/1 輪はモリーフR 2.5GY6/1
-	-	古墳 道	張替面直上	口縁部破片	-	5.1	-	-	無文	輪郭分文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-7 輪はモリーフR 2.5GY6/1 輪はモリーフR 2.5GY6/1
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	5.3	-	-	無文	輪郭分文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-8 輪はモリーフR 2.5GY7/1 輪はモリーフR 2.5GY7/1
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	1.8	-	-	無文	輪郭分文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-9 輪はモリーフR 2.5GY7/1 輪はモリーフR 2.5GY7/1
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	3.3	-	-	無文	ヘラ捺壓分文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-10 輪はモリーフR 2.5GY7/3 輪はモリーフR 2.5GY7/3
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	2.5	-	-	無文	無文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-11 輪はモリーフR 2.5GY7/3 輪はモリーフR 2.5GY7/3
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	2.1	-	-	無文	無文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-12 輪はモリーフR 2.5GY7/1 輪はモリーフR 2.5GY7/1
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	4.5	-	-	ヨコナナ	輪郭沈綴文	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-13 輪はモリーフR 2.5GY8/1 輪はモリーフR 2.5GY8/1
-	-	古墳 道	21号墳状況 基部直上	底部破片	-	1.4	-	-	塗付	塗付	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-14 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	0.8	-	-	塗付	塗付	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-15 輪はモリーフR 2.5GY7/1 輪はモリーフR 2.5GY7/1
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	3.0	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-16 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.5	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-17 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	3.3	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-18 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	口縁部破片	-	2.0	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-19 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.0	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-20 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.2	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-21 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.5	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-22 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.2	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-23 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.0	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-24 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.2	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-25 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.0	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-26 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.2	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-27 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.5	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-28 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.2	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-29 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	1.7	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-30 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
-	-	古墳 道	包合層	底部破片	-	4.3	-	-	ヨコナナ	ヨコナナ	白	西暦	灰白色	輪郭状況R-31 輪はモリーフR 2.5GY7/0 輪はモリーフR 2.5GY7/0
55 1	阿蘇 塙	地盤状況 土壌	口縁～底部片(14.4)	2.8	-	(8.2)	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	ヨコナナ	白色粒子・粗砂粒少	銀鏡	灰白色	輪は模造 2.5Y7/3
55 2	阿蘇 塙	地盤状況 土壌	底部片	-	6.0	-	(10.6)	ヨコナナ	ヨコナナ	白色粒子・粗砂粒少	亞鐵	灰白色	輪は模造 2.5Y7/3	
55 1	土崎 塙	13号墳状況 基部	底部片	-	1.4	-	(5.6)	ヨコナナ	ヨコナナ	白色粒子・粗砂粒少	亞鐵	灰白色	輪は模造 2.5Y7/3	
55 2	土崎 塙	13号墳状況 基部第1層	口縁～底部片(39.0)	6.3	-	-	ヨコナナヨコナナ 輪郭ヨコナナ	ヨコナナヨコナナ 輪郭クラハケ	ヨコナナヨコナナ 輪郭クラハケ	黃褐色・石英・長石多、 白色・赤色多・粗砂粒少	良好	灰白色	輪は模造 2.5Y7/3 外側は模造 2.5Y7/3	
55 3	鶴村 塙	15号墳状況 土壌	体部～底部片	-	4.0	-	(4.0)	無文	塗付	白色粒子	銀鏡	灰白色	輪は模造 2.5Y7/3	
55 4	新田 塙	20号墳状況 土壌	底部片	-	1.5	-	(8.8)	ヨコナナ	ヨコナナ	白色粒子	銀鏡	灰白色	輪は模造 2.5Y7/3	

第8表 出土土製品観察表

団体 番号	押印 番号	器種名	出土遺物 出土位置	残存高 (cm)	残存厚 (cm)	胎 土	焼成	色調	備 考
79	13	土器	包含層	4.5	2.6	白色・黑色粒子	既燒	褐褐色 7.5YR7/1	
91	12	丸瓦	包含層	5.0	1.4	白色・赤色粒子少	既燒	褐褐色 7.5YR7/6	内面市目模様あり
91	13	瓦?	包含層	5.7	2.1	白色物少・細沙粒少	既燒	褐褐色 10YR6/6	内面タタキ

第9表 出土石器観察表

体形 番号	形態 番号	西朝名	出土遺物 出土位置	石 材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
15	1	石鏡	1号海狀遺構 鏡面付	鳥頭石	1.90	1.40	0.30	9.5	長州鹿島屋石
15	2	石斧	包含層	赤玉石	1.95	1.35	1.35	3.4	伊豆産赤玉石
31	11	石歯	環狀 第4層	ホルンフェルス	11.60	6.65	2.90	248.7	石材は鷹十川や千本浜で採集可能
40	1	歌石	環狀 上包含層	閃綠岩	14.86	7.90	4.60	643.5	
40	2	歌石	海狀圓頂上	織紋砂岩	10.80	7.65	5.20	607.7	
40	3	歌石	環狀圓頂上	中粒砂岩	16.25	6.50	3.05	242.7	
40	4	歌石	包含層	中粒砂岩	9.25	8.55	3.95	430.3	
40	5	歌石	環狀圓頂上	輝石安山岩	10.50	5.40	3.55	303.8	
57	4	歌石	1号海狀遺構 鏡面付上	中粒砂岩	17.05	6.25	3.60	541.0	
90	3	四石	2号海狀遺構 鏡面付上	輝石	11.90	9.60	5.90	166.2	
91	14	鍍鉄錠	包含層	ホルンフェルス	9.20	7.55	3.80	316.4	石材は鷹十川や千本浜で採集可能

第10表 出土木製品観察表

団体 番号	押印 番号	器種名	出土遺物 出土位置	種 種 名	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備 考
34	18	用途不明 木製品	環狀 第6層	七ノギ	13.0	9.3	2.5	
43	18	板状木製品	1号海狀遺構 鏡面付上	イシマキ	41.7	8.0	3.5	
83	3	用途不明 木製品	海狀遺構 鏡面付上	クリ	6.7	5.3	0.9	赤色(10R5/8)の顔料 が片面に行塗
83	4	又削式 木製品	海狀遺構 鏡面付上	アカマツまたは クロマツ(ニ葉マツ類)	29.9	14.0	3.3	

第11表 出土金銀製品観察表

団体 番号	押印 番号	器種名	出土遺物 出土位置	材質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
29	8	鍼繩	環狀 第5層	鍼	6.2	0.9	0.3	9.9	実物 木質付箋
83	5	押状形銀品	海狀遺構 鏡面付上	銅	7.6	0.6	0.4	5.7	遺青表面の未完成品?
91	15	煙管	透柄付面上	銅	3.6	1.1	1.1	2.9	単首
91	16	煙管	単首	銅	9.7	1.2	1.2	15.1	吸口

第12表 出土錢貨観察表

団体 番号	押印 番号	品名	出土遺物 出土位置	書体	国名	製造年	材質	残存 (cm)	内径 (cm)	外径 (cm)	厚度 (cm)	重 量 (g)
92	1	昭和十四年 カクス一銭	海狀遺構 鏡面付上	—	日本	1839年	アルミ	1.70	—	—	0.14	0.9
92	2	天慶元寶	包含層	真書	北宋	1023年	銅	2.45	2.20	0.70	0.13	1.6
92	3	開慶元寶	包含層	真書	北宋	1068年	銅	2.40	2.10	0.75	0.12	2.1
92	4	元豐通寶	包含層	篆書	北宋	1078年	銅	2.40	2.00	0.75	0.12	1.6
92	5	寛永通寶(新寛永)	包含層	真書	日本	1660年	銅	2.30	2.10	0.65	0.09	1.9
92	6	寛永通寶(新寛永)	包含層	真書	日本	1660年	銅	2.30	2.10	0.65	0.09	1.9

第IV章 理化学的分析

第1節 自然科学分析

パリノ・サーゲイ株式会社

はじめに

西蓮北遺跡は、愛鷹山と駿河湾とに挟まれた沿岸平野に立地する。遺跡付近はかつて存在した大きな湿地帯であった浮島沼の東縁にあたると考えられる。この湿地帯は、绳文海進後の海退に伴い形成し砂堤列と愛鷹山との間に発達したもので、弥生時代頃に形成した潟灘由来するものである。今回の発掘調査により、1区では奈良・平安時代を中心とした遺構・遺物が、2区では弥生時代を中心とした遺構・遺物が発見されている。今回の自然科学分析調査は、弥生時代の環濠内の覆土について珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析、穀実分析を行い、当時の古環境に関する情報を得る。

1. 試料

当社技術1名が現地に赴き、調査および試料採取を行った。試料は、2区で検出された環濠の東側と西側の2地点で採取した（第93図）。I-33グリッドセクションでは、上位より1～6層に分層されている。最上位の1層は黒色粘土層、2層は灰黄褐色粘土層で、層相から連続的に堆積したことが推定され、ともに古墳時代・古代の遺物が混じるとされる。2層は3層の上位に不整合で堆積する。3層は黒色シルト質粘土層、4層は黒褐色シルト質粘土層で、連続的に堆積したことが推定される。ともに環濠埋設過程において土壌化が進んでおり、腐植が集積している。弥生時代の遺物が出土しているとされる。下位の5層は黒褐色シルト質粘土層、6層は灰黄褐色シルト質粘土層で、環濠が機能していた時期の堆積物と考えられ、弥生時代中期中葉の土器が部分的に集中して出土しているとされる。試料は、層位毎（1～6層）に6点（試料番号1～6）を採取した。分析調査には、弥生時代の堆積物を対象として試料番号3～6（3～6層）の4点について、珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。さらに、底部近くの2点（試料番号5、試料番号6）は穀実分析も実施する。

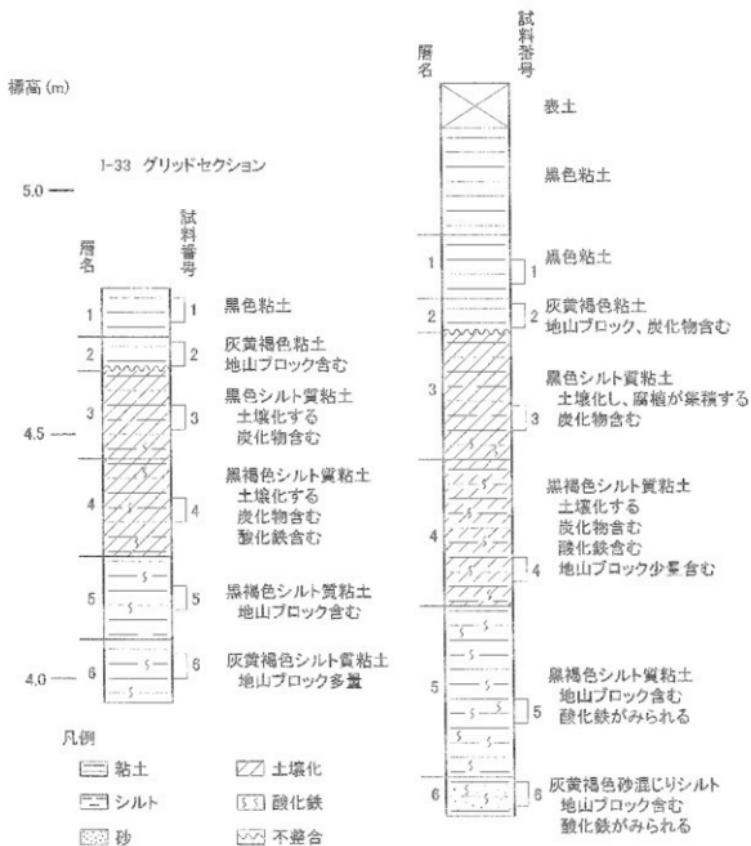
N-23グリッドセクションにおいても、I-33グリッドセクションと同様に上位より1～6層に分層されている。2地点の各層の層相は概ね類似する。ただし、N-23グリッドセクションの4層で腐植の集積が少ない。また、N-23グリッドセクションの6層の層厚は薄く、極細粒砂が比較的多く混じる（灰黄褐色砂混じりシルト層）。2地点間で1～6層の各層に包含される遺物の時期も一致するとされることから、各層は対比すると考えられる。試料は、層位毎（1～6層）に6点（試料番号1～6）の試料を採取した。このうち、6層は砂が多く化石や植物遺体の産出が少ないと予想されたため、試料番号2～5（2～5層）の4点について、珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析を実施する。さらに、底部近くの2点（試料番号4、試料番号5）は穀実分析も実施する。以上の合計で、珪藻分析8点、花粉分析8点、花粉イネ属同定8点、植物珪酸体分析8点、穀実分析4点を実施する。

2. 分析方法

(1) 硅藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塗酸処理、自然沈降法（4時間放置）の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1,000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、

N-23 グリッドセクション



第93図 環境試料採取地点の層序

珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann（1990）に従う。なお、壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縫溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms；広義のオビケイソウ綱Fragilariphycaceae）と有縫溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱Bacillariophyceae）に分ける。また、有縫溝類は、单縫溝類、双縫溝類、管縫溝類、真管縫溝類、短縫溝

類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf (1993) を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe (1974) に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に要別する。また、貧塩性種は細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・淡水に対する適応能を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料は、産出率2.0%以上の種類について主要珪藻化石群集の分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形藻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、淡水生種（貧塩性種）は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析・イネ属同定

試料約10gを秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、分別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトトリシス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行なう。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉总数、草本花粉・シダ類孢子は总数から不明花粉を除いた数をそれぞれ差数として、百分率で出現率を算出し図示する。

イネ属同定はノマルスキー微分干涉装置を用い、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚の状況・粒径などを考慮して、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類した。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身横動経胞由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析液流量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位の変化から古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的变化を図示する。

(4) 種実分析

試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。筒内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼窓体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実遺体を抽出する。現生種本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。試料中に確認された炭化材と高鉄小僧（褐鐵鉱）は、70°C48時間乾燥後の質量（g）と最大径（mm）を表示する。分析後は、種実遺体を分類群毎に容器に入れ、70%程度のエタノール溶液で液浸し、保管する。

第13表 生態性区分と環境指標種群

	塩分濃度に対する区分	Lowe (1974) による
海水生群	登場性種 真珠貝類 (海水生)	塩分濃度40.0%以上の高濃度海水域に生育する種 塩分濃度40.0~30.0%に生育する種
汽水生群	中塩性種 (汽水生種)	塩分濃度30.0~0.5%に生育する種
淡水生群	低塩性種 (淡水生種)	塩分濃度0.5%以下に生育する種
	淡水の塩分の生産性区分	
塩分	実施河川性種	少鹽の部分がある方が良く生育する種
	貧鹽不育性種	少鹽の部分があつてもこれに良く育えることができる種
	実非諒解性種	小鹽の部分にも育まることができない種
	広域耐性種	海水~汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	高酸性種	pH7.0以下に生育し、特にpH5.5以下の酸性水域で最も良く生育する種
	許容性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以下の水域で最も良く生育する種
	pH不定性種	pH7.0付近の中性水準で最も良く生育する種
	好アルカリ性種	pH7.0付近に生育し、pH7.0以上の水域で最も良く生育する種
Hustedt (1937~38) による	藻カキタリ性群	pH7.0以上の水準にのみ出現する種
淡水	真正止水性種	止水場にのみ生育する種
	静止水性種	止水場に特徴的であるが、流水場にも生育する種
	流水不育性種	止水場にも流水場にも普遍に生育する種
Hustedt (1937~38) による	好流水性種	流水場に特徴的であるが、止水場にも生育する種
	真流水性種	流水場にのみ生育する種
主に海水域での環境指標種群 (小杉、1983による)		
外洋指標種群 (A)	塩分濃度が83%の外洋水中で浮遊生活するもの	
内湾指標種群 (B)	塩分濃度35~26%の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することできる種群	
海水侵襲指標種群 (C1)	塩分濃度35~12%の海域で海藻 (草) に付着生育することからそのような環境を指標することできる種群	
汽水侵襲指標種群 (C2)	塩分濃度1~4%の汽水域で海綿 (草) に付着生育することからそのような環境を指標することできる種群	
海水砂質干潟指標種群 (D1)	塩分濃度35~26%の砂浜の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
汽水砂質干潟指標種群 (D2)	塩分濃度25~5%の沙浜の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
海水泥質干潟指標種群 (E1)	30~12%の有機性の高い底質地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群	
汽水泥質干潟指標種群 (E2)	塩分濃度12~2%の汽水化した塩性器器などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水泥質底群 (F)	2%以下の淡水域の底質の砂、泥、水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる群群	
淡水泥質底群 (G)	塩分濃度2%以下の弱酸などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる群群	
河口浮遊生物群 (H)	塩分濃度2~2%の河口域で浮遊生活、あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群	
淡水域での環境指標種群 (安藤、1990による)		
上流域河川指標種群 (J)	河川上流域の幹部に集中して出現することから上流域の環境を指標すし可塑性の大きい種群	
中~下流域河川指標種群 (K)	河川中~下流域や河川沿いの河岸段丘、陸地、自然堤防、軟膏湿地などに集中して出現することから、そのような種類を指標する可能性の大きい種群	
最下流域河川指標種群 (L)	最下流域の三州の部分に集中して出現することから、そのような環境を指標する可塑性の大きい種群	
湖沼浮遊性種群 (M)	水深約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼底層を指標する可塑性の大きい種群	
前沼泥沉积地指標種群 (N)	湖沼における浮遊生種としても沼澤湿地の付着生種としても優勢に出現することから、そのような環境を指標する可塑性の大きい種群	
沼澤湿地葉生種群 (O)	沼よりも淡く水深が1m前後で一帯に水生植物が繁茂している沼や更に水深の浅い溝地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可塑性の大きい種群	
高周波振動指標種群 (P)	ミズガケを主とした種類や泥炭が形成される環境に集中して出現することから、そのような環境を指標する可塑性の大きい種群	
陸塊指標種群 (Q)	水中でなく、多分の浪打性のある砂浜表面、岩の表面、コケなどに常に大気に曝された灯架的礁塊 (陸塊) に集中して生育することからそのような環境を指標する可塑性の大きい種群	
陸塊での環境指標種群 (伊藤・船内、1921による)		
陸生陸地生群 (RA)	陸生陸地の中でも、分市がほぼ陸端に限られる耐乾性の高い種群	
陸生陸地B群 (RB)	陸生陸地A群に隣接し、陸地にも水中にも生育する種群	
未区分陸生陸地 (RF)	陸生陸地に相当すると考えられるが、乾燥に対する適応性の不明なもの	

3. 結果

(1) 球藻類分析

結果を第14表、第94図に示す。また、球藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を第13表に示す。球藻化石の産出頻度は、何れの試料も多産する。完形殻の出現率は、60%前後である。産出分類群数は、合計で40属135分類群である。地点別に球藻化石群集の特徴を下位より述べる。

• I-33グリッドセクション

6層（試料番号6）は、淡水域に生育する水生珪藻が約50%、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約40%、淡水～汽水生種が約10%産出する。淡水生種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）の特徴は、貧塩不定性種と貧塩好塩性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。主要種は、塩分や塩類の豊富な河口や温泉水中などに付着生育する淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、淡水不定性で有機汚濁の進んだ腐水域に耐性のある好汚濁性種の*Luticola goeppertiana*、*Nitzschia amphibia*等が10%前後産出する。この他、好流水性種の*Achnanthes inflata*、沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*、淡水不定性で好清水性種の*Diploneis ovalis*等が産出する。陸生珪藻では、耐乾性の高い陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*が約10%産出する。

5～3層（試料番号5～3）は、陸生珪藻が全体の約60%と多産する。その他の水生珪藻が約20%、淡水～汽水生種が約10%産出する。主要種は、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*が約10%産出し、同じく陸生珪藻A群の*Diadesmis contenta*、*Pinnularia borealis*、それに水域にも陸域にも生育する陸生珪藻B群の*Navicula ignota*等が産出する。

• N-23グリッドセクション

5層（試料番号5）、4層（試料番号4）は、水生珪藻が約50%、陸生珪藻が約40%、淡水～汽水生種が約10%産出する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種と貧塩好塩性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種が多産する。主要種は、淡水不定性で好汚濁性種の*Luticola goeppertiana*が約15%と産出し、淡水～汽水生種の*Rhopalodia gibberula*、好流水性で付着性の*Achnanthes inflata*、*Caloneis bacillum*、沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*、淡水不定性で好清水性種の*Diploneis ovalis*等を伴う。陸生珪藻では、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*、*Luticola mutica*が約10%産出する。

3層（試料番号3）は、陸生珪藻が約70%と多産する。これに次いで、水生珪藻が約20%、淡水～汽水生種が約10%産出する。主要種は、陸生珪藻A群の*Hantzschia amphioxys*が約25%産出し、同じく陸生珪藻A群の*Luticola mutica*が約15%産出する。これに付随して、*Pinnularia borealis*等が産出する。水生珪藻としては、*Navicula seposita* var. *lanceolata*等が低率ながら産出する程度である。

2層（試料番号2）は、水生珪藻が約60%、陸生珪藻は、約40%産出する。淡水生種の生態性の特徴は、貧塩不定性種、好+真アルカリ性種、流水不定性種と好+真止水性種が多産する。主要種は、止水性で湖沼沼澤地指標種の*Aulacoseira ambigua*が約10%産出し、好止水性種の*Fragilariforma exigua*、*Pseudostaurosira brevistriata*、*Staurosira construens*、*Staurosira venter*、好流水性種の*Caloneis bacillum*、それに淡水不定性種の*Diploneis ovalis*等を伴う。

(2) 花粉分析・イネ属同定

結果を第15表に示す。I-33グリッドセクション、N-23グリッドセクション共に花粉化石の検出数が少なく、保存状態も悪い。分析済のほとんどは微粒炭である。モミ属、ツガ属、マツ属、イネ科などが少産されるのみである。イネ科花粉はI-33セクションの4層（試料番号4）で1個体検出されたのみである。

第14表 珪藻分析結果

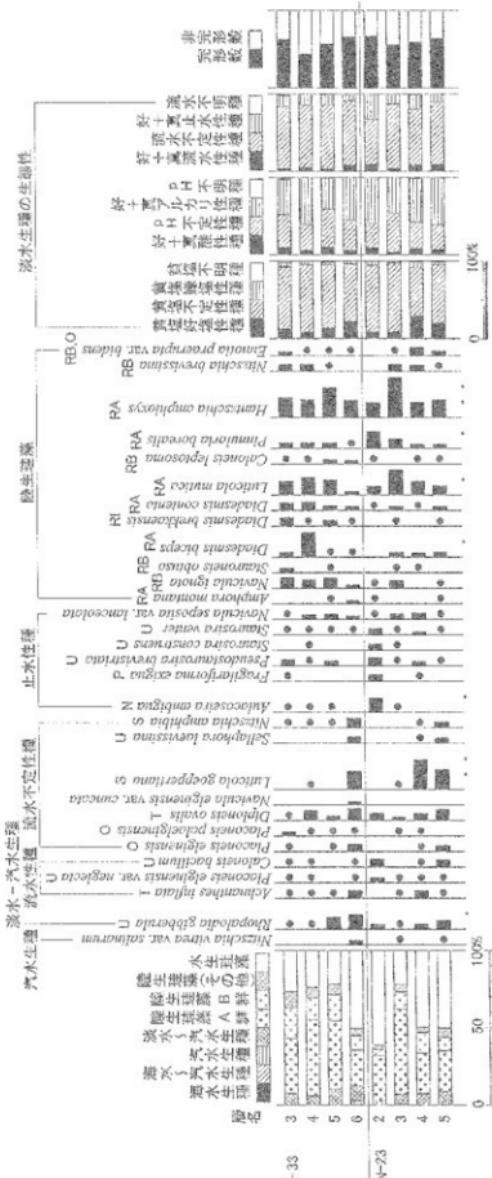
種 類	試験部位	生物群		礁底 沖御礁	I-25				II-25			
		部分	pH	藻類	2	4	5	6	2	3	4	500
Stelliferophyta (錐藻植物門)												
Centric Diatoms (中心藻類群)												
<i>Aulacoseira agardhii</i> (Grev.) Simonsen	Ophi-ind	al-l	l-ph	N.U.	1	1	1	-	9	2	-	-
<i>Aulacoseira granulata</i> (Grev.) Simonsen	Ophi-ind	al-l	l-ph	M.U.	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Aulacoseira sulcata</i> (Ehren.) Simonsen	Ophi-ind	al-s	l-ph	U	1	-	-	-	1	1	-	-
<i>Ceratodiscus rotundus</i> (Birg.) Grunow	Bio-Meth			-	-	-	1	-	-	-	-	-
<i>Amphidium diatoms</i> (錐藻類固氮菌)												
<i>Pinnularia capitata</i> Tresckovius	Ophi-ind	al-l	ind	T	9	1	-	-	2	1	1	-
<i>Pinnularia capitata</i> var. <i>gracilis</i> (Grev.) Hustedt	Ophi-ind	al-l	l-ph	T	-	-	-	-	3	-	-	1
<i>Pinnularia reniformis</i> (Kutz.) Poeltner	Ophi-ind	al-l	l-ph	K.T.	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pinnularia elongata</i> (Grev.) D.M.Williams & Round	Ophi-ind	al-l	l-ph	P	1	-	-	-	4	-	1	-
<i>Pinnularia elongata</i> (Grev.) D.M.Williams & Round	Ophi-ind	al-l	l-ph	P.U.	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Pseudostaurastrum brevirostre</i> (Grev.) Williams & Round	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	8	3	3	-	6	3	5	1
<i>Spirogyra contorta</i> (L.) Schleicher	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	3	-	-	4	2	-	-
<i>Spirogyra contorta</i> var. <i>nitida</i> (Burm.) Horikoshi	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Spirogyra contorta</i> var. <i>triundulata</i> (Roth) H.Kobayasi	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	1	-	-	-	2	2	1	-
<i>Spirogyra ovata</i> (Mitt.) J.Yahyaei	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	3	4	2	1	6	3	5	1
<i>Spirogyra physica</i> (Mitt.) Williams & Round	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	1	-	-	1	-	-	-
<i>Spirogyra leptocephala</i> (Grev.) Williams & Round	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	1	-	-	-	1	-	-	-
<i>Spirogyra punctata</i> (W.Sm.) Round	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	1	-	-	-	1	-	-	-
<i>Obelia geniculata</i> (L.) Alben	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	1	-	-	1	-	-	-
<i>Thalassia testudinum</i> (Forst.) Koeling	Ophi-ind	al-l	l-ph	T	1	12	-	-	1	-	-	-
Rapido-Pinnate Diatoms (錐藻固氮菌群)												
Micro-nugoid Pinnate Diatoms (錐藻固氮菌群)												
<i>Achmatella inflata</i> (Carter.) Grunow	Ophi-ind	and	p-ph	T	1	1	2	10	-	1	9	5
<i>Planovalvula lacustris</i> (Berk. ex Kutz.) Lange-Bertal	Ophi-ind	and	p-ph	E.T.	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Achmatella vulgaris</i> (Grev.) Grunow	Ophi-ind	al-l	ind	S	2	1	-	-	1	2	-	-
<i>Achmatella subnudata</i> (Kutz.) Grunow	Ophi-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Blaugattia Pinnata</i> Diatoms (錐藻固氮菌群)												
<i>Anabaena cylindrica</i> (Kutz.) Schumann & N.E.Arnold	Ophi-ind	al-l	ind	U	1	1	-	-	1	-	-	3
<i>Anabaena montana</i> (Grev.) A.Neurock	Ophi-ind	al-l	ind	K.A.U.	-	-	1	4	1	-	-	1
<i>Anabaena variabilis</i> Ralfs	Ophi-ind	al-l	ind	RB	-	-	-	2	-	-	-	-
<i>Anabaena cylindrica</i> (Grev.) M.Pitcairn	Ophi-ind	al-l	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Cyanothece nivalis</i> (Grev.) Sommer	Ophi-ind	ind	ind	Q.U.	-	-	-	-	-	-	1	-
<i>Lyngbya inflata</i> (Blytt) D.G.Mann	Ophi-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	1	-	-	-
<i>Placocella stagnaria</i> (Grev.) J.L.Carr	Ophi-ind	ind	ind	Q.U.	1	-	2	9	-	-	1	3
<i>Placocella stagnaria</i> var. <i>neglecta</i> (Tranek.) H.Kobayashi	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	1	5	-	1	3	1	1	4
<i>Placocella stagnaria</i> Lange-Bertal	Ophi-ind	al-l	ind	Q.U.	5	3	2	9	-	1	1	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrhard	Ophi-ind	al-l	l-ph	Q.U.	-	-	-	1	1	-	1	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrhard	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	1	-	-	4	1	1	-	-
<i>Gomphonema quadrangularatum</i> H.Kobayashi	Ophi-ind	al-l	l-ph	T	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Gomphonema quadrangularatum</i> H.Kobayashi	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis elliptica</i> (Kutz.) Cleve	Ophi-ind	al-l	ind	R.H.T.	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diploneis ovalis</i> (Miles) Cleve	Ophi-ind	al-l	ind	T	2	12	3	15	5	4	9	15
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ophi-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	3
<i>Hildenia sericea</i> (Horn)	Ophi-ind	and	p-ph	K.H.U.	1	3	1	9	-	2	1	1
<i>Hildenia hirsutella</i> Hustedt	Ophi-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Noctiluca proteiformis</i> (Büts.) Knobeld	Ophi-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Noctiluca germanica</i> Wallace	Ophi-Med	al-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Noctiluca amphioxys</i> Loizeau-Bertrand et U.Schmid	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Noctiluca digitata</i> var. <i>caerulea</i> H.Kobayashi	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	-	-	4	-	-	-	-
<i>Noctiluca glaberrima</i> Cleve	Ophi-ind	ind	ind	RI	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Noctiluca hirsutella</i> Hustedt	Ophi-ind	ind	ind	RI	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Noctiluca gaudia</i> Krätsch	Ophi-ind	ind	ind	K.H.U.	15	17	2	5	1	9	-	1
<i>Noctiluca gaudia</i> var. <i>accepta</i> (Grun.) Lange-B.	Ophi-ind	ind	ind	K.D.U.	2	-	-	2	-	-	-	-
<i>Noctiluca gaudia</i> var. <i>polysticha</i> (Huis.) Land	Ophi-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	1	2	0
<i>Noctiluca tenuis</i> Grunow	Ophi-ind	al-l	ind	3	-	-	-	-	1	5	1	1
<i>Noctiluca jamaicensis</i> Hustedt	Ophi-ind	al-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Noctiluca placenta</i> G. Schröder	Ophi-ind	al-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Noctiluca rosacea</i> Hartmann	Ophi-ind	al-l	l-ph	-	-	1	1	-	-	-	-	1
<i>Noctiluca septentrionalis</i> Hartmann	Ophi-ind	al-l	l-ph	T,U	-	-	-	-	-	2	-	-
<i>Noctiluca septentrionalis</i> Hartmann	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	2	5	5	4	1	7	8	2
<i>Noctiluca trichodes</i> Hartmann	Ophi-ind	al-l	l-ph	RI	-	-	-	2	-	1	-	4
<i>Noctiluca tenuis</i> Hartmann	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Noctiluca tenuis</i> Hartmann	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Noctiluca tenuis</i> Hartmann	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Gymnodinium spississimum</i> (Roth) Cleve	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Crithidella evaginata</i> (Noctil.) D.G.Mann	Ophi-ind	al-l	ind	S	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Solenites longulus</i> (P.C.Y.) Land	Ophi-ind	ind	ind	RI	5	3	3	-	1	3	3	1
<i>Solenites longulus</i> (P.C.Y.) Land	Ophi-ind	ind	ind	T	-	-	-	-	-	-	-	1
<i>Solenites oblongus</i> Lagerstedt	Ophi-ind	ind	ind	RI	6	-	2	-	-	2	1	-
<i>Solenites phebalioides</i> (Grev.) Thurell	Ophi-ind	ind	l-ph	Q.U.	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Solenites subtilis</i> Grunow	Ophi-ind	al-l	l-ph	U	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Solenites tenuis</i> Grunow	Ophi-ind	al-l	l-ph	RI	-	-	-	-	-	-	-	-
<i>Solenites tenuis</i> Grunow	Ophi-ind	ind	ind	RI	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fusulina nigra</i> (T.-H.) Do. Tied	Ophi-ind	al-l	ind	U	-	-	-	-	2	-	-	2
<i>Ceratiosira penitula</i> (Grev.) Mann & Stickle	Ophi-Med	ind	ind	-	-	-	2	-	-	-	2	-
<i>Glenodiscus longa</i> Aravat & Grunow in Van Heege	Ophi-ind	al-l	ind	S.A.T.	6	72	2	1	-	6	5	0
<i>Diatoms brasilianus</i> (Grev.) D.G.Mann	Ophi-ind	al-l	ind	U	11	9	4	2	-	1	1	1
<i>Diatoms conjugans</i> Karling	Ophi-ind	al-l	ind	R.B.S.	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Diatoms contracta</i> (Grev.) Van Heege	Ophi-ind	al-l	ind	R.H.T.	10	11	3	5	9	4	5	6
<i>Lacuna gossypium</i> (Ditrich.) D.G.Mann	Ophi-ind	al-l	ind	U	5	-	2	-	23	-	28	25
<i>Lacuna macta</i> (Kutz.) D.G.Mann	Ophi-ind	al-l	ind	R.H.S.	18	23	10	4	6	33	19	12
<i>Lacuna parvula</i> (Bock) D.G.Mann	Ophi-ind	ind	ind	U	5	-	-	-	-	-	-	1

種類	試験番号	生理性		酸度		I		II		III		
		区分	pH	種子	Fe(OH) ₃	3	4	5	6	2	5	4
Lactuca sativa (L.) L.	1	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-
Melilotus officinalis (L.) Desv.	2	Ogh-ind	ac-l	ind	R/A	2	-	10	10	-	-	1
Nicotiana tabacum (L.) Knaut	3	Ogh-ind	ac-l	l-ph	-	12	-	-	-	-	-	1
Nicotiana glauca (L.) Gray	4	Ogh-ind	ac-l	ind	R/A	1	-	-	-	-	-	-
Nicotiana sylvestris (L.) Gray	5	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-
Nicotiana acuminata A. Mey.	6	Ogh-ind	ac-l	ind	-	-	-	-	-	-	-	-
Nicotiana rotundifolia (Burm.) Cleve	7	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	1	-	-	-
Nicotiana longistylis (W.Gregg) R.Rosa	8	Ogh-ind	ac-l	ind	GU	-	-	-	-	-	-	-
Coldenia consanguinea Borb.	9	Ogh-ind	ac-l	ind	FAS	2	55	10	-	-	-	-
Coldenia angustifolia Bory E.	10	Ogh-ind	ind	ind	R/A	3	-	-	7	-	-	-
Coldenia heterolepis (Coss.) Cleve	11	Ogh-ind	ac-l	r-ph	U	1	1	5	5	-	-	-
Coldenia heterolepis (Coss.) Kuntze	12	Ogh-ind	ind	ind	R/A	-	-	-	-	-	-	-
Coldenia ligustrina (Lam.) Chodat	13	Ogh-ind	ac-l	ind	S	-	-	1	55	-	-	-
Coldenia ligustrina Lamotte & Lange-Berndt	14	Ogh-ind	ind	l-ph	AB	1	2	5	1	-	-	1
Coldenia heterolepis (Coss.) Chodat	15	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Plumbago auriculata L.	16	Ogh-ind	ac-l	ind	R/A	7	7	4	3	12	3	6
Plumbago auriculata L.	17	Ogh-ind	ind	ind	R/A	-	-	-	-	-	-	-
Plumbago pulchella L.	18	Ogh-ind	ac-l	ind	GU	1	-	-	-	-	-	-
Plumbago scandens (L.) W.Schult.	19	Ogh-ind	ac-l	ind	S	-	-	1	-	-	-	-
Plumbago scandens (L.) W.Schult.	20	Ogh-ind	ac-l	ind	R/I	1	4	-	-	-	-	-
Plumbago scandens var. <i>rhombifolia</i> (Forst.) Hochst.	21	Ogh-ind	ac-l	ind	S	-	-	-	-	-	-	-
Plumbago scandens Gregoire	22	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Plumbago scandens var. <i>rhombifolia</i> (Forst.) Hochst.	23	Ogh-ind	ac-l	ind	TBS	-	-	1	-	-	-	-
Plumbago spp.	24	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	1	-	-	-	-
Selaginella americana (L.) Gray	25	Ogh-ind	ac-l	ind	U	1	-	1	-	-	-	-
Selaginella lucidula (L.) Gray	26	Ogh-ind	ac-l	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella lepidophylla (L.) Gray	27	Ogh-ind	ac-l	ind	R/A	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella peruviana (L.) Gray	28	Ogh-ind	ac-l	ind	R/I	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	29	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	30	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	31	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	32	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	33	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	34	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	35	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	36	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	37	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	38	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	39	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	40	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	41	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	42	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	43	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	44	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	45	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	46	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	47	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	48	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	49	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	50	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	51	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	52	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	53	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	54	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	55	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	56	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	57	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	58	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	59	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	60	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	61	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	62	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	63	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	64	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	65	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	66	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	67	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	68	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	69	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	70	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	71	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	72	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	73	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	74	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	75	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	76	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	77	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	78	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	79	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	80	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	81	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	82	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	83	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	84	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	85	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	86	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	87	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	88	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	89	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	90	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	91	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	92	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	93	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	94	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	95	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	96	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	97	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	98	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	99	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	100	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	101	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	102	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	103	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	104	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	105	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	106	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	107	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	108	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	109	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	110	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	111	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	112	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	113	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	114	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	115	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	116	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	117	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	118	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	119	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	120	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	121	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	122	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	123	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	124	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	125	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	126	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	127	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	128	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	129	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	130	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	131	Ogh-ind	ac-l	ind	U	-	-	-	-	-	-	-
Selaginella rupestris (L.) Gray	132	Ogh-ind	ac-l									

株式会社アスクル

RF.R. : 濃度
Molar : 摺合比
pH : 水素イオン濃度
1N : 1モルの水溶液
C.R.L. : 倍水
100% : 100モルの水

Meh 水素生産 3.54 水アルカリ性加
Osh 過酸化水素二水素鉄 3.52 種アルカリ性深



第24図 主要珪藻化石群集
海水-汽水-淡水生産出率・各種産出率・完形試験率は全種基數、淡水生産の生態性の比率は淡水生産の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試剤について示す。なお、●は2%未満の値を示す。

(斜線標識：N-湖沼泥地性種；O-淡水湿地性種；S-好汚濁性種；U-広域適応性種；下：好淡水性種。
RA-陸生珪藻 A 群；RB-陸生珪藻 B 群；RI-未区分珪藻群）

第15表 花粉分析結果

種類	I-33				N-23			
	3	4	5	6	2	3	4	5
<u>木本花粉</u>								
モミ属	-	-	-	-	1	-	-	-
ツガ属	-	-	1	-	-	-	-	-
マツ属	-	-	1	-	1	1	-	-
スギ属	-	-	-	-	1	-	-	-
ブナ属	-	-	-	-	1	-	-	-
<u>草本花粉</u>								
イネ科	-	1	-	-	-	-	-	-
イネ科	-	2	-	1	4	-	-	-
ヒルガオ属	-	-	-	-	1	-	-	-
オミナエシ属	-	-	-	-	-	1	-	-
不明花粉	-	-	1	-	-	-	-	-
<u>シダ類胞子</u>								
イノモトソウ属	-	-	1	-	2	-	-	-
他のシダ類胞子	4	5	10	9	19	1	2	4
<u>合計</u>								
木本花粉	0	0	2	0	4	1	0	0
草本花粉	0	3	0	1	5	1	0	0
不明花粉	0	0	1	0	0	0	0	0
シダ類胞子	4	5	11	9	21	1	2	4
総計(不明を除く)	4	8	18	10	30	3	2	4

(3) 植物珪酸体分析

結果を第16表、第95図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（腐食痕）が認められる。以下に、各地点での産状を述べる。

I-33グリッドセクションでは、上位ほど植物珪酸体含量が増加し、3層（試料番号3）で約23万個/gと極めて多い。各試料で検出される分類群は同様であり、ネザサ節を含むタケ亜科、スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亞科などが見られる。各種類とも、ほぼ植物珪酸体含量に比例して増減しているため、構成比でみると、いずれの試料も類似する。なお、3層（試料番号3）では、栽培植物であるイネ属も検出される。葉部に形成される短細胞珪酸体が見られ、その含量は約900個/gである。またイネ属の短細胞列も見られる。

N-23グリッドセクションの植物珪酸体含量は、I-33グリッドセクションと異なる傾向が見られ、上位にかけて減少する。しかし、検出される分類群は同様である。また、産状も同様であり、スキ属を含むウシクサ族の産出が目立つ。ウシクサ族の機動細胞列も見られる。

(4) 種実分析

結果を第17表に示す。概要は、I-33グリッドセクションの6層（試料番号6）から草本のタデ属の果実1個と、N-23グリッドセクションの4層（試料番号4）からタデ属の果実2個、5層（試料番号5）から草本のサナエタデ近似種の果実1個が検出されるのみであった。その後に、各試料から炭化材が微量（0.01g未満）や高師小僧（褐鐵鉱）、N-23グリッドセクションの5層（試料番号5）から種類、部位不明の植物片が微量確認された。以下に、種実の形態的特徴を記す。

* サナエタデ近似種 (*Polygonum cf. lapathifolium L.*) タデ科タデ属

果実の破片が検出された。黒色、長さ1.5cm、幅1.3mm程度の偏平な円状二面体。頂部はやや尖り、2花柱を欠損する。基部は切形で、灰褐色の萼と萼から伸びる花被片を欠損する。果皮表面は平滑。

* タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実の破片が検出された。黒褐色、形状はレンズ状または三稜状広卵形と思われるが、詳細は不明。

破片の大きさは1.3mm程度。頂部は尖り、花柱を欠損する。果皮表面には網目模様がある。

4. 考察

珪藻化石群集からみると、I-33グリッドセクション、N-23グリッドセクション共に類似した傾向が認められ、これは2地点間で1~6層の各層が対比していることを反映しているものと考えられる。濃褐色土下部にあたるI-33の6層とN-23の5・4層は、水生珪藻が陸生珪藻の割合を上回る。また、塩分や塩度の豊富な水域に生育する種群や有機汚濁の進んだ腐水域に生育する好汚泥性種が多産することが特徴である。のことから、これらは富栄養で淀んだ（流れがない）状況であったと思われる。なお、今回花粉化石や種実遺体はほとんど検出されないが、これらは好気的環境（乾いた状態）における風化に弱い。また、上位に比べて割合は低いが陸生珪藻も産出する。のことから、覆土は上記のような水

第16表 植物珪藻体含量

種類	I-33				N-23				(個/g)
	試料番号	3	4	5	6	2	3	4	
イネ科葉部短細胞壁體									
イネ族イネ属	900	—	—	—	—	—	—	—	—
タケアサ科ネザサ属	900	—	<100	—	—	—	—	—	—
タケアサ科	2,800	500	400	600	700	1,000	3,400	1,700	—
ヨシ属	—	200	<100	—	200	200	300	—	—
ウシクサ族ススキ属	68,900	4,000	900	300	2,200	5,100	7,400	5,200	—
イチゴツナギ科	900	300	300	200	200	500	700	—	—
不 明	49,100	12,000	4,900	2,800	15,000	20,500	26,600	23,600	—
イネ科葉身短細胞壁體									
タケアサ科ネザサ属	3,800	200	300	<100	200	300	300	700	—
タケアサ科	2,800	1,800	<100	900	1,900	500	2,400	2,300	—
ヨシ属	—	200	<100	<100	300	—	300	—	—
ウシクサ族	73,700	5,400	1,400	3,100	8,400	12,300	19,900	15,200	—
不 明	26,500	6,300	4,100	5,200	10,000	7,900	19,500	17,300	—
合 计	124,700	16,900	6,600	3,900	18,200	27,400	38,400	35,500	—
イヌ科葉部短細胞壁體	106,800	13,800	5,900	9,400	20,800	21,700	42,400	35,900	—
総 合	231,500	30,700	12,500	15,300	39,100	49,100	80,900	71,400	—

合計は、10の位で丸めている(100位にする)

<100:100個/g未満
—:未検出 *:検出

第17表 種実分析結果

分類部	部位	状態	I-33		N-23		個
			5	6	4	5	
種実							
サナエタデ近縁種	果実	破片					1個
タデ属	果実	破片			1個	2個	—
不明種類	不明	破片					+
炭化物							
		乾燥灰分	<0.01g	<0.01g	<0.01g	<0.01g	
		最大径	2.2mm	2.5mm	2.5mm	3mm	
高筋小穀(鴨跖草)		乾燥量	2.91g	0.9g	1.97g	1.21g	
		最大径	32.8mm	8.9mm	14.8mm	15.9mm	
		分析量	200cc	200cc	200cc	200cc	
			284.24g	281.48g	263.16g	267.26g	

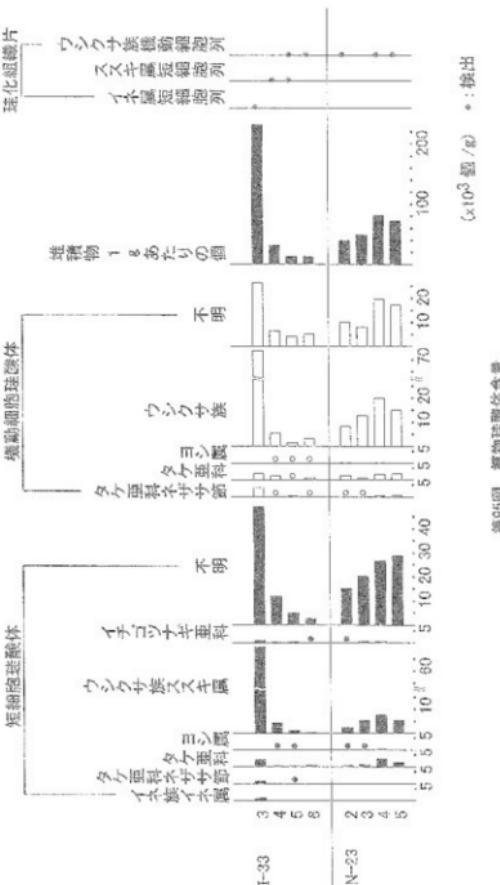


図65 地植物 1 gあたりに換算した個数を示す。○は 250 個/g未満を示す。
また、珪化組織片の値は * で示す。

域環境の中で水成堆積した後、一時的に乾燥した時期も存在したと考えられる。したがって、花粉化石や種実遺体は般化分解が進み、残りにくかったと考えられる。

I-33の5～3層やN-23の3層は、疎乾性の高い陸生珪藻A群を多く含む陸生珪藻が多産する。層相からみて、これらの堆積物も水によって運搬されたと思われるが、その後乾燥することが多かったため、陸生珪藻が優占する組成になったと思われる。I-33の4・5層で陸生珪藻がやや多いのは、N-23より乾燥していたことを反映していると考えられ、I-33の4層の土壤化も進んだと考えられる。これは、I-33の4層以下の標高がN-23よりも20cm程度高いこととも整合する。

N-23グリッドセクションの2層は、水生珪藻が多産する。瀬沼沼澤地指標種群や沼澤地付着生種群が多かったことから、浅い沼澤域であったと考えられる。2層が3層の上位に不整合で堆積することを考慮すると、3層堆積後のある時期に3層の上部を削刻して2層が水成堆積したことが考えられる。ただし、花粉化石の保存が悪い点などから、當時水が存在していた訳ではなく、乾燥した時期もあったと考えられる。以上のことから、環濠内の水域環境は、乾湿を繰り返すような環境下で、埋没が進行していったと考えられる。

植物珪酸体分析結果を見ると、「不明」も含めたいずれの種類も、堆積物中の植物珪酸体含量に応じて増減していることがわかる。このため、植物珪酸体の構成比をみると、各層準とも類似した割合となる。のことから、植物珪酸体の含量の変化は、周辺植生が変化したためではなく、植物珪酸体の堆積構造の違いによると考えられる。したがって、植生を考えるに当たっては、細かな含量の変化は考慮せず行う。植物珪酸体組成から、周辺には、ネヂササ節、スキ属、イチゴツナギ亞科などのイネ科植物が定常的に生育していたことがうかがえる。この中でもスキ属は全ての層準を通して他の試料よりも多く検出されており、周辺植生の中でも主要な種類であったと考えられる。特にI-33の3層では多くのスキ属が検出され、周辺に多く分布していたと思われる。なお、スキ属には低湿地に生育する「オギ」も含む。潟湖が近いことから、検出されたスキ属を含むウシクナ族珪酸体は、湿地に生育する「オギ」の可能性もあるが、環濠内の珪藻分析等の結果により、周辺が乾いた状態状況であったと推定されることなどから、周辺に生育していたものは乾燥地を好むスキ類であったと思われる。スキ類は開けた草地を構成する種類で、乾燥した裸地に先駆的に侵入して草地を構成する。したがって、開発によって切り開かれた土地にこれらが広く生育していたものと考えられる。種実遺体で微量ではあるが検出されるタデ類も開けた場所を好む種類であり、環濠周辺などを中心に生育していたと思われる。

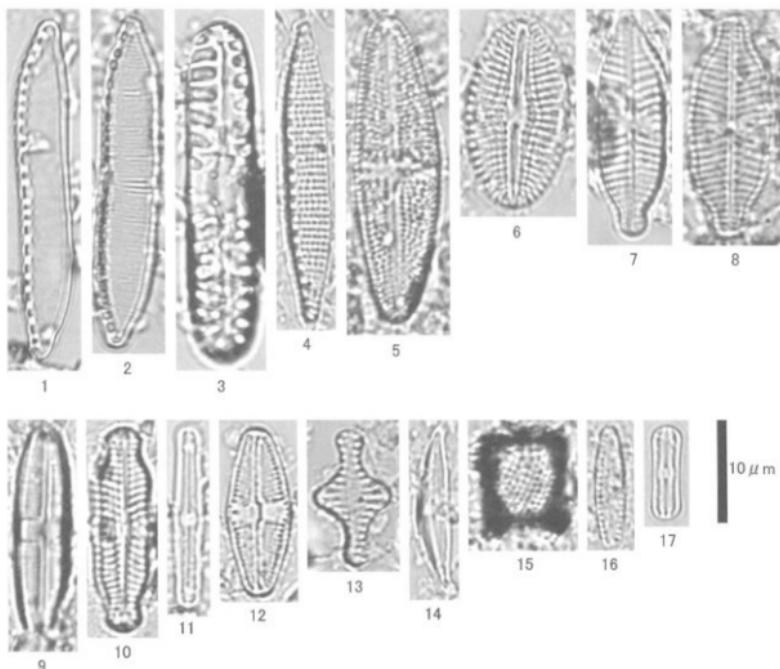
当時の地形環境からして、西側には浮島ヶ原の元となる潟湖が広がっていたと考えられる。浮島ヶ原に位置する蘿鹿原遺跡で弥生時代後期～古代にかけての古植生が調査されており、スギ林や常緑広葉樹林が優占したことが推察されている（パリノ・サーヴェイ株式会社 1990、松原 1990）。また、弥生時代後期前半とされる立木の調査では、アカガシ亞属やカヤが確認されている（熊城ほか 1991）。おそらく当時の森林は、山地縁辺部や低地中でも河川の影響を受けやすいなど土地条件が悪く開発が及びにくい地域を中心に生育していたとみられる。

なおイネ属由来の花粉化石や植物珪酸体が、少量検出される。イネ属が微量で、スキ属の方が圧倒的に多いことを考えると、イネの生産域は離れた場所にあり、周辺には存在しなかった可能性がある。

引用文献

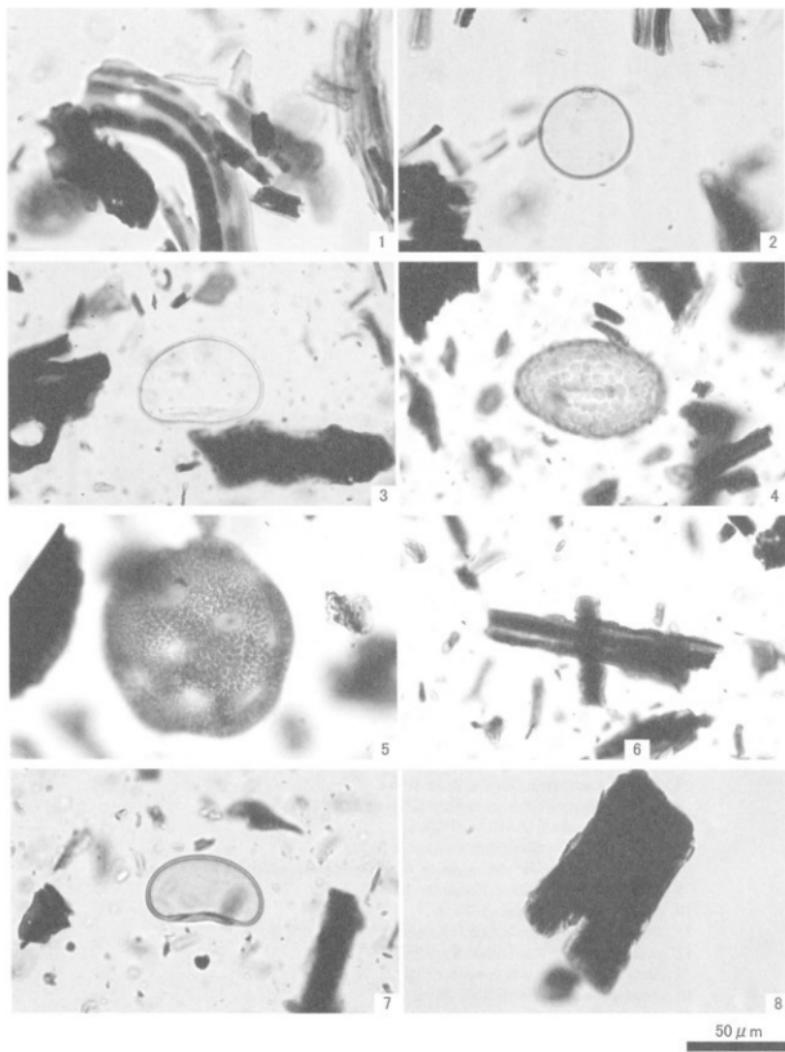
- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42, 73-88
 Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47
 原口和夫・三友清史・小林弘. 1998 『埼玉の藻類』竺灘類 埼玉県植物誌 埼玉県教育委員会, 527-600.

- Hustedt, F. 1937-1939 *Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra* Archiv für Hydrobiologie, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』 6, 23-45
- 石川茂雄 1994 「原色日本植物種子写真図鑑」 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』 27, 1-20
- 小林弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲保・長田啓五 2006 「小林弘珪藻図鑑」 第1巻 株式会社内田老舗 531p
- 近藤綸三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』 48, 46-64
- Krammer, K. 1992 *PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26.* J. CRAMER, 353p
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 *Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae*. In: *Süßwasserflora von Mitteleuropa. Band 2/I.* Gustav Fischer Verlag, 876p
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 *Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae*. In: *Süßwasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2.* Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a *Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae*. In: *Süßwasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3.* Gustav Fischer Verlag, 230p
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b *Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatce) und Gomphonema*. In: *Süßwasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4.* Gustav Fischer Verlag, 248p
- Lowe, R. L. 1974 *Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms*. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati
- 中村純 1974 「イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として」『第四紀研究』 13, 187-193
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 「日本植物種子図鑑」 東北大学出版会, 642p.
- 能城修一・車崎正彦・鈴木三男・石川治夫 1991 「静岡県沼津市鹿島塚遺跡出土木製品の用材」『金沢大学教養部論集』人文科学編 28-2 金沢大学, 43-63
- 松原影子 1990 「鹿島塚遺跡周辺における自然環境の変遷」『鹿島塚遺跡発掘調査報告書』 I 遺構編 沼津市文化財調査報告書第51集 沼津市教育委員会, 171-215
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1990 「鹿島塚遺跡の自然科学分析結果」『鹿島塚遺跡発掘調査報告書』 I 遺構編 沼津市文化財調査報告書第51集 沼津市教育委員会, 153-170
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990 *The diatoms. Biology & morphology of the genera*. 747p. Cambridge University Press, Cambridge
- Vos, P. C. & H. deWolf 1993 Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. *Hydrobiologia*, 269/270, 285-296
- 渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻彰洋・伯耆晶子 2005 「淡水珪藻生態図鑑」 内田老舗, 666p
- 柳沢幸夫 2000 「II - 1 - 3 - 2 - (5)計数・同定」『化石の研究法—採集から最新の解析法まで—』化石研究会・共立出版株式会社, 49-50



1. *Nitzschia brevissima* Grunow(I-33; 3)
2. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow (I-33; 4)
3. *Pinnularia borealis* Ehrenberg(I-33; 4)
4. *Nitzschia amphibia* Grunow (I-33; 6)
5. *Luticola goeppertiana* (Bleisch)D.G.Mann(N-23; 4)
6. *Diplotheis ovalis* (Hilse)Cleve(I-33; 6)
7. *Placoneis elginensis* (Greg.)E.J.Cox (I-33; 6)
8. *Placoneis elginensis* var. *neglecta* (Krasske)H.Kobayasi(N-23; 4)
9. *Caloneis bacillum* (Grun.)Cleve (N-23; 2)
10. *Navicula ignota* Krasske(I-33; 3)
11. *Diadesmis brekkaensis* (J.B.Petersen)D.G.Mann(I-33; 3)
12. *Luticola mutica* (Kuetz.)D.G.Mann(I-33; 4)
13. *Staurosira construens* Ehrenberg (N-23; 2)
14. *Amphora montana* Krasske(I-33; 6)
15. *Aulacoseira ambigua* (Grun.)Simonsen(N-23; 2)
16. *Pseudostaurosira brevistriata* (Grun.)Williams & Round(I-33; 3)
17. *Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck(I-33; 3)

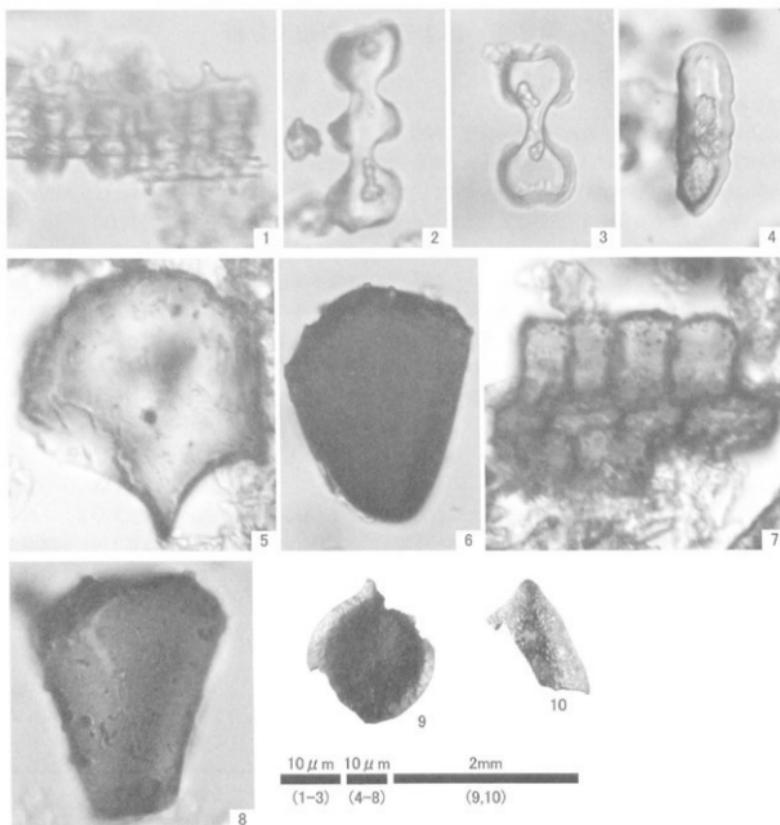
写真7 珪藻化石



1. 状況写真(I-33; 3)
3. 状況写真(シダ類胞子)(I-33; 5)
5. 状況写真(ヒルガオ属)(N-23; 2)
7. 状況写真(シダ類胞子)(N-23; 4)

2. 状況写真(イネ属)(I-33; 4)
4. 状況写真(シダ類胞子)(I-33; 6)
6. 状況写真(N-23; 3)
8. 状況写真(N-23; 5)

写真8 花粉化石



1. イネ属短細胞列(I-33; 3)
 3. ススキ属短細胞珪酸体(N-23; 3)
 5. ヨシ属機動細胞珪酸体(I-33; 6)
 7. ウシクサ族機動細胞列(I-33; 6)
 9. サナエタデ近似種 果実(N-23; 5)

2. ススキ属短細胞珪酸体(I-33; 3)
 4. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体(I-33; 4)
 6. ウシクサ族機動細胞珪酸体(I-33; 3)
 8. ウシクサ族機動細胞珪酸体(N-23; 3)
 10. タデ属 果実(N-23; 4)

写真9 植物珪酸体・種実遺体

第2節 出土弥生土器胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

沼津市西通北遺跡は、駿河湾奥部の海岸を縁取る砂州の上に立地する。この砂州は、狩野川下流の扇状地性三角州と富士川河口扇状地に挟まれて東西に細長く発達しており、砂州と富士山・愛鷹山南麓との間に浮島ヶ原とよばれる低湿地が広がっている。西通北遺跡の位置する砂州が完成したのは約2,000年前頃とされている（松浦 1989）が、これまでの発掘調査では弥生時代中期・古墳時代および古代の遺構・遺物が確認されている。

今回の分析調査では、調査区内から出土した弥生時代中期中葉および同後葉とされた土器の材質（胎土）について、その岩石学的な特性を明らかにするとともに、その特性と既存の地質情報との比較から土器原材料の地域性を検討する。特に今回の試料は考古学的所見により、静岡県中部（西駿河）や神奈川県西部（西相模）等の地域性が想定できるとされる特徴を有するものが含まれることから、これらの型式と胎土の特徴および地域性との対応関係を確認することにより、各試料の搬入あるいは在地の可能性についても検討する。

1. 試料

試料は、西通北遺跡の環濠より出土した弥生土器片10点で、分析番号1～10が付されている。これらのうち、分析番号1～4の4点は弥生時代中期後葉とされ、分析番号5～10の6点は弥生時代中期中葉とされている。発掘調査所見によれば、分析番号3は静岡県中部（西駿河）における弥生時代中期後葉の有東式併行と考えられており、分析番号7、9は神奈川県西部（西相模）における弥生時代中期中葉の中里式併行であると考えられている。さらに分析番号4および9は、弥生時代中期の太平洋沿岸部に多くみられる、「磨消縞文壺」に相当すると考えられている。

各試料の出土位置、時期、器種などを一覧にして、第18表に示す。

第18表 試料一覧および胎土分類

分析番号	出土位置	時期	器種	注記	発掘調査所見	胎 土 分 類										
						燃物・岩石組成					粒径組成					障壁物
						A	B	C	D	E	F	1	2	3	4	5
1	環濠 第3層	弥生中期後葉	壺	SNDK K-27 S150 II層 090305												
2	環濠 第3層	弥生中期後葉	壺	SNDK M-24 S150 II層 090302												
3	環濠 第4層	弥生中期後葉	壺	SNDK J-28 S150 IV層 090115	静岡県中部（西駿河） 有東式併行											
4	環濠 第4層	弥生中期後葉	壺	SNDK I-33 S150 IV層	磨消縞文壺 (太平洋沿岸部)											
5	環濠 第5層	弥生中期中葉	壺	SNDK I1738												
6	環濠 第5層	弥生中期中葉	壺	SNDK M-24 S150 V層 090304												
7	環濠 第6層	弥生中期中葉	壺	SNDK I1718	静岡県西部（西相模） 中里式併行											
8	環濠 第6層	弥生中期中葉	壺	SNDK I597	磨消縞文壺 (太平洋沿岸部)											
9	環濠 底直上	弥生中期中葉	壺	SNDK I570	神奈川県西部（西相模） 中里式併行											
10	環濠 底直上	弥生中期中葉	壺	SNDK I571												

2. 分析方法

ここでは、松田ほか（1999）の方法を用いる。この方法は、土器の薄片を作製して、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細砂までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べるものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるため、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解説も可能である。したがって、単に岩石片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、顕微鏡～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

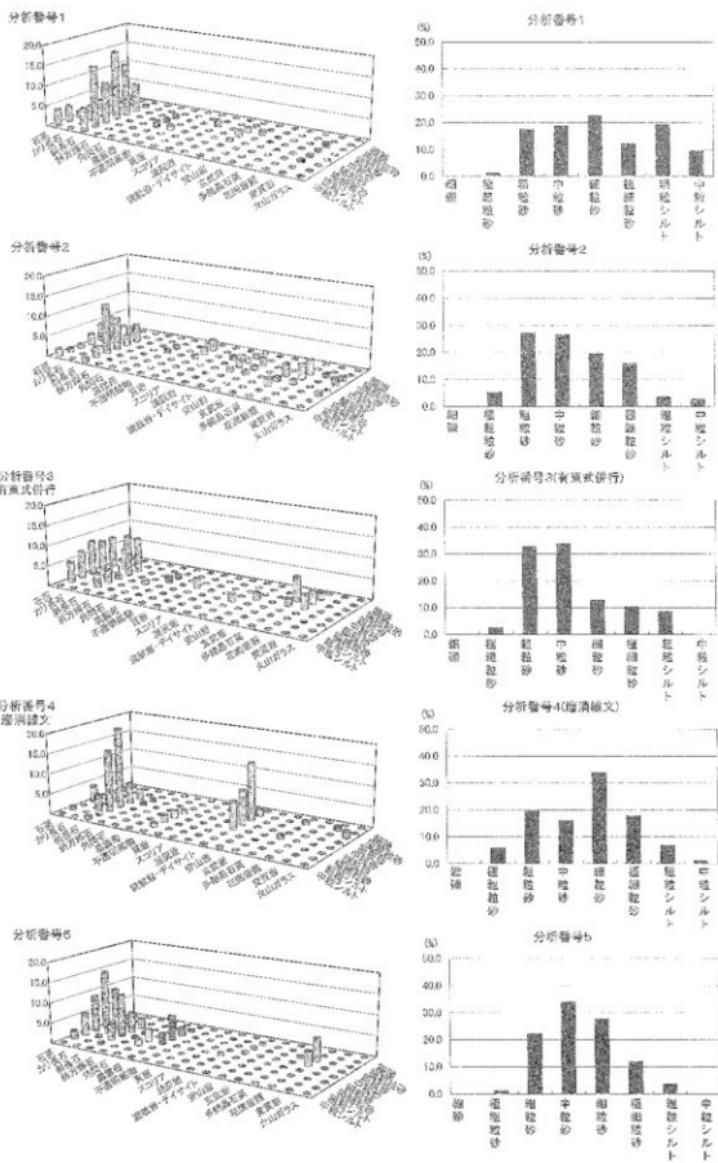
3. 結果

結果を第19表、第96～98図に示す。検出された鉱物片および岩石片の種類とその量比は、試料によつて比較的明瞭に異なるものとほぼ同様のものとのことが認められた。すなわち、グルーピングすることが可能である。特に鉱物片では、斜長石の多い組成の試料と石英と斜長石が同量程度に多い組成の試料が認められる。また岩石片の組成に注目すると、流紋岩・ディサイトが特に多い組成から、それに安山岩や玄武岩の加わる組成、さらにそれに加えて堆積岩類や花崗岩類ホルンフェルスまで含む組成が認められるほか、花崗岩類の多い組成も認められた。このような分析結果から、上述した順に、以下に示すA～F類までの6種類を設定することができる。

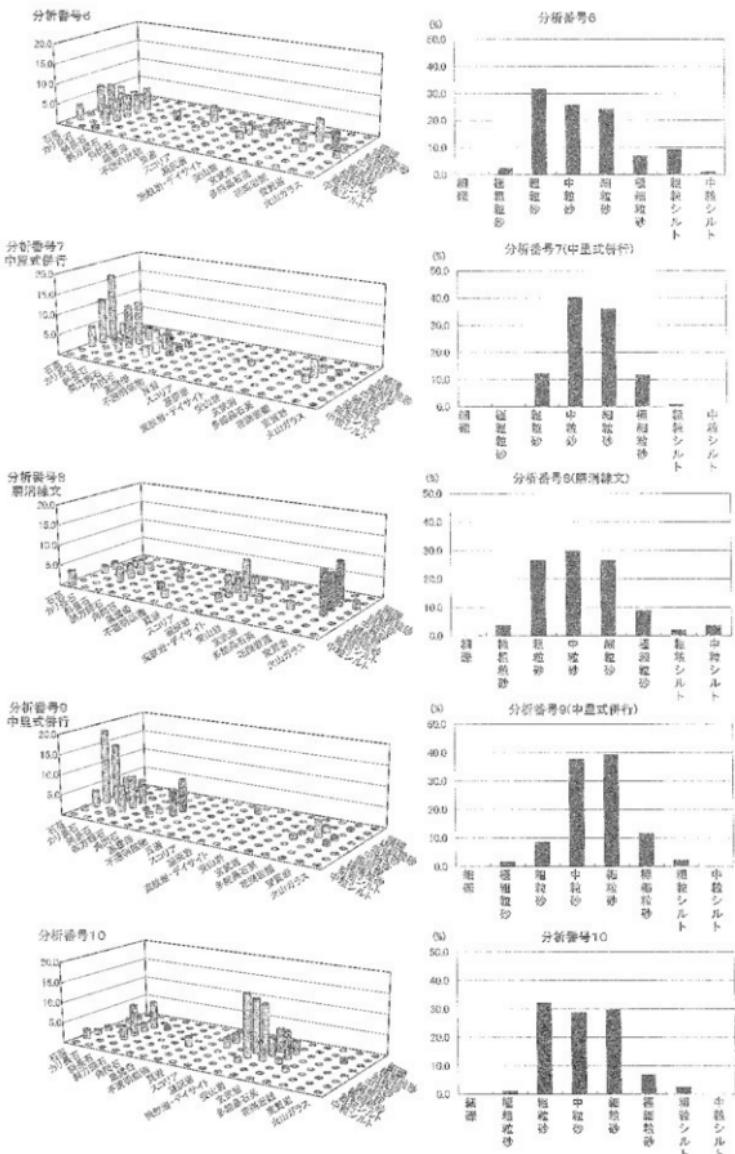
A類：斜長石の鉱物片と流紋岩・ディサイトの岩石片が突出して多く含まれる組成。斜長石以外の鉱物片では、少量の石英と不透明鉱物を伴い、微量の斜方輝石と单斜輝石が含まれる。流紋岩・ディサイト以外の岩石片では、微量の軽石、多結晶石英、変質岩、火山ガラスが含まれる。なお、流紋岩・ディサイトの斑晶は輝石であり、石英には二次鉱物の黒雲母が含まれている。また、変質岩は安山岩または玄武岩の風化岩である。今回の試料では、分析番号4の1点がA類に分類される。

B類：A類と同様に鉱物片では斜長石が突出して多いが、岩石片では流紋岩・ディサイトがやや多く、スコリアや安山岩および変質岩も少量ではあるが同量程度に含まれる。斜長石以外の鉱物片では、少量の石英と微量の黒雲母および不透明鉱物が含まれる。流紋岩・ディサイトは斜長岩状組織を示し、A類と同様に斑晶には輝石、石基には二次鉱物の黒雲母が認められる。また、安山岩には沸石を含むものも認められた。変質岩は風化岩などである。今回の試料では、分析番号1の1点がB類に分類される。

C類：A類と同様に鉱物片では斜長石が多く、岩石片では流紋岩・ディサイトが多い。ただし、安山岩および玄武岩の岩石片も少量伴われることが特徴となる。斜長石以外の鉱物片では、少量の石英と微量の斜方輝石および不透明鉱物を伴い、岩石片は上述した種類以外に後述のスコリアと多結晶石英および変質岩が含まれる。流紋岩・ディサイトの特徴は、上述したA類およびB類と同様である。また、安山岩と玄武岩は、新鮮で変質していない第四紀の火山岩に由来するものが多い。今回の試料では、分析番号10の1点がC類に分類される。



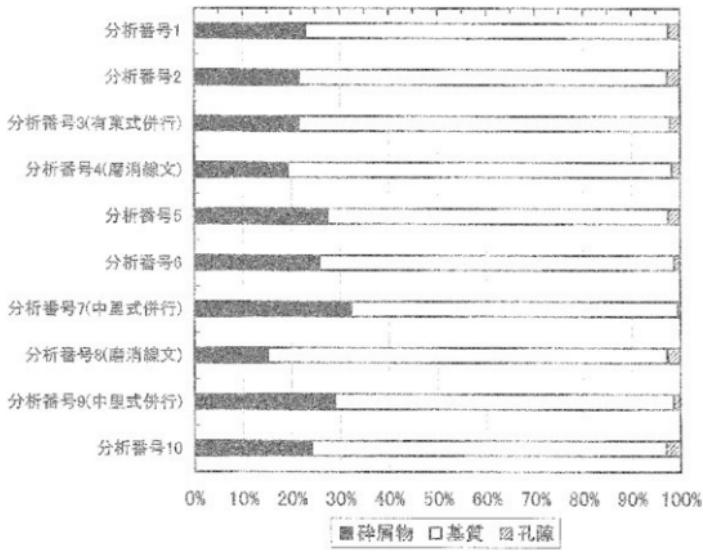
第96図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(%)および粒径組成①



第97図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度（%）および粒径組成②

第19表 薄片觀察結果

分類番号	分類区分	砂 質 の 様 成										合計
		片	片	片	片	片	片	片	片	片	片	
6	細粒											9
	粗粒砂											3
	粗粒砂	6	8	7								42
	中粒砂	5	4	6	11							34
	粗粒砂	9	5	7	1							32
	粗粒砂	1	1	7								9
	粗粒シルト	5	6									1
	中粒シルト											1
	無質											276
	孔隙											6
7	細粒											0
	粗粒砂											0
	粗粒砂	6	4	6								24
	中粒砂	33	22		7	1	9					80
	細粒砂	22	3	21	1	11	10					72
	粗粒砂	16	1	6		5	5					33
	粗粒砂											1
	粗粒シルト											0
	中粒シルト											0
	無質											416
	孔隙											5
8	細粒											0
	粗粒砂											0
	粗粒砂	1										1
	中粒砂	1										1
	細粒砂	1										1
	粗粒砂											0
	粗粒砂											0
	粗粒シルト											4
	中粒シルト	2										2
	無質											341
	孔隙											10
9	細粒											0
	粗粒砂											0
	粗粒砂	9	1		1							17
	中粒砂	23	4	12			16					79
	粗粒砂	37	5	15	1	2	13					78
	粗粒砂	8		15		5						22
	粗粒シルト	2		2								4
	中粒シルト											0
	無質											484
	孔隙											9
10	砂 質											0
	粗粒砂											0
	粗粒砂	1										1
	粗粒砂	1	5	1								29
	中粒砂		2									26
	細粒砂	1		7								27
	粗粒砂	1		5								6
	粗粒シルト	2										2
	中粒シルト											0
	無質											277
	孔隙											18



第98図 碎屑物・基質・孔隙の割合

D類：全体的に砂粒が少量しか含まれないが、その中で鉱物片では斜長石が多く、岩石片では凝灰岩と変質岩がやや多い。斜長石以外の鉱物片では微量の石英、黒雲母および不透明鉱物を伴い、岩石片では他に微量の流紋岩・ディサイト、安山岩、多結晶石英、珪長岩、珪化岩、変質岩、火山ガラスも含まれる。変質岩は風化した凝灰岩や火山岩などである。今回の試料では、分析番号8の1点がD類に分類される。

E類：鉱物片では石英と斜長石が同量程度に多く、それよりやや少量のカリ長石を伴い、他に微量の單斜輝石、角閃石、黒雲母を含む。岩石片では、チャート、頁岩、砂岩の堆積岩類、凝灰岩、流紋岩・ディサイト、安山岩の火成岩・火山岩類、そして多結晶石英と花崗岩類およびホルンフェルスおよび変質岩、珪化岩など、多種類の岩石を少量ずつ含むことが特徴である。今回の試料では、分析番号2、3、6の3点がE類に分類される。

F類：鉱物片では石英と斜長石が同量程度に多く、少量のカリ長石、角閃石および黒雲母を含み、微量の側方輝石と緑摩石も含む。岩石片は、全体的に少量であるが、その中では花崗岩類が比較的多いことが特徴である。花崗岩類以外の岩石片では、凝灰岩、流紋岩・ディサイト、多結晶石英、珪長岩、ホルンフェルスなどが微量ずつ含まれる。今回の試料では、分析番号5、7、9の3点がE類に分類される。

胎土中の砂粒の粒径組成では、試料によってモードとなる粒径が異なる。ここでは、全体的に粗粒の傾向から細粒の傾向に向かって1～4類までの分類ができる。

1類：中粒砂をモードとするが、粗粒砂も同程度に多く、これら2段階の粒径が突出して多い組成。

2類：粗粒砂をモードとするが、中粒砂も同程度に多く、さらに1類に比べて細粒砂と極細粒砂の割合も比較的高い組成。

3類：粗粒砂、中粒砂、細粒砂の3者が同程度に多く、いずれかがモードとなり、かつそれらが突出して多い組成。

4類：中粒砂または細粒砂をモードとし、両者が同程度に多く、かつこれらが突出して多い組成。

5類：細粒砂をモードとする組成

各試料の分類結果は第18表に併記する。全体的には3類が4点と多く、他の分類は、4類と5類が2点ずつ、1類と2類は1点ずつである。

碎屑物の量比（第98図）は、約15%から約35%までの範囲が示されることから、ここでは5%ごとに段階を区切り、碎屑物量の少ない順に15~20%をI類、20~25%をII類、25%以上をIII類とした。各試料の分類結果は、第18表に併記する。試料全体では、I類が2点、II類とIII類は4点ずつに分類された。

4. 考察

(1) 胎土の地域性

A類からF類まで設定された鉱物片・岩石片の組成は、それぞれが土器の原材料となった土（一般には粘土と呼ばれることが多いが、実際にはシルトや砂も含まれている）の採取された場所の地質学的背景を反映している。したがって、今回分析対象とした計10試料には、地質学的背景の異なる6つの地域で製作された土器が混在していると考えることができる。

西濃北遠縫の位置する砂州周辺の地形・地質について、沢村（1953, 1955）、日本の地質「中部地方」編集委員会（1988）、町田ほか編（2006）、杉山ほか（2010）などの記載により概観すると、すぐ東側には富士火山に由来する火山碎屑物からなる御殿場泥流堆積物により形成された、狩野川最下流の扇状地性三角洲が分布する。御殿場泥流堆積物は、玄武岩角礫を主体とする堆積物である（町田 1964）。狩野川の扇状地性三角洲南側の駿河湾沿いには、白浜層群と呼ばれる新第三紀中新世～鮮新世の火山岩・火碎岩（凝灰岩）から構成される静浦山地が分布する。白浜層群の火山岩・火碎岩のほとんどは安山岩質または玄武岩質であるが、沼津市獅子浜背後の山地斜面、伊豆の国市重寺付近の山地、同市神島付近の葛城山や城山にはディサイトからなる貫入岩体が分布している。静浦山地の東側は、狩野川の沖積低地（田方平野）を挟んで、第四紀の安山岩質または玄武岩質の溶岩や火碎岩からなる多賀火山が位置し、その北側に接して安山岩質または玄武岩質の溶岩・火碎岩からなる箱根火山が分布する。なお多賀火山西端の旧藤山町土手和田付近の山地は、白浜層群中のディサイトの貫入岩体により構成されている。

また本遺跡の位置する砂州は、駿河湾沿いに西方に伸びて富士川扇状地に接する。この砂州は主に富士川系の疊によって構成されており、駿河湾奥部を東向きに流れる沿岸流によって形成されたとを考えられている（松原 1984）。したがって、砂州の地質学的背景としては、富士川流域に分布する堆積物ということができる。上述した地質記載に、尾崎ほか（2002）などを加えて富士川流域の地質をみると、下流域の両岸には岩淵安山岩などの新第三紀鮮新世～第四紀前期更新世の安山岩類が分布するが、それより上流側の山地には富士川層群と呼ばれる新第三紀中新世の堆積岩類からなる地質が広く分布し、さらに上流の甲府盆地南側の山地には新第三紀中新世の凝灰岩類や火山岩類が分布、そして甲府盆地内の笛吹川流域には新第三紀中新世に貫入した花崗岩類からなる甲府深成岩体が分布している。おそらく、富士川扇状地を構成する堆積物中には、これら多種類の岩片石やそれに由来する鉱物片が含まれていると考えられる。そしてそれらが移動し、再堆積したものが砂州であり、移動中の淘汰はあるものの、その堆積物中には多種類の岩石片や鉱物片が含まれていると考えられる。

今回の胎土分類におけるA～F類のうち、A～D類までは斜長石が石英よりも多く、岩石片では火山岩および火碎岩を主体とする組成である。上述した地質学的背景との比較から、このような組成は西濃北遠縫よりも東側の地域に由来する可能性が高いと考えられる。流紋岩・ディサイトの突出して多い組成

のA類は、白浜層群中に分布するディサイトからなる貫入岩体の山地周縁部に由来する可能性がある。B類の流紋岩・ディサイトは同様に白浜層群中のディサイトに由来すると考えられ、混在する安山岩も沸石を含むことから、同様に白浜層群を構成する安山岩に由来すると考えられる。また、同時に混在するスコリアについては、富士山の噴出物に由来すると考えられることから、B類は白浜層群からなる静浦山地と御殿場泥流堆積物からなる扇状地性三角州とが接する、沼津市市街地付近に由来する可能性があることが示唆される。C類については、流紋岩・ディサイトは白浜層群に由来すると考えられるが、これに第四紀火山噴出物に由来する安山岩と玄武岩とが混在することから、両地質からの碎屑物が混在する田方平野の沖積低地堆積物に由来する可能性がある。D類の主な岩石片である凝灰岩・流紋岩・ディサイト・安山岩はいずれも白浜層群に由来すると考えられることから、D類も静浦山地周縁部に由来する可能性がある。ただし、D類は、スコリアを含まないことでB類とは区別され、第四紀火山噴出物を含まないことでC類とは区別されることから、D類の由来する地域としては、静浦山地周縁部でも沼津市街地に近い北部ではなく、また田方平野内でもない山地斜面沿いの地域が想定し得る。

E類は、堆積岩類や花崗岩類などを含むことで、A～D類とは地質学的背景の大きく異なる地域に由来すると考えられる。上述した周辺地質記載との比較では、E類の岩石片の種類構成は、富士川流域の地質分布と非常に良く一致する。したがって、E類の由来する地域としては、第一に富士川扇状地が推定され、第二に西通北遠跡も含めた静岡の分布域内が推定される。現時点では、両地域の自然堆積物の鉱物・岩石組成などを得ていないため、いずれの地域に由来するかを判別することはできない。今後の分析事例の蓄積により、E類の由来する地域を特定できるものと考える。

F類も、A～D類とは鉱物・岩石組成が大きく異なり、さらに上述したE類とも岩石組成の違いは大きい。したがって、F類の由来する地域は、少なくとも沼津市周辺や富士川下流域ではないと考えられる。また、F類の特徴である花崗岩類は伊豆半島には分布しないから、伊豆半島全域もF類の由来する地域からは除外される。前述した周辺地質の記載では、花崗岩類が広く分布する地域として甲府盆地が認められる。甲府盆地を取り囲む地質の概略は、前述した尾崎ほか（2002）および日本の地質「中部地方I」編集委員会（1988）でみることができる。前述したように、盆地南側の山地には西八代層群と呼ばれる新第三紀の火山岩・火碎岩が分布し、この地質は盆地西側の山地にも分布している。その北側山地の北部には、甲斐駒ヶ岳深成岩体と呼ばれる主に角閃石黒雲母花崗岩からなる地質が分布し、釜無川を挟んでその北東側には第四紀更新世の八ヶ岳火山が位置する。一方、盆地東側の笛吹川上流域には、前述した甲府深成岩体が広く分布する。甲府深成岩体を構成する岩石は、黑雲母花崗岩や角閃石黒雲母花崗岩などである。そして甲府市街地北側背後の山地は、新第三紀中新世～鮮新世とされるディサイト・安山岩質の溶岩および火碎岩が分布している。F類の岩石組成では、花崗岩類に伴って微量の砂岩、凝灰岩、流紋岩・ディサイトが認められているが、安山岩はいずれの試料からも認められない。F類の由来する地域として甲府盆地を想定した場合は、おそらく八ヶ岳起源の安山岩類が比較的多く混在するであろう釜無川流域よりも、凝灰岩の混じる笛吹川流域の方が可能性は高いと考えられる。ただし現時点では、F類の由来する地域を甲府盆地に特定できないため、他の花崗岩類が広く分布する地域の可能性は十分にありえる。

(2) 型式と胎土との関係

第18表には、A～F類の鉱物・岩石組成、1～5類の粒径組成、I～III類の碎屑物量という胎土分類と各試料の時期や器形およびその他の所見が並べてある。時期と胎土との対応をみると、弥生時代中期後葉と弥生時代中期中葉では、いずれの胎土分類にも異なる傾向があることが看取される。弥生時代中期後葉ではA、B、Eの各類に分かれれるが、弥生時代中期中葉ではF類が若干多い傾向を示し、他にC、D、Eの各類を伴い、後葉の土器で認められたA類およびB類は認められない。粒径組成では、弥生時代中期

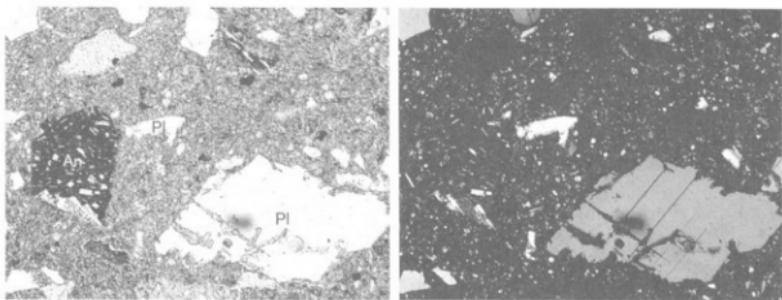
後葉の土器は、粒径の粗い1類と2類、粒径の細かい5類とに分かれるが、弥生時代中期中葉の土器は、粒径の中程度の3類と4類から構成されている。碎屑物の量では、弥生時代中期後葉の土器は中程度のII類が多い傾向にあり、少量のI類を伴うが、弥生時代中期中葉の土器は多量のIII類が若干多い傾向にあり、少量のI類を伴うという構成である。

以上述べた時期と胎土との対応関係から、弥生時代中期中葉と後葉とでは、使用されている土器の製作と供給に関わる事情が異なっていたと考えられる。特に鉱物・岩石組成の違いからは、製作地の違いが推定され、粒径組成および碎屑物量の違いからは、業地土の調整（砂と粘土の混合の仕方など）も異なっていたことが推定される。中でも中葉のE類と後葉のE類では、粒径組成・碎屑物量とも異なる分類になる事実は、製作地域が同じでも業地土の調整が時期により異なっていたことを示唆するものであろう。

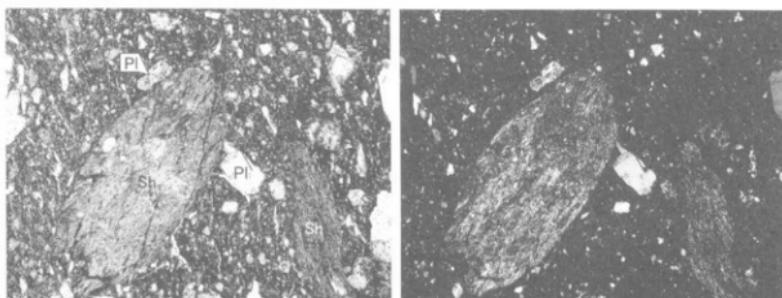
現時点では、各胎土分類の地域性もまだ仮説の段階であり、今後愛鷹山麓から駿河湾沿岸および伊豆半島も含めた地域において分析例を蓄積することにより、より確かな土器製作事情を推定することができるものと期待される。

引用文献

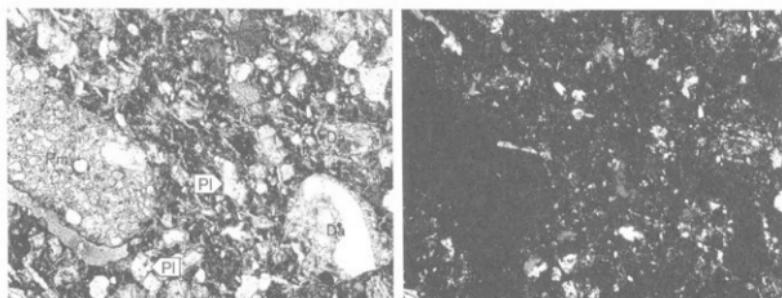
- 町田洋 1964 「Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史—第四紀末期について—（その1）（その2）」『地学雑誌』73, 293-308, 337-350
- 町田洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄編 2006 『日本の地形』5 中部, 東京大学出版会, 385p.
- 松原彰子 1989 「完新世における砂州地形の発達過程—駿河湾沿岸低地を例として—」『地理学評論』62A, 160-183
- 松田頼一郎・三輪若菜・別所秀高 1999 「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の觀察—岩石学的・堆積学的による—」『日本文化財科学会第16回大会発表要旨集』, 120-121
- 日本の地質「中部地方 I」編集委員会 1988 『日本の地質』4 中部地方 I 共立出版, 330p
- 尾崎正紀・牧本博・杉山雄一・三村弘二・酒井彰・久保和也・加藤慎一・駒澤正夫・広島俊男・須藤定久 2002 『20万分の1地質図幅「甲府」』 地質調査所
- 沢村孝之助 1953 『7万5千分の1地質図幅「沼津」』 地質調査所
- 沢村孝之助 1955 『5万分の1地質図幅「修善寺」』 地質調査所, 47p
- 杉山雄一・水野清秀・豹野謙一・村松 武・松田時彦・石塚治・及川輝樹・高田亮・荒井亮作・岡村行信・実松健造・高橋正明・尾山洋一・駒澤正夫 2010 『20万分の1地質図幅「静岡・御前崎」(第2版)』 独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター



1.分析番号1(環濠第3層 弥生中期後葉 壺)



2.分析番号2(環濠第3層 弥生中期後葉 壺)

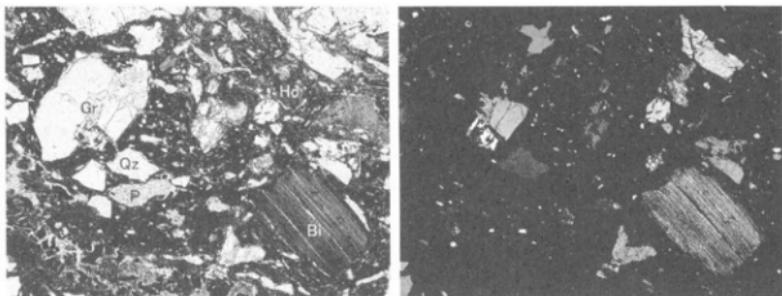


3.分析番号4(環濠第4層 弥生中期後葉 壺 磨消線文壺)

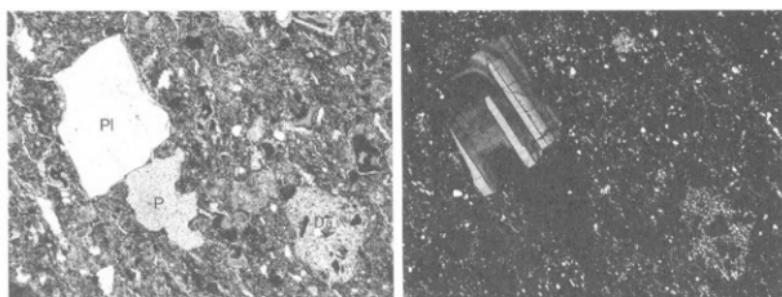
0.5mm

Pl:斜長石, Sh:眞岩, Pm:軽石, Da:デイサイト, An:安山岩。
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

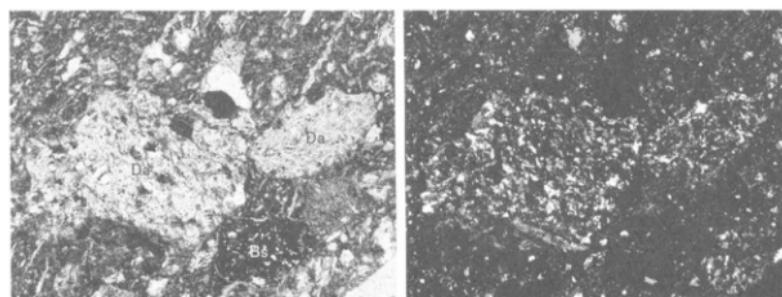
写真10 胎土薄片①



4.分析番号5(環濠第5層 弥生中期中葉 壺)



5.分析番号8(環濠第6層 弥生中期中葉 壺 磨消線文壺)



6.分析番号10(環濠底直上 弥生中期中葉 壺)

0.5 mm

Qz:石英, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Bi:黒雲母, Da:デイサイト, Bs:玄武岩, Gr:花崗岩,

P:孔隙.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

写真11 胎土薄片②

第3節 放射性炭素年代（AMS測定）

株式会社加速器分析研究所

1. 測定対象試料

西沼北遺跡は、静岡県沼津市小瀬訪・大瀬訪地内（北緯 $35^{\circ} 6' 38''$ 、東経 $138^{\circ} 50' 12''$ ）に所在する。南は千本浜、北は愛鷹山をのそむ標高6m程の低地で、浮島ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東縁にあたる。測定対象試料は、環濠の直上包含層出土木炭（No. 1 : IAAA-100632、No. 2 : IAAA-100633）、9号土坑列出土木炭（No. 3 : IAAA-100634）、157号土坑出土木炭（No. 4 : IAAA-100635）、環濠第4層出土木炭（No. 5 : IAAA-100636）、同第5層出土木炭（No. 6 : IAAA-100637）の合計6点である（第20表）。

2. 測定の意義

No. 1、2、5、6の測定では環濠の存続期間を明らかにする。No. 3の測定により土坑列の存続時期を確認する。No. 4の測定で環濠の内側にある土坑の存続期間を明らかにし、環濠との前後関係を知る。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA : Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と第20表に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に接着する。

4. 測定方法

3MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした ^{14}C -AMS専用装置を使用し、 ^{13}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第20表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第20表に、補正していない値を参考値として第21表に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の ^{14}C 年代がその

該範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMC が小さい (¹⁴Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第20表に、補正していない値を参考値として第21表に示した。
- (4) 層年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。層年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の層年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縱軸が¹⁴C年代、横軸が層年較正年代を表す。層年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下一行を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、層年較正年代の計算に、IntCal09データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。層年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第21表に示した。層年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6. 測定結果

環濠に関わる試料の¹⁴C年代は、直上包含層出土のNo. 1が $90 \pm 20\text{yrBP}$ 、No. 2が $860 \pm 30\text{yrBP}$ 、第4層出土のNo. 5が $2500 \pm 30\text{yrBP}$ 、第5層出土のNo. 6が $2240 \pm 20\text{yrBP}$ である。環濠覆土出土試料について検討すると、覆土第4、5層から弥生時代中期の土器（中葉中葉主体）が出土していることに照らして、層年較正年代 (1σ) でBC 4世紀前半とBC 3世紀前葉から中葉頃の範囲が示されている第5層出土No. 6の年代値が整合的と考えられる。第4層出土のNo. 5はNo. 6よりも若干古い値を示した。直上包含層のNo. 1は層年較正年代 (1σ) で17世紀末以降、No. 2は12世紀後半から13世紀初頭の範囲となっている。周辺の包含層から弥生時代中期中葉から奈良・平安時代までの土器が混在して出土していることとあわせて、これら2点の年代値は環濠が存続した期間の下限を矛盾なく示している。

9号土坑列出土木炭No. 3の¹⁴C年代はModernである。

157号土坑出土木炭No. 4の¹⁴C年代は $180 \pm 30\text{yrBP}$ で、層年較正年代 (1σ) は17世紀後半以降の範囲となった。157号土坑は環濠の内側に位置しているが、この土坑が環濠よりもずっと新しい時期の遺構である可能性を示す結果となった。

炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第20表 制定結果①

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						LibbyAge (yrBP)	pMC (%)
IAAA-100632	No. 1	遺構：環濠 層位：直上包含層	木炭	AAA	-23.20±0.38	99±20	96.94±0.30
IAAA-100633	No. 2	遺構：環濠 層位：原上包含層	木炭	AAA	-25.25±0.65	860±30	89.80±0.28
IAAA-100634	No. 3	遺構：9号土坑列 層位：覆土	木炭	AAA	-22.91±0.63	Modern	104.02±0.32
IAAA-100635	No. 4	遺構：157号土坑 层位：覆土	木炭	AAA	-26.03±0.74	180±30	97.84±0.31
IAAA-100636	No. 5	遺構：環濠 層位：第4層	木炭	AaA	-23.45±0.61	2,500±30	73.24±0.24
IAAA-100637	No. 6	遺構：環濠 層位：第5層	木炭	AaA	-24.76±0.66	2,240±20	75.68±0.23

[#3674]

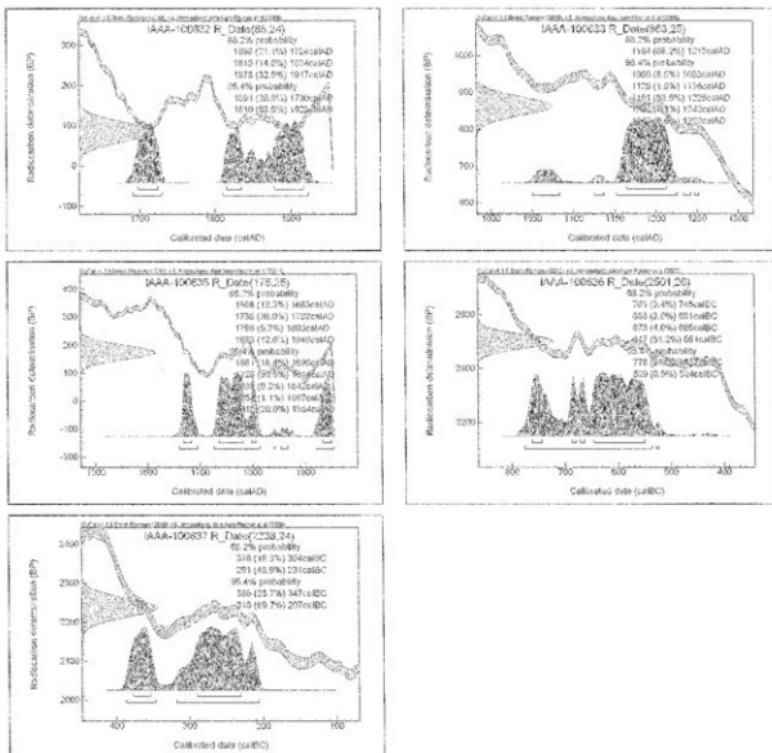
第21表 測定結果②

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		層位校正用 (yrBP)	1σ層年代範囲	2σ層年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-100632	60±20	99.30±0.29	85±24	1698calAD-1794calAD (21.1%) 1815calAD-1834calAD (14.6%) 1878calAD-1917calAD (32.5%)	1691calAD-1730calAD (25.8%) 1510calAD-1823calAD (69.6%)
IAAA-100633	870±20	89.76±0.25	863±25	1164calAD-1213calAD (68.2%)	1050calAD-1083calAD (8.5%) 1125calAD-1186calAD (1.8%) 1151calAD-1225calAD (83.5%) 1233calAD-1242calAD (1.1%) 1247calAD-1252calAD (0.6%)
IAAA-100634	Modern	104.46±0.29	Modern		
IAAA-100635	190±20	97.63±0.27	175±25	1668calAD-1683calAD (12.3%) 1736calAD-1782calAD (38.0%) 1798calAD-1805calAD (5.3%) 1933calAD-1949calAD (12.6%)	1661calAD-1695calAD (19.4%) 1726calAD-1914calAD (55.6%) 1839calAD-1842calAD (0.3%) 1853calAD-1887calAD (1.1%) 1918calAD-1954calAD (30.0%)
IAAA-100636	2,480±30	73.47±0.22	2,501±36	783calBC-745calBC (9.4%) 688calBC-681calBC (3.6%) 673calBC-665calBC (4.0%) 647calBC-551calBC (51.2%)	776calBC-637calBC (94.9%) 529calBC-524calBC (0.5%)
IAAA-100637	2,240±20	75.71±0.21	2,238±34	378calBC-354calBC (19.3%) 291calBC-231calBC (48.9%)	386calBC-347calBC (25.7%) 318calBC-207calBC (69.7%)

[参考値]

文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 327-360
 Reimer, P. J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP,
Radiocarbon 51 (4), 1111-1150



第99図 層年校正年代グラフ

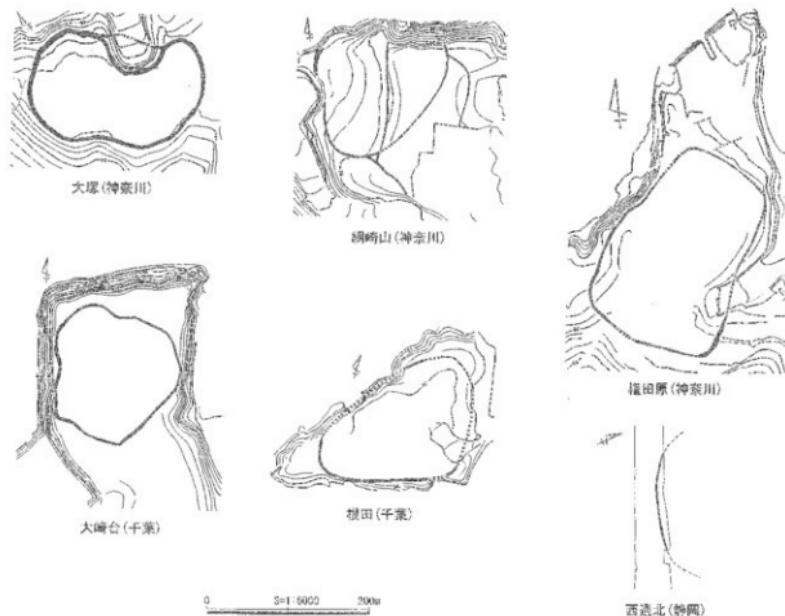
第V章 考 察

第1節 環濠の特徴と機能について

1. 「環濠」の呼称について

西通北遺跡で検出された大型の溝状遺構を「環濠」とした。濠の底部から出土した土器の年代観や放射性炭素年代測定結果（第IV章第3節参照）から、濠は弥生時代中期中葉以前に掘削されていた可能性が高い。静岡県内での類例としては、浜松市の中村遺跡のSD01から丸子式（弥生時代中期前葉）土器が出土したことから、県内最古の環濠と考えられている（鈴木編 2005）。東日本でも弥生時代中期中葉以前にまで遡る環濠の検出例は少なく、埼玉県熊谷市の泡上遺跡（中島ほか編 1984）や神奈川県小田原市の中里遺跡（戸田 1999、河合 2008など）が知られている程度である。ちなみに、中里遺跡例は環濠的役割をもつ溝と旧河道とされ、「環濠」と呼称されてはいない。本遺跡での検出例は、これらの類例に並び県内最古級ないしは東日本最古級の環濠と位置づけることが可能であろう。

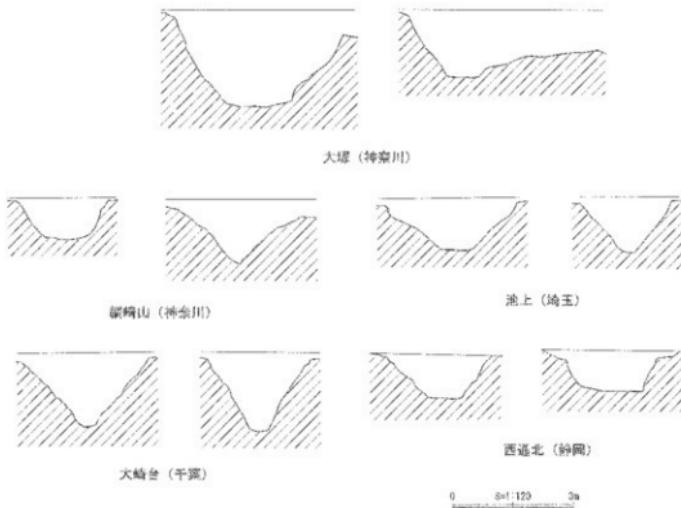
ただし、今回の調査では調査範囲の制約もあり、環濠の内側に展開したであろう住居址等の居住域を確認するには至らなかった。環濠が環濠集落に伴うものであるのならば、集落なき環濠という表現は適切なのであろうか。「環濠」とは言うまでもなく環状の濠のことである。斎藤忠氏の『日本考古学用語辞典』（斎藤 1998）では「環濠（かんごう）→（ほり）」とした上で、「堀（ほり）：濠・塚・渠・溝・隄」と



第100図 弥生時代中期環濠の平面形態の諸例（武井編 1991をもとに作成）

も書く。溝と同じように一種の水路でもありかつ水を貯える施設でもあるが、考古学上の遺跡では、古墳のまわりや層敷や城郭のまわりをはじめ生産遺跡・集落遺跡などに、この種の施設がみられる。また、「ほり」にどの文字をあてるかについては「堀と濠」と最も適切であるが、「堀」の場合、「穿孔」の意味も強いので、むしろ「濠」が適当であろう。すなわち周濠・環濠のように用いてもよい」とされる。環濠と言えば弥生時代の集落外縁に巡らされる特有の施設と理解されることが多いが、古墳時代の豪族居館や中・近世の屋敷を巡る濠もある。環濠が取り囲むものは居住域だけでなく、貯蔵穴群や工房群、墓域もある場合もある。また、縄文時代の環濠の存在も指摘され、祭祀等に用いられる非日常的な空間と考えられる（岡村 1997など）など、環濠の性格やその機能について統一的な見解が定まっている状況とは言い難い。そこで本書では、居住域の有無をもって「環濠」呼称の可否は問わない立場をとる。

本遺跡で検出された大型溝状遺構を環濠とした根拠には、①遺構の規模（長さ・幅・深さ）②平面形態③断面形態の3点が挙げられる。他地域における弥生時代中期の環濠と比較しながら、この3点について検討を進めていく。本遺跡の環濠の規模は、縱延長約120m、平均幅2.5m、最大幅4.5m、検出面からの深さは1m前後を測る。規模については、環濠の典型的な事例とされる神奈川県横浜市の大塚遺跡例（武井編 1991）などと比較しても見劣りするものではないだろう。小出耕穂氏は、南関東地方の弥生時代中期後葉の環濠を集成検討した結果、中期の環濠の平面形態は「円への指向」を最も基本的な要素としており、後期に多くみられる直線的な「条溝」タイプの環濠は認められない点を指摘している（小出 2006）。本遺跡の環濠の平面形態も、円弧状を描いており、弥生時代中期の「円への指向」をもつ環濠の一例として捉えることができよう。環濠の断面形態については、第101図に示されるように、台地上の遺跡では断面V字形のいわゆる薬研掘りが多い。その反面、池上遺跡のような低地付近（自然堤防上）の遺跡では、本遺跡のような断面U字形あるいは逆台形に近い形態のものも認められる。また、大



第101図 弥生時代中期環濠の断面形態の諸例（武井編 1991をもとに作成）

塚遺跡のように台地上に立地しながらも、断面U字形のものも存在している。本遺跡の環濠の断面形態は低地における弥生時代中期の環濠として妥当なものと思われる。

以上の3点の検討から、本書では西通北遺跡で検出された大型の溝状遺構を「環濠」と呼ぶ。

2. 「空塚」か「水濠」か

環濠の「ごう」の字を「濠」とすべきか「塚」とするか意見が分かれることもある。水を湛えた環「濠」と、底を覗いて掘り方を見通せる環「塚」とでは、「ほり」としての機能も異なったものと考えられる。西通北遺跡の環濠が、水濠あるいは空塚であったか、またその機能を特定することを目的として、本調査期間中に環濠に対する自然科学分析を実施した。環濠覆土6層の各層位から採集したサンプルを対象に珪藻分析、花粉分析、花粉イネ属同定、植物珪酸体分析、種実分析を行い、当時の古環境に関する情報を得ることができた。分析結果は第IV章第1節に詳述されているが、珪藻分析によって水生珪藻の化石が数多く認められ、環濠は水を湛えていた時期があったことが判明した。ただし、常時環濠内が浸水していた訳ではなく、乾燥した時期もあったと考えられ、環濠は乾湿を繰り返すような環境下で、埋没が進行していったことが考えられた。また、種実分析によってススキ属が全ての層位を通して多く検出されるなど、当時の周辺植生は湿生植物が繁茂する湿地のような環境下であったことが考えられる。環濠の周辺が水捌けの悪い湿地であったことも、環濠が水を湛えていたことを想起させる。

環濠が水濠であったことは、自然科学分析の結果以外でも、確認することができた。写真12は環濠の側壁の様子である。濠の中央よりやや下位に、ほぼ同じ高さで横位の10cm前後の窪みが認められる。この窪みは環濠内のほぼ全域で認められた。環濠が埋没する過程で、この窪み付近が底面となった際に、濠の中に溜まった水の侵食作用によって生じた窪みであることが考えられる。このことから、環濠内に水が10cm程溜まっていた時期が存在したことが推定される。また、土器の出土状況からも環濠の状態を



写真12 環濠側壁の窪み

知ることができる。環濠内の土器出土状況については、第1章第2節で詳述したように、第5・6層でまとまって出土する土器集中が4箇所認められた。土器は局所的に出土する地点が数箇所あるだけで、溝渠なく出土する訳ではなく、土器が出土しない箇所では、まさに一片の土器片の出土も認められなかつた。土器集中における土器は同一個体のものが多く、接合すれば完形に近い状態にまで復原できる土器もあった。すなわち、数個体の土器が濠の中に転落あるいは廻収されたような印象を受ける出土状況であった。もし、環濠の中に水が溜まっており、流路の如く水の流れがあったのであれば、濠の中へ落ちた土器の破片が一面に散乱したような出土状況になることが想定されよう。つまり、環濠内の土器は濠の中を水流などによって移動はしなかつた、土器を移動させるほどの流れはなかつたと考えることができる。そのことを傍証するように、出土した土器の表面は鋭く、流れてローリングを受けた土器に特有の摩滅したような痕跡を認めるることはできなかつた。

珪藻分析の結果や濠の中あるいは周囲に湿生植物が繁茂していたような植生、側壁面の水の浸食の痕跡から、環濠には水が溜まっていた、つまり水濠であったと考えられる。ただし、自然科学分析で得られた乾燥を繰り返したような環濠の水城環境、集中的かつ局所的な土器出土状況、出土土器には大きく磨滅したような痕跡が認められなかつたことから、水は溜まっていたものの環濠は流路としては使用されていなかつたことが分かる。また、付け加えるのであれば、土器には砂や砂利を含む層が認められなかつたことも環濠内に流れがなかつたことの状況証拠と言える。環濠は雨水等が溜まるにまかせたまま、乾燥を繰り返していたのであろう。

3. 環濠の性格と機能

環濠には、今まで①審覈の進入を防ぐ②敵対する集団の進入を防ぐ③土地の境界を区画する④精神的な結界として区画する⑤導水や排水のための流路とする⑥廃棄物を処理する等のいくつかの用途が推定されてきた。特に、佐原真氏は弥生時代に起こった戦争を証拠立てる根拠の一つとして環濠集落の存在を挙げている（佐原 1999）。愛知県の朝日遺跡で検出された逆茂木や佐賀県の吉野ヶ里遺跡で見つかった物見櫓の存在と合わせて、環濠は防衛的機能をもつものとして説明していった感もある（佐原 1991・2002、田中 1991、森岡 1991など）。一方、東日本弥生社会における環濠の機能として、捕虜収容所の如く村人の逃亡を防ぐため（岡本 1998）、集団の内訌結束を図るため（久世 2001）、集落の形成や再生を記（祈）念して掘られた（小出 2006）などの環濠と戦争とを直接結び付けない用途が提示されている。

上記のような環濠に対する研究や評価を踏まえて、西道北遺跡における環濠の性格と機能を考えてみたい。用途①や②のように本環濠に防衛的な機能を想定することには、慎重にならざるを得ない。積極的に集団同士の抗争を示す遺物や防衛性の高い施設を備えていたとは考え難いためである。出土遺物は土器を除けば石鏡に鍛錬、不明木製品のみであり、土層断面の觀察からは、環濠の内側ないしは外側から積み上げた土が流入している痕跡は認められなかつた。土墨ないしは土手のような構造物は環濠には伴わなかつた可能性が高い。ただし、本環濠の幅は平均2.5m、最大で4.5m程を測り、容易に飛び越えることはできない。用途①に關してのみ、ある程度機能し得たことが考えられる。用途③や④の区画についてでは、本遺跡が起伏の少ない低地上に位置していることを考慮すれば、濠によって内外を境界することは自然なことと考えられる。ただし、現時点では環濠の内側の様相が判明していないことから、それ以上踏み込んで検討を加えることは難しい。用途⑤は検証が困難であるが、環濠内へ廃棄物を処理していたか否かは、土器の出土状況から考へると、少なくとも環濠内は土器捨て場あるいは土器溜まりのような様相は呈していなかつた。埋没（機能停止）時に数個体の土器が廃棄あるいは転落した痕跡が認められるほかは、環濠内は比較的の整然としている印象を受ける。

用途⑥に関しては、調査成果から踏み込んだ検討が必要とされる。前述したように環濠が水濠である

ものの、流路としては機能を得なかった点から、導水や排水といった機能を想定することは躊躇われる。調査区内は現地形・旧地形とも勾配がほとんど無く、水をいずれかの方向へ流す、あるいは取り込むといった用途は想定し難い。また、環濠内も意識的に高低差をつけて掘削されたような痕跡は認められなかった。ただし、流路としては機能しなかったとしても、低湿地帯に立地する環境や珪藻分析の結果を考慮すれば、雨水や湧水を溜めておく遊水池の如く機能していた可能性は十分考えられる。最初からそれを目的として掘削されたかは定かではないが、環濠が閉口している間は、環濠周辺の雨水や湧水による漫水は緩和されたことであろう。遺跡の立地環境に目を向けて評価するのであれば、雨水や湧水等による水害対策に掘削された可能性は捨て切れず、治水的な機能を考えておきたい。

上記の検討から、本遺跡の環濠の性格と機能についてまとめてみたい。本遺跡の環濠に防衛的機能を想定するのであれば、対人ではなく害獣に対しては機能していた可能性はある。物理的あるいは精神的区画については十分考えられるが、環濠内の居住域の存在が確定していない段階では保留とせざるを得ない。また、環濠内に雨水や湧水を蓄えておくことによって、環濠周囲の水害を緩和する治水的機能を果たしていた可能性が考えられる。ただし、最初から環濠に治水的機能を求めて掘削が行われたものなのか、掘削した結果として治水的機能を有すことになったのかは判然としない。

4. 出土遺物について

弥生時代中期の壺と甕が、環濠内からまとまって出土した。壺は、細頸のもので口縁部から肩部上半にかけて太拙の沈線や縄文・刺突文等を組み合わせながら、三角文・四角文を横位に連続させて文様帶を構成している。甕は、口縁部から底部まで横方向を基調とした粗い刷毛目調査が施されたものが出土している。刷毛目調整の後、胴央部に指頭等によって2~3条の横方向の磨消線が施された「磨消線文甕」と呼ばれるものである。

小野真一氏はかつて沈線や縄文、刺突文を組み合わせた文様が施される絆頸壺に代表される、東駿河地域の弥生時代中期中葉の土器型式として鶴ヶ池式を設定した（小野 1979など）。西通北遺跡環濠出土土器も第5・6層を中心として鶴ヶ池式の特徴をもつ壺が認められる。しかし、鶴ヶ池式は、瀬江地域の同時期の稲田式と大差なく、ほぼ同一型式（小野 1976）とされるとともに、南関東地方の須和田式にきわめてよく似る（小野 1966）とされるなど、その実態が判然としていない部分が多い。原因の一つとして、東駿河地域における当該期の資料の少なさがあげられる。弥生時代中期中葉の土器は、沼津市域においては、愛鷹丘陵に位置する古城遺跡（秋本 1972、鈴木編 1984）やニッケ御遺跡（山本・仲家・前田編 1993）、浮島ヶ原の雄鹿塚遺跡（鈴木編 1989）からの出土が知られているが、周辺地域においても三島市の御殿川流域の中手乱遺跡や鶴喰広田遺跡の汎流跡から出土している（佐野・岩本編 1998）程度であり、しかも明確な遺構からの出土事例ではない。また、壺のみの出土が多く、甕を含めた組成が不明確であった。

本遺跡では、環濠内部から壺が発見されており、第3層以下は弥生時代の資料のみが含まれるなど、他の時期の資料の混在が無い良好な出土事例と言える。今までまとまった資料が少なかった東駿河の弥生時代中期中葉の土器断年を検討するうえで、基準的な資料になり得るだろう。また、出土弥生土器胎土分析の結果（第IV章第2節参照）からは、弥生時代中期中葉と後葉とでは、使用されている土器の製作と供給に関わる事情が異なっていたことが考えられ、土器の移動やその背後の人々の交易関係など、当該期の流通に関する課題も提示された。

土器以外に特筆すべき資料として、環濠第3層から出土した1点の鉄器が挙げられる。前述の通り、第3層出土土器は概ね弥生時代中期後葉に位置づけられることから、出土鉄器も弥生時代中期後葉に帰属する資料である可能性が高い。東海地方での弥生時代鉄器の出土事例は少なく、管見に触れる限り、

第22表 東海地方出土弥生時代鐵器地名表

第22表の通り55遺跡より1,548点が認められた。ただし、この中には愛知県豊田市の南山畠遺跡（天野編 1999）で検出された鍛冶関連遺物（SB01・04・08）より出土した鉄器製作時の煅造薄片等の微小鉄片や鉄滓等1,378点も含まれている。そのため、製品としての鉄器の数は、總点数からこの鍛冶関連遺物1,378点を除いた170点となる。これらはほぼ全てが弥生時代後期から終末期の資料とされている。本遺跡発見の鉄滓は、弥生時代中期中葉の資料とされている愛知県名古屋市の朝日遺跡61E区SD02出土刀子（宮原編 1992）とともに、東海地方では稀有名な弥生時代中期の鉄器と考えられる。本資料は静岡県内では9例目の鉄滓出土事例となり、弥生時代中期の鉄滓出土事例では言うまでもなく初めてとなる。また、静岡県内最古の鉄器になる。東海地方における弥生時代中期の鉄器の少なさが明らかになる一方で、南関東地方では弥生時代中期後葉（宮ノ台式期）に属する鉄器の出土数が一定量認められている（安藤 1997）。今後はこのような状況を踏まえ、東海地方のみならず南関東地方を含む東日本社会への鉄器普及を考えるうえで、本遺跡出土資料を位置づけていく必要があろう。

5. 東駿河地域の弥生時代集落について

西通北遺跡が位置する静岡県東部地域（東駿河地域）における弥生時代集落の展開について触れておきたい。駿東郡長泉町の大平遺跡は東駿河地域のみならず静岡県内最初期の弥生時代遺跡である（佐野・水上編 2001）。大平遺跡では弥生時代前期末の住居址が検出され、条痕文土器（窓）や黒曜石製石器が出土するなど、弥生時代開始期の人々の暮らしを明らかにする手がかりを得ることができた。大平遺跡は愛鷹山南東麓に位置する丘陵上の遺跡で、住居址は狩猟採集生活におけるキャンプ地として機能していた可能性が考えられており、集住や農耕の痕跡は認められなかった。弥生時代中期前葉・中葉段階では、東駿河地域において明確な遺構やそれに伴う遺物は見つかっていない。特に、人々が集団となって暮らしを営んだ大規模な集落の痕跡は未だに発見されていない。このような背景の中で、本遺跡で検出された環濠は、第II章第1節で触れたように、現在の沼津市域低地部が海から灘へそして陸地化していく過程で、丘陵部から低地部に定住し始めた最初の弥生時代人の活動痕跡を示すものとして評価できる。

静岡県内の弥生時代中期における明確な環濠の検出事例は稀少で、弥生中期環濠集落の形成と展開について言及できるだけの資料が揃っているとは言い難い。弥生時代後期段階に入ると、浜松市の伊場遺跡の三重環濠（斎藤ほか編 1977）に代表されるように、県内での環濠および環濠集落の検出・調査例は弥生中期段階のそれとは比較にならないほど増加する。弥生時代後期の「環濠」は無縫研究を構成する要素の一つとして扱われ、県内環濠集落の地域性やその展開と解体に関しては言及されている（松井 1988・篠原 2002）。東駿河地域の弥生後期環濠集落としては、本遺跡の立地する浮島ヶ原低地のやや北側、愛鷹山南麓丘陵末端部の低台地上に位置する尾崎遺跡（内藤編 2000）や目黒身遺跡（小野編 1970）などが知られている。環濠集落以外でも、植出遺跡（羽二生・岩崎編 1997）や北神馬土手遺跡（矢田編 2001）など、愛鷹山南麓丘陵上に弥生時代後期から終末期にかけての大規模集落が営まれるようになる。

上記のことから、東駿河地域（特に沼津市域とその周辺）においては、丘陵部から低地部へ、さらには低地部から丘陵部へという弥生集落の変遷過程が認められるようである。本遺跡の環濠は、弥生時代前期から中期における最初の集落変遷である低地部への移住について考えるうえで、貴重な一例と言えよう。

参考文献

- 秋本寛道 1972 「沼津市興國寺城出土の弥生式土器」「駿豆考古」第12号 駿豆考古学会
- 足立頼司ほか編 1995 「長崎遺跡」IV(遺物・考察編) 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第59集 貢
団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 天石夏実 2000 「鳩ノ道遺跡(第6次)」「ふちゅ～る」No.8 静岡市教育委員会
- 天石夏実 2002 「資料紹介—静清平野出土の銅鏡・銅鏡・銅環—」「ふちゅ～る」No.10 静岡市教育委
員会
- 天野博之編 1999 『南山畠遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 豊田市教育委員会
- 浅野敏 1988 「小黒遺跡」「静岡・清水平野の弥生時代—新出土品にみる農耕生活—」静岡市立登呂博物館
- 安藤広道 1997 「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」「横浜市歴史博物館研究紀要」第2
号 横浜市歴史博物館
- 石川治夫編 1990 「雄鹿塚遺跡発掘調査報告書」II 遺物編 沼津市文化財調査報告書第51集 沼津市教
育委員会
- 石黒立人ほか編 1994 『朝日遺跡』V(土器編・総論編) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34
集 貢団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤美鈴 1996 「峯山台状墓・崇信寺古墳群」「静岡県赤町飯田の遺跡」赤町教育委員会
- 岩野見司ほか編 1965 「川路萩平(C地点)遺跡・大宮八劍遺跡」新城市教育委員会
- 梅島満 1978 「駿河湾を中心とする土師器の研究」「駿河」第31号 駿河郷土史研究会
- 岡村達雄 1997 「縄文時代の環濠、溝、幅列」「考古学ジャーナル」No.412 ニュー・サイエンス社
- 岡本孝之 1998 「外土塙環濠集落の性格」「異貌」第16号 共同体研究会
- 小栗謙次郎 1932 「銅鏡鐵盤を共存した名古屋市瑞穂町東牧の彌生式遺跡」「愛知縣史蹟名勝天然紀念
物調査報告」第十 愛知縣
- 小栗謙次郎 1933 「名古屋市西區則武町向貝塚」「愛知縣史蹟名勝天然紀念物調査報告」第十一 愛知
縣
- 小野真一 1957 『静岡県東部古代文化總覽』 蘭溪社書店
- 小野真一 1966 「駿河湾地方における中斐弥生文化について」「上代文化」第36輯 國學院大學考古學
會
- 小野真一 1976 「入門講座 弥生土器—中部東海東部2—」「考古学ジャーナル」No.127 ニュー・サイ
エンス社
- 小野真一 1971 「駿河矢崎遺跡調査略報」「駿豆の遺跡研究」(1) 沼津女子高等学校郷土研究部
- 小野真一 1979 「駿豆地方の弥生式土器集成」「駿豆考古学会
- 小野真一編 1970 「目黒身一弥生・古墳時代集落址の調査—」沼津考古学研究所
- 小野真一ほか編 1968 「東名高速道路(静岡県内工事)関係埋蔵文化財調査報告書」 静岡県教育委員
会・日本道路公團
- 金子智子編 2004 「城ノ谷遺跡発掘調査報告」「三重県埋蔵文化財センター
- 河合英夫 2008 「中里遺跡の衝撃—南関東農耕形成期の集落—」「新神奈川・新都市論」 神奈川県考古
学会
- 川崎志乃ほか編 2009 「上箕田遺跡(第3次)・上箕田城跡、上原遺跡、尾野山城跡、打越城発掘調査
報告」「三重県埋蔵文化財センター
- 木村弘之編 1992 「竹之内1号墓遺跡発掘調査報告書」「磐田市教育委員会

- 久世辰男 2001 「集落遺構からみた南関東の弥生社会」 六一書房
- 藤本俊明編 2001 『菖蒲ヶ谷遺跡・山ノ口古墳群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第124集 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 小出輝雄 2006 「環濠は戦争用遺構か—南関東弥生時代中期後半期の検討から—」『古代』第119号 早稲田大学考古学会
- 斎藤忠 1998 『日本考古学用語辞典』 学生社
- 斎藤忠ほか編 1977 『伊場遺跡遺構縦』 伊場遺跡発掘調査報告書第2集 浜松市教育委員会
- 齊藤基生・可児光生・磯谷祐子編 1994 『伊源栗地遺跡発掘調査報告書』 美濃加茂市教育委員会
- 佐口篤司編 2003 『県道浜松袋井線緊急地方道道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 佐口篤司ほか編 2006 『新蒼山遺跡発掘調査報告書』 III 新豊院山古墳群 D地点の発掘調査 磐田市教育委員会
- 佐野五十三・岩本貴編 1998 『御殿川流域遺跡群』 IV 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第104集 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐野鶴彦・水上綾子編 2001 『大平遺跡』 II 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第129集 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 佐原真 1991 「弥生時代の戦争」『邪馬台国時代の東日本』 六典出版
- 佐原真 1999 「日本・世界の戦争の起源」『人類にとって戦いとは I 戦いの進化と国家の形成』 東洋書林
- 佐原真 2002 「弥生時代の戦争」「古代を考える 程・金属・戦争—弥生—」 吉川弘文館
- 宍戸信悟ほか編 1989・1991 「砂田台遺跡』 I・II 沢奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 猿原和大 2002 「環濠—磐田県における弥生時代後期環濠集落の理解に向けて—」『静岡県における弥生時代集落の変遷』 静岡県考古学会
- 柴田謹編 1993 『椿野遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第52集 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 渋谷昌彦・坂巻隆一・足立順司編 1985 『田ノ谷遺跡発掘調査報告書』 岐阜市教育委員会
- 清水政宏編 2003 『山奥遺跡』 I 四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書31 四日市市教育委員会
- 清水政宏編 2004 『山奥遺跡』 II 四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書32 四日市市教育委員会
- 杉山和徳 2009 「東駿河の弥生時代の始まり」「平成21年度遺跡調査報告会 静岡の原像を探る」 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所・静岡県教育委員会
- 杉山和徳 2010 「西通北遺跡—弥生時代中期中葉の環濠の調査—」『月刊考古学ジャーナル』 No.600 ニュー・サイエンス社
- 鈴木光一編 1994 『祝田遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第51集 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木敏則編 2005 『梶子北（三永）・中村遺跡—弥生時代縄—』 財團法人浜松市文化協会
- 鈴木裕荒編 1984 『興國寺跡跡伝天守台跡・伝東船着場跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第32集 沼津市教育委員会
- 鈴木裕篠編 1989 『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第46集 沼津市教育委員会
- 澄田正一編 1967 『新編 一宮市史』 資料編二 一宮市
- 武井則道編 1991 『大塚遺跡』 弥生時代環濠集落の発掘調査報告 I 遺構編 横浜市埋蔵文化財セン

タ-

- 田中秀和編 1998 『大城遺跡発掘調査報告書』安濃町埋蔵文化財発掘調査報告5 安濃町教育委員会・安濃町遺跡調査会
- 田中琢 1991 「後人争乱」日本の歴史② 築英社
- 谷本既次編 1970 『高松弥生墳墓発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告4 津市教育委員会
- 田村塗太郎編 2006 『森町円田丘陵の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第167集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 戸田哲也 1999 「弥生農耕成立期の集落一神奈川県中里遺跡」『季刊考古学』第67号 雄山閣
- 内藤由貴子編 2000 『尾崎遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第73集 沼津市教育委員会
- 中島宏はか編 1984 「池守・池上 一般国道125号線埋蔵文化財発掘調査報告書」埼玉県教育委員会
- 中野宥輔 1989 「登呂遺跡出土資料目録」写真編 登呂遺跡基礎資料4 静岡市立登呂博物館
- 中村文哉編 1994 「欠山遺跡」小坂井町教育委員会
- 西川修一ほか編 1998 「御屋敷派遺跡 第3地点(No.1) 第4地点(No.2) 第5地点(No.44) 高森・一ノ崎遺跡(No.37) 高森・窪谷遺跡(No.3)」かながわ考古学財団調査報告33 財団法人かながわ考古学財団
- 萩本勝はか編 1990 「白浜遺跡発掘調査報告」本浦遺跡群調査委員会
- 鶴本敏之編 1994 「御殿川流域遺跡群」II 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第50集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 羽二生保・岩崎しのぶ編 1997 「北津馬土手遺跡」I (遺構編本文) 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第74集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平野和男編 1971 「ひらさわ 平沢遺跡発掘調査報告書」佐久間町教育委員会
- 平野吾郎 1987 「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鏃先の出土状態について」『研究紀要』II 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 平野吾郎編 1983 『有東遺跡』I 下 静岡県文化財調査報告書第28集 静岡県教育委員会
- 平野吾郎・山田成洋・伊藤律子編 1991・1992 「川合遺跡 遺物編」2 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第32集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 穂積裕昌・小菅文裕編 1995 「一般国道23号中勢道路(6工区)建設事業に伴う南谷遺跡・宿生遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター
- 前田清彦はか編 1989 「挿中・雨谷」豊田市教育委員会
- 松井一明 1988 「静岡県」「弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題」II 愛知考古学講話会
- 松井一明編 1983 「浜北市東原遺跡B地点」(I) 浜北市教育委員会
- 松井一明はか編 2004 「愛野向山II遺跡」袋井市教育委員会
- 丸杉俊一郎・平冢智久・大谷宏治編 2008 「矢吹遺跡」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第182集 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 水野裕之ほか編 1999 『三王山遺跡(第1~5次)』埋蔵文化財調査報告書30 名古屋市教育委員会
- 宮脇健司編 1992 『朝日遺跡』III 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 森泰通ほか編 2001 『神明遺跡』II 豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 豊田市教育委員会
- 森岡秀人 1991 「戦いと武器」「弥生文化—日本文化の源流をさぐる—」弥生文化博物館叢書1 大阪府立弥生文化博物館
- 森川幸雄はか編 2002 『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)愛知県境~四日市JCT建設事業に伴う

- 金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告書 三重県埋蔵文化財センター
 八木勝行・磯部武男編 1980 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』 I 繩文・弥生時代
 編 藤枝市土地開発公社・藤枝市教育委員会
 八橋一郎ほか編 1969 『山木遺跡—第二次調査概報—』 菊山町教育委員会
 矢田陽子編 2001 『北神馬土手・尾上II番遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第76集 沼津
 市教育委員会
 山田鉄一 1980 『瑞穂遺跡—1951・52・54年度発掘調査報告—』『人類学博物館紀要』第2号 雨山大
 学人類学博物館
 山田鉄一ほか編 2003 『島鹿遺跡(第1次)』 埋蔵文化財調査報告書45 名古屋市教育委員会
 山本恵一・仲家三千彦・前田友子編 1993 『ニッ洞遺跡(b・c区) 発掘調査報告書』 沼津市文化財調
 查報告書第54集 沼津市教育委員会
 渡辺博人編 1999 『藤原東原遺跡群発掘調査報告書』 各務原市文化財調査報告第26号 各務原市埋蔵文
 化財調査センター

第2節 溝状遺構と古代条里について

律令期における西遼北遺跡を取り巻く環境について、第Ⅱ章第2節でも触れたように、本遺跡が古代駿河国の主要交通路の推定路線上周辺に位置していたこと(第102図)から、発掘調査開始当初は古代東海道の発見が期待されていた。本調査では、古代東海道自体が検出されることはなかったが、律令期の人々の盛んな往来を偲ばせるような土師器・須恵器の集中出土、溝状遺構や土坑の検出が認められた。この内、ほぼ東西方位に延伸する1号溝状遺構と、概ね南北方向に延伸する8号溝状遺構の存在は、律令期の条里を意識した遺構として注目される。また、本遺跡の所在地である小堀訪字二ノ坪は、数詞の付く坪地名として、条里施行地域における条里界線推定の手がかりとして数度に渡り活用してきた(望月 1961、加藤 1976、原・菊池 2004・2006)。そうした経緯からも、ここでは本遺跡周辺の古代の土地区画を考えるうえで、本遺跡の属する駿河国駿河郡の条里に関する研究を踏まえ、1・8号溝状遺構の特徴に触れ、若干の検討を加えたい。

1. 駿河国駿河郡の条里研究小史

駿河郡の条里に関する研究は、古代の駿河国と伊豆国の国境を巡る問題を背景に、小野真一氏が駿東郡および田方郡の条里復元を試みた(小野 1961)ところに端を発する。小野氏は沼津・三島周辺には、東駿東条里・西駿東条里・田方条里・伊豆國府条里が存在し、東駿東・西駿東・伊豆(田方および伊豆國府)の3条里はそれぞれ方位を異にするものと考え、沼津周辺の条里制の大枠を固めた。

加藤雅功氏は沼津・三島のみならず、富士・富士宮周辺も含めた条里復元を試みた(加藤 1976)。沼津市域に残される土地区割りから、この地域の古代条里を正方位から5度内外東傾する点を指摘し、これは地形的条件によって水利の得やすい方位で決定されたものと考えた。先の小野氏の方位を基にする3条里の併存に関しては、追認する立場をとった。また、沼津周辺の正方位から5度内外東傾する条里に関しては、佐野五十三氏が駿河国東部地域の遺跡の遺構配置を検討した結果、類似する傾向は認められない点を指摘している(佐野 2004)。

原秀三郎氏は、沼津周辺の残存する地割を手がかりに、駿河国駿河郡において、小野氏以来想定された東駿河条里・西駿河条里の併存は認められず、駿河郡一帯の同一針画による統一条里(駿河条里)の存在を明らかにした(原・菊池 2004・2006)。原氏の復元する駿河条里は、ほぼ正方位で、境川およ



第102図 古代駿河国の主要官衙交通路（佐野2004に加筆）



第103回 犬河条風復元概念図（原・菊池2006に加筆）



第104図 1・8号溝状遺構の配置

で26m程を確認できた。南端は途切れるが、北端はさらに調査区外へと続く。1号溝状遺構の東端と8号溝状遺構の北端は結節あるいは交差する可能性もあるが、推定結節点が調査区外にあたるため確認はできなかった。1号溝状遺構に隣接する3・5号溝状遺構からは、土師器や須恵器の集中出土が認められ、出土状況や出土土器の破面が磨滅していない点などから、付近での扇葉が想定された。調査区外にあたる1号溝状遺構の北には律令期の居住城が展開していた可能性も考えられる。

駿河条里との関連を推定するには、情報と根拠に乏しい感も否めないが、坪野跡地に位置する遺跡で検出された正方位に準する遺構として取り上げておきたい。

参考文献

- 小野真一 1961 「条里制と古代集落」『沼津市誌』中巻 沼津市
 加藤雅功 1976 「静岡県東部の条里遺構について」『沼津市歴史民俗資料館紀要』1 沼津市歴史民俗資料館
 佐野五十三 2004 「富士川下流域における古代交通路の素描—地域古代史の立体的復元—」『設立20周年記念論文集』財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
 原秀三郎・菊池吉修 2004 「駿河国駿河郡の条里と古代の駿豆国境問題—駿河条里跡地報告—」『沼津市史研究』第13号 沼津市教育委員会
 原秀三郎・菊池吉修 2006 「駿河国駿河郡の条里と古代の駿豆国境問題 稽考」『沼津市史研究』第15号 沼津市教育委員会
 望月薫弘 1961 「駿河の条里制について」『駿台史学』第11号 駿台史学会

び沼津市大平地区以西、沼津市東椎路・大瀬昉に及ぶ、現在の沼津市域の大部分を含むものである（第103図）。

奈良時代までに施行された条里制が、ほぼ郡を基本単位とした統一的な土地区画制度であることを考慮すれば、駿河郡における統一条里を想定することが、現状では合理的と考えられる。

2. 溝状遺構の特徴

ほぼ正方位に区画される駿河条里を念頭において考えれば、本調査で検出された1・8号溝状遺構は古代条里を意識して掘削された可能性も考えられる。1号溝状遺構はやや蛇行するものの、ほぼ東西方位に延伸し、上端での平均幅1.5m、平均深度0.25mを測る。長さは調査区内で80m程を確認できたが、西端・東端はさらに調査区外へと続いている。他の溝状遺構や土坑と比べ、掘り込みが深く、調査区内を途切れることなく横断する点、区画や地割を意識したものと思われる。また、出土遺物から8世紀代に掘削されたものと考えられる。8号溝状遺構は、蛇行しながらも、概ね南北方位に延伸し、上端での平均幅1m、平均深度0.15mを測る。長さは調査区内

第3節 総 括

西邊北遺跡の調査成果は弥生時代や奈良・平安時代を中心に多岐に渡る。最後に本調査の成果から判明したことを整理し、まとめとしたい。

弥生時代中期中葉の環濠の発見は、本調査における大きな成果の一つと言える。環濠内出土遺物からは当時の人々の生活を窺い知ることができたものの、調査範囲の制約により、環濠内部の集落の様相は判明しなかった。弥生時代中期中葉の集落としては、静岡県中部地域において静岡市の有東遺跡・川合遺跡・棚名遺跡で集落関連の遺構が見つかっている。また南関東地方に目を向けると、神奈川県小田原市の中里遺跡では多数の竪穴住居址や掘立柱建物跡、方形周溝墓が検出されており、千葉県君津市の常代遺跡でも当該期の方形周溝墓基や罐跡、また多量の木製農具が出土している。これらの事例は、弥生時代中期中葉に本格的な農耕集落が南関東地方にまで定着していることを示している。のことから、静岡県東部地域においても本格的な農耕集落の存在は予測されていたが、今回の西邊北遺跡の調査成果は、静岡県東部地域における当該期の社会を探るうえで、また東日本の農耕集落の出現を考えるうえでも重要な役割をもつと言えよう。

7世紀末から9世紀にかけての溝状遺構や土坑が認められ、3・5溝状遺構では土師器や須恵器が集中して出土した。出土状況から、これらの土器は流れ込みによるものではなく、付近での廃棄等が想定され、近辺に当該期の集落が存在していたことを窺わせる。また、正方位に準じて延伸する1・8号溝状遺構は古代の駿河条里に則って掘削された土地区画溝である可能性が考えられる。出土した須恵器の中には、口縁部が歪むなどの焼け歪みが認められる焼成不良品あるいは焼成不良品も含まれていた。こうした失敗品・不良品をも生產地から製品として供給されている点は、消費地としての本遺跡の特徴を示すものと考えられる。周辺に展開したであろう集落も、官衙等とは無縁であったのであろうか。

10世紀以降も遺構は検出されなかったものの、遺物の出土は認められ、断続的に人為的活動が営まれていたことが窺える。池状遺構とその周辺の溝状遺構や土坑の存在から、近世以降も居住域あるいは耕作や畑作といった生産域として、当地が活用されていたことが考えられる。

あとがき

発掘調査及び報告書作成に当たっては、以下の方々から多くの御教示・御指導を賜った。記して厚く御礼申し上げる。そして、現地調査・資料整理において、多くの方々の献身的な作業によって円滑に調査を遂行することができた。末筆ながら記して感謝申し上げたい。

(敬称略・順不同)

池田治 植田雄己 植松章八 押方みはる 柏木善治 今野まりこ 佐野五十三 篠原和大 鈴木一有
鈴木敏則 鈴木敏弘 高尾好之 立花実 土屋了介 賛元洋 西川修一 林雅恵 林美佐 松井一明
山岸良二 山本恵一 渡井英誓

現地作業員

五十嵐高丸 石川益男 井出忠夫 井原和子 上原きく江 宇津木美紀 遠藤裕己 奥山幸雄
小野三千男 笠間公雄 木村義子 熊坂勇 桑山隆充 後藤正司 小長井建昭 杉村桂子 杉山満義
鈴木稔 諏訪隆明 世利忠 芹澤志江 田川美恵子 土屋辰雄 永島民雄 中山忠義 中村末幸
奈良輪庄吉 橋本金五郎 服部正 浜田清治 原田郷子 深澤文夫 福田千征 細谷政以
本間日出男 松浦美智枝 松岡潔 松下隆宣 水落安治 水上綾子 望月久美子 八木範夫
山田里美 山田武義 行藤たけし 吉村たまみ 吉村秀雄 米山美代子 和田勝基 渡辺昇

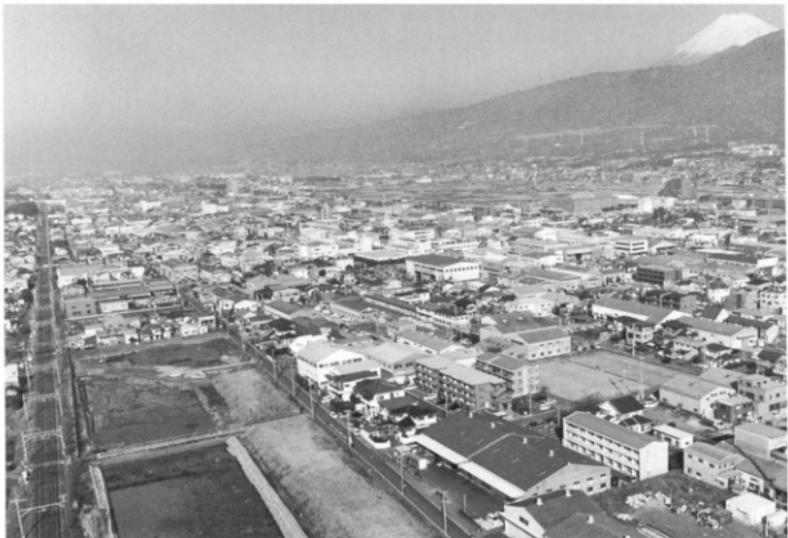
整理作業員

池松由貴子 落合高志 加藤百合子 小泉文香 佐々木富士子 森田矢穂里



写真13 アフガニスタン研修生を現地に迎えて

写 真 図 版



1 西通北遺跡遠景（南東より）



2 西通北遺跡完掘状況遠景（東より）

図版2



西通北遺跡完掘状況全景（合成）

図版 3



1 環濠全景（南東より）



2 環濠西部完掘状況（南東より）



3 環濠中部完掘状況（東より）



4 環濠東部完掘状況（東より）

図版4



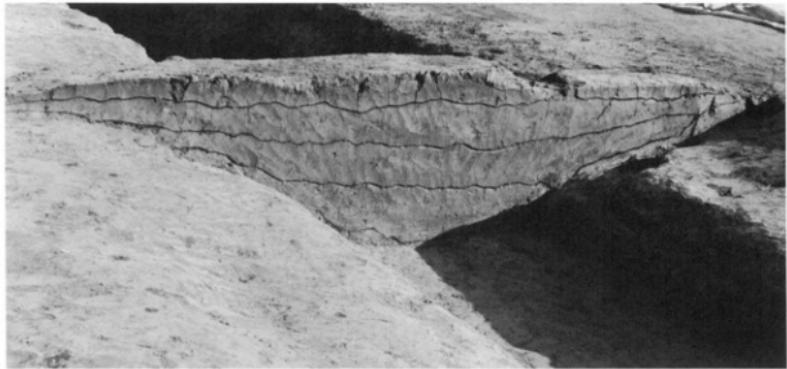
1 環濠土層断面①
(北西より)



2 環濠土層断面②
(東より)



3 環濠土層断面③
(西より)



1 環濠土層断面④（西より）



2 環濠土器出土状況①（南西より）



3 環濠土器出土状況②（北東より）



4 環濠土器出土状況③（北西より）



5 環濠石器出土状況（北西より）

図版6



1 環濠土器出土状況④（南東より）



2 環濠土器出土状況⑤（南西より）



3 環濠鐵施出土状況（西より）

図版 7



1 3号溝状遺構上端土器出土状況①（北東より）



2 3号溝状遺構上端土器出土状況②（北東より）



3 3号溝状遺構土器出土状況①（北より）

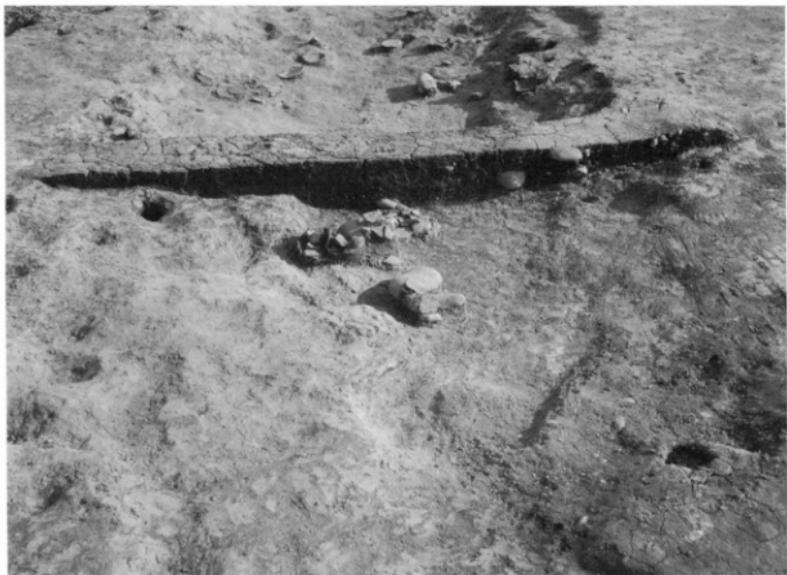


4 3号溝状遺構土器出土状況②（北東より）



5 1号溝状遺構木製品出土状況（北より）

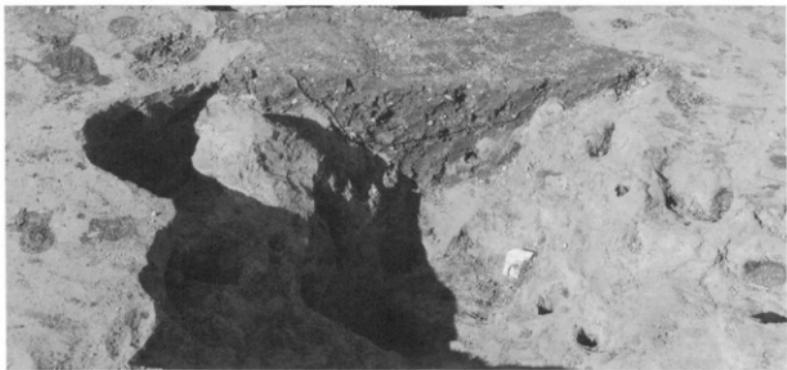
図版8



1 5号溝状遺構遺物出土状況（北より）



2 池状遺構土層断面（南西より）



1 池状遺構遺物出土状況（東より）



2 20号溝状遺構遺物出土状況（西より）



3 近世陶器出土状況（北より）

図版10



28-2



30-1



30-3



32-2



32-1



32-1

弥生土器壺①



33-1



33-2



33-4



33-3



33-1

弥生土器壹②

図版12



33-5



33-6



33-6

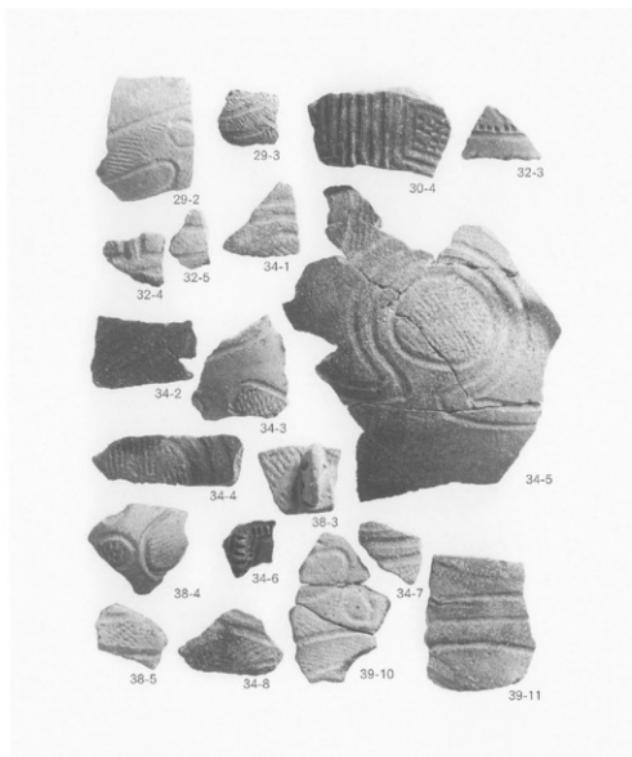


33-8

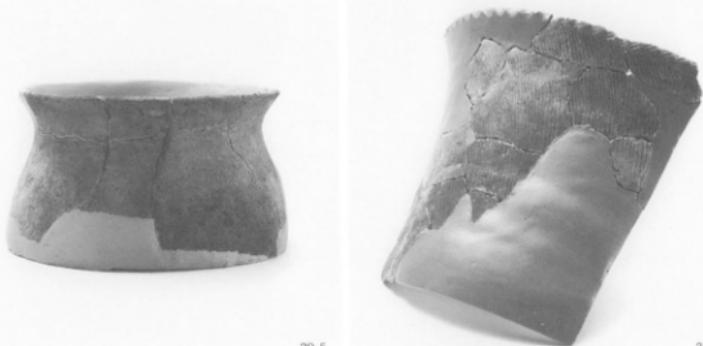


39-4

弥生土器壺③

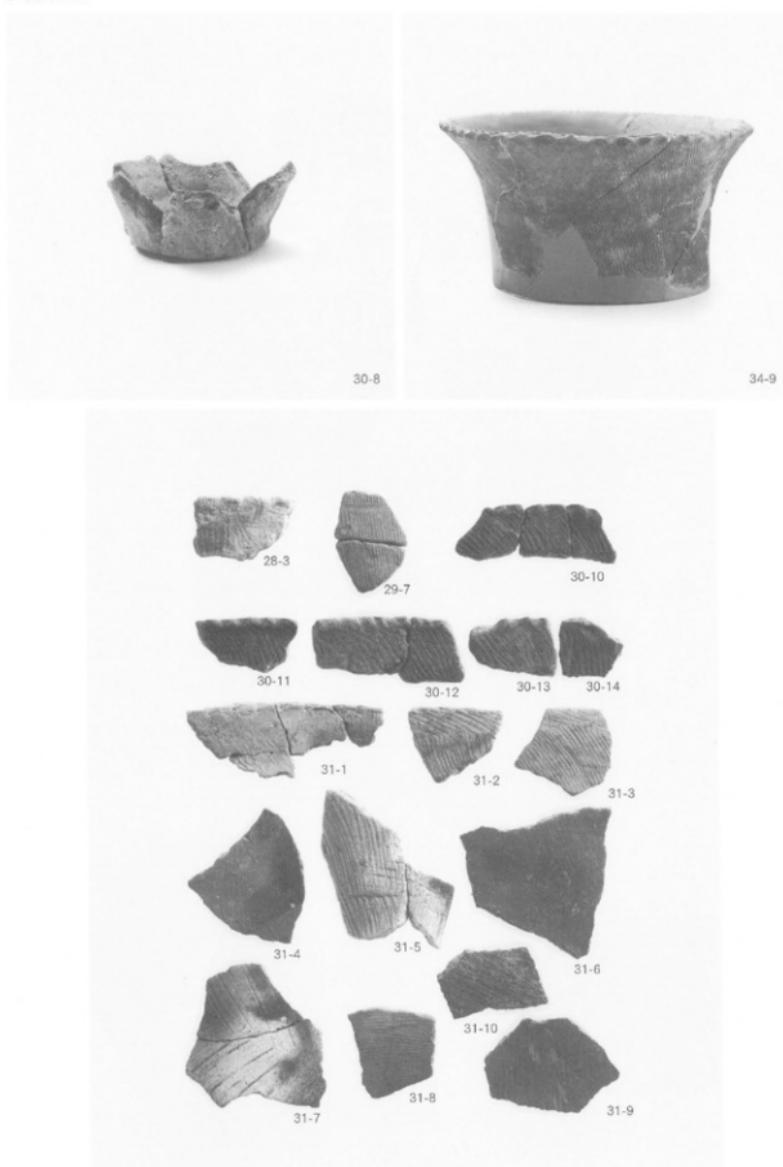


1 弥生土器壺④

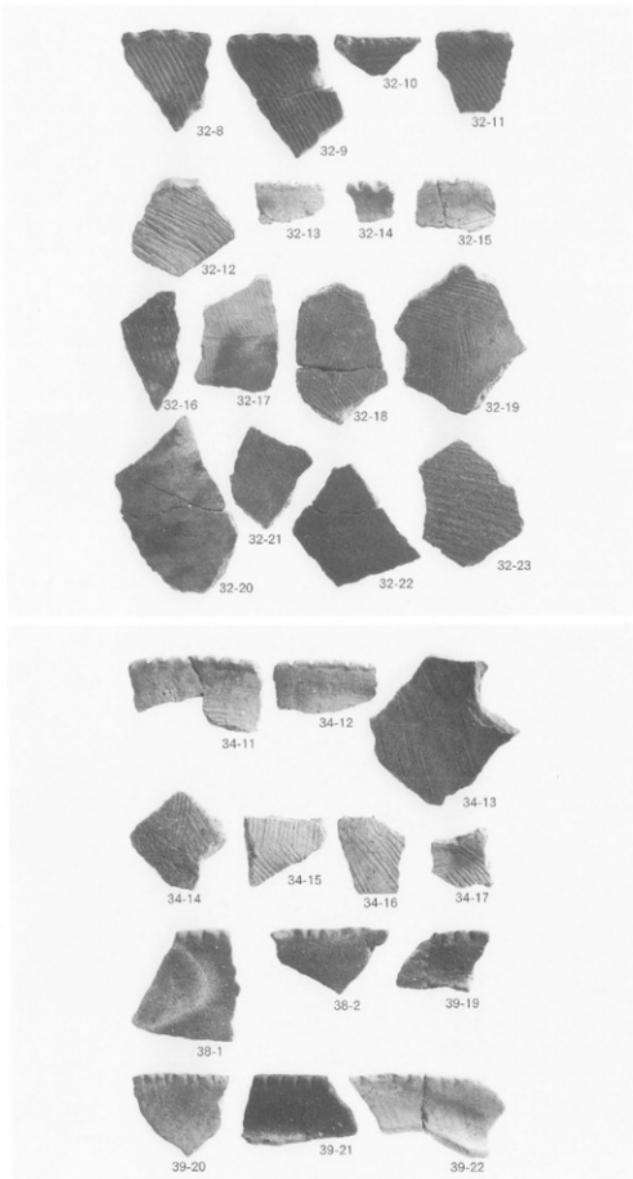


2 弥生土器壺①

图版14



弥生土器壺②



弥生土器臺③

図版16



1 環濠出土弥生土器壺



2 環濠出土弥生土器壺



43-1



48-1



48-2



48-3



48-20



49-6

土師器壺・甕①

图版18



48-19



50-6



53-3



53-1



53-2

土师器坏·甕·鉢



1 3号溝状遺構出土土師器臺



2 土師器環・甕②

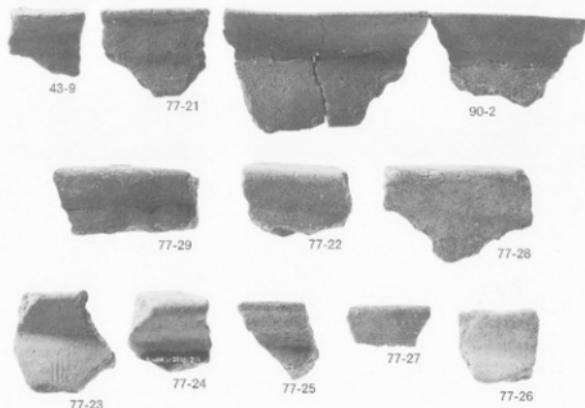
图版20



1 遺構外出土土師器坏



2 土師器高环



1 土師器壠



50-9

50-10



50-11

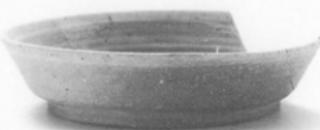
50-12

2 須恵器壠①

図版22



50-13



50-17



50-18



50-19

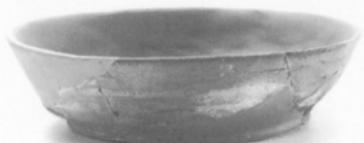


51-1

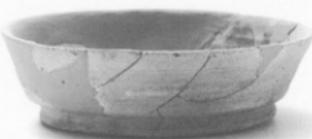


51-2

須恵器杯②



51-3



51-5



51-6



51-10



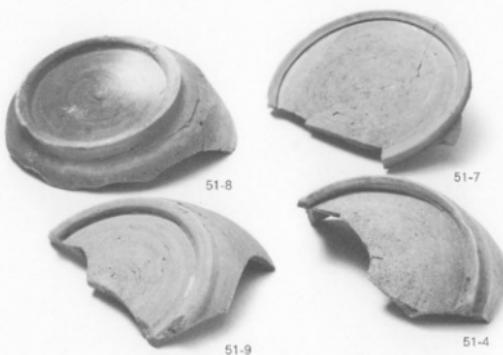
51-13



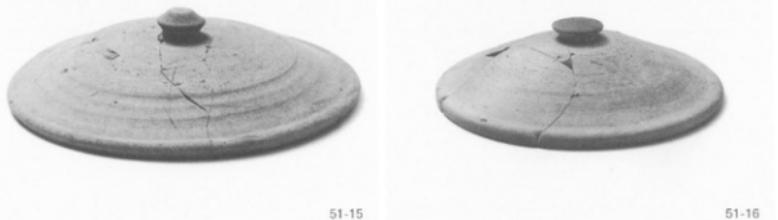
51-14

須惠器坏・高坏・坏蓋

図版24



1 3号溝状遺構出土須恵器坏



51-18

2 須恵器坏蓋・壺



1 5号溝状遺構出土須恵器环



54-1

74-1



78-1

78-11

2 須恵器环・壺

图版26



78-12



78-22



79-1

1 须惠器坏·坏盖·壹



78-2

2 遗构外出土须惠器坏



1 須恵器壺・甌・鉢

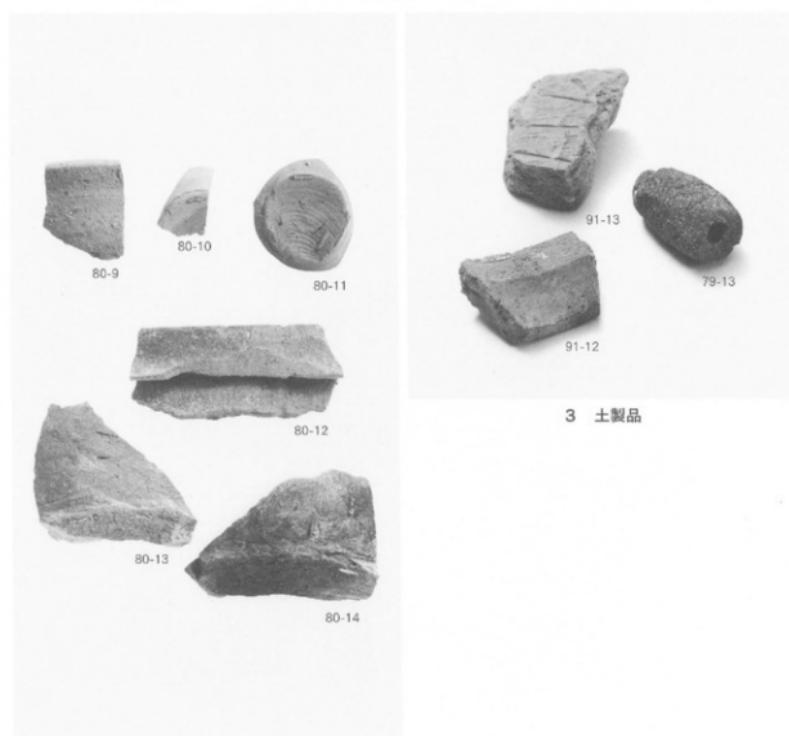


2 灰釉陶器

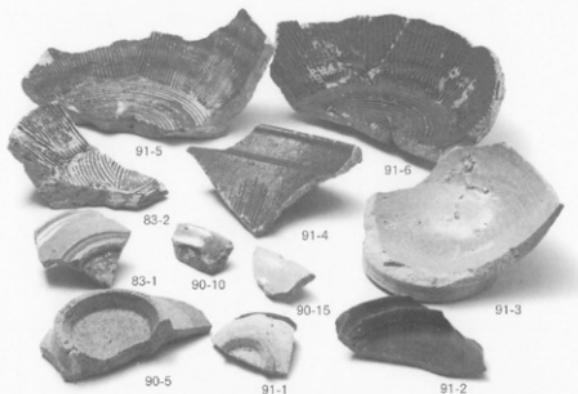
図版28



1 灰軸陶器坏・皿



2 中世陶器



1 近世以降陶器



2 近世以降磁器

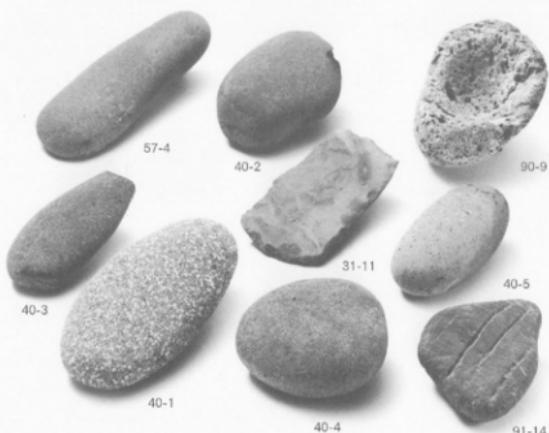
図版30



15-1 1 石鏽



15-2 2 石核



3 石器



34-18(表面)



34-18(裏面)

4 木製品①



43-18



83-3



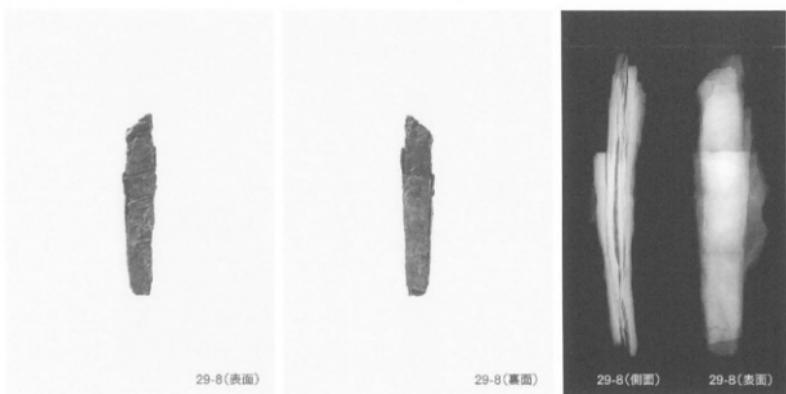
83-4(表面)

木製品②

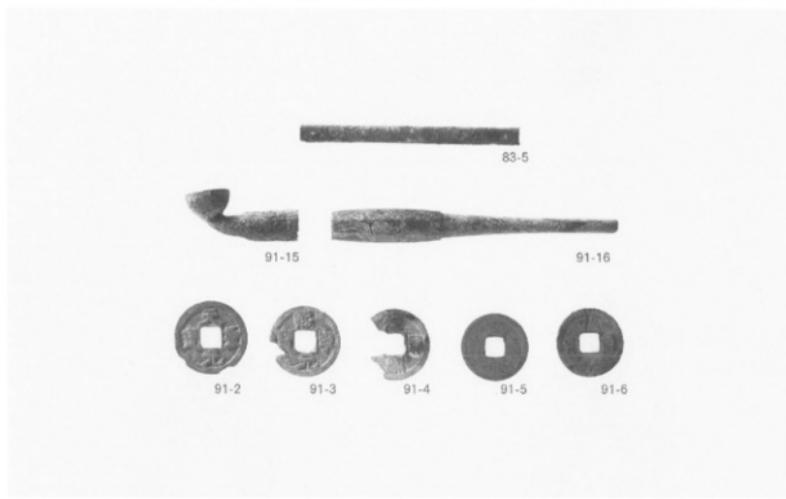


83-4(裏面)

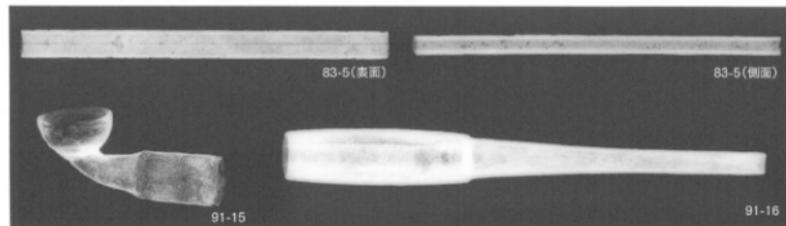
図版32



1 鉄製品



2 銅製品・錢貨



3 銅製品

報 告 書 抄 錄

ふりがな	にしどおりきたいせき							
書名	西浦北遺跡							
題名	平成20~22年度JR東海道本線・JR御殿場線緊急地方道路整備事業(新幹B) 平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線都市高速鉄道高架事業(新草薙基地) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告							
シリーズ番号	第239集							
編著者名	杉山和徳							
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所							
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261 (代表)							
発行年月日	西暦2011年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡 番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
西浦北遺跡	静岡県 沼津市 大瀬戸字 新道、 小瀬戸字 二ノ坪	22203		35° 06' 38"	138° 50' 12"	20080602 ~ 20100129	16,409m ²	JR沼津駅付近鉄道高架事業による新草薙基地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
西浦北遺跡	散布地	縄文時代以前		石器・石核				
	集落	弥生時代	環濠1・土坑5・ 土坑列1	弥生土器・石鏡・敲石・ 木製品・鐵鏟			弥生時代中期中葉の環濠を検出	
	散布地	古墳時代		土器				
	集落	奈良・平安時代	溝状遺構12・ 土坑20・土坑列7	土器・須恵器・灰陶陶器・ 綠釉陶器・土鍬・敲石・ 木製品			溝状遺構から土鍬器・ 須恵器が築中して出土	
	散布地	中世		陶器・磁器				
	集落	近世以降	溝状遺構1・ 溝状遺構9・ 土坑15・土坑列1	陶器・磁器・瓦・凹石・ 鐵器・木製品・漆器・漆器製品・ 鐵管・鐵質			他に発掘時期不明の土坑117と小穴16を検出	
要約	西浦北遺跡は、南は本汎川、北は愛鷹山をのぞむ芦ヶ原と呼ばれる低湿地帯の東縁に位置している。弥生時代中期から近代にわたり、断続的に人為的な活動が営まれた複合遺跡である。 弥生時代中期中葉の環濠は、豊岡県内最古級のものに位置づけられる。環濠内から出土した撫神土器や彌形土器は、当該期の資料数が少ない静岡県東部地域の弥生土器編年を補う貴重な資料である。 奈良・平安時代は7世紀末から9世紀にかけての遺構や遺物が認められた。溝状遺構内で土師器や須恵器が集中して出土しており、付近には須器が広がっていたことが想定される。また、正方形に準じて延伸する溝状以降も認められ、古代余皇朝との関連性が見える。	近世以降では排水・導水・区画の機能が想定される溝状遺構、溝状遺構や土坑が検出された。						

静岡県埋蔵文化財調査研究所報告 第239集

西通北遺跡

平成20~22年度JR東海道本線・JR御殿場線

緊急地方道路整備事業（街路B）

平成21年度JR東海道本線・JR御殿場線

都市高速鉄道高架事業（新車両基地）建設工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年3月18日

編集・発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261㈹

FAX 054-262-4266

販 售 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹

